顧問

井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂 校訂

古名録

自一巻
至十一巻

合資會社
日本古典全集刊行會壽梓

古名錄解題

古名錄は紀藩の伴存翁の畢生の大著である。其の書の成立は自から卷頭にものせる「古名錄引」及刊本土岐氏の緖言で明らかであるから又何等言を添ふるの必要もない。此書は明治十八年三月二日から田中男が出版せられた。其書には

緖言

この編は、もとの紀藩の藷餰家にて、夙にその名の高かりつる、畔田翠山源伴存翁の撰にして、通編部門を水火鹵石金石土彩色草木竹菜蓏果蓏蕈穀蟲魚介禽獸斎人魑魅飲食の二十六にわかち、又その子目を八十七となして、上は六國史を始とし、歷代の史傳本草書新撰字鏡倭名鈔萬葉集より、下は天正慶長の頃までの載籍、無慮數百種を引用し、その漢名は、彼の國の本草書府縣志字書等に據りて、一々これが出典を掲げ、編纂の體裁は、むねと本草綱目に傚ひて、普く宇宙萬物の名稱を裒輯せられたるものなり。その該博にして精確なる、和漢百科の學にわたりて、坐右必備の良材といふべし。翁頗る著述に富めりといへど、生前に上梓したるものは、紫藤園攷證の甲集のみ。易簀の後は、手稿おほかた散佚せしとかや。田中芳男先生翁の志の篤きを慕はれて、年ごろ遺册を訪求して、くさ〴〵弆藏せらるゝがなかに、去年はじめて水族志を刊せられしを、今またこの編を刊して、心ある人々に益せんことを思ひたゝれたるに、製紙分社の

長なる陽其二、その擧をめでゝ、とみに印刷發賣の事をうべなはれたれば、この書もまた不朽に傳はりなん。されど卷帙浩瀚にして、一旦夕の能くすべきことにはあらじとて、本編八十三卷の外に、總目錄の一卷と、以呂波引の一卷とを通じて、合本四十五册と定め、月ごとに一册を刊せんとす。こは印刷の勞を節にするのみにあらず、需むる人の便を謀りてなり。さるによりて、今まで深く先生の庫中に秘めおかれたる、翁の自筆の稿本を、おのれがもとにおこせられて、排字のまに／＼對比してよと囑せらるゝによりて、おのれ全部を渉獵することゝはなりぬ。因りて聊その故よしを述べて、この編のはしがきとす。翁の略傳著述目錄は、水族志のはじめに詳なるをもて、こゝにはもらしつ。近き世に、長編大部の印行を企つるものおほかれど、その功いまだ半ならずして、いつしかあとの絕えなんとするもの少しとせず。あはれこたびの企よ、需むる人のさはにして、速に業を卒へなんことを祈る。

明治十八年二月　　土岐政孝しるす

の詞が卷頭に添つてゐる。全部の功を了したのは明治廿三年三月五日である。土岐氏は猶卷末に

古名錄の印成に就きて一言を添ふ

古名錄の一書を月刊せんと田中ぬしの思ひ立たれたるは、いにし明治十七年の末つかたにて、陽ぬしは其の印刷を諾はれ、おのれこれが閱讀を諾ひて、第一卷を刷り出しゝは、明治十八年の三月にぞありける。かゝりしよりこのかた、歲を經ること六年にして、ことし明治二十三年の今月に至り、本編八十五卷總目

一卷及索引一卷を完成せらるゝことゝはなりぬ。此の印刷のはじめにあたり、おのれ全部の通覽を心得たりしかど、年ごとに事繁くて、東に行き西に走りて、暇なかりしかば、一部のうち讀過したるは三分の二を出でず。然るに陽ぬしは始より終まで倦まず撓まず印刷の事を督せられたればこそ、今日のめでたき結果をば得たれ。是に由りて思へば、畔田ぬしは彼の世に喜ばれ、田中ぬしは此の世に喜ばれ、此の印本を購はれたる人たちも、悉く成し畢へたるを喜ばれざらんや。此のさま〴〵の喜を一つに集へて喜ばるゝは陽ぬしにして、おのれも倶に其の喜を申さんとす。たゞ恐らくは魯魚の誤植あらんとを。さるはおのれの見たると見ざるとに拘はらず、みづから罪を謝するより外はあらず。偏に覽者の訂正を乞ふ。

明治二十三年二月　　　　　　　　　　　　　土岐政孝

と此の書の出版の始末を認めてゐられる。

此書が世に出たのは田中男のたまものである事は活版本の緒言にて明である。然しこの時はまだ活版の術は進歩してゐなかつた爲か、誤植が中々に多い。假名づかひなぞは、處々改訂したと見ゆる處もある。此活版本は今は世に極めて稀になつて中々手に入り難くなつた。其で此度此の書を複刻する事にしたのである。此度はすべて伴存翁の自筆本をもとゝした。假名づかひ等も總て自筆本によつた。伴存翁は假名づかひに對しては一定の考を或は持つてゐられなかつたのかと思はれる。引用書は大抵原本に據られたと見えるが、自らの書かれたのにも前後相違が有るらしい。何分にも德川時代の本草家なぞも、あながち歷史假名遣にはよら

れなかつたと見える。今はとにかくに自筆本の通りとした。處で此自筆本が又伴存翁怱劇の際に諸書を抄錄せられたと見えて、かなりの誤脫を存してゐる。其で出來るかぎりは原本にさかのぼつて其の誤脫の明白なものは訂正した。多少にても疑はしきは訂せずして頭注を加へた。六國史、萬葉集等をはじめ國書は勉めて原本を見た、此の挍合は案外な時間を要した。漢籍は座右藏有せる本が少いから、是れは遺憾ながら多くは原稿のまゝに差し置かねばならぬ點が多かつた。國書は讀點を加へた、是れは讀みよくする爲のさかしらに過ぬ。漢籍は淺學の上に原本をも見ぬ爲に誤脫を知ることも出來ぬから、かへつて誤を生ぜん事を恐れて自筆原本のまゝにしておいた處が多い。揷入の画は自筆本を影寫して凸版とした。刊本と多少相違が有るかも知れぬ。

さて今底本に用ゐた著者自筆本は高木氏と井上書店主人の敎示とにより、岡田眞君の世話で、伊藤氏の盡力のもとに、武田氏の藏本を借用した。以上の諸氏の厚志を深謝する。自筆本は原稿の事であるから、形に於て多少不備の點が有るらしい。其で活版本を參考して形を整へた點が多い。索引は全部新に編して添へる心組である。伴存翁の傳は卷末に添へるつもりである。

古名錄引

所謂古名者始國史國朝本草字鏡倭名鈔萬葉集而終天正慶長之間其闕於舊書者亦有用慶長已降之名矣。如近世所稱則不便攷索於古史故不載錄之也。如大同類聚方則古書既亡失矣。今所流布者蓋後人之僞選而有可疑之名稱。故暫錄其槩以備考證俟眞書之所訂正。至日本風土記則亦後作而眞籍纔存於若干焉。其他雖不係物類書聊采其要記之也。延喜式所載藥名總以漢字註之固無用國字。然本草啓蒙以傍訓悉爲式文。傍訓輙後人所加也。大和本草亦誤以萬葉集註釋豕尻爲猪舌。啓蒙爲此說所蔽以傳寫國字之錯譌爲漢字。故本文大意已齟齬矣。斯以此書正古名之出處不改國書所載而部中凡 溷淆眞草者恐失其本書義也。僕久歎 國朝之舊書物名之無詳錄從來稽古探賾采其糟魄編輯之。然書內非無魚魯誤文中差謬亦多矣。後識者正之云爾。

天保十四癸卯初夏日

春雪ノ雪字原本無シ刊本及本文ニヨリテ補フ

古名録水部巻第一目録

天水類上

由吉（ユキ） 雪
ゆきのこほり 雪凍
阿波由岐（アハユキ） 春ノ雪
赤雪
安良禮（アラレ） 霰
比左女（ヒサメ） 雹
美曾禮（ミゾレ） 水雪
斯毛（シモ） 霜
八豆之毛（ハツシモ） 初霜
つゆしも
都由（ツユ） 露
かんろ 甘露

通計十二種

古名錄水部卷第一

丹鉛總錄曰、水者五行之首也。萬物之宗也。浮天而載地載形浮氣也。始於天地而終於天地也。七十二候始於東風、終於水澤腹堅。天地之始終亦若是而已矣。震泉小品曰、積陰之氣爲水

紀藩　源　伴存撰

天水類

由吉（ユキ）萬葉集　［漢名］雪　蠡海集　［今名］ユキ

蠡海集曰、雪者雨之凝也。因高而寒極、故雨凝爲雪也。其雨雪相雜者、雪有高低之異也。低者則爲雨、高者爲雪。名物攷曰、大戴禮云、天地積陰、溫則爲雨、寒則爲雪。春秋元命苞曰、陰陽凝爲雪。曾子曰、陰氣勝則爲雪。釋名云、雪綏也、水下遇寒而凝、綏綏然下也。黃氏日抄曰、晦庵語類、雪是雨結、雨遇寒而凝。故高寒處先結。雪花六出者、霰被風拍開。雨航雜錄曰、愚謂雪者陰氣所積、當冬而雪、陰得其令、亦豐之兆。若雪太多、陰氣過盛、則爲水徵。物理小識曰、寒月則雨凝于上、體因風相襲成雪。河圖稽燿鉤曰、十月立冬爲節者冬終也。立冬

校云。由棄の引例に「由吉」を混同せり。蓋し萬葉集卷五の例歌の一首中「由棄」「由吉」の兩例ある爲に誤りたる也。「由棄」の次に直に「由吉」の見出を掲けて萬葉集卷九の例を又掲ぐべきな

之時萬物成爲ニ箇名一、小雪爲レ中者氣序轉ジ寒ク、雨變ジ成ル雪ト。故ニ以テ小雪ヲ爲レ中ト也。正字通ニ曰、雪ハ洗也。洗ヒ除ク瘴癘蟲蝗ヲ。資暇小品ニ曰、雪ハ者天地ノ之積寒也

[一名] **由棄** 萬葉集卷第五曰、能許利多流、由棄仁未自列留、烏梅能半奈、半也久奈知利曾、由吉波氣奴等勿。同卷第十四曰、由吉可都禰思自云云。同卷第十七曰、布流由吉乃、之路髮麻泥爾云云。昨日毛今日毛、由吉能布禮禮婆。多知夜麻乃、由吉之久良之毛云云。同卷第十八曰、由吉能字倍爾、天禮流都久欲爾。餘略之

由伎 萬葉集卷第十四曰、氣波禰爾、由伎可母布良留。同卷第十五曰、布流由伎云云。同卷第十七曰、曾能多知夜麻爾、等許奈都爾、由伎布理之伎底云云。多知夜麻爾、布里於家流由伎乎云云。同卷第二十曰、波都由伎波、知敝爾布里之家云云。應レ詔賦ニ雪歌一、麻都我延乃、都知爾都久麻泥、布流由伎乎

遊吉 萬葉集卷第十七曰、之路多倍爾、遊吉波布里於吉底云云

由支 新撰字鏡曰、霏。敷非反、平雪降貌。由支不留

由木 倭名類聚鈔曰、雪。和名由木

與伎 萬葉集卷第十四曰、可美都氣努。伊可抱乃禰呂爾、布路與伎能

六邊香 吾妻鏡卷第十一曰、建久二年正月十七日雪降積ル地ニ五寸、幕下爲レ覽レ雪渡ニ御鶴岡別當坊一。佐貫ノ四郎候ス御笠役ニ、前少將時家供奉。路次ニ有ニ御連歌一、別當獻ニ盃酒一。此間、仰ニ盛綱親家等ニ、取テ六邊香ヲ納ム長櫃ニ、被レ送ニ遣ス此ノ者ノ坊一。彼ノ窟ノ山陰ニ日脚相ヒ隔ル、仍テ構ニ氷室ヲ可レ消ニ炎暑ヲ之由被レ仰ニ。以ニ此ノ次ヲ常參諸人運ニ送ス白雪ヲ云云　○近峯聞略曰、香雪未ニ嘗テ香ニ也。而李太白詩云、瑤臺雪花數千點、片片吹落春風香、出韻語陽秋、予亦謂雨未嘗香也。李賀四月詞依微香雨青氛氳

雪花 和漢通名、三代實錄卷第二十七曰、貞觀十七年六月四日乙

り。因云、又巻十四の「由吉可都柧」思自」は誤引なり。

校云。巻九の例は「由岐」の字面なり。

校云。ゆく水戸本ゆきニ作ル

校云。古今著聞集の上に「深雪」の見出を脱せるか

卯、太政官曹司廳南門雪花散落。書東便蒙曰、凡草木花皆五出、惟雪花六出、以其數屬陰也

ゆく 蜻蛉日記曰、つまどをおしあけて、ゆくこそふりたりけれといふ程に

こ雪 徒然草曰、ふれ〳〵こ雪、たんばのこ雪、といふ事よねつきふるひたるに似たれば粉雪といふ。たまれこ雪、といふべきをあやまりて、たんばとはいふなり。かきや木のまたにとうたふべし、とあるものしり申き。むかしよりいひける事にや。鳥羽院おさなくおはしまして、雪の降にかく仰られけるよし、讃岐のすけが日記に書たり

美由伎 萬葉集第十八曰、美由伎布流、多爾伊多禮婆云云。美由伎布流、古之爾久太利來

美雪 萬葉集巻第十七曰、大王乃、等保能美可度曾、美雪落云云

三雪 萬葉集巻第十八曰、時者今者、春爾成跡、三雪零、遠山邊爾、霞多奈婢久。同巻第十三曰、三雪零、冬朝者云云。同巻第二十曰、三雪布流、布由波祁布能未、古今著聞集巻第十四曰、白川院深雪の朝、雪見に御幸有べしとて、御供の人少とめさるゝ事ほのきこえし程に、やがて出御ありて、おもしろき雪かな、いづかたへかむかふべき云云。吾妻鏡巻第五曰、文治元年十一月廿二日辛丑、豫州凌吉野山深雪、潜向多武峯。同巻第十六曰、正治二年庚申正月十八日乙巳、深雪風烈。藻塩草曰、深雪行幸をも云也。又よそへても云也。吾妻鏡巻第九曰、文治五年十一月八日因幡前司廣元爲使節上洛云云。當時依爲深雪、可有其煩。十二月廿五日云云。又曰、雖爲深雪之期、皆可廻用意云

薄雪 吾妻鏡巻第二十五曰、承久三年正月十一日丙申、薄雪降。去冬遂不降、可謂初雪歟。同巻第二十八曰、寛喜三年十一月廿九日早且雪聊降庭上、偏似霜色。將軍家爲覽林頭渡御永福寺。同巻第四十四曰、建長

六年正月一日乙亥、朝雪聊散、已乾屬ㇾ霽

六花 藻塩草曰、六花、雪の異名也。冬嵐にふかれてちるが六花の手折袖にも雪のかゝれば藏玉にあり。榮花物語本の雫曰、正月ゆきのふる日、皇后宮より大みやにきこえさせ給へり「はなはゆきゆきははなにぞまがへつるうぐひすだにもなかぬはるにて。」宜胤卿記曰、高潤丸怯餘寒六花其興候○埤雅曰、雪六出而成ㇾ華、言凡ソ艸木華五出雪獨六出、陰之成數也。釋常談曰、雪謂㆓之六出㆒、草木諸花皆有㆓五出㆒、唯雪有㆓六出㆒。蠡海集曰 雪爲㆓陰之精㆒、企得㆓水之成數㆒、雪花皆六出、霜雪者雨露之凝結、水從ㇾ金生シ氣盈テ而見ㇾ母、是以霜雪色皆白也。本草時珍曰、凡花五出、雪花六出、陰之成數也。韓詩外傳曰、六者陰極之數。又雜組曰、至後ツハ雪花五出此相治之言ノリ。然余每ニ多春之交ニ取㆓雪花㆒視ㇾ之皆六出。其ノ五出者十ニ不ㇾ能㆓一二㆒スル也。乃知古語亦不㆓盡然㆒

白雪 和漢通名。萬葉集卷第八曰、大伴坂上郞女雪歌一首、松影乃、淺茅之上乃、白雪乎、不令消將置、言者可聞奈吉。同卷第七曰、天平十八年正月、白雪多零積ㇾ地數寸。又曰、白雪忽降積ㇾ地尺餘。人車記曰、仁安四年二月一日白雪粉々○正字通曰、凡物類之白者、皆以ㇾ白名ㇾ之、白通稱也

素雪 和漢通名。撰集抄曰、玄冬素雪の寒にも、嵐をともとして砂に臥ても。明月記曰、治承五年正月十三日、素雪天晴陰。建暦三年十二月十四日、素雪埋庭草、朝天晴○正字通曰、白西方之色。又潔也。素也○江家次第曰、元日宴會、內記奉㆓宣命ヲ㆒見畢返給。若シ降ㇾ雪之日、宣命加㆓雪毛降ヲ字㆒云云○令義解曰、謂雪者明也。江談抄曰、雪者白字也

集註 日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳六年十二月己丑朔雪不ㇾ告ㇾ朔。朱鳥元年三月庚戌雪之。續日本紀卷第十二曰、聖武天皇天平九年夏四月戊午云云目賊地雪深ノ

思欲難得、所以雪消草生、方始發遣云云。今春大雪倍於舊年。同卷第三十六曰、光仁天皇寶龜十一年二月丁酉、陸奥國言云云。仍須差發軍士三千人、取三四月雪消雨水汎溢之時、直進賊地、固覺鼈城。

續日本後紀卷第十四曰、承和十一年春正月甲申朔、廢朝賀、大雪也。同卷第十五曰、承和十二年春正月戊申朔、廢朝賀、大雪也。同卷第十七曰、承和十四年春正月戊戌朔、廢朝賀、大雪也。文德實錄卷第七曰、齊衡二年春正月壬午朔、帝不御大極殿、以雪後泥深。仍停朝賀。同卷第八曰、齊衡三年十二月癸酉、大雪。天安元年春正月甲辰、風雪。同卷第九曰、天安元年冬十月癸巳、是夜天寒雨雪。同卷第十曰、天安二年春正月甲午朔、天皇不聽朝賀、以陰雪也。二月癸酉、日暮陰雨。入夜風雪。甲戌、大雪。三代實錄卷第三曰、淸和天皇貞觀元年十一月廿三日甲戌、大雨雪。廿九日庚辰、雪未止。同卷第四曰、貞觀二年閏十月廿日丙寅、雨雪。同卷第八曰、貞觀六年春正月戊子朔、大雨雪。同卷第十曰、貞觀七年春正月癸未朔、是日立春、天皇不受朝賀、以雨雪地濕也。同卷第十九曰、貞觀十三年正月廿四日辛未、大雨雪。五月十六日辛酉、先是出羽國司言。從三位勳五等大物忌神社在飽海郡山上、巖石壁立、人跡稀到。夏冬戴雪。同卷第二十曰、貞觀十三年十一月十八日己未、大雨雪。同卷第二十二曰、貞觀十四年十一月八日甲戌、通夕雪未止。右大臣已下參議已上於侍從所賞雪會飲。詔以内藏寮綿賜之各有差。侍從九位以下亦預賞焉。同卷第二十六曰、貞觀十六年十二月癸酉、大雨雪。同卷第三十曰 陽成天皇貞觀十八年十二月六日己酉、雷電雨雪。同卷第三十二曰、貞觀十八年十二月九日丙午、大雨雪。同卷第三十三曰、元慶二年戊戌春正月丁酉朔、天皇不受朝賀、澍雨降雪也。同卷第三十五曰、元慶三年春正

校云、刊本要略「雪之時歟」とあり

月十日庚子、大雨雪。十一日辛丑、是日出羽國飛驛奏言、今亦蒙犯雷雪云云。三月二日壬辰、正五位下守右中辨兼行出羽權守藤原朝臣保則飛驛奏言曰、又當國形勢地迫北陸、秋天多雪云。同卷第三十九曰、元慶五年春正月廿八日丁丑、大雨雪。去冬氣溫無宿雪、今春多雪。同卷第四十曰、元慶五年十一月十八日壬戌、雨雪。十九日癸亥、雪猶不止、勅賜六府少將侍從已下見在陣座及五位已上在侍從所者綿各有差。外記內記亦預之、慶新雪也。同卷第四十一曰、元慶六年春正月甲辰朔、烈風大雨雪、平地二尺。二日乙巳、雪未止。是日太皇加元服、其儀云云、是日列見因雪地濕、故雨儀威禮近仗服上儀。同卷第四十二曰、元慶七年春正月十六日癸未、踏歌之節、於紫宸殿宴王公侍臣。雅樂寮奏音樂、宮人踏歌、於殿上、以雪落地濕也。同卷第四十四曰、元慶八年甲申春正月癸亥朔、天皇不受朝賀、雪也。二日甲子、自昨大雨雪。廿八日庚寅、自廿五日雨雪、至是猶未止。同卷第四十五曰、光孝天皇元慶八年二月七日戊戌、風雪寒。同卷第四十八曰、仁和元年冬十月六日丁巳雨雪。同卷第四十九曰、仁和二年十二月十四日戊午、是日自朝至夕、風雪慘列矣。政事要略曰、初雪見參事。國史云 桓武天皇延曆十一年十一月乙亥、雨雪。近衞官人以下賜物有差。初雪見參、是其濫觴歟。往代之間、雨雪（　）之朝（服カ）或王卿侍臣亦賜物有差。不別冬春皆有此事。仍或亦稱大雪●時具國史曆注等。山槐記曰、治承二年正月廿三日辰尅、凌大雪自中山堂鞍馬寺於美曾呂坂逢右少將維盛朝臣。治承四年十二月八日、去夜雪積一寸、十一日天陰雪積二寸許、廿九日、陰晴不定　雪隱地面不及寸、曉降歟　永昌記曰、嘉承元年十二月三日、今日夜雪降深及五六寸。早旦參內、主上（堀河院）於紫宸殿覽深雪。朝餉壺并藤壺前庭被作雪山。

殿上人八九輩於舟岡爲覽初雪也。建久沙汰文曰、十二月三日云云同八日、淸風雪上洛。小右記曰、永觀三年正月十日、雪高五寸許。於淸涼殿前南忽被作雪山。實躬卿記曰、正應四年十二月廿五日、雪降埋地、禁裏洞有雪山。家光卿記曰、承久三年十月廿三日、雪降、傳聞內裏有雪山沙汰。村上御記曰、應和三年十二月廿日令右衞門志飛鳥部常則推雪作蓬萊山於女房小庭、今日功畢。賜常則及藏所雜色役夫三人祿有差。吾妻鏡卷第三曰、元曆元年二月七日、雪降。同卷第五曰、文治元年十一月十七日云云靜云、予時與數多金銀類於我云云、弃置于深峯雪中之間、如此迷來云云。十二月十五日、吾凌深山雪希有而著藏王堂。同卷第六曰、文治二年正月二日、及暮雪。三日去夜雪猶委地。同卷第七曰、文治三年十二月一日、雪降雷一聲。被催雪興。二品、欲歷覽山岳邊給之處、依驚雷鳴給令留給。同卷第八曰、文治四年十一月十八日、西風烈吹、雪降。同卷第十六曰、正治二年正月十三日晴入夜雪下、殆盈尺。二月六日、晴陰、雪飛風烈。同卷第十七曰、建仁二年十二月十九日、雪降。積地七寸。同卷第十八曰、元久三年二月四日、大雪降。建永二年十二月三日、冴陰、白雪飛散。同卷第十九曰、承元二年正月六日、陰。雪時時飛。承元四年十二月廿一日、曉以後雪降積尺餘。同卷第二十一曰、建保元年十二月十九日、雪降。同卷第二十四曰、建保七年正月廿七日、入夜雪降、積二尺餘。同卷第二十七曰、安貞二年十二月卅日、自晨至于夜半雪降、被催其興。將軍家俄渡御竹御所。御騎馬也云云。自廊御歸、近邊山館令歷覽給。安貞三年正月三日、雪降。及晚將軍家入御武州亭。是非御行始、依雪興、爲楚忽儀也。寬喜二年正月一日、及晚雪降。同卷第三十二曰、曆仁元年十二月十七日、入夜雪降、於御所有和歌御會。十二月三日、夜半以後

校云。文永二年正月十一日は東鑑に記事なし。正月一日には「雪」を「雨」に作りて此文と合す。

校云。苛政甚之と甚字流布本にあり

雪下。十二日、大雪降。曆仁二年正月十一日、雨雪降。同卷第四十三日、建長五年正月十一日庚寅、雪降積四寸。同卷第五十二日、文永二年正月十一日自二去夜一雪降、之餘降。親長卿記曰、文明七年正月八日雪下。管見記曰、叡山之雪誠可レ謂二都富士一者也。類聚國史曰、延曆十二年春正月辛巳、大雪。十一月丁亥、大雪。諸司掃レ雪、賜レ物有レ差。帝王編年記曰、崇德院天治元年二月、兩院白河鳥羽有二雪見御幸一。百練抄第四曰、治曆四年六月廿四日、越後國阿蘇山雪降五六寸。同第五曰、天永元年、或記云、三月五日、雪下。寒氣甚 苛政之故也。同第六曰、天治元年十二月十六日、兩院白河・鳥羽臨二幸白河邊一、歷二覽郊外深雪一。大治元年十二月十六日、兩院女院幸二白川殿一覽レ雪一。同第十曰、文治三年正月一日癸卯、自レ夜雪降。當二新春之初一呈二豐年之瑞一乎。同第十三日、寛喜二年六月 或人云、去八日美濃國生津庄內雪降。委レ地二寸許云云。同第十五日、寛元元年十一月五日、今朝深雪盈レ尺 豐年呈レ瑞。去承元五年以後無二如レ此之雪一云云。寛元二年十月十七日、天陰雪散。十一月七日、大雪、於二內裏一有二御作文事一。同第十六日、寶治元年正月十二日、今夕雪降。內裏式曰、今日波正月朔日乃豐樂聞食須日爾在。又時毛寒爾依弖御被物賜久止宣。若雨レ雪者、時寒之上可レ加二雪毛布流之詞一。中右記曰、寛治二年正月七日、天晴。未刻許節會始御出內辨內大臣、申刻以後親族拜之、後天陰雨雪紛々、禁庭皆白。十九日初有行幸 院大炊殿今朝雨雪紛々、庭上敷粉。寛治三年正月二日、天陰終日飛雪紛々。寛治四年正月三日、時々天陰白雪紛々。十六日朝間殘雪紛々。寛治八年正月一日、高天清晴宿雪殘庭、二日及午後飛雪隨風如花散。同十二月十九日、時々天陰飛雪隨風。大治四年二月九日、今朝白雪紛々頗積庭上、山家氣色自然催興、嶺頂松樹蘚下竹叢 草木帶花遠近逢春、漸及辰刻白日高昇、薄雪欲消。關太

齊曰、康永三年正月一日、朝間飛雪紛々。康永三年正月七日、朝間白雪滿地五六寸。源氏物語はゝ木ゞ曰、けしきも見がてら雪を打はらひつゝ。同さかき曰、宮は三條の宮にわたり給、御むかへに兵部卿宮參り給へり。雪うちゝり、風はげしうて云云。雪いたうふりたり。同須磨曰、冬になりて雪ふり、あれたるころ。同薄雲曰、雪かきくらしふりつもるあした云云このゆきすこしとけてわたり給へり。同あさかほ曰、雪うちちりて、えんなるたそがれ時に云云月さしいでゝ、いとおもしろき夜のさまなり云云雪のいたうふりつもりたるうへに云云冬の夜のすめる月に、雪の光あひたる空こそあやしう、いろなきものゝみにしみて云云。一とせ中宮の御まへに、雪の山つくられたりし、世にふりたることなれど、猶めづらしくもはかなき事をしなし給へりしかな。同初音曰、月のくもりなくすみまさりて、うす雪すこしふれる庭のえならぬに云云かげすさまじき曉月夜に、雪はやう〳〵ふりつむ云云ほの〴〵と明行に、雪やゝちりてそゞろさむきに。同みゆき曰、雪いさゝかうちちりて、みちの空さへえんなるに。同眞木柱曰、雪かきたれてふる云云。雪すこしひまあり。同まぼろし曰、雪ふりたりし曉に、たちやすらひて云云いみじうもつもりにける雪かな、といふ聲をきゝつけ給へる云云雪いたうふりて、まめやかにつもりにけり。同匂宮曰、みちのやゝほどふるに、雪いさゝかちりてえんなるたそがれどきなり。同椎が本曰、いと雪ふかきを云云雪もいと所せきに云云雪いとゞ空もとぢぬべう侍り、と。同總角曰、風いたう吹て、雪のふるさまあはたゞしうあれまどふ云云雪のかきくらしふる日、ひねもすにながめくらして云云まだ夜ふかきほどの雪のけはひいとさむげなるに云云年のくれがたには、かゝらぬ所だに空のけしきれいには似ぬを、あれぬ日なくふりつむ雪

校云。かゝせの下中畧あり。
校云。流布本「も」を「まで」に作る。

に、うちながめつゝあかしくらし給。同手習曰、雪ふかくふりつみ。古今著聞集巻第五曰、平治元年二月廿五日、御方違の爲に押小路殿に行幸有けり。透廊にて夜もすがら御遊ありけるに、女房の中より硯蓋に紅の薄様をしきて、雪をもちて出されたるに、和歌をつけたりける。月影のさえたるおりの雪なればこよひははるをわすれぬるかな。寛元元年二月九日、雪三寸計つもりたりける曉、冷泉前右府參内し給ける。雪の降かゝりたる松の枝を折て、御硯の蓋におきて、御製を紅の薄葉にかゝせ給ひける。九重にふりかさなれる白雪はこれやちとせの松の初はな。同巻第八曰、或夜雪のいたくふりたりけるに。同巻第十四曰、白川院鳥羽殿におはしましける時、きのふより雪ふりてけふ一日ふりくらしける。夜半ばかりもなをふりければ、院おきさせ給て、備後守季通が御前に臥たりけるに、雪はいくらほどたまりたるぞ、なをふるかと見て參れと仰られければ、吹ためたる所は一尺にあまり候。庭は八九寸ばかりと申ければ、ゆゝし大雪にこそ、只今尺に滿なんずと仰られて云云。承元五年閏正月二日の朝、目もおどろくばかり雪ふりつもりけるに。同巻第十七曰、治承四年四月廿九日云云東洞院邊には雪ふりたりけり。又曰、雪ふり風吹てきつるに云云庭には雪ふりてしらみわたりたるに。榮花物語さま〴〵のよろこび曰、おりしもゆきはいみじうふりければ。同うら〳〵のわかれ曰、おりしもゆきいみじうふる。同鳥邊野曰、ゆきのかきたれふるに。又曰、長保三年十二月廿二日のことなり。ほどなどもいとゞさむく、ゆきなどもいとたかくふりて云云ゆきのいみじきに云云同初花曰、又の日ゆきのいみじうふりたれば云云同本の雫曰、正月ゆきのふる日、皇太皇后宮より大みやにきこえさせ給へり。「はなはゆきゆきははなにぞまがへつるうぐひすだにもなかぬは

るにて。同布引瀧曰、おりしもつもるゆきことさらのやうなり。同紫野曰、ゆきなどふりていとあはれなり。同日蔭のかづら曰、しはすにもなりぬ、よのなかこゝろあはたゞしう、うちよりはじめ、みや〳〵の御佛名にも、れいの佛名經たど誦するこゑもおかしきに、ふるしらゆきとともにきえなん、などもあはれなり。同淺緑曰、かみなづきにもなりぬ。いつしかとはつゆきふりわたり、れいにもにずいとゝきことを、人〳〵けうじおほすに。同若枝曰、おほかたのそらははれたれど、ゆきうちちりて、いみじうおかしうみへたるに。同鶴の林曰、その日つとめてよりよるまでゆきいみじうふる。さるべき人〳〵、れいのさうぞくのうへに、あやしのものどもきて、ゆききえあへずふりかゝりたるも、さま〴〵にあはれにかなし。同曉待星曰、十一月殿上にゆきやまつくらせ給て云云。同根合曰、ゆきのきえのこるをみて云云。平家物語卷第一曰、雪ははだれにふつたりけり。かれ野のけしきまことにおもしろかりければ云云。又曰、しら雪くだつて地をうづみ。同卷第三曰、けふは北國の雪のしたにうづもれて云云。又曰、みねのしらゆきたえやらで云云。住吉物語曰、雪のいみじうふりたる日、たゞずみありきて。十六夜日記曰、さてもそれより雪になり行。殿中申次記曰、永正三年十二月卅日云云觀世太夫於庭上被成御覽時、以外大雪にて、庭上に雪つもり申候間、祗候仕立所の雪かきのけさせられよと、太夫申次に懇望申之。當日貞遠なり。返答には、御庭に雪つもり申事大切之儀也。又自然御馬にもめされ候事可有之。何事にかきのけ申候哉と可被仰出時、如何可申哉。然東山殿慈照院御代に判門田御對面候時、如此大雪積候也。然どもはかせ候事は無之。以其例對太夫、返答有之。尤之儀候由各被申、申次之輩可有分別事候也。今物語曰、おりしも雪降て月おぼろなりける

校云、東關紀行は秋八月十日に都を出でたる旅の記なれば、此の文と合はぬ点あり。書名たがへるか

に。又曰、雪いたくふりて袖にたまりたりけるをみて。花營三代記曰、應永卅年十二月廿五日、初雪薄雪無庭程也。河越記曰、はるかにのぞめば二十句の不二のねは千里のからよりみへ云云のぼり一雪に鏡をかけたるやうにぞ。六代勝事記曰、ふかき山の雪をしのぎてぞおもむかせ給ひける云云。東關紀行曰、しはすに松なりぬ、雪かきくらして云云。又曰、ふはの關にたりて雪たゞふりに降くるに、風さへまじりて吹雪もかきくれぬれば。狹衣曰、しはすの月もみる人がらにや、よひ過て出るかげさやかにすみわたりて、雪すこしふりたる空のけしきのさえわたりたるも、いひしらずこゝろぼそげたるに。又曰、よものあらしも外よりはものおそろしげに吹まよひて、雪もかきくらしふりつもる庭のおもに。又曰、わた殿の戸より見とをし給へば、わかきさぶらひども、きたなげなき、いろ〳〵の狩衣、さしぬきなどきよげにて、五六人雪まろばしするを見るとて、とのゐすがたなるわらはべ、わかき人ゝなど出たるすがた共、いづれとなくおかしげにて、ふまゝくをしきものを、などいへば、みすの内なる人、おなじくはふじの山にこそつくらめ、などいへば、こしの白やまにこそあめれ、といふ也云云。ふじの山いと大きにつくりたてゝ、煙たてたるは、げにいとおかしう見やられ給ふ云云。又曰、霜月の十余日なれば、紅葉もちりはてゝ、山も見所なく、雪かきくらし降つゝ。又曰、雪ふりて物心ぼそげなる夕つかた。又曰、冬ふかき霜がれの雪のあしたこそこの色はおかしけれ。又曰、ふけ行まゝに、ゆきおれ〳〵ふりつゝ、こがらしあら〳〵しう吹しきみたる。又曰、日ごろふる雪、としのこりすくなうなるまゝに、いとゞふりかさなりつゝ、きえやるべくもあらずしみわたるを、見いだし給ひても。又曰、ゆきばかりあるじがほにふりつみたる庭のおも、はる〴〵と心ぼそげなる

校云。群本・高根の雪ふゞきと「雪」字あり
ト群本「下部」に作る

を見渡し。又曰、つゝ戸はいとひろくあきて、雪のみぞふりいりたる、月はなけれどいとあかくて、おかしきよのさまかな。又曰、廿ゝ日の月なれば、月もまだいとあかきに、雪の光さへくまなくて、ひるのやうなるに。歌林四季物語曰、また初雪けざんなど、また霜かともおもひまがはぬ雪のあした、をこなはるゝ事にて。又曰、みやまのはざらにて、都のうちも、比叡あたご、さらぬ高根のふゞき、袖さむきあさな／＼、花かと見まがひけんも、そゞろさむき春のながめならんとはおもひながら云云見參の祿俸をこなはれ、雪をつけたるかざしのにしきなど、あらぬさまなるまで雪をかけたり。拾穗抄曰、宗祇云、めかれせぬとは晴間なく降雪の心也。俊頼髓腦抄曰、冬のものは、はつ雪めづらしくふりて、いはほにも花をさかせ、のこりの雪のきえうせぬるに、わか身のはかなき事をなげき。山賤記曰、かきねがくれにゆきのむら／＼のこり侍るも、おりからつれなきこゝちして。聖忌記曰、廿九日終日陰雨自夜雪降去夜甚雪大風。源平盛衰記卷第十一曰、降積雪ノ深ケレバ、言問道モ埋レヌ。同卷第四十六曰、荒乳山木湯峠ヲ越行バ、越ノ初雪踏分テ。同卷第四十八曰、冬ハ右近ノ馬場ニフル雪ヲ、先笑(サク)花カト悅(ヨロコビ)。宇治拾遺第十二曰、雪のいみじくふる日、侍うたよめ、おかしうふる雪かな、といへば。赤染衞門集曰、國にいきつきたりしに、はつ雪のふりしに云云雪いみじくふりたりしに、石山に涅槃會にまうでしに、うちいでのはまにて、いとふかくつもりたりしに。紫式部日記曰、みゐる。雪を御らんじて、おりしもまかでたることをなんいみじくにくませ給ふ、と人々もの給へり。枕草紙曰、にげなきもの。下すの家に雪の降たる。あはれなる物。山里の雪。又曰、しはすの廿ゝ日のほどに、雪いとたかうふりたるを、女房どもなどして、

校云。からず本ノマヽ

ものゝふたにいれつゝ、いとおほくをくを、おなじくは庭にまことの山をつくらせ侍らん、とてさぶらひめして、おほせ事にて、いへば、あつまりてつくるに、殿守司の人にて、御きよめにまいりたるなどもみなよりて、いとたかくつくりなす。宮づかさなどまいりあつまりて、ことくはへ、ことにつくれば、所のしう三四人まいりたる。殿守(とのもり)づかさの人も二十人ばかりになりにけり。里なるさぶらひめしにつかはしなどす。けふ此山つくる人には、ろく給はすべし。雪山にまいらざらん人には、おなじからず云云二十日(十二月也)のほどに雨などふれど、きゆべくもなし。たけぞすこしをとりもてゆく云云つごもりがたにすこしちいさくなるやうなれど、なをいとたかくてあるに云云又曰、雪いとおかし。けふはひるつかたまいれ、雪にくもりて、あらはにもあるまじなと云云。伊勢物語曰、富士の山をみれば、さ月のつごもりに雪いとしろくふれり。又曰、ひえの山の麓なれば、雪いとたかし。又曰、雪いとしろう木のすゑに降たり。又曰、雪こぼすがごとくふりて、ひねもすにやまず。十訓抄曰、一條院雪いと面白く降たりける朝、端近く出居させ給て、雪御らんじけるに云云。又曰、白河院は花盛、雪の朝、必御覽じてもてなさせおはしましけり。或時、雪の夜中ばかりよりかきくれて降ければ云云敦季おもふやう、雪は北に深くつもれば、疑なく北さまへぞ御幸はならんずらんと思て。又曰、六條前齋院と聞えさせ給ける宮の御所に、いみじきかゞりをうへられたりけり。三月のはじめつかた、其道の上達部殿上人あまた參て、鞠つかうまつりけるに、公卿座に雪をかはらけにもりて、とのも司してすへをかれけるを、雪共見わかざりけるにや、鞠の座に食物をすゝめらる事、そのためしまれ也。いか様にかとてあやしみ申て各出られにけり。或有職後に此事を聞て、いみじくこそ雪をば出されけ

校云。下ノ頭註ハモトヨリアリ。正字通曰、李季雪讚ニ曰、資清以化、乘氣以麗、過象能鮮、即潔。

る。さる事あるらん共しらで、近くよりて見る人のなかりける、ゆゝしき恥也。又鞠の時、雪を出さるゝ定れる式なれども、ことさらにかはらけにもられければ、人の心をはかりて御らんぜんとの御しわさ也とぞ申ける。宮の御高名、鞠足の不覺にてぞ有ける。永昌記曰、嘉承元年十二月三日庚申、月夜雪降深及二六寸一云云。撰集抄曰、木々の紅葉ちりはてゝ、枝には雪のふりかゝり、雪だに消侍しありさま。又曰、むかし村上の帝のすゑのころ、如月の中の十日のはじめつかた、雪いみじく降かさねて、月ことにあかく云云月千里をてらす、木ごとに花さく心ちして云云明月記曰、治承五年正月十一日、朝雪、積地二寸許。建久九年二月八日、天晴、雪猶飛。九日宿雪白。建久十年正月八日、昨後雪、忽降積三寸許。正治元年十二月廿二日、自曉雪紛々、積地五寸許。建仁二年正月十日、天晴、夜雪積三寸許、有雪山事。二月十四日、夜雪積地一寸許、甚寒。元久元年十一月廿九日云云、文義自北山求出送雪云云。卅日、夜中雪尋出獻、殊令悅喜。元久二年正月十九日、自夜雪降朝間霰々變々、積地六寸。二月三日朝雪紛々、已後天晴、雪猶霏々。承元二年九月十四日、自昨日俄寒北山幷偏白雪也。建曆三年十二月八日、曉雪積四寸許。十一日、素雪埋庭草。嘉祿元年十二月五日、曉雪積地四寸許。廿五日、雪埋地。寬喜年十二月十日夜雪埋草樹、積庭不及寸、朝陽出、地雪消。十一日、雪積三寸。十五日、曉雪屋上白。日出消、寬喜三年正月八日、夜雪埋庭草不積。十九日、雪積二寸許。貞永二年正月十八日、雪埋庭草、朝陽晴、雪間飛。天福元年十二月九日、雪積地三寸許、朝陽漸晴、陽景間見、草木雪消、庭雪猶白、巳後漸消。文曆二年正月三日、夜雪宿草樹。九日、雪紛々。十日、朝霞掩日、夜雪埋路。十一日、宿雪未消、終日沍寒、四峯山皆白雪、庭上猶半不消。十二日、雪飛、何時以後積

成レ嘩カ
謝與連ニ
雪賦既ニ
因テ方レ
而爲ス
主ヲ亦
週ノ賈レ
而成ス
所レ堊ヲ
則萬レ頃照
同シ縞ヲ
瞻レ山ヲ
則千巖
倶ニ白シ
校云。
いかに
も一木
いまゞ
トアリ
校云。

地。十三日、夜雪積地二尺許。十一月十八日、雪降、積地寸餘。後愚昧記曰、年號不知正月廿一日、今曉瑞雪、敷地四寸許歟。台記曰、久壽二年十二月十七日、平明歸東、三條屋上雪三寸許。辨内侍日記曰、十一月十四日の夜、雪いとおもしろく、みちたえてつもりけり。又曰、有明の月くまなかりしに、雪のひかりさえとをりて、おもしろくみえ侍しかば。又曰、いまだ夜はあけぬものから、雪にしらみたるうちのゝけいき、いつのよにもわすれがたくおもしろしといへば。又曰、衞士どもうへにのぼりて、雪かく音もおもしろく、みゝにとまるこゝちして。又曰、かはらのむねに、雪しろくつもりたるに。又曰、日來ふる雪さえとほりたるに、いしばいの間にかへりたち、つくづくとまちいたりし。ひえざまもいとたへがたし。又曰、雪はかきたれふるに、あらしをしのぎてつかひ〳〵いそがしもよほすけしきいと寒げなり。雪かきはらふもおもしろくて。又曰、雪いみじくふりたるあした、とばどのへ院の御幸なりて云云たゞまへいたにこぼれのりたり。道すがら雪いかにもふるめり、いとおもしろし。とばどのゝけいき、山のこずゑども、みぎはの雪いひつくすべからず。更級日記曰、雪降あれまどふに、ものゝ興もなくて。又曰、雪うち散て、いみじくはげしくこほる云云。又曰、霜月の廿よ日、いしやまにまいる。雪うち降つゝみちのあとさへおかしきに。水左記曰、治曆二年正月廿二日、天陰雨レ雪ヲ霏々。承保四年十二月九日、巳刻以後寒雪飄々。十二日、曉雪降、朝間地白。未時許寒雪飄々。十二月廿日、朝間雪白、積地二寸。閏十二月十四日、自夜雪降 朝間地白 宇津山記曰、十月初に若狹路、丹波路漸雪を凌て、霜月に紫野眞珠庵に籠り濟ぬ。世繼物語曰、村上の先帝の御時、雪のいとたかう降たりけるを、やうきにもらせ給て、梅の花をかさゝせ給ひて、月のいとあかきに是に

世繼ノ文枕草子ノ文ニホヾ同ジ但シ兵衛ノ詞「雪月花の時」トアリ。是レニヨルベシ

校云。東平九年ハ七年ノ誤記カ。

歌よめ、いかゞはいふべきと、兵衛の藏人に給はせ給ひければ、雪の花と奏たりければ、いみじうめでさせ給ひけり。松島日記曰、明がた夜もやう〳〵ところ〴〵のこ殘むの雪もはづかしきまでしらみはてたり。北山抄曰、大饗事、天德三年右大臣家饗、雪消庭濕云云。類聚雜例曰、長元六年十一月四日、天晴、雪積二寸許。都記曰、永保元年十二月十三日、積雪三寸。廿日積雪四五寸許。身のかた見曰、霜月十日あまりにもなりぬ、雪いさゝかうちゝりて、えんなるあさぼらけ。つれ〴〵曰、雪のおもしろうふりたる朝。太平記第二十六日、桃井右馬頭直常、其比越中ノ守護ニテ在國シタリケルガ、兼テ相圖ヲ定タリケレバ。同、正月八日越中ヲ立テ、能登、加賀、越前ノ勢ヲ相催シ、七千餘騎ニテ夜ヲ日ニ繼テ責上ル。折節雪ヲビタダシク降テ、馬ノ足モ不立ケレバ、兵ヲ皆馬ヨリ下テ 檋カンシキ ヲ懸サセ、二萬餘人ヲ前ニ立テ、道ヲ踏セテ過タルニ、山ノ雪氷テ如レ鏡ナレバ、中々馬ノ跡ヲ不労ヌ七里半ノ山中ヲバ人馬容易タヤスク越ハテヽ、比叡山ノ東坂本ニゾ着ニケル。扶桑略記第廿二曰、小松天皇仁和二年十二月十四日、是日自レ朝至レ夕風雪慘列矣。同廿九日、康平五年十二月五日、頼資改二配流土左國一、其使奏聞、雪深路嶮、難レ達之由、仍改流也。治曆四年六月廿四日、肥後國阿蘇山雪降、深五六寸。同三十日、承保元年三月二日、申時以下雪降、深四五寸。應德二年三月十五日、申時雪降、尙如二季冬一。寬治三年十二月廿二日、太上天皇引二率公卿相等一、參二入同寺一寺。彥根凡洛下貴賤、海內緇素、男女老少皆以參拜。凌二寒風一而飛二於輕車一、侵二甚雪一而策二於疋馬一。嘉保元年正月五日、終日大雪、深及二一尺一、家如二北山一。數日不レ消。蜻蛉日記曰、ゆきなんいみじうふるといふなり。としのをはりになにごとにつけても、おもひのこさゞりけんかし。又曰、しも月にゆきはいとふかくつもりて。又曰、三日になりぬ

校云。まとハまことノ誤

るよ、ふりけるゆき三四寸許たまりて、いまもふる。又曰、はつゆき七八寸のほどたまれり。二水記曰、大永八年正月三日、終日雪飛、積地一尺有餘也。近年之深雪也。宣胤卿記曰、永正三年十一月廿四日、晴。去夜雪在屋上、當年初也。卅日、終日雪頻降積。薩戒記曰、四日雪のふりて、木ごとのすゑ花かとあやまつほどの明ぼのに。康富記曰、應永廿九年十一月廿八日、雪降、自夜積庭、豐年之嘉瑞者哉

形状

榮花物語根合曰、ゆきのふりたるつとめて、一ほんのみやのにようばう、南殿などを出てみれば、ゆきはまとにはなとまがひ、いけのこほりはかゞみとみゆ。いはほにもはなさき、いみじうおかし。御だうのかたをみれば、からゑのこゝちしてみわたさる。にはのゆきはきえがたになりにけり。こずゑぞさかりとみゆる云云また人〴〵「いはほにもまつにもはなぞ咲にけるかゝるゆゝ見しおりはありきや。平家物語第九曰、ころは二月はじめの事なれば、峯の雪村ぎえて、花かと見ゆる所も有云云のぼれば白雪かう〳〵としてそびへ、くだれば せい山がゞとしてきしたかし。松の雪だにきえやらで、こけのほそ道かすか、あらしにたぐう折〳〵は、梅花とも亦うたがはれ。懐風藻曰、五言、詠雪一首。雲羅囊珠起、雪花含彩新、林中若柳絮。枕草紙曰、雪のいとたかくはあらで、うすらかにふりたるなどは、いとこそおかしけれ。又雪のいとたかく降つみたる夕ぐれより、はしちかう、おなじ心なる人二三人ばかり、火おけなかにすへて、物がたりなどするほどに、くろうなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光、いとしろう見えたるに、火ばしして、はいなどかきすさびて、あはれなるもおかしきも、いひあはするこそおかしけれ。又曰、雪たかふ降て、今も猶ふるに、云云からかさをさしたるに、風のいたく吹て、よこさまに雪を吹かくれば、すこしかたぶ

きてあゆみくるふかぐつ、はうくわなどのきはまで、雪のいと白くかゝりたるこそおかしけれ。仙覺萬葉集註釋卷第八曰、ほどろ〳〵にふりしけばとは、雪はまづ垣ねなどのほとりにつもれば、ほどろ〳〵にふりしければとよめりと釋し侍れども、雪にほどろとよみたる歌はあまた見へ侍るに、ほどろとは、ひかると云詞也。源氏物語末摘花曰、雪かきたれいみじくふりけり云云まへの前栽の雪々見給。ふみあけたる跡もなく、はる〴〵とあれわたりて、いみじうさびしげなるに云云まだほのぐらけれど、雪のひかりに、いとゞきよらにわかうみえ給を云云色は雪はづかしくしろうて云云松の雪のみあたゝかげにふりつめる、山ざとの心ちして物哀なるを云云たち花の木のうづもれたる、みずいじんめしてはらはせ給。うらやみがほに松の木のをのれをきかへりて、さとこぼるゝ雪も云云日のあし程なくさしいりて、雪すこしふりたるひかりに。同若菜曰、けふの雪にいとゞ御風くはゝりてかきみだり云云又の日、雪うちふり、空のけしきも物あはれに云云をくる。あけぐれのそらに、雪の光みえて、おぼつかなし。なごりまでとまれる御にほひ、やみはあやなしとひとりごたる。雪は所々きえのこりたるがいとしろき庭の、ふとけぢめみえわかれぬほどなるに云云おもしろき雪のひかりに。同浮舟曰、雪俄にふりみだれ、風などはげしければ云云雪のやう〳〵つもるが、ほしのひかりにおほ〳〵しきを云云雪のいとたかうつもりたるに云云消のこりたる雪山ふかく入まゝに、やゝふりうづみたり云云雪なら消つゝ云云雪のふりつもれるに、わがすむかたをみやり給へば、霞のたえ〴〵にこずゑばかりみゆ。山はかゞみをかけたるやうに、きら〳〵と夕日にかゞやきたるに。古今著聞集卷第十一曰、後二條殿三月の比、白河の齋院へ參給て御鞠の會有けるに、しばし有てふき

校云。一本扇をかざして

みのきたる童扇をさして、片手に蒔繪の手箱の蓋に薄様敷て、雪をおほく盛て、日隠の間の御縁に置て歸入にけり云云御手などにてはとらせ給はで、檜扇のさきにてすこしすくひてたりけるが、しみたる雪にて、御直衣にかゝりたりけるがとけて、二重裏にうつりていでゝ、むら〳〵にみへける。よろづの御のり日、夜のまの雪のはたそめたる日かり、あしたの日影にきら〳〵として、おとゞのうへ御まへの木ずゑなどいとゑんに見どころおほかり。吾妻鏡卷第四十一曰、建長三年六月五日、有ニ評定一、此事每度、日來有ニ盃酒椀飯等之儲一。又當ニ炎暑之節一者、召ニ寄富士山之雪一。所レ爲レ備ニ珍物一也。彼是以レ無ニ民庶之煩休一被レ止レ之。善政隨レ一云云

【今名】本草啓蒙ニ雪ノ形狀ヲ說ニ、其形水靳ノ花ニ似テ六瓣ト云。此說水靳ヲ水英ト云ヨリ發レル者也。然ドモ漳州府志ニ、芹二三月作レ英、時、可ニ菹及ヒ熟瀹シ食フ之ヲト云トキハ、英ハ水靳ノ苗ヲ云ル者也。花ノ義ニ非ズ。雪ノ形狀ハ雪譜ニ詳也。

ゆきのこほり 榮花物語　【漢名】**雪凍** 物理小識

東軒述異記曰、雪花辛未冬、雨ニ雪ヲ。奉天大內堀馳道ニ一、墻壁屋瓦俱ニ結成ニ種種異花ヲ、南北、名卉無ニ一不レ備、枝葉蕤獵儼如ニ圖畫ノ。上朝文武官役無レ不ニ目擊一。又以ニ沍寒ヲ數月不レ化。物理小識曰、凍成花鳥草木之形。嘗見紀載河凍有魚龍花艸形。或在屋上有之。類以爲祥異。格致艸曰、崇禎壬申臘月、余樓簷瓦凍爲花艸獅鳳之形。喧曰、丁丑春雪凌數日。殿門貼梅花 瓦還作蒲花。野老曰、豐兆也。蓋雪凍則土堅蝗絕、而芒種時

有雨
耳

【集註】榮花物語つぼみ花曰、うへより、まつにゆきのこほりたるを「はるくれどすぎにしかたのこほりこそまつにひさしくとゞこほりけれ。とあれば、みやのおほんかへし「ちよふべきまつのこほりは春くれどうちとけがたきものにぞありける。つれ〴〵曰、北の屋かげにきえ残たる雪の、いたうこほりたるに。萬葉集卷第十三曰、立留、待吾袖爾、零雪者、凍渡奴、置霜文、氷左叡度落雪母、凍渡奴。

阿和由岐 倭名類聚鈔

【漢名】春雪 名物攷　【今名】ハルノアハユキ

【一名】沫雪 萬葉集卷第八曰、沫雪香、薄太禮爾零登、見

名物攷曰、臘雪掘之輙聚、立春以後不復可摶。亦微溫摶之故也。里語以爲春雪不能鋼厭擴攜、其以此乎。左右二、流倍散波、何物花其毛。沫雪、保杼呂保杼呂爾零敷者云云。沫雪爾、所落開有、梅花云云。沫雪乃、比日續而、如此落者云云。沫雪之、可消物乎、至今、流經者云云。沫雪乃、庭爾零敷、寒夜乎云云。同卷第十曰、梅枝爾、鳴而徙、鶯之、翼白妙爾、沫雪曾落。卷向之、檜原毛未雲居者、子松之末由、沫雪流。吾背子乎、且今且今、出見者、沫雪零有、庭毛保杼呂爾云云。峯之沫雪、寒零良之。同卷第十六曰、沫雪之零也來座云云。古事記曰、如沫雪蹶散而。又曰佐夜具賀斯多尒、阿和由岐能。釋日本紀曰、私記云、問謂沫雪其意如何。答、師說、沫雪、是雪之脆弱者也。其弱如水沫、故云沫雪。阿

校云。葉。原本及木活本寛文版共ニ葉ニ作ル。秋葉氏舊藏本版本「養」ニ朱訂ス

波由岐 古事記 **あは雪** 源氏物語御幸曰、かたきいはをも、あは雪になし給つべき御けしきなれば。袖中抄曰、顯昭云、あは雪とはきえやすき雪也。 **うす雪** 言塵集曰、はだれ雪、うす雪の事也。藻塩草曰、はだれ、薄太禮とかく。うすき也。またらの葉也。されどもまだらゆきとはきゝなれず。又曰、あは雪のほとろ〱とふりしけば、はだら〱にと云詞也。と云云又曰、かきたれてふると云云又雪のふる音を云と一字抄にみえたり。是はくれずと云云又云、物のほとり〱にふりしける也。雪のいたくふらぬ程に、ものゝきは〱にたまる也。袖中抄曰、顯昭云、ほどろ〱は、はだら〱にといへる詞也。童蒙抄云、ほどろ〱とは、ものゝほとり〱にふりしけばとよめるなり。ゆきいたくふらぬほどは、ものゝきは〱にたまるなり。又曰、はだれ雪をばまだらといひ、うす氷をうすらひと云歟。

集註　高倉院升遐記曰、にはもまだらにつもるあは雪の上に、月のおぼろにさしいでたるを見て

赤雪 續日本紀

唐書曰、德宗貞元二十一年正月甲戌、雨赤雪于京師。宋史曰、仁宗慶曆三年十一月河北降赤雪。集異志曰、晉武帝太康七年十月河陰雨赤雪二尺。路史亦載之。明季北略曰、萬曆四十四年初三、南京天雨紅雪、與唐貞元二十一年京師雨赤雪同

集註　續日本紀卷第十四曰、聖武天皇天平十四年春正月己巳、陸奥國言、部下黑川郡以北十一郡、雨赤雪、平地二寸。

安良禮　萬葉集　［漢名］霰　本草　［今名］アラレ

正字通曰、霰先見切、音線。說文稷雪也、言雪作未成華、圓如稷粒。漢書曰、雹者陰脅陽也。霰者陽脅陰也。本草時珍曰、曾子云、陽之專氣爲雹、陰之專氣爲霰。陸農師云、陰包陽爲雹、陽包陰爲霰。

［一名］丸雪　萬葉集卷第七曰、丸雪降、遠江、吾跡川楊、雖刈云云。同卷第二十曰、霜上爾安良禮多婆之里云云。言塵集曰、丸雪と書てあられと讀。又曰、丸雪とは霰也。字典曰、霰、集韻霰也。埤雅雪寒甚則爲粒、淺則成華、華謂之霙。

阿良例　萬葉集卷第二十曰、阿良例布理可志必能可美乎、伊能利都都云云

阿良禮　天文寫本和名抄　○倭名鈔曰、雹、陸詞云、雹、雨冰也。和名安良禮。按雹ハヘウ也。字鏡曰、雹、阿良禮、永正四年二月御月次集曰、霰。

あられ　山賤記曰、さへ〳〵てちるや霰の玉はやすむこのうら風なみにしくめり雪あられかきくらす空のひまなきこころは

阿羅禮　仙覺萬葉集註釋卷第二曰　肥前國風土記云云杵嶋郡云云歌詞云、阿羅禮符縷、耆資能加多塏塢、嵯峨紫彌占、區翫刀理我泥底、伊母我提鬪刀縷曰杵島曲。又曰、云云此歌古點にはみぞれふり、あられまつばら、すみよしの、をとひむすめと、みれどあかぬかも、と點せり。霰字はみぞれ、あられもとより兩訓あり云云。四條大納言公任卿の和漢朗詠集の中にあられに用らる。又今歌のごときは霰打とかけり。打字其意あり。源平盛衰記卷第四十八曰、霰玉チル閼伽ノ折敷ゾ置レタル。萬葉集卷第十曰、霰落、板敢風吹、寒夜也云云。枕草紙曰、あられは、いたや。

なれば
流布本
たりぬ
ればー

玉あられ

撰集抄曰、玉ざゝの上には玉あられつもり、ひろはん事もかた岡の、松のみどりは君のために、千代の色をやこめつらん

集註 續日本紀卷第七曰、元正天皇靈龜二年夏四月戊午、雨霰。常陸國風土記曰、風俗說云霰零香島之國。百練抄第十五曰、寬元四年四月七日、霜降霰散、可レ謂二奇異一歟。明月記曰、建曆二年十一月五日、天晴微霰零、寒風烈。寬喜二年正月五日、終夜達、且霰零氷結。宇津保物語俊蔭曰、たゞ霰はげしきに。更級日記曰、みつさかのやまのふもとに、夜ひる、しぐれ、あられ降みだれて、日の光もさやかならず。枕草紙曰、冬は雪あられなどの風にたぐひて入たるもいとおかし。又曰、ふるものは雪あられ。源氏物語はゝきゞ曰、ひろはゞ消なんと見ゆる、玉ざゝのうへのあられ。同薄雲曰、しはすにもなりぬ。雪あられがちに心ぼそさまさりて。同若菜曰、あられふりあれて、すごき夜のさまなり。同よもぎふ曰、霜月ばかりになれば、雪あられがちにて、ほかにはきゆるまもあるを、あさ日夕日をふせぐよもぎむぐらのかげに、ふかうつもりて、こしのしら山思ひやらるる雪のうちに。同椎が本曰、年もくれにけり。ゆきあられふりしくころに。同總角曰、あられふるみ山の里はあさ夕にながむる空もかきくらしつゝ。古今著聞集曰、高辨上人云云正月の比松のもとに居て、くはんねんせられるに、あられのふりければ、岩のうへ松のこかげにすみ染の袖のあられやかけしそい玉　撰集抄曰、竹の葉にあられふるなり、さら〳〵と聞ば獨はねぬべき心ちもせず。又曰、神無月の比、木々の紅葉の嵐にさそはれて庭につもり、時雨かきくらし、あられまじりて、この葉の上におつとみれば、かつ消行を見るに。蜻蛉日記曰、けふのひるつかたよりあめいとたうはらめにて、あられにつれ〴〵とふる。平家物語曰、空

校云。

かきくもりあられうち散、いとゞきえ入心ちぞせられける。狹衣曰、あられのいとおどろ〳〵しうふりたるに。又曰 つれの冬よりも雪あられがちにて、はれまなきそらのけしきもいとゞ所がらはしめやかに。又曰、日のくるゝまゝに、風のをとなひもあらくて、よこざまに吹入るあられの音も、ものおそろしう成ぬれば。蘐墟草曰、あれはてゝむねもくもらぬ宿なればあられならではもる人もなし。吾妻鏡卷第十九曰、承元二年十二月廿六日辛卯、霰飛。同卷第二十二曰、建保二年十二月二日、霰降。同卷第四十三曰、建長五年十一月廿五日、霰降。同卷第四十四曰、建長六年十月四日戊戌、霰甚雨雷鳴霰相交。

比左女(ヒサメ) 倭名類聚鈔 【漢名】雹 本草 【今名】ヘウ

廣東新語曰、雹者氷之所ㇾ爲、氷以㆓盛陰㆒而堅 盛陰脅㆓盛陽㆒則雨ㇾ氷而爲ㇾ雹。品字箋曰、雹。雨氷。左傳、凡雹皆多之徵陽、夏之伏陰也。西京雜記、陰氣脅ㇾ陽爲ㇾ雹。陸佃云、陽散ㇾ陰爲ㇾ霰、陰包ㇾ陽爲ㇾ雹。形似㆓半珠㆒其粒皆三出、雪六出成ㇾ華、雹三出成ㇾ實。五雜組曰、雹似㆓是霰之大者㆒、但雨ㇾ霰寒而雨ㇾ雹不ㇾ寒、霰難ㇾ晴、而雹易ㇾ晴如㆓驟雨㆒。然北方常遇ㇾ之。相傳龍過則雹下、四時皆有。余在㆓齊魯㆒四五月間屢見ㇾ之、不㆓必多㆒也。然雹下之地、禾麥經ㇾ年不ㇾ生。蓋冷氣凝結、入ㇾ地未ㇾ化耳。史冊所ㇾ載雹有㆘大如㆓桃李㆒者、如㆓雞子㆒者、如ㇾ斧如ㇾ斗者㆖。惟武帝元封中雹大如㆓馬頭㆒極矣。【一名】比 倭名鈔曰、日本紀私記云、火雨 和名比左女 雨氷 同上 今按、俗云㆓比布留㆒。三代實錄卷第四十五曰、占曰、凡雹者多之過陽、夏之伏陰也。陰過陽冬温、伏陰夏寒矣。源氏物語明石曰、いとかく地のそこをとをるばかりのひふり、い

「陰」字流布本なし衍ならん

校云。二一流布本三ニ作ル

夜云。

かづちのしづまらぬことは侍らざりき。

氷　日本書紀曰、皇極天皇二年二月、是月風雷氷雨。同卷第二十九曰、天武天皇白鳳八年六月庚戌朔、氷零、大如ニ桃子一。同卷第三十曰、持統天皇五年六月、京師及郡國四十雨氷。太神宮諸雜事記曰、治曆二年五月十二日丙申、氷降天雷電振動之天四方如暗、犬ハ人ノ中走迷、田夫殖女、衣服笠ノ被ニ打破一。大小鳥飛落天被ニ打殺一之事等有。宮司上奏畢。扶桑略記廿二裡書曰、延喜十七年三月廿三日、子刻氷降。同廿七日、長保四年三月十日、雷電大盛、氷降雨次。同廿九日、治曆元年六月廿四日、大和國十市高市兩境雨レ雹、幷氷降、徑寸餘○按ニ、雹ノ内ニ氷片ヲ雜ヘ降シ證。

氷雨　古事記曰、於是零ニシ大ナル氷雨ヲ一

こほりの雨　源平盛衰記曰、ふしぎやと思ひ、立出て四方を見わたせば、此山よりくろくも一むらたなびきわたり、雷電ひゞきてこほりの雨ふり。

へう　小島のすさみ曰、へうはらめき、かさもとりあへず、あはたゞしければ、いかなる事にかと、又心まどひいはんかたなし。

［集註］　日本書紀曰、皇極天皇二年二月辛巳朔乙巳、雹傷ニ草木華葉一。夏四月己亥、西風而雹、天寒人著ニ綿袍三領一。續日本紀卷第廿九曰、稱德天皇神護景雲二年三月戊午、雨レ雹。文德實錄卷第八曰、齊衡三年三月丙午、雨レ雹、記レ災也。同卷第十曰、天安二年閏二月乙巳、雨レ雹。三代實錄卷第二曰、淸和天皇貞觀元年夏四月七日壬辰、出羽ノ國雷雹。五月十七日壬申、雷電雨レ雹。同卷第四曰、貞觀二年五月廿日甲寅、地震。雷電雨レ雹。十八日丁卯、地震。雷、雨レ雹。同卷第六曰、貞觀四年三月十九日丁亥、雨レ雹。同卷第二十三曰、貞觀十五年夏四月廿七日辛酉、雷電雨レ雹。同卷第二十九曰貞觀十八年六月十八日癸亥、是日雺降。申時雨レ雹。同卷第四十四曰、陽成天皇

是日。流布本是日ニ作ル「大系本云ヒ諸本作最恐是、」コレニヨレバ「最且」トスベキカ

元慶八年甲申春正月四日丙寅、巳ノ時天南雷八聲、降レ雨。始雷發ニ聲於離一、行鳴ニ於坤一。其 後暴風雨レ雹。
同卷第四十五曰、光孝天皇元慶八年夏四月五日乙未、自レ辰降レ雨、至レ申雷電雨レ雹。九日己亥、申時雷電雨
レ雹。摧ニ傷草木之葉一ヲ。同卷第四十六曰、元慶八年九月十八日乙亥、申ノ時、雷電雨レ雹、摧ニ傷草木之葉一ヲ。同
卷第九十曰、仁和三年六月廿七日己巳、自レ昨雷雨、至レ今未レタ止マ、諸衛警陣。雷電雨レ雹、況シヤ交致、水潦彌
溢、人不ニ通行一。雹積ニ地上一、移レ時ヲ不レ消。日本記略曰、延曆十五年四月丙子 雹。吾妻鏡卷第二十七曰、寬
喜二年六月云 云去九日辰尅云 云同時降レ雹。同卷第三十二曰、曆仁元年六月五日、及ニ深更一雷鳴降レ雹。同
卷第四十一曰、建長三年十二月廿六日、雹降、於レ地積レ之事三寸。百練抄第八曰、治承四年四月廿九日、雹
降、又雷發ニ一聲一。同第十三曰、嘉祿元年三月十二日、晝方雹降。今日夏節也。同卷第十五曰、寬元元年五月
十八日、河東雹降。人以驚遽云 云。扶桑略記廿八曰、長曆元年閏四月八日、雷鳴雹降。明月記曰、治承四年
四月廿九日、未時許雹降、雷鳴先三聲之後、霹靂猛烈。建久九年二月廿一日、雷鳴雹降、其音如飛礫。又休、
可恐
云云

形狀

日本書紀曰、推古天皇三十六年夏四月壬午朔辛卯、雹零、大如ニ桃子一。壬辰雹零、大如ニ
李子一。又曰皇極天皇二年夏四月甲辰、近江國言、雹下、其大徑一寸 續日本紀卷第卅三
曰、光仁天皇寶龜六年秋七月庚戌、雨レ雹、大者如ニ碁石一。續日本後紀卷第十曰、仁明天皇承和八年秋七月癸
未、雨レ雹、大サ如ニ碁子一。文德實錄卷第一曰、嘉祥三年五月癸卯、雨レ雹 大如ニ鴨卵一。同卷第十曰、天安二年
夏四月丁酉、天陰雷雨、夜雨レ雹、大如ニ碁石一。須臾而止、通夜快雨。三代實錄卷第二十三曰、淸和天皇貞觀
十五年五月二日丙寅、雷雨レ雹、其大サ如ニ雞子一或ハ如ニ梅實一。日本記略曰、延曆十九年四月辛卯、是日和泉

校云。文永二年八三年ノ誤

國雨ㇾ雹、大如ニ桃李一。吾妻鏡卷第五十二曰、文永二年三月五日、午尅雷鳴、自ニ南方一亘ㇾ北、降ㇾ雹、大如ㇾ李。其後晴天。山槐記曰、治承四年十月廿九日、朝間晴、午尅天陰雷鳴、風烈雹降、其勢如大角豆、積地不消。頃之休止後、閑院河船等漂流者云云。百練抄第四曰、後冷泉院治暦二年五月十三日、太神宮雹雨、大如ニ鷄卵一。四條院嘉禎元年五月四日丙申、雷鳴雹降、其勢如ニ梅子一。邊土作物皆以打損云云。同二年四月八日甲午、暴風雷雨。未刻雹降、其大如ニ柑子一、萬人驚目。齋宮記曰、選子還院之後降雹、大如栗。扶桑略記廿九曰、康平七年四月十九日、加茂祭。未刻、天陰暴風雷雨、氷雹交降。大如ニ梅李一、牛馬驚走、數刻不ㇾ銷。治暦二年六月三日、伊勢太神宮司言上。去月十三日神宮幷齋宮雹降ニ大雹一之異、大如ニ鷄卵一、烏鵲之類多以被ニ搏殺一。明月記曰、文暦二年五月五日、昨雹此邊如飛礫、積地不消、拾入椋、今日猶不消、大猶柑子、稼穡已損由民口不安云云

美ミ曾ゾ禮レ 倭名類聚鈔　漢名　水雪 正字通　今名　ミゾレ

丹鉛總錄曰、雪云云帶雨不成花、俗諺云、夾雨夾雪。正字通曰、霄、水雪雜下者、故謂之霄雪。又陸佃云、閩、俗呼水雪。又杜甫詩 帶雨不成花〇俊頼髄腦抄曰、みぞれといふは雪まじりてふる雨をいへは云云。言塵集曰、みぞれとは雪霰雨まじりたるを云歟。宣胤卿記曰、永正三年十月廿六日雨雪雜下。

一名　三ミ曾ゾ禮レ 新撰字鏡曰、霙、亡各反、霰、又三曾禮。字典曰、霰、釋名、霰珠小

雨也。爾雅、小雨謂之霢霂。正字通曰、霂、莫卜切、音木。霢霂小雨也　倭名鈔曰、霙、孫愐云、霙雨雪相雜也、音於驚反、文選雪賦、師說曰、三曾禮。字典曰、霙、玉篇雨雪雜下。韓詩外傳雪華曰霙。○明月記曰、貞永二年二月廿三日、朝猶雨降、霰交、巳時蒼天晴、天乍晴雨雪交降、大風間發、櫻花之後雪霰、非恒事。文暦二年十二月十八日、午後俄沍陰霙降。即晴。康富記曰、文安四年十一月八日、雨雪交下、平野祭也。上卿云云召使久繼等參行之、社司申記之時分、霙下候間用雨儀

集註　源氏物語薄木曰、夜ふけていみじうみぞれふる夜。同みをつくし曰、雪みぞれかきみだれ。明月記曰、寛喜二年正月一日、及未剋雨猶雜交雪、徐欲積、萬頃同縞、千巖俱白。小時雪又止、雨猶降。閏正月十九日、霜結沍陰、入夜雨雪降、終夜不止、寒氣如嚴冬。十二月九日、午吃雨雪交降。寛喜三年正月十八日、夜小雨交雪、瀝聲聞。文暦二年正月九日　雨雪交而長途深泥。松島日記曰、けふ雪みぞれふりこりて、わらんづおもたゝしきに。宣胤卿記曰、永正三年十一月廿六日　雨雪雑下

形狀　枕草紙曰、みぞれはにくけれど、雪のましろにてまじりたるおかし

斯毛（シモ）萬葉集　**漢名**　霜 廣東新語　**今名**　シモ

廣東新語曰、霜者白露凝戾而成。黃氏日鈔曰、俚俗語類、霜者露結之、雨結、高山無霜者、上西風漸清氣漸緊吹散不結。群芳譜曰、霜喪也。物遇之皆凋喪、故名之曰霜。大戴禮、季秋之月霜始降、蓋陰氣勝則凝而爲

校云。記ハ扶桑略記ナリ

霜、大抵徹夜清明天必降露、寒氣凝則爲霜、天氣清明又極寒冱則霜必重、若雖寒而不甚有霜、又雖稍有雲霧而不清明則無霜矣　品字箋曰、霜露陰液至秋而白、寒甚爲霜。說文、霜喪也。此氣慘毒物遇之悉凋喪也

【一名】**之毛**　倭名類聚鈔曰、霜。和名之毛。萬葉集卷第十五曰、安伎左禮婆、於久都由之毛爾、安倍受之弖、京師乃山波、伊呂豆伎奴良牟。同卷第五曰、伊都乃麻可、斯毛乃布利家武、久禮奈爲能。續日本後紀卷第十二曰、承和十年九月甲午、是重陽節也。天皇御紫宸殿、宴群臣及文人、同賦白露爲霜之題。宴訖賜祿。倭名鈔國郡部曰、武藏國播羅郡霜見、之毛美。扶桑略記廿八曰、治安三年、入道前大相國詣金剛峯寺。記云十一月一日丑刻、入御京花、於椎河邊夜漸曙矣。宿露滿野、嚴霜凝衣

志毛　萬葉集卷第二十曰、佐左賀波乃、佐也久志毛用爾云云

朝霜　萬葉集卷第十二曰、朝霜乃、可消耳也、時無二云云。同卷第七曰、朝霜之、消安命。扶桑略記廿五曰、人身無常似霜露之逢朝日

阿佐志毛　日本書紀景行天皇歌曰、阿佐志毛能。釋日本紀曰、朝霜也。私記曰、朝霜易消也

夕凝霜　萬葉集卷第十一曰、夕凝霜置來云云

霜柱　言塵集曰、霜柱とは霜の氷りたるなり。又曰、霜くづれとは霜柱の折るなり

高霜　言塵集曰、高霜とは大霜なり

つるのいましめ　藻鹽草曰、つるのいましめ、しも也

さはひこま　同上、霜の異名なり。藏玉にあり

【集註】日本書紀曰、推古天皇三十四年三月、寒以霜降。又曰、皇極天皇二年三月乙亥、霜傷草木華葉。又曰、天武天皇白鳳十一年秋七月戊午、是日、信濃國吉備國並言、霜降。續日本後紀卷第

校云。殺ノ下「草」字加フベシ

校云。大系本ニ可ノ下「爲」字ヲ補フ

一日、仁明天皇天長十年夏四月庚申、降レ霜。文德實錄卷第六曰、齊衡元年三月丁未、春寒殞レ霜、何以書レ之記レ災也。同卷第七曰、齊衡二年夏四月戊午、是月、寒殞レ霜 記レ災也。三代實錄卷第四曰、淸和天皇貞觀二年夏四月六日丙戌、殞レ霜殺レ草。同卷第五曰、貞觀三年三月乙亥、殞レ霜。四日戊寅、自三一日一霜頻降。同卷第六曰、貞觀四年二月十六日乙卯、出雲國出雲、大原兩郡、去年風水殞レ霜、多被二損傷一。詔復二課役一年一。同卷第七曰、貞觀五年三月十五日丁丑、霜降。五月七日己巳、天寒、殞レ霜。同卷第十曰、貞觀七年夏四月三日癸丑、殞レ霜殺。四日甲寅、殞レ霜不レ止。七日丁巳、殞レ霜。八日戊午、殞レ霜。十四日甲子、殞レ霜。同卷第二十五曰、貞觀十六年夏四月五日癸巳、殞レ霜。同卷第三十三曰、陽成天皇元慶二年夏四月九日甲戌、殞レ霜。同卷第三十五曰、元慶三年二月廿三日癸未、殞レ霜。同卷第三十七曰、元慶四年三月廿五日戊寅、殞レ霜。同卷第四十五曰、光孝天皇元慶八年三月廿六日丁亥、殞レ霜。夏四月十日庚子、天寒殞レ霜。十一日辛丑、霜降。十六日丙午、霜降氣寒。十七日丁未、夜寒霜降、草木葉彫。令義解曰、謂九月霜始降 婦功成可三以授二冬衣一。榮花物語鳥部野曰、こよひしもゆきいみじうふりて。扶桑略記廿五裡書曰、承平五年四月四日、夜霜降、爲レ異。同廿六日、天德四年五月八日、霜降。尤可レ異。同三十日、應德二年三月十六日、霜降。明月記曰、元仁二年正月四日、霜凝。廿六日、霜凝。嘉祿元年十月五日、霜凝。十六日、霜凝。廿一日、霜凝。寬喜元年十月十五日、霜結。寬喜二年正月十二日、霜凝。閏正月十二日、夜月明、朝霜凝。十月十五日、霜凝。廿二日、霜埋庭草。貞永二年三月廿一日、霜結。宇津保物語曰、かの京極にも風のあらく、霜雪の降つむまゝに。平家物語卷第十曰、多の霜のぐんえうをからすにあひおなじ。同卷第八曰、霜をおほへ

校云。あなさんアナ寒なり

るあしの葉の、もろきいのちをあやぶむ。六代勝事記曰、雀のこずゑ野邊の草、霜がれぬれど。歌林四季物語曰、外山の霜もけしきとられて云云。撰集抄曰、夜さむに秋もすゑにのぞみ、霜さえて枯野の瀬跡もなく。又曰、霜かれはてし野邊のうきなんどをかなしみ。吾妻鏡巻第二十七曰 寛喜二年七月十六日、霜降、殆如冬天。

【形狀】　源氏物語若紫曰、霜はいとしろうをきて。同乙女曰、霜のいとしろきに。同若菜曰、霜のいとこちたくをきて、松はらいろまがひて云云ほの〴〵とあけゆくに、霜はいよ〳〵ふかくて。仙覺萬葉集註釋巻第一曰、たへといふは、いづれの物にもうつくしきを、ほむるにいふとなれば、いづれのいろにもわたるべけれども、なねとはしろきをいふこと也。たと云は、高上の義也。いづれにもすぐれたりといはんと也。白色 語色の本と云は是なり。しろきいろあらはれて、ふれる霜なれば、たへのほに、よるのしもふりといふ。同巻第九曰、とけじもの、うちこひふして、とは、しものとけたるを、とけじもと云。霜のとけて露と成しに云云。つれ〴〵曰、汀の草に紅葉のちりとゞまりて、霜いと白ふをけるあした。又曰、さしよせたる車のあかえも、霜いたくきらめきて。榮花物語本の雫曰、朝のしものあさ日にきえ、ゆふべのつゆたのみすくなく。太平記七曰、劔戟ノ日ニ映ノ耀ケル有様ハ、曉ノ霜ノ枯草ニ布ルカ如ク也。蜻蛉日記曰、けさも見いだしたれ、やのうへのしもいとしろし。わらはべよべのすがたながら、しもくちまじなはんとてさはぐもいとあはれなり。あなさん、ゆきはづかしきしもかた。とくちおゝしつゝ。又曰、又の日しものいとしろきに。明月記曰、嘉祿元年十月八日、霜如雪。十一月四日、霜如雪。嘉祿二年十一月十七日、天晴、霜如雪。嘉祿三年九月十四日、朝霜不異雪。十五日、霜如雪　寛喜二

年八月廿七日、朝霜如雪。十月二日朝霜如雪。十一月八日、霜凝、天晴、如北山白雪。十二月廿三日、霜如雪。寛喜二年二月廿三日、霜如雪。九月廿六日、夜霜白。文暦二年十一月二日、寒霜如雪。辨内侍日記曰、

左衛門のぢむのはしに霜のしろくさへたりし。

さむくつめたさかぎりなかりしもおもしろくて

八豆之毛（ヘツシモ） 倭名類聚鈔 [漢名] **霰** 說文 [今名] **ハツシモ**

詩經類考曰、說文 霰竹入反早霜也 [一名] **はつしも** 源氏物語 **早霜** 三代實錄卷第十一曰、貞觀七年十二月九日丙戌、武藏國早霜。倭名鈔曰、霰。和名八豆之毛 [集註] 源氏物語藤袴曰、九月にもなりぬ、はつしもむすぼゝれ、えんなるあしたに云云朝日さすひかりをみても玉ざゝの葉分のしもをけたずもあらなん

つゆしも 仙覺萬葉集註釋 [今名] **ミヅシモ**

仙覺萬葉集註釋曰、或は九月ばかりの寒露をいふ。露の霜に成ほどなれば、露霜と云。霜にもなりはてず、なを露にて、又露にもあらぬほど也

都由（ツユ） 萬葉集 [漢名] **露** 名物攷 [今名] **ツユ**

地理孝思集曰、露者土氣之所化也。物理小識曰、月爲水精、以月主潮者是也。月遶地而行、潮亦遶地而行。月行天一周、潮循地一周。是天地內、無地不潮、無刻不潮也。是亦與月類、夏日無月之夜、星辰自縈。則地氣升而爲露、艸尾皆有露珠。亦潮也〇仙覺萬葉集註釋卷第四曰、いと云は出る義、つと云は水也。非をつと云がごとく、水のしろきをつゆと云がごとき也

[一名] **つゆしも** 仙覺萬葉集註釋卷第八曰、或は露をつゆじもと云。霜け露のなる物なれば、露をつゆじもといふといへり

白露 萬葉集卷第十二曰、暮置而、旦者消流、白露之云云

之良都由 萬葉集卷第二十曰、秋草爾、於久之良都由能云云

豆由 倭名類聚鈔曰 露 和名豆由。萬葉集卷第十五曰、都由智於伎爾家類。同卷第二十曰 左乎之可能、都由和氣奈加牟云云

安佐都由 萬葉集卷第十五曰、安佐都由爾、毛能須蘇比都知云云

旦露 萬葉集卷第十二曰、旦露之云云

朝露 萬葉集卷第十一曰、朝露之、消安吾身云云。朝露之吾身一者云云。明月記曰、寛喜元年七月廿九日、有朝露云云

葉のほる露 言塵集曰、葉のぼる露とは、地より草木の葉にのぼる也。露はふらぬ物也。露に夕に結びて、朝に消也。藻鹽草曰、草の葉にすがる白露なども云り

しけ玉 言塵集曰、しげ玉とは露の名也。後撰によめり

[集註] 明月記曰、寛喜元年七月廿八日、近日雖天晴無夜露、草木枯槁。天福元年六月十九日、夜無露草木枯槁。天福元年六月廿九日、夜露滿庭草。文暦二年閏六月廿三日、草露似秋朝。蹈詩略記曰、綴草露垂珠。文時。綴草露消天漸寒。本朝無題詩曰、菡萏葉率玉露圓。世繼物語曰、女々月

校云。豆由ノ例ト都由ノ例混同セリ

を詠めてはしにゐたりけり。ぜんざいの露きら〳〵とをきたるに。更級日記曰、かしらもしとゝに露をく曉がたの月、いといみじくすみわたりて。榮花物語初花曰、十五夜の月くもりなく、秋深き露のひかりにめでたきおりなり。狹衣曰、日のくれ行まゝに、ひもときわたす花の色〻、おかしう見わたさるゝに、袖より外にをきわたす露もげにたまらぬにやと詠出して。又曰、道しばの露の名殘なめりかし。源氏物語よもぎぶ曰 御さきの露を馬のぶちしてはらひつゝいれ奉る云云木のしたづゆは雨にまさりて、ときこゆ。同野分曰、庭の露きら〳〵として。同鈴虫曰、あさ露のかゝれるほどは。同御法曰、これは十五日のあかつきなりけり。日はいとはなやかにさしあがりて、のべの露もかくれたるくまなくて。同まぼろし曰、前栽の露いとしげく。同橋姫曰、露けき道のほどにひとりのみそぼち。撰集抄卷第一曰、結かさぬる草枕、涙の露のしどろにて。又曰、同心の末葉の露は風に亂てしどろなる有樣。同卷第四曰、小野のしのはらに至りては、露のやどりのしげき影をも詠。又曰、誰にとはまし草の原、色かはる露をば袖にをきまよひても。同卷第五曰、かれ野の草の原、露のやどりしげかるらんとおほへて、何となくあはれなるに。又曰、見ずや露をこそはかなき物とはいふめり。平家物語第一曰、つゆふきむすぶ秋風は、いむけの袖をひるがへし。同卷第五曰 庭上露しげし。同卷第十二曰、心のまゝにあれたるまがきはしげき野べより露けく。又曰、わくる草葉の露しげみ、いとゞ御袖ぬれまさり云云。又曰、露むすぶ庭のおぎは霜がれて。河越記曰、そよめく露は月をこぼす。六代勝事記曰、ならはぬ床の露けさ。又曰、わすれぬ草の露ばかりをむすびて。東關紀行曰、このほどをも行過て、野路と云所にいたりぬ。草の原露しげくして旅、衣いつしか袖のしづくところ

せく。又曰、南は野山にて秋の花露しげし。又曰、あれたる庭の秋露云云。狹衣曰、かの道しばの露も、此つらにおもひいづべきにはあらねど、みるめなぎさには思ひやはかけじなど。又曰、道しばのつゆはそでにかけ給はぬ日なく。又曰 御前の花さかりにさきみだれて、夕露なまめかしげに云云。なぐさめ草曰、野原の露にみじか夜の月をおしみ。俊頼髓腦抄曰、草むらの露をかぞへ。又曰、草むらの露をばをのづからとられぬ玉かとおぼめき、風にこぼるゝをば、袖のなみだになし。西行物語曰、おばなが露にやどる月、すゑこすかぜに玉ちりて、小はぎかもとのむしのねいと心ぼそく。又曰、秋の露さへをきそへて。徒然曰、露こそあはれなれと。又曰、あれたる庭の露しげきに

形狀 狹衣曰、露はおもげにきら／＼とをきわたりたるは、によいほうじゆかと見えわたされたるに。身のかた見曰、秋の夕は月のかげほのかにさし出、ぜんざいの草むらはなさきて、露の玉きら／＼とをきわたし。源氏物語野分曰、あさゆふ露のひかりもよのつねならず、玉とかゞやきて云云ましして草むらの露の玉のみだるまゝに。萬葉集卷第八曰、芽二貫置有(ヒル)露之白珠(シラタマ)、相佐和仁云云。同卷第十二曰、朝旦、草ノ上ヘ白、置露乃云云。榮花物語玉臺曰、いけのめぐり中しま、御だう／＼のおまへのぜんざいに、つゆのたまのやうにきらめきてみゆる

かんろ 狹衣物語

漢名 甘露 本草

雲南通志曰、天啓二年二月 甘露降於大理圓瑩如珠。順治十八年辛丑、甘露降於安寧文廟古柏上、形如貫珠、味如飴。養泉小品曰 露者陽氣勝而所ン散也、濃爲ニ甘露、凝如ノ脂美如レ玉。一名膏露、一名天酒

一名 天上樹汁 延喜式神名記曰、因幡國巨濃郡、甘露神社。同卷第二十一曰、治部省祥瑞、甘露美露也。神靈之精也。凝如脂其甘如飴。一名膏露。塵添壒囊鈔曰、甘露トイハ何物ゾ、草ニウク露アマキ歟云云。大原長宴僧都ガ抄ニハ、甘露ハ天上樹ノ汁ト云云

集註 續日本紀卷第四曰、元明天皇和銅元年五月庚申、長門國言、甘露降。同卷第六曰、靈龜元年五月壬辰、伯耆國言、甘露降。文德實錄卷第一曰、嘉祥三年五月戊戌、石見國言、甘露降。同卷第四曰、仁壽二年五月癸巳、大和國言、紫雲見。是日甘露降於京師樹上、及大和、越前、加賀、但馬、因幡、伯耆、隱岐、播磨、長門等九國。並言、甘露降。同卷第七曰、齊衡二年秋七月丁未朔、紀伊守從五位下紀朝臣眞高獻甘露。同卷第八曰、齊衡三年夏四月庚辰、駿河國言、甘露降。狹衣曰、かんろ法藥のくすりも

形狀 走湯山緣起曰、如白琉璃霰凝枝條久不零、嘗之如蜜糖、衆色更和。露結草葉自不消、味之病患愈。日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳七年冬十月甲申朔、有物如綿、零於難波、長五六尺、廣七八寸。則隨風以飄于松林及葦原。時人曰、甘露也。文德實錄卷第二曰、嘉祥三年秋七月乙酉、石見國獻甘露、味如飴餳。八月丙辰、公卿抗表曰云云又石見國守從五位下笠朝臣岑雄等奏偁、所管安濃郡川合鄕甘露降

今案 漁隱叢話ニ曰、後齋漫錄ニ云、熙寧六年冬、建昌軍ノ城北五里ノ間ニ甘露降ル於進士除上交ノ別業ノ松上ニ、濃厚ニシテ如シ酒澤ノ、其ノ味甜香。上交打テ松枝ヲ獻ズ於太守張子方ニ、子方率ニ僚屬ヲ就テ觀ント之ヲ欲ス以テ上聞セント、路過ル鳳凰山下ヲ、牧童見テ車馬ヲ相ヒ叫呼曰、此ノ山上ニモ亦多シ甘露、何ゾ獨リ徐家ノ地分ナランヤ乎。群童各々持テ松葉ヲ吮弄スルコト甚多シ。時ニ有リ野叟賣ル藥ヲ於市ニ者、語テ人ニ曰、太守

不祭耳、何物爲甘露、自天降、而偏於斂、敢問乎。吾嘗客華陰縣、民亦有以甘露降告縣者焉、縣令怒械繫之、道人曰、體如人身、精液流通均布、六七十年中、若其壽短促、則涸併於末死之前矣。此木氣將槁故耳。官人不信、請留我以待明春、此松必不復榮也。縣令如其說、果驗焉。元祐丙子渾城西天慶觀、一株有甘露、郡人皆以爲祥、及聞此野夫之說、有詣天慶觀觀之、昔時甘露所降之松果、已先枯。物理小識曰、建康實錄、陳末齊舟山蔣山松柏林。冬日嘗出木醴、後主以爲甘露、果瑞耶。王楙曰、周韋仲元宰衡陽、甘露降松如珠、取一枝示貢父。貢父曰、爵餳也。飲之令人疾、都尉高懿隴禮有甘露、鄭敬曰、但樹汁耳、晉按厭端之說也。本草時珍曰、杜鎬言甘露非瑞也、乃草木將枯、精華頓發於外、謂之雀餳、於理甚通。品字箋曰、餳各盈切、薄餳汁、而不餅者曰餳

古名錄水部卷第一　終

古名録水部卷第二目録

天水類下

古名錄水部卷第二

紀藩　源　伴存撰

天水類下

雨水 本草

【漢名】 【今名】アメ

安米 萬葉集

羣芳譜曰、雨者輔也。水從雲下輔時以生養萬物也。埤雅云、天地之氣怒而爲風、和而爲雨。丹鉛總錄曰、雨雪至地則六出六爲陰地數也。凡雨露之點亦皆六出。但碎而不可見耳。太陰玄精石皆六稜、是其證也。品字箋曰、雨自上而下曰雨。煮泉小品曰、雨者陰陽之和、天地之施水從雲下

【一名】

阿米 古事記曰、阿佐阿米能。萬葉集第二十曰、比佐可多乃、安米波布里之久云云。同第十八曰、等能具毛利安比弖、安米母多麻波禰。云云等能具毛理、安米毛布良奴可云云

阿梅 日本書紀曰、阿梅多知夜梅牟。釋日本紀曰、雨立止也

安麻都美豆 萬葉集第十八曰、天平感寶元年閏五月六日、以來起小旱云云仍作雲歌云云安麻都美豆、安布藝弖曾麻豆。常陸國風土記曰、風俗云、立雨零行方之國。三代實錄三十三曰、夫雨以潤之

阿女 新撰字鏡、高野御幸記

曰、天治元年十月廿二日、雲膚猶蒸、雨脚不止云云言上云、雨脚猶降、大和河假橋欲漂流云云。大和川橋中央二丈許流切畢、雨脚不止水勢洋溢云云。萬葉集第十三曰、雨者落來奴、雨霧相云云

あま水

言塵集曰、あま水、天水也。根て侍と

集註

續日本紀第六曰、祈雨于名山大川。續日本後紀第三曰、承和元年六月丙申、奉幣群神、以祈甘雨、旱也。秋七月丁巳、天无片雲、炎光如焚。比及辰天陰雨零。從此漸至滂沛。萬葉集第十八曰、賀雨落歌一首、和我保里之、安米波布里伎奴云云。又曰、安米布良受、日能可佐奈禮波、宇惠之田毛、麻吉之波多氣毛、安佐其登爾、之保美可禮由若云云。本朝無題詩曰、于時來雨忽下、黎民悉賀。中右記曰、寬治八年正月十五日、雨脚猶不止、及晚以天頗晴。類聚國史曰、延曆二十二年春正月癸丑朔、廢朝雨也。山槐記曰、治承四年七月十六日、天晴、午剋雨下、須臾止。相國寺供養記曰、此時分雨降、裝御雨皮於御車、小時屬晴。江家次第第一曰、白馬雖深雨趁渡猶晴儀。百練抄第五曰、元永元年六月、此月、旬日以來、雨脚頻下、近水之人多沒死。有涼氣諸人收汗。同第七曰、久安六年五月十日美福院門於法勝寺、金泥一日經供養。法會已始之間、雨脚滂沱、仍延引。同第十曰、文治元年八月廿八日戊寅、雨降。建久五年七月廿日己卯、終日雨降、農夫悅豫。同第十一曰、正治元年正月一日、雨降。同第十五曰、仁治三年六月三日甲寅、終日雨降。入夜彌滂沱。寬元元年六月十日、時々雨降。寬元二年十月十六日、天陰雨降。扶桑略記廿八曰、長久四年五月十三日、午後雨下。同廿九曰、治曆三年十月五日、天皇車駕幸臨宇治平等院、云云翌日雨下。同三十曰、延久五年四月卅日癸卯、九坎雨下。承保二年三月四日、此日雨下。永保元年四月十六日、賀茂祭、自昨雨脚滂沱。明月記曰、治承

校云。五ノ下龍祭ノ二字脱カ

校云。平ノ下ノ三ハ亦ノ誤カ

校云。家ハ庵ノ誤

校云。

四年二月廿三日、自夜雨降、晝雨止。治承五年閏二月四日、雨降。八月廿九日、自辰雨漸降。正治二年八月九日、去夜今日雨如沃、無聊隙、河水大溢、田畝又爲水底云云。元久元年十一月八日云云、途中雨如沃。元久二年二月十七日、自夜甚雨、終日濛々。元仁二年三月六日、自夜甚雨、終日濛々、入夜如沃、寛喜元年九月五日、自夜雨降、終日滂沱。寛喜二年十月十日、天陰、未後雨降、終夜如沃。後愚昧記曰、年號不知三月六日雨下。水左記曰、治暦二年三月十三日、雨降。承保四年八月五日、臨夜半雨盛降。十八日、今夜雨盛降。九月卅日、自曉雨降。閏十二月廿日、入夜雨脚如沃。都記曰、治暦四年十一月廿日、雨脚時灑。江談抄曰、神泉苑修請雨經法支。神泉苑修請雨經法四ケ度、人々大僧都宗海一七ケ日、不雨降。延二ケ日、九ケ日龍破神泉苑上天、即降雨、天下潤澤。陰陽師滋岳川人勤五。又云、小僧都元眞、一七ケ日雨不降。延二ケ日、遂不降。仍隱居鎭西安樂寺云云。又云、阿闍梨仁海、寛仁二年六月四日始、五ケ日間雨降。可任律師之狀蒙宣旨。八月十一日任權律師。陰陽師安倍吉平三勤五龍祭云云。類聚雜例曰、長元九年四月十七日、主上自去三月之比不例御朝間降雨。廿二日云云此間降雨殊甚。源氏物語よもぎふ曰、日比ふりつる名殘の雨すこしそゝぎて。同胡蝶曰、あめのうちふりたるなごりのいとものしめやかなる夕つかた。同東屋曰、雨やゝふりくれば、空はいとくらし。同手習曰、雨いたくふりぬべし。更級日記曰、おなじ月の十五日、雨かきくらし降に、さかひを出て下野の國のいかたといふ所にとまりぬ。家などもうきぬ計に雨ふりなどすれば、おそろしくていもねられず。日本記略曰、弘仁三年六月壬子、敕、甘澤不レ降、稍渉ニ旬日一云云、所レ冀神靈垂レ祐、早致ニ膏雨一、宜下奉ニ幣ヲ畿内ニ祈中於名神上。都記曰、承暦四年閏八月廿二日、天陰雨下。榮花物語音樂

挙大系本走ニ作ル

校云。東關紀行トアルハ誤ナルガ交レルカ。京に入る日しもナド今ノ流布本ニハナク、又鎌倉ヲ立ツ處ニテ総レル

日、日ごろともすればあめふりて、このほどの御ありさまいかに〳〵と申思て。同御着裳曰、おりしも、あめすこしふりて、たごのたもとども〵しぼとけげなり。同衣の珠曰、いたやはあめのをとかしがましさこそすぢなくはべりけれ、などきこえ給て。同玉の餝曰、あめふりかみなりて、そらの氣しきむつかしげなり。同くものふるまひ曰、十四日あめふりてくちおしきに。同松が枝曰、あめいたうふりて、なにのはへなく。又曰、おめいたくふりて、もの〵はへもなく。平家物語卷第八曰、折ふしくだる雨しやぢくのごとし。同卷第十曰、其夕べ雨すこしふつて、よろづ物さびしげなる折ふし。今物語曰、おりふし雨のはら〳〵とふりたりければ、東關紀行曰、鎌倉につく日の夕つかた、雨俄にふりて、みかさもとりあへぬほど也。又曰、夜なかより降いでつる雨の、明日(ママ)ま〵にしほ〳〵とぬる〵程になりぬ。又曰、何故か〵るおほ雨に降れて。又曰、日ごろ降つる雨のなごりに。又曰、あふみの野路といふ處より雨かきくらしふり出で。又曰、京に入日しも雨降いでて。太神宮諸雜事記曰、大雨如沃天シ俄洪水如海。又曰、日來大雨頻降天人民乃作田畠物皆損了。又曰、始レ自二同廿三日朝一天細雨降天。廿四日、大雨降天云云雨彌倍天シ無二間斷一。北山行幸記曰、こよひより空のけしきくもりて、雨もふりぬべく見えしかば云云、九日けふは雨ふりてまひ御らんものびたれば云云、十一日けふは又雨ふりてなに事もなければ、此やどにて春の物とながめくらしたるばかり也。俊頼髓腦抄曰、あめとふれども水のまさらぬことをよろこび。高倉院升遐記曰、うちつゞきあめかきくらしふるに。聖忠記曰、五日自夜甚雨。西行物語曰、次の日關川をこへてはる〴〵行程に、七度くもり八度雨ふるとかやの心ちして、時々雨うちふり、ことにものあはれなり。古今著聞集卷第三曰、內宴は弘仁年中

ナリ。前ニモ不明ノ事アリ其書相違セルカ

にはじまりたりけるが、長元より後たへておこなはれず。保元三年正月廿一日におこしおこなはるべき由さた有けるほどに、其日は雨ふりて廿二日におこなはれけり。蜻蛉日記曰、八月廿よ日より降そめにし雨、この月もやまずふりくらがりて。又曰、あめいたうふりたるに。又曰、よるあめのふりけるしきにてきどもつゆかゝりたり。又曰、けふは廿四日、雨のあしいとのどかにてあはれなり。又曰、雨いたくふり、こち風はげしくふきて。又曰、むま時許よりあめになりて、しづかにふりくらす。又曰、あめよいほどにのどやかにふりて。又曰、二月の朔日の日、あめのどかなり。それよりのちそらはれてだり〔ママ〕。又曰、廿七日、あめ昨日のゆふべよりくだり。又曰、ついたちあめがちになりにたれば。又曰、よあけめときく程にあめふりいでぬ。又曰、四日にあめいたうふる。雲井の御法曰、よひの雨しめやかにふりて、いとたけのしらべも、かだのこゑも、こよひはことにしみ〴〵ときこへ侍りし。永享九年行幸記曰、廿四日、雨降、れいの日にて殊なる無御遊。相國寺塔供養記曰、十三日朝の空はうすぐもりて、晝ほどより雨いたくふりて、風もおびたゞしく吹あれつゝ、ひねもすにつちふりたる空のけしきなおどろ〳〵しきほどなり。たゞ事ならぬ雨風かなと覺侍るに。世繼物語曰、一條院の御時、御佛名の又の日、雨いみじうふりて、つれ〴〵也とて、宮の方にて御あそび有けり。高倉院嚴嶋御幸記曰、そのあしたより雨ふりて、夕にぞはれたる。又曰、ゆふべの雨しづかにそぼちて、たびのとまりいつしか宮古戀しく、心ぼそきありさまなり。善光寺紀行曰、日もやう〳〵くれがたになり、雨そぼふりて前路もとげがたく。海道記曰、四月四日の曉、都出し朝より雨にあひて、勢田の橋のこなたにしばらくとまりて、あまじたくしてゆく。けふあすともしらぬ老人を、ひとり

校云。走頭大系本建禮ニ改ム

思ハ置てゆけば云云はしのわたりより雨まさりて、野徑の道芝露殊にふかし。八町なはてを過れば、行人たがひに身をそばめ、一邑のさととをれば、亭犬類に形をほゆ。今日しもなにはぬ旅の空に、雨さへいたくふりて、いつしか心のうちもかきくもるやうに覺えて。砂石集曰、或人妻ヲ姦リケルガ、雨ノフリケレバ、色代ニケフハ雨フレバ留マリ給ヘト云フ。小嶋のすさみ曰、夜にいりて雨いたうふりて。落くぼ物語曰、今雨やめてしばしよてとてふし給へれば云云日やう〳〵暮るほどに、少やみたる雨ふる事かぎりなし。高野參詣日記曰、かくて山中にいたりて、雨はなはだしく、風はげしくて、えゆきやらず。谷より吹のぼるかぜ身をくだきて、さらに一あしもすゝみがたきよしを申て。筑紫道記曰、夜更行ば雨いとゞ降て寢覺もいとゞ數を。實富士記曰、雨いたくふり侍しに。宣胤卿記曰、永正三年六月廿九日、晴甲斜雨如涙。豐臣勝俊朝臣九州の道記曰、翌日は雨そぼふりければゆきもやらず

形狀

源平盛衰記卷第二曰、白川院御時金泥ノ一切經ヲ被二書寫一法勝寺ニテ御供養ト被レ定。其日時ニ及ンデ甚雨有ケレバ延引ス。又日時ヲ被レ定タリケレバ、甚雨ニ依延引ス。又日時ヲ被レ定タリケレバ、甚雨ニ依テ延引ス。既ニ三箇度マデ延引アリ。第四箇度ニ適御供養有ケル日、空搔曇リ雨降テ、俗モ僧モシホ〳〵トメ、法會ノ儀式最興醒タリケレバ、天氣逆鱗有テ、雨ヲ器ニ受入テ、獄舍ニ被レ入タリシヲコソ、珍キ事ニ申シテ云云。續日本後紀卷第十八曰、嘉祥元年六月戊子朔、連雨不レ停、雨勢如レ走二甑水一。八月庚寅、雨勢如レ倒レ井、終日不レ止。方丈記曰、曉の雨はおのづから木の葉吹嵐に似たり。人車記曰、嘉應元年九月十八日、自夜甚雨、終日如レ涙

校云。しづくにノ下「ことならず」脱カ誤カ

波流佐米 萬葉集 春雨通名

〔今名〕ハルサメ

〔一名〕春之雨 萬葉集卷第四曰、春之雨者、彌布落爾、梅花云云。同卷第八曰云云、春之雨爾。同卷第十曰、春之雨爾、有來物乎、立隱レ云云。同卷第十七曰、久禮奈爲能、赤裳乃須蘇波、波流佐米爾。同卷第十八曰、波流佐米爾、許母理都追牟等云云。俊頼髄腦抄曰、春雨をはゝさめと云。藻塩草曰、春雨又春の雨とも

春雨 萬葉集卷第四曰、春雨乎、待常二師有四、吾屋戸之云云。同卷第八曰、春雨乃、敷布零爾云云。同卷第十曰、春雨之、零別不知云云。同卷第十七曰、春雨爾、毛延之楊奈疑可云云。三代實錄第七曰、貞觀五年三月十五日丁丑、詔曰、加以春雨未レ遍、水泉涸乏。同第二十七日、春雨未レ遍

〔集注〕日本紀略曰、天長六年二月庚午、奉二幣ヲ五畿七道諸國名神一、祈二春雨一也。榮花物語若水曰、はるさめさへのどかにふれば、なにごともこゝろもとなし。撰集抄曰、神のめぐみの春雨にうるほされつゝ。後宇多院御灌頂記曰、德治三年正月廿六日、朝間陰雲處々掩春雨時々灑。源氏物語眞木柱曰、雨いたうふりいで云云、かきたれてのどけきころの春雨にふるさと人をいかにしのぶや。同柏木曰、いとゞしうはるさめかと見ゆるまで、のきのしづくにぬらしそへ給ふ。明月記曰、元仁二年二月十日、春雨濛々。太平記二十九曰、折節春雨しめやかに降て

〔附錄〕

初春雨 藻塩草

〔漢名〕立春雨水 時珍食物本草○藻塩草曰、初春雨、そゝぐ春雨

卯花くたし 言塵集　漢名 隔轍雨 退齋雅聞　今名 ウツキノアメ

退齋雅聞曰、立夏雨爲ニ隔轍雨一〇言塵集曰 卯花くたしとは四月雨也。藻塩草曰、卯花くたし、四五月也云云

集註 和久良牟、御法曰、いまだ卯花くたしの名殘とや、ともすれば空かきくもりつゝ、村雨がちにて侍りしかば

さみだれ 源氏物語　漢名 梅雨水 本草　今名 ツユノアメ

花史左編曰、江南梅熟之時輒有ニ細雨一、連日不レ絶、衣物皆裛、謂ニ之梅雨一。五雜組曰、江南毎歲三四月、苦ニ霪雨不レ止、百物黴腐一、俗謂ニ之梅雨一。蓋當ニ梅子青黄時一也。自徐淮而北則春夏常旱、至ニ六七月之交一秋霖不レ止、物始黴焉。俗亦謂ニ之梅雨一。蓋徽與レ梅同音也。正字通曰、黴同黴、亦作黣。陰溼之色曰レ黴、音梅黔溼氣著衣物生ニ斑沫一也。黴、說文物中ニ久雨一青黑也。又曰、霉黄裴切、音枚。既東曰、江南以ニ三月一爲ニ迎梅雨一、五月爲ニ送梅雨一。或言古語黄梅時節家家雨。故云張蒙溪、謂梅當レ作レ霉、雨中暑氣也。霉雨善汙ニ衣服一、故又云ニ霉瀧一。言爲レ霉所レ壞也。清嘉錄曰、黄梅天。芒種後遇レ壬爲ニ入黴一。俗有三芒種逢レ壬便入レ黴之語一、而人卽以ニ入レ黴日數一、度ニ黴頭之高下一、如芒種一日遇レ壬、則黴高一尺、至ニ第十日一遇レ壬、則黴高一丈。度レ物過レ夜速生ニ黴點一、謂ニ之黄梅天一。又以其時忽晴忽雨。諺有レ云、黄梅天十八變。又謂天寒主旱。諺云、

黄梅寒井底乾、夏至後遇庚爲出黴、小暑日爲斷黴、過此則無蒸濕之患。俗又忌小暑日雷鳴、主潦俗呼倒黄梅。諺云、小暑一聲雷、依舊倒黄梅農人、又以霉日雨主旱。諺云、雨打黄霉頭、四十五日無日頭、雨打黄霉脚四十五日、赤晒晒又以入霉日雨主水。諺云、迎梅一寸送梅一尺、案施宿卿叢說謂淮浙以芒種節氣後、爲梅雨周處。風土記云、夏至前名黄梅雨、庚溪詩話江南五月梅熟時、霖雨連旬謂之黄梅雨。陸佃埤雅云、湘浙四五月間、梅黄欲落、蒸鬱成雨、謂之黄梅雨。沾衣多腐爛、崔寔農家諺黄梅雨未過。冬青花未破、冬青花已開黄梅雨不來、項㫌東謂江南以三月爲迎梅雨、五月爲送梅雨。過雷霆爲斷霉。或言古語、黄梅時節家家雨、張蒙溪謂梅當作霉、雨中暑氣也。霉雨著汗衣服、故又云霉涴。言其爲梅所壞也。字典霉義與黴通。許愼說文、黴物中久雨青黑也。玉篇謂、面垢也。淮南子修務訓、舜黴黑、又劉向九歎顔黴黧以沮敗兮、桂未谷札樸謂物傷濕曰黴、音黴義同。府志一說作塺、塺塺也。楚詞九懷、霧士忽兮、塺靡靡也。義異。長元吳志皆載處暑一聲雷依舊例黄梅之諺、但考芒種距處暑凡七十五日、既云夏至後遇庚出梅、豈歷三月之久、再復黄梅之理、舊占處暑日忌雷鳴當是小暑日忌雷鳴耳。蔡鐵翁詩、怕聞小暑一聲雷。吳縣志亦載出黴之法

一名　沙亂（サミダレ）　新撰

萬葉集曰、沙亂丹、物思居者、郭公鳥云云。
又曰、沙亂丹、情解筒、喉杵身緒云云

梅のあめ　藻塩草曰、梅のあめ、五月、五月雨。又さみだれの雨共云

集註

榮花物語月の宴曰、五月さみだれにも哀にて一ぼとけくらし、たごのたもとにおとらぬ有さまにて。同、きるはわびしとなげく女房曰、さみだれはいとゞはれまなく、のきのあやめもしらずがほにてすぎぬ。同松

校云。さみだれノ下「の」脱カ
ともハをもカ

の下校曰、五月雨はいとなみだもよほすつまなり。平家物語卷第六曰、ころは五月廿日あまり、またよゐの事なるに、五月雨さへかきくれて、よろづ物いぶせかりける折ふし。歌林四季物語曰、五月雨のふりくらしたるはやうかはりて。太平記十六曰、時節五月雨降つゞいて、河水增りければ。世繼物語曰、五月のなが雨の比云云。又曰、五月廿日の程、五月雨の比なれば、雨のかきくれ降て、いみじうくらき夜云云。蜻蛉日記曰、さみだれの廿よ日のほどものいみもあり。ながきしやうじもはじめたる人山でらにこもれり。あめいたくふりて、ながむるに、いとあやしく心ぼそきところになん、などもあるべし。かへりごとに、ときしもあれかくさみだれときさりにおちかたびとのひともこそふれ。又曰、ましてながめのさみだれは、うきよの中にふるかぎり云云

波也佐安女 新撰字鏡

漢名 暴雨 爾雅

今名 キフアメ

名物攷曰、纂要云、疾雨曰驟雨。爾雅疏曰、暴雨謂驟雨也

一名 阿良支水 新撰字鏡曰、瀑疾雨也。甚雨。阿女佐加利爾不留。又阿良支水。又曰、涷、多貢力見二反去暴雨。波也佐安米。爾雅曰、暴雨謂之涷

阿女佐加利爾不留 見上註

こしあめ 俊頼髄脳抄曰、こしあめといふは、いたうふる也。ぬれとをりて、はかまのこしなどのぬるゝほどなるをいふ

集註 百練抄曰、天元二年七月九日 大風暴雨、大治三年八月二日、暴雨大風。建暦元年八月四日 甚雨大風、仁治二年十月廿日丙午、甚雨之間平野行

幸延引。寛元三年正月十一日、天陰雨降、雷電甚雨。建長三年五月十九日、入ㇾ夜甚雨。續日本後紀第十七日、承和十四年六月乙巳、暴風如ㇾ懸河ㇾ。明月記曰、寛喜二年十月廿八日、日来依ㇾ寒風甚雨ㇾ不ㇾ宿ㇾ本所ㇾ、宿ニ北邊ノ小屋ー

○無良佐米（ムラサメ）　天文寫本 和名抄　［今名］ムラサメ　［一名］

言塵集曰、秋の村雨ひやゝかにと讀り。撰集抄曰　村雨はるゝ秋の野原の心ちして。身のかた見曰、紅葉をそむる村雨に、さらのことゆるゝかにかきならし。觀ㇾ此則無良佐米（ムラサメ）は秋月の暴雨也

無良左女　倭名類聚鈔曰、暴雨。楊氏漢語抄云、白雨。和名無良左女　○白雨ハ雹（ヘウ）也。廣東新語ニ見エタリ。天文寫本和名鈔曰、無良佐米、暴雨一種也。令義解曰、謂甚雨爲ㇾ暴也

［集註］　源氏物語手習曰、むら雨のふりいづるに。平家物語曰、りよ人が一村雨のすぎ行に、一じゆのかげにたちよりて。太平記曰、赤松すこし由斷して、一村雨の過けるほど物具の露ほさんと云云

暮立之雨（ユフダチノアメ）　萬葉集　［漢名］狂雨　五雜組　［今名］ユフダチ

五雜組曰、齊地每ニ盛夏ニ狂雨雲自ㇾ西而興者ハ其雨甘菁皆潤澤　［一名］夕たち　宇治拾遺第十二曰、夕だちのしけれは。藻塩草曰、夕立、萬に秋にもよめり。又夕だちのあめ共云り。

萬葉集第十五曰、暮立之、雨打零者、春日野之、草花之末之、白露於母保遊。同第十曰 暮立之、雨落毎云云

ひちかさ雨

源氏物語須磨曰、俄に風ふきいでゝ、空もかきくれぬ。御はらへもしはてず、立さはぎたり。ひぢかさ雨とかふりきて、いとあはたゞしければ、みなかへり給はんとするに、かさもとりあへずさる心もなきに、よろづ吹ちらし、またなき風なり。浪いといかめしうたちきて、人このあしを空たり。海の面はふすまをはりたらんやうに光みちて、神なりひらめく。おちかゝる心ちして。小島すさみ曰、九月九日云云にはかに風いみじうふき出て、暮行まゝに物も見へず。おびたゞしくふきまどはして、山の木どもおほく吹たをし、よもの草むらは更にもいはず、ひぢかさ雨とかふりいでゝ、神なりひらめき、おちかゝるこゝちして、いといみじく、雨のあしあたるところはみなとをりぬ。倭賴髓腦抄曰、ひぢかさ雨といふは、にはかにふる雨をいふ。言塵集曰、ひぢかさ雨とは、俄雨也。藻塩草曰、ひぢ笠雨、俄降雨を云也。俄にて笠も取あへぬ程に、袖をかつく。さればひぢ笠雨と云也。催馬樂曰、ひぢかさの雨もやふらん、しでたをさ、あまやどり(倭賴髓腦抄曰、夏雨をばときのあめと云)按ニ、驟雨ヲ夕立トスルコ水左記ニ出タリ。水左記曰、承保四年八月四日、寅時計雨盛降、即止。去六月十四日驟雨之後、不雨天以旱魃及、今夜陰雨稼穡無幸無徭緻

集註 源氏物語紅葉賀曰、夕だちして名殘すゞしきよひのまぎれに。同榊曰、雨にはかにおどろ〳〵しうふりて、神いたうなりさはぐあか月に。六代勝事記曰、天かきくもりし夕立の神なりにおどろきて。太平記第二十五曰、夕立に逢て、可立寄方も無りければ、仁和寺の六本杉の木陰にて、雨の晴間を待居たりける。吾妻鏡卷第五十二曰、文永二年六月三日、日中

夕立。高野參詣日記、四月の比云云えなみとかやいふわたりにて、夕立一とをりして、かいの雫もいとたへがたくなん。船のうちかくはるかなるべしともおぼえず。大内問答曰、文安の比、畠山左衛門督入道持國へ御成の時、伐二番目の御能より大夕立にて云云御能半に大雨ふり候ひしに。平安紀行曰、車坂といふ里にて、夕立頻にふりきたれば

秋之雨　萬葉集

一名　しはあめ　藻塩草曰、しはあめ、あきのあめと云云。萬葉集卷第八曰、秋之雨爾、所沾乍居〻者云云

集註　百練抄第六曰、崇德天皇長承二年八月、近日秋雨難レ晴、稼穡多損。明月記曰、寛喜二年七月十七日丙午、天陰、辰後雨降、秋雨濛々、有二涼氣一。終日着小袖。十九日、終夜今朝雨猶降。秋雨終日不レ止

奈我阿女（ナガアメ）　新撰字鏡

漢名　霖　爾雅　爾雅曰、三日已上曰レ霖、久雨爲レ霪

今名　ナガアメ

一名　奈加阿女　倭名類聚抄曰、霖、兼名苑云、霖三日以上雨也。音林。今按、又連雨、又名苦雨。爾雅註云、霖一名霪、音淫。久雨也。和名奈加阿女。名物攷曰、纂要云、雨久曰苦雨。塵添壒囊鈔曰、霖雨トハイカホド久ク降ル雨ヲイフベキゾ。張銑文選註ニ、三日雨ヲ爲レ霖ト云ヘリ。三日ヨリ久カラバ勿論也。淫雨トモ云歟　字鏡曰、霖、序助如序

校云。降ハ天治本陰ニ作ル

校云。五箇所云云ハ五日ノ記事ナリ

校云。辰ハ戌ノ誤

二反、霖也。霂也　奈加阿女强也。霪、力函力潛二反、久雨。奈加阿女　霪以針反、平、雨无止也猶降也。奈我阿女

長雨 萬葉集第十曰、秋芽子乎(ヘギ)、令落(オトス)長雨(ナガメ)之、零比(フル)者

集註

百練抄卷八曰、承安二年五月廿一日、近日霖雨洪水。同第十一日、建仁三年六月廿三日、依霖雨一被レ立ニ六社奉幣。扶桑略記廿四、裡書曰、延喜十八年八月廿日、召レ寮占ニ霖雨由一。延長七年八月三日、依ニ霖雨一云云、五箇所神社付ニ在國一、令レ祈ニ申霖雨ニ之由一。同廿五裡書曰、承平元年閏五月七日、召ニ官寮ニ有ニ御卜一。依ニ霖雨一也。蜻蛉日記曰、ながあめしける比。日本書紀第二十二曰、推古天皇三十一年、自レ春至レ秋霖(ナガアメ)大水、五穀不レ登焉。續日本後紀第五曰、承和二年八月甲辰、是日、霖雨霽焉

古佐女(コザメ) 新撰字鏡

漢名 霡霂 爾雅

今名 コザメ

一名 小雨 太平記二十曰、小雨まじりの夕霧に、誰を誰とも見分ねば

古左女 字鏡曰、霢、息顯私賢二反、平、微也。古佐女。萬葉集第七曰、今日之霡霂(コサメ)爾、吾共所沾(トスレナハ)者。

集註

倭名類聚鈔曰、霡霂、兼名苑云、細雨、一名霡霂、小雨也。麥木二音、古左女。仙覺萬葉集註釋第一曰、霡霂零とかきたるは小雨なり。こさめなりとも。名物攷曰、說文云、霡霂小雨也。[illegible]、微雨也。溟、小雨也。爾雅疏曰、小雨、謂ニ之霡霂一

小細雨 日本靈異記曰、小細雨三合、コサメ

細雨 水左記曰、承保四年八月二日、自曉風吹、細雨時々下。五日、陰辰之時間細雨下

萬葉集第十二日、左佐浪之、波越安暫仁、落小雨、間文置而、吾不念國。明月記曰、建仁四年正月二日、未後細雨間降、入夜大雨。寬喜元年五月三日、天陰、微雨降。寬喜二年七月十九日、及晚纔以微雨。廿一日、午後又小雨。文曆二年二月八日、朝天陰、小雨間灑。善光寺紀行曰、けふは小雨そゝぎて、風いさゝかふく。康富記曰、嘉吉三年四月廿六日、朝間小雨灑、晝以後晴天。建治三年日記曰、八月十五日微雨。實胤卿記曰、永正三年二月二日、晴陰時々小雨。九月卅日、小雨。十一月十二日、陰自晚小雨。水左記曰、承保四年九月廿四日、入夜有小雨氣。承曆五年八月十五日、陰巳時以後小雨。十月十四日、朝間陰小雨。愚昧記日、壽永二年正月一日、天陰、風烈、微雨灑

志久禮（シグレ） 新撰字鏡　【漢名】液雨水 本草　【今名】シグレ

小知錄曰、入液出液間俗立冬後遇壬日名入液、小雪出液、得雨名液雨、百蟲飲此而蟄

【一名】四具禮 萬葉集卷第三日、九月能、四具禮能時者、黃葉乎 同卷第十日 秋田苅、客乃廬入爾、四具禮零云々。黃葉乎、令落四具禮能、零苗爾云々。四具禮零、曉月夜、紐不解云々。同卷第一日 天之四具禮能、流相見者

志具禮能安米 萬葉集卷第十五日、志具禮能安米

鐘禮能雨 萬葉集卷第八日、鐘禮能雨、無間零者、三笠山、木末歷、色附爾家里爾云々

四具禮乃雨 萬葉集卷第十日、九月　、四具禮乃雨之云々。灼然 四具禮

校云。平家物語ノ例ハ引誤カ

乃雨者、零ッ勿國云云

之具禮 萬葉集卷第六曰、左牡鹿乃、妻呼秋者、天霧合ッ、之具禮乎疾、狹丹頰歴、黄葉散乍云云。同卷第十九曰、許能之具禮、伊多久奈布里曾云云。十月、之具禮能常可云云。

此具禮 萬葉集卷第十曰、云云此具禮乃零者云云

思具禮能雨 萬葉集卷第八曰、思具禮能雨、無間莫零ッ、紅丹云云。同卷第十曰、四具禮能雨、無間之零落、眞木ノ葉毛、爭不勝而、色付爾家里

鍾禮 萬葉集卷第八曰、春日野爾、鍾禮零ル所見、明日從者、黄葉頭刺牟、高圓乃山。黄葉乎、令落鍾禮爾所沾而來而云云。十月、鍾禮爾相有、黄葉乃云云。同卷第十二曰、十月、鍾禮乃雨爾、沾乍哉云云。同卷第十三曰、九月乃、鍾禮乃落者云云〇本朝麗藻曰、山雨鍾鳴荒巷暮。

十月雨 萬葉集卷第十二曰、十月、雨之間毛不置ス、零爾西者云云。

倭類鐃鑑抄曰、十月雨をばしぐれといふ。仙覺萬葉集註釋曰、しぐれは十月におほくはよみはべれども

斯具禮 萬葉集卷第九曰、男ノ神爾、雲立チ登ル、斯具禮零云云

急雨 太平記卷第十三曰、時節秋ノ急雨一通リ〆、河水岸ヲ浸シケレバ

山めくりする雨 藻鹽草〇平家物語曰、あれにしぐろうてみゆるはたれが手やらん

〔集註〕 榮花物語衣の珠曰、かみな月にもなりぬれば、おほぞらのしぐれもひまなくおぼされて、同石蔭曰、十月にもなりぬれば、中ぐうの御そでのしぐれもながめかちにぞすぐさせ給。同根合曰、ましてかみな月のしぐれに、このはのちりかふほどは、なみだとゞめがたし。平家物語曰、空かきくもり、いつしかうちしぐれつゝ。又曰、時雨もしもゝをく露も云云。應永なぐさめ草曰、しぐれもいたくなとおぼゆるもいまは時ならずや。

校云。いざなはノ下る脱カ

十六日夜日記曰、比は三冬たつはじめのさだめなきそらなれば、ふり見ふらずみ時雨もたへず云云。又曰、野路といふ所は、こしかた行さき人も見えず、日はくれかゝりて、いと物がなしと思ふに、時雨さへ打そゝぎ。蜻蛉日記曰、かみな月、れいのとしよりもしぐれがちなる心なり。十よ日の程に、れいのものする山でらに、もみぢも見がてらと、これかれいざなはればものす。けふしもしぐれふりみふらずみ、ひねもすにこの山いみじうおもしろきほどなり。源氏物語葵曰、風あらゝかにふき、時雨さとしたる程云云、おりしりがほなる時雨うちそゝぎて、木葉さそふ風あはたゞしうふきはらひたるに。同夕霧曰、時雨いと心あはたゞしう吹まがひ、よろづに物がなしければ。同幻曰、神な月はおほかたも時雨がちなる比、いとゞながめ給て、夕ぐれのそらのけしきにも、えもいはぬ心ぼそさにふりしかど、ひとりごちおはす。同椎本曰、しぐれがちなる夕つかた。同總角曰、九月十日の程なれば、野山のけしきも思やらるゝに、時雨めきてかきくらし、そらのむら雲おそろし氣なる夕ぐれ云云。同寄生曰、暮ゆくまゝにしぐれおかしきほどにて、花のいろも夕ばへしたるを御らんじて。清輔袋草紙曰、又良羅於二或所一語云、一日江州ヨリ上洛之間、於二會坂一時雨ニ逢石門立入テカシコクヌレズト云云。赤染衛門集曰、しぐれいたうふる日云云よるしぐれのいとあらゝかにふるに。紫式部日記曰、時雨のさとかきくらせば、つかひもいそぐ。又空のけしきもうちさはぎてなんとて。十訓抄曰、時雨のさとしければ。うたゝね曰、うづまさにまうでんと思ひ立ぬ云云ともなる人と、時雨しぬべし、はやかへり給へなどいへば、心にもあらずいそぎ出るに、ほうこんがう院のもみぢ、此ごろぞさかりと、いとおもしろければ過がてになりぬ。宇津保物語俊蔭曰、十月ばかりに成ぬ。時

雨空にも入しれぬ袖によそへられてながむるをだにと空にのみむかへるに。更級日記曰、ほしのひかりだに見へずくらきに、うち時雨つゝ、木の葉にかゝるおとのおかしきを云云さらば今宵よりはくらきやみのよの、しぐれうちせんは又心にしみ侍なんかし。狹衣曰、俄にくもりて時雨るに、木がらしのあら〳〵しく吹きよふにつけても、いろ〳〵の紅葉散かゝりつゝ。松島日記曰、今日しも時雨めく比にて云云時雨の雲きそひ來て。曾我物語卷第一曰、ころはかみなづき十日あまりの事なれば、山めぐりのむらしぐれ、ふりみふらずみさだめなく、たつよりくものたへ〴〵にぬれじと、こまをはやめてたづなかひくるところに。六代勝事記曰、唯はつしぐれのふるさとのみかきくもりたれば。東關紀行曰、山風松の梢に時雨わたりて。又曰、太山おろしはげしくうちしぐれて、谷川みなぎりまさり、岩瀨の波高くむせぶ。春日社參記曰、秋の露もしぐれも、もろ人の袖の上にのみしほれはてつゝ。歌林四季物語曰、時雨めく雲のたゝずまひ、なに心なきも、この比のあはれいづれか袖をぬらさずやはある。源平盛衰記卷第四十六曰、イツシカ打時雨ツ、嵐烈メハ窗ヲ徹シ。撰集抄曰、冬を待えず、むら時雨のはげしくて、人の門に立やすらひて、内を見入侍るに、あるじの尼の、時雨のもりけるをわびて、板を一ひらさげて、あちこち走ありきしかば、何となくかく「しづかふせやをふきぞわづらふ」、とうちすさみたるに、此尼さばかり物さはがしく、走あはつるが、何とてか聞けん。板をなげすてゝ「月はもれ雨はたまれとおもふには」と付侍き。又曰、時雨にわかに降とをり、あらしはげしくて、月の光も雲まなくなりぬ。太平記曰、其時節餘所の時雨に水增て、逆波高く漲り落て、淺瀨はさてもありや無やと云云。落くぼ物語曰、しぐれいたうする日。筑紫道記曰、折から時雨いさゝ

校云。作庭記曰、雨しだりトアルハ「雨しだゝり」ニアラジカ

かうちそゝぎ、夕月夜さやかにさしのぼりたるなど

ノ音ヲ聞召サントノ爲ニ如此ト云云

【形狀】海人藻芥曰、淸凉殿ノ孫子庇ト申ハ、檜皮葺之庇ノ外ニ・又板ビサシヲ指ル也。檜皮葺ニハ時雨ノ音聞エ子バ、板ビサシヲ指テ、時雨

阿萬之太利（アマシタリ）倭名類聚鈔　【漢名】屋霤 物理小識　【今名】アマダリ

正字通曰、屋水流處曰霤。說文、霤屋水流也。除曰、屋簷滴水爲霤、霤中庭也

【一名】アナタリ 明月記曰、以件杓土器置砌下アナタリ　阿米志太々留 新撰字鏡曰、霤、力救反、自屋水流下。阿米志太々留。倭名鈔曰、說文云、霤、屋簷前、雨流下也。音溜。和名、阿萬之太利　阿末之太利 天文寫本和名抄　雨したゞり 言塵集、作庭記曰、雨しだりのあたる所に石を立べからず。其とばしりかゝれる人惡瘡いづべし。檜皮のしだりの、石に當れる所の毒をなす故也。或人云、檜山杣人はおほく足に□いふ病ありとか○物理小識曰、天河水東流水逆流水山泉井花屋霤行潦其性迥異

【集註】義經記曰、あまおち石たゝきにどうとおつる。明月記曰、寛喜元年八月一日、朝天聊陰、午始急雨降。溜初落、即晴簷溜初落、不及濕地雨即止　寛喜二年五月十九日、簷溜未乾、朝陽初見。天福元年五月五日、辰巳時簷溜雖猶落、陽景間出雲、終夜猶聞溜聲。十月十六日、朝陽晴、簷漏落、雪解歟。文暦二年六月十九日、朝大雨、天色如

校云。出雲ノ下中界アリ

土。巳時穀霽乍零陽景見。江家次第五曰、祈年穀奉幣云云上卿於待賢門霽下。太平記曰、數百箇作り雙たる役所の軒に纖䋄を懸て、雨ふれば、霤(あまだれ)を少しも餘さず舟にうけ入れ、舟の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬ樣にぞ拵ける。三好義長亭御成記曰、御妻戸立砂アマタレヨリ六寸出テ立申由河原者申之。砂石集曰、秘藏ノ水瓶ヲ、雨ダリノ石ニ落メウチワリテ

附錄 四付 萬葉集卷第二曰、足日木乃、山之四付(シヅク)二、妹待跡、吾立所沾、山之四附二

明水 和漢通名 今名 ツキノミヅ

倭名類聚鈔曰、水精。和名、美豆止留太萬。俊乗坊重源參宮記曰、水執珠。本朝無題詩曰、秋月詩、中原廣俊。青銅鑄出鏡生水〇名物攷曰、瓊齊說云、月猶水也。隋書曰、月者陰之精也。洛書甄耀度曰、月者陰之精地之理。偶書曰、方諸引則水生。群芳譜曰、積陰之寒氣爲水、水氣之精爲月。京房曰、月與星辰陰也。有形無光、日照之乃有光。一說、其質圓其體黑、受日之光而白、不照處則闇。月中有物、婆娑者乃山河影色、其空處海水影也。淮南子、秋官司烜氏掌以夫遂取明火於日以鑒取明水於月。正字通曰、明水陰鑑所取月中之水

集註 延喜式卷第二十曰、大學寮主水司取明水陰鑒水精玉以供實樽罍

附錄 雨ニ諸物ニ 續日本紀卷第十四曰、天平十四年六月戊寅夜、京中往々雨飯(イヒ)。百練抄第四曰、一條天皇長保元年三月八日、太宰府進雨米一斛、令諸道勘申。同第六曰、崇德院保

延四年三月十九日、雨穀、其形如胡麻。同六年三月十三日、自朝及夕、大陽不現、非雲非霧、四方似烟、有如雨下者、其形如露。又如胡麻。永治二年九月廿五日、京中不知名之物交風飛、其形如胡麻。吾妻鏡卷第四十日、建長二年正月十三日、下野國結城郡、自天麥降、如燒云云。同卷第五十二曰、文永三年二月一日、雨降。晚泥交雨降、希代恠異也。扶桑略記廿二曰、小松天皇仁和二年八月四日、安房國言。去五月廿四日夕、有黑雲、自南海群起。其中現雷光、雷鳴地震、通夜不止。廿六日曉雷風。巳時、天色清朗、砂石粉土遍滿地上、山野田園無所不降。或所厚二三寸、或處僅蔽地。除苗草木皆悉凋枯、馬牛食粘粉草、死斃甚多〇五雜組曰、傳記六、和塔頂有月桂、因風飄落。此說不經之甚、月中豈眞有桂耶。夜靜風高從山外飄來者耳。史傳所載雨粟雨麥、及魏河內雨棗、安陽殿雨朱李者、皆此類也。蓋自上而下、故通謂之雨耳。正字通曰、漢五行志、武帝天漢元年三月、天雨白毛。三年八月、天雨白氂。京房易傳曰、前樂後憂厥妖天雨羽。又曰、邪人進賢人逃、天雨毛。師古註、凡言氂者、毛之强曲者也。成帝時天雨魚、隋開皇六年、京師天雨毛如馬尾。其月梁士彥等謀反伏誅。七年五月雨石于武安滏陽閒十里。梁惠成王八年天雨骨于赤髀、後兵荒起。又梁武帝大同三年、天下雨灰色黃侯景亂。唐五行志、垂拱三年七月、廣州雨金。占曰、人君多殺無辜。貞元四年二月、雨木于陳留十里許、大如指、長寸餘、中空所下者立如植木。元英宗至治元年、雨鐵民舍、山石皆穿、人物値之輒斃。俗呼鐵雨。順帝元統二年、雨血于汴梁著衣皆赤。又天雨毛如線而綠。又至正十一年、饒信等路雨黍、未幾四方兵起。順帝夜出走上都、元亡。又明弘治庚戌三月、陝西慶陽府雨石。大者如鵝卵、小者如雞頭。實皆作人言史載雨塵沙土石、雨金鉛錢氷、雨絮帛穀粟、雨草木花

葉、雨魚肉毛血、不勝述。其間似祥而實災者、如宋元豐三年六月、饒州雨木子數畝、如山茱子味辛而香、皆妖氣所致也

古名錄水部卷第二 終

古名錄水部卷第三目錄

地水類上

水澁（ミシブ） 地溲

宇太加太（ウタカタ） 水沫

酒水

燃水（モユルミヅ） 石腦油

美泉 醴泉

通計三十一種

古名錄水部卷第三

紀藩　源伴存撰

地水類 上

瀰豆（ミヅ）日本書紀　【漢名】水 通名　【今名】ミヅ

帝京景物略曰、水有光無色、內物悉形、外物悉影。管子曰、水者地之血氣如筋脉之通流者也。湧幢小品曰、天地間水下注氣上升。齋東野語曰、水者天地之血也。三才發秘曰、夫水如血、所以榮腑名曰外杰。名物攷曰、元命苞云、水者天地之包幕。文子云、水之道、上天爲雨露、下地爲江河。玄中記云、天下之多者水焉。浮天載地、高下無不至、萬物無不潤。文子云、水之爲物、擊之無創、射之不傷、斬之不斷、焚之不然。利穿金石、功濟天下。偃湖樵書曰、人之恒言曰、青山綠水則水色同綠。又曰、山青水碧則水色又碧。綠與碧皆形容其色、而不可得而彷彿言之。掬水細視、有何色哉。物理小識曰、市上水溫、深山之水寒。而深山亦有水性熱者。

【一名】**彌津**　常陸國風土記曰、勅云、能停水哉。俗云、與久多麻禮流彌津可奈。日本書

紀武烈歌曰、作麼摩比你、彌逗佐倍母理。釋日本紀曰、水盛也。延喜式卷第八祝詞曰、山山乃自レ口狹久那多利爾下賜水乎、甘水登受、天下乃公民乃取作禮留奧都御歲乎、惡風荒水爾不相賜

美豆 古事記曰、美豆多麻流、余佐美能伊氣能。萬葉集第二十曰 和我都麻波、伊多久古比良之、乃牟美豆爾、加其佐倍美延弖、余爾和須良禮受。倭名鈔佾房具曰、水瓶、和名、美豆加米（吾妻鏡第三十六曰、大殿日來有ニ御飲水之氣ニ

嚴罔象女 日本書紀曰、水ノ名ヲ爲ニ嚴罔象女ニ

三豆 倭名鈔國郡部曰、越中國射水、伊三豆

美都 倭名鈔國郡部曰、備中國英賀郡水田、美都多

美 倭名鈔國郡部曰、備中國下道郡水內、美乃知。信濃國水內、美乃知

冷水 延喜式卷第四十三曰、主膳監年料、冷水槽一口、口闊二尺、深六寸

す 增鏡曰、又ほす院けす院無量光院とかやとて。闕太曆曰、以法水院爲道場。管見記曰、弘安六年女院如法經十種供養也。堂法水院

甘水 釋日本紀曰、神祇令曰、大忌祭謂ニ廣瀨龍田二祭ヲ也。今山谷水變成ニ甘水一、浸ニ潤苗稼ヲ得ニ其全稔一、故有ニ此祭一（正字通曰、濂、虛器切、音戲、水也。字林鹽池一曰以甘水和鹹水爲鹽濂。遵生八牋曰、甜水以甘稱也（頓醫抄曰、勞水、コレハ水ヲ物ニ入テ、ツエヲモテセン反カキテ、ツカラカシタル水ナリ

【集註】令曰、凡御門云云並大器貯レ水監ニ祭セ、諸用入者一。江家次第卷第十五曰、大嘗會主殿主水設水火。延喜式卷第四十三曰、主膳監、板蓋後甕各五口。徑八寸、盛ニ水鋺粥鋺一料。御水案一脚。百練抄第四曰、永承元年七月廿九日 諸卿定下中貴布禰社爲レ水流損。可レ被ニ改ニ立他所一哉否事上。同第八曰、治承四年、自ニ去五月一終、旱涉レ旬 天災競發歟。所々水皆絕。榮花物語花山曰、みづをのみきこしめせと云云。

同見はてぬ夢曰、多つかたになりて、くはんばくどの、みづをのみきこしめして云云かくてくはんばくどの、みづきこしめすことやませ給はで云云。同初花曰、きたなげなき六ゐゑぶなど、たきゞこりみつなどもたるおかし。同本の雫曰、かくれたるかたにてみづあみ給て。同松の下枝曰、御こゝちなやましげに、みづなどきこしめす。狹衣曰、わづかに落くる水を、ほの〴〵たけのひどもをくもでにまかせやりつゝ。又曰、水のつぶ〳〵と聞え給ふべき。源平盛衰記卷第廿六曰、四日入道彌病ニ責伏ラレ給ヘリ。燃焦て難レ堪ト宣ケレバ、丙人ノ夫ヲ立テ、追續々々比叡山ノ千手院ヨリ水ヲ結ヒ下メ、石ノ船ニ堪ヘテ、入道其中ニ入テ冷給ケルニ、水ハ涌返リテ湯ニナレ共、更ニ苦痛ハ止ザリケリ。塵添壒囊鈔曰、五臟燃方、酢天目七分、水一皿入ベシ。內火藥云云冷水ニテ飼也云云小馬ナラバ半分冷水天目八分ニ云云。蜻蛉日記曰、このまよりみづのおもてつやゝかにて。又曰、みづのこゑもれいにすきもと有云云みづはいしがちなるなかよりわきかへりゆく。又曰、このてらのべたうとおぼしきほうし、てうしに水をいれてもてきて。明月記曰、安貞元年十一月廿九日、去今兩月之間、唯一日之外雨不降、諸水又涸云云。寬喜二年十二月廿二日、以宗弘問覺法印、歸來云、十七八日之間六度絕入、不能飮水。兵範記曰、久壽三年正月十三日、今夜右京大夫長輔卿薨逝了、生年五十四。月來飮水之至云云。康富記曰、嘉吉二年十二月廿五日、主水司事也可被存知云云予申云、縱雖爲主水司之所役、如此事者寮官年預沙汰來歟、長官尙以不可存知也。所詮非外記方之催之間難存知之由申了。官務云、於火者主殿寮之所役也。既申付云云當座加下知之間、主殿寮炭火爐等俄尋出、如形置之。於水者尙不可置之處、予不可存知之由申切之間、官務又內々以下部加下知令置水、件水納小土

器畢。卜部座下程也。此事後日尋申淸史之處、無所見云云如次第者、水火事上卿下知之條不注之云云。或本ニハ主水司獻水、掃部寮置火云云然者今夜爲主殿寮役官務加下知令置火之條、又不得其意者哉

【形狀】源平盛衰記卷第十一曰、岸ニタヽヘル淵水ハ藍ヲ染カトアヤマタル。宇津保物語俊蔭曰、ひやゝかなる水をつゝみてくる

つゝ井の水 義經記　【漢名】井水 時珍食物本草　【今名】キノミヅ

遵生八牋井水注曰、井淸也、泉之淸潔者也。其曰井取汲多者、蓋汲多則氣通而流活耳。終非佳品。爾雅疏曰、世本云、伯益作。亦云、黃帝始穿。品字箋曰、井朱註、穴地出水。釋名、井淸也。潔淸其泉。其汲不懈也。廣雅井深也。地脈淵深而濟于上也。農政全書曰、井。地穴出水也。說文曰、淸也。故易曰、井洌寒泉食。甃之以石則潔而不泥。汲之以器。則養而不窮。井之功大矣。按用書云、黃帝穿井。又世本云、伯益作井。堯民鑿井而飲。又曰、鑿井之處、山麓爲上。蒙泉所出、陰陽適宜。園林室屋所在、向陽之地次之。曠野又次之。山腰者、居陽則太熱、居陰則太寒。爲下鑿井者、察泉水之有無、斟酌避就之。凡掘井及泉、視水所從來。而辨其土色。若赤埴土、其水味惡。赤埴、黏土也。中爲甓爲瓦者是。若散沙土、水味稍淡。若黑墳土、其水良。黑墳者、色黑稍黏也。若沙中帶細石子者、其水最良。又曰、作井底用木爲下。磚次之。鉛爲上。既作底、更加細石子厚一二尺。能令水淸而味美。若井大者、于中置金魚或鯽魚數頭。能令水味美。魚食水蟲、及上垢故 ○伊賀國風土記曰、伊賀郡猪田里、有井依此有里名。大旱水不盡。忍穗井所通也。倭名類聚鈔

校云。大系本社ヲ狂ニ作ル

校云。廿六ノ康保年五月廿五日

曰、井、和名爲。同國郡部曰、伊豫國溫泉郡井上、井乃倍。義經記曰、加茂川かつら川、みなせきれてながれずついゝ井の水もたえて。延喜式祥瑞曰、浪井、不鑿自成之井、而騰波浪者。明月記曰、建永元年六月廿日、御幸滋野井泉。

集註　續日本紀卷第一曰、文武天皇四年三月己未、道照和尚物化云云。於後周遊天下、路傍穿井、諸津濟處儲船造橋、乃山背國宇治橋、和尚之所創造者也。同卷第三、四日、寶龜八年十二月、是不雨、井水皆涸。出水宇治等川並可揭厲。三代實錄卷第六曰、清和天皇貞觀四年九月十七日癸未、是日京師人家井泉皆悉枯竭、所有水之處、人相借汲用。是日、勅開神泉苑西北門、聽諸人汲水。阿波國風土記曰、勝間井冷水出于此。日本紀略曰、昌泰元年五月十八日、御井有聲如雷。正曆五年五月十六日、左京三條南油小路西有小井、社夫云、飲此水之者、可免疫病者、仍都人士女擧首來汲之。常陸國風土記曰、倭武天皇巡狩東夷之國、幸過新治之縣、所遣國造毗那良珠命、新令掘井、流泉淨澄、尤有好愛。時停乘輿、翫水洗手。御衣之袖垂泉而沾。」新治郡云云即穿新井、其水淨流、仍以治井因著郡號。」茨城郡。郡東十里桑原岳。昔倭武天皇停留岳上、進奉御膳。時令水部新掘淸井。出泉淸香、飲喫尤好。勅云、能渟水哉。萬葉集卷第一曰、和銅五年壬子夏四月、遣長田王于伊勢齋宮時、山邊御井作歌、山邊乃、御井乎見我氐利、神風乃、伊勢處女等、相見鶴鴨。扶桑略記廿四裡書曰、延喜十九年八月廿七日、近衛東二條以北、井原皆涸。同廿六日、京洛有僧、其名空也云云。見無井則掘之。號曰阿彌陀井。又引靈異記曰、童女汲水趣井、[illegible]人洗足[illegible]之、亦村童女集井汲水、而奪宿家童女之水。大和國風土記曰、平群郡向井戶、去坂門在二百步南隅。其水甘冷而不

ナリ
水流、布本井ニ作ル

正治二年八月十四日ニハ此記事ナシ

三日、流布本二日トス

校云。御てをすましてノ下文流布本ト合

能達水旱之變、近隣之黎首以之得田宰繁多也。延喜式卷第五十曰、凡諸國驛路邊植ニ菓樹一、令下ニ往還人得ニ休息一スルコト。若無レ水處、量レ便掘レ井。釋日本紀曰、播磨國風土記曰、明石驛家、駒手御井者云云於レ是朝夕乘ニ此舟一爲レ供ニ御食一汲ニ此井水一ヲ云云。百練抄卷第十二曰、佐渡院承久元年六月七日、今日、三條堀川邊在ニ小井一、飲ニ此水一者可レ免レ疫云云仍男女競汲云云。明月記曰、正治二年七月廿七日、近邊井水多爲旱止。此井水又乏少云云。八月十四日、久不雨所々井水皆乾。嵯峨方無水云云。元久元年十二月廿六日、自秋比上邊水乾、此間已及此邊井悉乾。元久二年正月十四日、今日此宅井有水、上邊悉乾買水云云。嘉祿二年八月十四日、久不雨、所々井水皆乾。嵯峨方無水云云。九月廿六日、旱魃已久、諸井無水云云廿七日云云其後女房等行冷泉沐浴。此家依無水也。嘉祿三年四月廿二日、大雨雖地濕、井水未潤云云。十二月十九日、泉水以下猶盡氷、井水猶乾、雖冱寒無雨雪。寛喜元年七月卅日、已渉旬無雨露、井水已乾云云。八月三日、井水漸乾渇云云。天福元年六月廿四日、去多所掘之井淺而水旱乾了。今汲垣外本井。七月七日、申時許沐浴、雖有一度之雨、赤日之照耀猶如焦、井水已乾云云。天福二年七月廿五日、同近邊井水乾云云。榮花物語殿上の花見曰、廿九日にかへられ給つるでに、かめ井のみづのもとによらせ給て御らんずるほどに。同疑曰、かめ井の水に御てをすましても、よろづよまでやとみえさせ給。山家集曰、天王寺へまいりて龜井の水を見てよめる云云。太神宮諸雜事記曰、永承二年春比ヨリ御饌料乃御井水、忽失已了。仍土ノ宮乃御前乃水汲テ、御饌ヲ備進也ヲ。抑皇太神宮天降御之時ニ、始テ御饌ノ備進乃水、非ニ當朝乃水ニ、天村雲命ノ太神ノ詔勅ヲ蒙テ、高天原乃天忍石乃長井水ヲ持下テ、其上分ヲ入蓋盛備進テ、殘ノ水以ニテ天忍井水ニト宣テ、豐受神宮乃坤方ノ岡ヲ片岸ニ、御

井ヲ新掘テ、其御井底天忍井水ヲ入加テ、當朝ノ水ニ和合シテ、末ノ世ノ御饌備進料ニ移置給水也。仍以ニ彼水ヲ天自レ爾以降所レ奉レ調ニ御饌ヲ也。但以ニ天寛平八年二月之比ニ件御井水俄干失之時、禰宜等上奏之日、且差ニ勅使ヲ令ニ祈申ヲ給。治暦元年五月六日ヨリ七月マテ大旱魃シテ、豐受太神宮乃御饌乃御井水失之由。古今著聞集卷第二曰、智證大師御起文云、件ノ井水依レ經フルニ三皇御用ヲ號ニ御井ト。南禪寺記曰、階北有井名不動水、汲用無竭。後宇多院御灌頂記曰、其西有閼伽井、今曉寅刻承仕汲此水。浜燈國師年譜曰、師曰、此地無レ水民家勞遠汲ニ井泉ヲ也、水汝ゝ有也云云其夜東清泉迸ホトハシリ出凉冽不レ可レ言也。ねざめ記曰、小野宮右大臣さしもかしこくおはしけるにはにず、女事に忍び給はざりけり。北のたいのまへに井ありけり。女ども清凉水となづけてあつまりくみけり。平家物語曰、あまりのたえがたさにや、ひえい山より千手井の水をくみ下し、石の舟にたゝへ、それにおりてひへ給へば、水おびたゞしうわきあがつて、ほどなく湯にぞなりにける。佐女牛井記曰、吾邦洛下亦有ニ靈泉ヲ、擧コソツテレ世號ニ佐女牛井ト、闘シムルニ茶者携ニ瑠璃瓶ニ貯レ之、其水味無双而十ニ倍于廉泉ニ。又近州有ニ湧泉ニ名ニ醒井ト、是亦其味以相似者乎

花水 延喜式

[漢名] 井華水 本草　[今名] 早朝初テ汲水

時珍食物本草曰、平旦首汲爲井華、無時初汲曰新汲。瀟湘錄曰、夏月因自就井汲新水奉レ母

[集註] 延喜式卷第四十曰、主水司、釋奠料、享日官人一人率ニ水部六人仕丁四人ヲ汲ニ花水六斗ヲ供ス

レ祭。平家物語曰、井花水のみづを結び給ひし故にこそ三井寺と名付たれ。玉葉集曰、後深草院御灌頂長講堂にて侍けるに、とらの時の水とらせ給はんとて、六條若宮のあかゐに臨幸の時云云。福田方曰、井花水 諸藥ヲ煎ニ井花水ヲ用タリ。此ハ曉(アカツキ)他人ノ未汲前ニ、只一ツルベ汲出タル水ヲ云也。井水清ミ淨テ、水ニ花サク叱分ナルガ故ニ井花水ト名ルナリ

若水(ワカミヅ) 世諺問答

漢名 立春水 食物本草

今名 ワカミヅ

遵生八牋曰、周天玉衡六問曰、大寒後十五日斗指艮、爲立春。立始建也。春氣始至故爲之立也。四時纂要曰、立春貯水謂之神水、釀酒不壞。食物本草曰、立春清明二節、貯水謂之神水。宜浸造。本草綱目、節氣水注曰、月令通纂云 正月初一ヨリ至十二日止。一日主ル一月ヲ、每旦以瓦瓶秤水視其輕重、重則雨多、輕則雨小。觀此雖一日之內尚且不同、況一月乎

集註 江家次第曰、正月 供御藥 元三 同日以屠蘇漬御井。件御井在豐樂院西、典藥寮異。以日中可懸沈井中。勿令至泥。又曰、供立春水事。舊年封御生氣方人家井、一タビ用之後廢而不用之。自御厨子所付臺盤所女房供セシム之於朝餉。土高坏上瀉(ソソギ)折敷 押紙 面大土器盛立春水居折敷供之。陪膳居之於高坏上、一度飲御畢徹之。立春前井一用テ後不用。立春水。主水司先舁立於弓場殿入大瓶立於三几子之上(ホトリニ)。次充供御。北山抄曰、立春日主水司獻立春水事、主水司付女官供之。延喜式卷第四十曰、主水司、御生氣(ムギウ)ノ神一座 祭云云、山ノ際左ノ日レ水料 已上汲 右隨御生氣擇宮中若京內ノ一井、堪(タヘタラン)用者定、前冬ノ土王ニ令牟義都

首渫治即祭之。至於立春日昧旦牟義都首汲水付司擬供奉。一汲之後廢而不用。春日坊御生氣汲水料雜器云云。袖中抄曰、わか水とは、立春日、もとりづかさのおほやけにたてまつる水を云也。案内しらぬ人は、正月元日たてまつるよし申す僻事也。賀茂社などにぞ朔日たてまつるぞわか水と申なる。これは立春になづらへて私に申事也。年中行事云、立春主水司獻立春水、居折敷一本各一杯出朝餉方、向生氣方飲御、女房稱之若水。先立春廿日定立春御井、式秘本土用初日主水司撰御生氣方若宮中若京中井、祭立春日供之。生氣無便者用養者方、典藥寮進竈御藥井并封居蘇井在典藥寮巽井。但近代無件井、仍用后町。山家集曰、立春の朝よみける。とけそむるはつ若水のけしきにて春立ことのくまれぬるかな。春宮年中行事曰、十二月、明年の御くすり御井ふずる事。御しやうけ(生氣)のかた(方)にあたりたるの井を、どよう(土用)よりさきにてねんず(熱)。ちやうれい(例)をそんして申あぐ。宮づかささたをいたす。たゞしすけの申さだむることなり

有越水　萬葉集第十三曰、天橋毛、長雲鴨、高山文、高雲鴨、月夜見乃、持有越水、伊取來而、公奉而、越得之早物。台記別記曰、康治元年十一月十六日、大嘗會中臣壽詞、天忍雲根神、天乃二上仁奉上氐、神漏岐神漏美命乃前仁受給波里申仁、皇御孫尊乃御膳都水波、宇都志國乃水止天都水乎加天立奉牟止申遣里、事教給志仁云云自其下天乃八井出牟、此遠持天天都水止所聞食止事依奉支

附錄　月夜見乃持

由　倭名類聚鈔

漢名　熱湯　本草

今名　ユ

校云。
●しんで
●んへし
ゆでん

湯品曰、第一得一湯、火續已儲、水性乃盡、如斗中米、如稱上魚、高低適平、無過不及爲度、盞一而不偏雜者也。第十二法律湯、凡木可以煮湯、不獨炭也。正字通曰、三沸陸羽茶經、凡候湯如魚眼微有聲爲一、沸四面如涌泉連珠二、沸騰波鼓浪爲三、沸則湯也○倭名鈔國郡部曰、武藏國豐島郡湯島、由之萬。近江國淺井郡湯次、由須木。備中國下道郡湯乃、由乃

〔集註〕延喜式卷第十一曰、太政官、凡物還ニ朝集堂ニ、天蹕始臨ニ廻立殿ニ、供ニ奉御湯ニ、入ニ大嘗宮ニ。同卷第三十六曰、主殿寮、追儺已畢供ニ奉御湯ニ。江家次第第一曰、追儺後主殿寮供ニ御湯ニ。都記曰、承曆五年二月十六日申時許參內云云次大舍人居汁次食畢。但湯不居更令居。榮花物語月の宴曰、一のみこのはゝにようごのゆみづをだにまいらで云云。同鳥部野曰、御ゆなどまいらするに、きこしめしいるゝやうにもあらねば。又曰、つゆ御ゆをだにきこしめさで。同玉村菊曰、大將殿には御ゆなどまいらせ給て。同紫野曰、つゆの御ゆなどもめさず。源氏物語かしは木曰、御ゆまいり給。同總角曰、御ゆなどまいらせ奉り給へど。同寄生曰、御ゆなどまいらせ給へとて。同手習曰、ゆとりて手づからすくひ入などするに。平家物語曰、此四五日は湯水をだにはかぐしう御らんじさせ給はぬ人の。類聚雜要抄曰、宇治平等院御幸御膳。御湯津个。御湯。入ニ銚子ニ。右記曰、致童指揮抄云彼ノ抄者菅三品之撰也以ニ飲殘ノ湯及ヒ水ヲ不レ嗽事。康富記曰、寶德三年九月廿九日、粟田口神明有湯立參詣拜見了○春宮年中行事曰、五月五日●しんでんしよ●供御ゆをぐする事。●古あんに、れいにかはる事なし。たゞし御ゆにしやうぶを入てまいらす。高倉院嚴島御幸記曰、御舟よせておりさせ給、御ゆなどめして

〔附方〕明月記曰、元久元年十一月廿九日云云又痛骨事、湯體馬ノ食スル物ヲ入テ、溫湯ヲ入テ、上ニ敷席

カ○供ハ衍カ○古祥本「こん」ニ作ル

校云。西庇戸云々ハ

ムス、第一タスカル事也、可試
此事、承仰退出、參病者御許

湯水 兵範記

本草綱目曰、以新汲水百沸湯合一盞、和勻、故曰生熟、今人謂之陰陽水

漢名 生熟湯 本草

今名 ウメユ

集証 榮花物語玉の臺曰、あるところをみれば、ゆぶねのゆわかして、そう二三十人あみのゝしる。同玉のかざり曰、つとめて、いかでゆすこしあみん、とおほせらるれば云云進物所にかねやすに、たゞとくわかせてまいらせよ、とによらばういひたれば云云御ゆかたひらながらおはしましたるに。姓氏錄曰、大鷦鷯天皇御子、瑞齒別尊誕生淡路宮之時、淡路瑞井水奉灌御湯云云乃定多治部、諸國爲皇子湯沐邑。延喜式卷第三十四曰、木工寮。沐槽。長三尺、廣二尺一寸、深八寸。浴槽。長五尺二寸、廣二尺五寸、深一尺七寸、厚二寸、同卷第三十六曰、主殿寮。新甞會供奉料。沐槽一隻加案云云。浴槽二隻加案。年中所用御薪。湯殿料二百八十荷云云。御沐料一百八十荷。御御水料二百四十荷云云。供奉年料。沐槽一隻加案。浴槽二隻云云。池由加二口。一口湯殿、一口釜殿。同卷第四十三曰、主殿署。年料。沐槽一隻加案。浴槽一隻加案。江家次第第六曰、三月。御燈。先供御浴。同第七曰、中和院神今食御裝束云云。件御湯殿無杓、御湯殿西壁設樋傳御槽。樋口壁外居斗御云云。西庇戸內供御湯船。同第十五曰、大甞會。卯日。主殿寮供御浴。百練抄第十二曰、建保六年十月十一日、皇子御湯始也。同第十四曰、延應一年四月

件御湯ノ上ニアルベシ。按云。建長八年即チ康元元年ノ記事ナリ七ハ誤

九月戊申、平野祭。内裏依無ニ御湯殿一不レ被レ行ニ御禊一。同第十七日、建長六年六月一日、皇子御浴殿儀也。二日、皇子御浴殿如ニ昨日一。三日、皇子御浴殿如レ初。四日、御浴殿如レ先。五日、御浴殿如レ先。建長七年九月廿五日、主上赤斑瘡御悩御落居之後、始御沐浴云云。平家物語第一曰、國府の邊にら川といふ山寺あり。おりふし寺僧どもが、湯をわかひてあびけるを、亂入しておひあげ、我身あび、ざう人ばらおろし、馬あらはせなどしけり。同第十曰、あまつさへ、ゆどのしつらひなんどして、御ゆひかせ奉る。辨内侍日記曰、御ゆどの丶上にて。帝王編年記曰、三條院長和二年七月六日研子女御有御産事、降誕皇女可有御浴殿事、而七日不宜陰陽師吉平勘申。八日左大臣道長被レ仰云、世浴此日不浴如何。吉平申云、此事無所見。七月八日沐浴之由見于尚書曆、仍有御浴殿事。扶桑略記第二曰、安康天皇三年八月壬辰日、天皇意將ニ沐浴一。幸ニ于山宮一。明月記曰、建久十年三月廿六日、湯治之後腰漸宜、今夕行歩。廿九日、湯治如日來、建仁三年十二月十日云云風爐傍爲御湯殿居甁、御湯殿南僻公卿湯殿居甁、置湯帷少々。寛喜二年正月七日、今度姫君御湯殿巽角、南面、有此事。諸大夫三人衣冠打。御湯自中門持參云云、自元三日也。兵範曰、久壽三年正月十三日、召陰陽生令勘文。即今日始湯殿、卯刻造物具、午時浴之。胤仁闍梨加持湯水等。嘉應元年二月十九日、遷宮云云於本堂大湯屋行温室

之三豆（シミヅ） 倭名類聚鈔 〔漢名〕 土石間新出泉水 大觀本草 〔今名〕 シミヅ

合璧事類曰、湧出曰濆泉、側出曰氿泉

一名　**之美豆**　天文寫本和名鈔曰、妙美井ノ日本紀私記云、妙美井、之美豆

妙美井（シミヅ）　源平盛衰記曰、泉ノ妙美井（シミヅ）搗サレド影涼クゾ思召ケル、高倉院南都落ノ處ニモ出

美妙水（シミヅ）　源平盛衰記曰、美妙水（シミヅノ）冠者

たて水　仙覺萬葉集註釋卷第十一曰、たちみとは、いづる水なり。水にたて水、ふし水といふ事あり云云たちみづとは、わき出てながるゝ水なり

たちみづ　見上

ましみづ　言塵集曰、ましみづとは眞清水也

清水　常陸國風土記曰、行方郡、槻野之清泉、臨レ水洗レ手以レ玉落レ井、今存ニ行方里之中ニ謂ニ玉清水ニ。扶桑略記廿七日、天延三年八月十三日、左大臣源朝臣兼明於ニ龜山ニ祈レ水祭文作レ之。其詞云云、世傳云、即時清水涌出云云

清泉　古事記曰、到ニ玉倉部之清泉（シミツ）ニ以息坐之時御心稍寤、故號ニ其清泉ニ謂ニ寤居清泉ニ也

寒泉（シミツ）　古事記曰、且夕酌ニ淡道島之寒泉（シミツ）ヲ獻ニ大御水（ヲモイ）ニ也

之美都　倭名鈔國郡部曰、信濃國更級郡清水、之美都

冷水　出雲國風土記曰、島根郡、邑美冷水。撰集抄曰、安藝嚴島は云云中にもし水あり、みたら井とは是ならん

以豆美　倭名鈔國郡部曰、山城國相樂郡水泉、以豆美

伊豆美　倭名鈔國郡部曰、薩摩國出水、伊豆美

出水　見上

八信井　萬葉集第七曰、此ノ小川ヲ白氣結（ヒノアスベル）瀧至（オチユクハ）八信井（シリヰノ）上ニ爾事上（コトアゲ）不爲友（セネドモ）

走井水　萬葉集第七曰、隕田寸津（オチタギツ）走井水之清有者（ケレバ）。蜻蛉日記曰、人にはいはず、はしりゐには、これかれうまうちはやして、さきだつもありて云云うらやましこまのあしとくはしり井の、といひたれば、し水にかげはよ

どむも
のとは

集註

常陸國風土記曰、香島郡。高松濱。東西松下出泉、可二八九歩一、清渟太好。那賀郡。自レ郡東北挾二粟河一而置二驛馬一。當二其以南一泉出二坂中一。水多流尤清、謂二之曝井一。緣レ泉所レ居、村落婦女夏月會集、浣レ布曝乾。久慈郡。所レ稱二高市一、自レ此東北二里密筑里、村中淨泉、俗謂二大井一。夏冷冬温、湧流成レ川。駿河國風土記曰、富士郡。小泉。其小泉恰如二小圓器一、極旱水不レ涸、淺底如二扇尺一。二水記曰、大永六年六月十二日、月下東堀清水賞翫、浮瓜酌醴、正親町張行也。當年始湧出了。清潔冷氣凡無比類也。十四日、月下清水賞翫如先夜。十五日黄昏、月下又出清水邊遊興。十九日、中御門前亞相、四條黄門、山科頭辨沓直朝臣等午後來入、各爲清水賞翫也。袖中抄曰、山城よりならへゆくみちに、井での清水とてめでたき水の、みちづらにある也。ゆきゝの人これを手にむすびつゝのむ。此水をば玉の井といふ。又曰、野なかのし水とは、播磨の稲見(イナミ)野にあり。大原におぼろのしみづ、せかいのしみづあるにこそ。奥義抄云、野中のしみづとは、はりまのいなみ野にあるなり。始はめでたき水にて有けるが、すゑにはわるく成て、人などもすさめぬを、むかしを聞つたへたるとのゝ、これにはめでたき水ありとこそきけとて、尋てみるに、あさましくきたなげになりてありけれども、これはめでたかりける水也。いかでかのまで過なんとて、のまれける事を云云。山家集曰、はりま書寫へまいるとて、野中の清水を見けること、一むかしになりにける。年へて後、修行すとてとをりけるに、おなじさまにて、かはらざりければ、昔見し野中の清水かはらねば我影をもや思ひ出らん。撰集抄第五曰、山かげの清水きよくながれて。同第六曰、延喜の御代のすゑつかたのころ云云天下日でり、すべてたへせぬし水なども、みなひかはきて云云近江國に、ある山中

にし水の有けるを、はるかの遠き所よりあつまりくみけるたり。同第九曰、淸水四方にながれちれり。花鳥餘情曰、兼明親王天延三年八月十三日龜山に祈レ水祭文有。後世迄も小倉山の麓、篁の中にその水の跡あるよし。豐臣勝俊朝臣九州みちの記曰、備中のくにきびの中山につきぬ。つれ〴〵さのあまり、こゝかしこ見ありきはべりて、彼ほそ谷川の邊にいたりて云云その水上にのぼりてみれば、ちいさき池のなかより、たえ〴〵出る淸水なりけり。かのしみづ、みな月のころほひもたゆることなし、となむいへり。その谷川のひろさ、算築といふものゝながさばかりなむ有ける

以波之三豆 天文寫本和名鈔　【漢名】山岩泉水 本草綱目

本草綱目曰、山岩泉水、此山岩土石間所レ出泉、流爲二溪澗一者也〈一〉遵生八牋曰、泉非石出者必不佳○續世繼曰、大將殿なゝ夜、かちより、いわしみづの宮にまいり給ける。榮花物語曰、いはしみづのりうじのまつりに

【一名】石井之水 萬葉集第七曰、鑿之君之、穿之井之、石井之水者、雖飮不飽鴨。新古今新抄曰、淸水は石の中よりわき出る物なり

いはゐの水

俊頼髓腦抄曰、松かげのいはゐの水をむすびあげて、なつなきとしかとうたがひ。天文寫本和名抄曰、石淸水。以波之三豆　【集註】小島のすさ見曰、松の陰そびえたる岩ねよりわきいづる水の、ながれいときようすみて、まことに世にしらぬ所見ゆ。こゝはさめが井なるべし。やがて又かけ樋ありて、ちいさきたらきよげなるに、これも岩ねより出る水たぐひなし。ひさごといふものめし出

校云。善光寺記行ニハ此記事ナシ。兼良ノふぢ河の記ナルヲ引キ誤レリトミユ

て、手あらひなどしてすぐ。いとめでたき水なり。更級日記曰、是よりは駿河なり。よこばしりの關のかたはらに、いはつぼといふところ有。えもいはずおほきなる石の、よはうなる中にあなのあきたる中よりいづる水の、淸くつめたき事かぎりなし。善光寺記行曰、さめが井といふ所、淸水いはねよりながる。一すぢは上より、一すぢは下よりながれて、末にてひとつにながれあふ。まことやらむ、みのゝ養老の瀧につゞきたりといへり

由久美豆（ユクミツ） 萬葉集　【漢名】河水 通名　【今名】カハミズ

名物攷曰、釋名云、河者下也。隨地下流而通也

【一名】進留水　萬葉集第二曰、明日香川、四我良美渡之、塞益者、進留水母、能杼爾賀有萬思。釋日本紀曰、如流水之無隙之由也。吾妻鏡曰、有流河而落于南、是北上河也。衣河自此流降而通于此河云云。平家物語曰、賀茂川の水

行水　萬葉集第十一曰、八釣川水底不絶行水。吾妻鏡曰、寒止行河水云云

逝水　萬葉集第四曰、一瀨二波千遍障良比逝水之。同第十九曰、聽許伊臥、逝水之、留不得常

往水　萬葉集第七曰、卷向之病足之川由往水之、同第六曰、往水丹潔而益乎云云。泉川往瀨乃水之絕者許曾

由久美都　萬葉集第十七曰、可波能瀨伎欲久由久美豆能多由流許登奈久云云。由久美豆乃於等母佐夜氣久。同第十五曰、由久美都能可敝良奴其等久○延喜式祥瑞曰、河水五色、江水五

續後紀ハ承和十一年十一月ナリ
校勘云。動ノ下前田家本「致」字アリ
吾妻鏡ハ嘉禎四年二

色

○三ノ間ノ水　和名集曰、宇治橋自レ北當ニ三ノ間一水也。從ニ竹生嶋辨才天ノ內陣一流出云云

集註　日本書紀第二十一崇峻紀曰、屍ニ其頸一投ニ河水裏一。續日本紀第十五曰、天平十五年六月癸巳、山背國言。今月二十四日自レ酉至レ戌、宇治河ノ水涸竭ノ行人揭渉。同第卅曰、神護景雲三年九月壬申、尾張國言。此國與ニ美濃國一堺、有ニ鵜沼川一。今年大水。其流改レ道、每日侵損云云。同第三十九曰、延曆七年六月癸未、美作備前二國國造中宮大夫從四位上兼攝津大夫民部大輔言。和氣郡河西百姓一百七十餘人欵曰、己等元是赤坂上道二郡東邊之民也。去天平神護二年、割隷ニ和氣郡一。今是郡治在ニ藤野鄕一、中有ニ大河一、每レ遭ニ雨水一公私難レ通。因レ茲江西百姓闕ニ公務一。請河東依レ舊爲ニ和氣郡一、河西建ニ磐梨郡一。其藤野驛家遷ニ置河西一、以避ニ水難一、兼均ニ勞逸一。許レ之。餘略之　續日本後紀第十四曰、所謂ハ鴨川、從ニ二神社一指レ南流出。明月記曰、建曆二年十一月九日、早旦行向朱雀大路、見事躰、三條大路朱雀以東河水也。寬喜元年八月六日、大井河猶以水淺云云。類聚三代格曰、弘仁十四年二月戊子、太政官謹奏。割ニ越前國江沼加賀二郡一爲ニ加賀國一事云云。加以途路之中有ニ四大川一、每レ遇ニ洪水一經レ日難レ渉。人馬阻絕、動レバ擁滯云云。又曰寬平八年四月十三日官府云云。但諸家幷ニ百姓ノ墾田多ク在ニ堤西一、皆用ニ中河水一。今加ニ實撿一須レ聽ニ開墾一。何者件等ノ田以ニ堤西中河水一灌ニ溉之一、不レ可レ爲ニ堤防之害一。蜻蛉日記曰、いづみ河水まさりたり、いかになどいふほどに。吾妻鏡第三十二曰、欲レ競ニ渡天龍河一之間、浮橋可ニ破損一歟云云。此河水俄落、供奉人所從等者、不レ能レ渡ニ浮橋一。又無ニ乘船沙汰一、大半渡レ河、水僅及ニ馬下腹一。俊賴髓腦抄曰、かも川のいたく水の增りたりけるに云云みむろ山にちりぬれば、たつたの川に水をうしなる、よしの川に

月六日ノ記事ナリ

俊頼髄腦抄ノ文異同アリ

みちぬれば、渡らん事をなげき。たぐさめ草曰、流水左右にたゝへたり。更級日記曰、大井川といふわたりあり。水の世のつねたらず、すりこなどをこくしてながしたらんやうに、白き水はやくながれたり。ふじ川といふは、富士の山より落たる水也。平家物語曰、ころは睦月廿日あまりの事なれば、ひらのたかね、志賀の山、むかしながらの雪も消、谷々の氷うちとけて、水は折節まさりたり。白浪おびたゞしうみなぎりおち、瀬枕大きにたきなつて、さかまく水もはやかりけり。續古事談曰、河原院は融左大臣の家也云云其後此所鴨川水みなぎり入て、苑池ことごとく水底になりぬべかりければ

【形状】更級日記曰、たぎりてながれ行水、すいしやうをちらすやうにわきかへるなど、いづれにもすぐれたり

○東流水 延喜式 和漢通名

【集註】江家次第第六曰、尋二東流水一於二其ノ上行一上二行之一。山槐記曰、擇申今日御降誕皇子雜事日時、御沐浴日時、十四日癸酉時午可汲東方流水

○五位水 和名集

【集註】和名集曰、洛中洛外名水、五位水。延喜御宇得二ル此官一、鷹司萬里小路與二近衛一之陝

○椎水 和名集

【集註】和名集曰、洛中洛外名水、蓮水。冷泉堀川西頰

○御溝水 和名集

【集註】和名集曰、洛中洛外名水、御溝水。二条大宮也。從二江州醒井一流云云。知顯抄曰、大宮川の水をば、一条大宮より南、陽明門の北、大垣の内にながす。是を御溝水とするゆへに、二条より上をば、清浄にさはやけて、塵をだにうかべず。抑このみかは水の末を、二条の北、郁芳門の南より、又大宮川にやり出せり。是より下に清めさわやぐる事もなく、あまつさへ大内の朝ぎよめの、ちりあくたなど流れいで

ゝぞありぬべき

○西行水 和名集 【集註】和名集曰、洛中洛外名水、西行水。三条、坊門室町東頬。西行於彼所隠居時、以楊枝堀出云云

○富樫(トカシ)水 和名集 【集註】和名集曰、洛中洛外名水、富樫(トガノ)水。四條、坊門堀川西頬。是元箕之旧跡

○車水 和名集 【集註】和名集曰 洛中洛外名水、車水。四条堀川従水車地現此在所。近代成井

○やりみつ 榮花物語 【集註】榮花物語わかえだ曰、やりみづなどのをとも、おかしきほどにながれたるに。同若水曰、御まへのやりみづさへ、こゝろゆくさまにすゞしげなり。同晩待星曰、おまへのみすのまへのやりみづにひたして云云。同根合曰、夜ふくるまゝに、月すみのぼり、やりみづの、れいよりはひろくながれたる、いとおかし。源氏物語総角曰、やり水のみくさはらはせなどなし給

澤泉(サハイヅミ) 萬葉集 【漢名】澤中停水 時珍食物本草 【今名】タマリミヅ

食物本草曰、澤中渟水、内有魚鼈精 令人生鼈瘕病○萬葉集十一曰、隠處(コモリヅノ)澤泉(サハイヅミ)在(ナル)石根(イハネ)毛(モ)、通念吾戀者。 【一名】ふし水 萬葉集註釋巻第十一曰、水にたて水ふし水といふ事あり。ふし水とは、したにたまりたれども出流(いでなが)るゝ事なき水なり。たちみづとは、わき出てながるゝ水なり○萬葉集第九曰 隠沼(コモリヌ)乃、下延置(ハヘ)而 同第十一曰、青山之石垣沼間乃水隠爾

校云。考證日ヲ日ノ誤トス

池沼水 時珍食物本草 【漢名】　【今名】イケノミヅ

伊氣美豆 萬葉集

食物本草曰、池沼水、苑囿之中、方塘半畝、謂之池沼、池沼水止而不流。名物攷曰、孔安國曰、停水曰池。廣雅云、沼池也。圓曰池、曲曰沼。古今事物類考云、黃帝破蚩尤、而有池沼、蓋始于此。品字箋曰、池、沼也。穿池以鍾水也〇大鏡曰、こうめいちのさうじにさしいでさせ給へるつ禁秘抄曰 淸涼殿二間與二上御局一之際、立二昆明池障子一。倭名類聚鈔曰、池、和名以介。沼、和名奴萬。古事記曰、余佐美能伊氣能。萬葉集第二十曰、伊氣乃之良奈美 伊蘇爾與世云云。伊氣美豆爾、可氣左倍見要底云云。伊蘇可氣乃、美由流伊氣美豆、氐流麻泥爾。榮花物語根合曰、みづのながれもこゝろゆき、いけのおもてすみわたり、まつのみどりもけざやかに見え、いみじうおもしろくめでたし

【漢名】 日本書紀卷第二十二曰、推古天皇十五年、是歲冬、於二倭國一作二高市池、藤原池、有岡ノ池、菅原池一。山背國堀二大溝於栗隈一。且河內國作二戶苅池、依網池一。續日本紀卷第八曰、養老二年夏四月丙辰、筑後守正五位下道君首名卒云云。和銅ノ末ニ、出爲二筑後守一、兼二治肥後國一云云。又興シ二築陂池一、以廣ニ溉灌一。肥後ノ味生池、及筑後往々陂池皆是也。同卷第九曰、養老七年二月戊午、始築二矢田池一。同卷第二十三曰、天平寶字五年正月丙午、使二散位外從五位下物部山背、正六位下巳作若麻呂等行一視畿內ノ陂池堤堰溝洫之所一也。同卷第三十二曰、寶龜元年九月壬寅、令二天下諸國修一造セ溝池一。寶龜六年十一月丙申、遣二使於五畿內一修二造溝池一。續日本後紀卷第十四曰承和十一年八月癸巳、幸二北野一、駐二蹕於雲林院一、閱二覽シ玉フ池瀆一。扶桑略記廿四裡書曰、延長八年六月廿六日、宣云、奉

校云。聖ハ雲ノ誤カ

校云。されハ群本「御通歌」ニ作ル是ナラン

レ勅、炎旱渉レ旬、田畝焦損。爰京南鳥羽等欲レ導ニ神泉池水一。若不ニ許容一、恐失ニ民業一。宜レ令ニ少納言良岑遠視、率ニ六府舍人以下一、准ニ承前例一、通中池水流上。明月記曰、建仁三年八月八日、申時赴ニ廣澤池一。寛喜元年八月六日、廣澤池水乾失。榮花物語曰、池のおもてはるかにすみ渡り。同駒くらべ曰、いけをたゝへ。本朝文粹曰、池亭記云云池水九之三。續世繼曰、東北院は、池のすがたもなべてならず。筑波問答曰、この水はむかしより名池にて侍ししかども、ことさら承元二年のころかとよ、後鳥羽院、三条坊門殿とてときみかきつくらせたまひて、詩歌管絃の御遊所にて侍りき。後嵯峨の御ときは、この泉にてされ年毎に庚申の日必侍し也

形状　明月記曰、碧瑠璃池水

多留美（タルミ）　倭名類聚鈔

集註

沃泉　爾雅曰、沃泉ハ縣出、縣ニ出トハ下出也。註從レ上溜下。合璧事類曰、從レ上溜レ下曰ニ下泉一

一名

垂見　萬葉集第八曰、石激（ソヽク）、垂見上乃、左和良妣乃。仙覺萬葉集註釋第八曰、たるみといへるは、たるみづなり。いはそゝぐといふては、もつともたるみと云べし。倭名鈔國郡部曰、讃岐國那珂郡、垂水、多留美

垂水　萬葉集第十二曰、石走（ヘシキャシ）、垂水之水能、早敷八師。同第七曰、石ハシ流（ル）、垂水、水乎、結ヒ飲ミ都（ツ）○新撰字鏡曰、淋、志太ゝ留、又毛留。淋灑、以水附於物之貝、散也。曾ゝ久、又志太ゝ留

集註

袖中抄曰、たるみのうへのさはらびとは、攝津と播磨とのさかひに、たる

昌泰元年十月廿五日　永観二年八月廿七日

みと云所あり。垂水と書り。きしよりえもいはぬ水出る故に、たる水と云也。垂水明神と申神おはす。此水のいはの上に落かゝれば、いはそゝぐたるみとは云也

多岐（タキ）　天文写本　和名鈔　［漢名］瀑布　［今名］タキ

瀛生八牋曰、泉懸出曰沃、暴溜曰瀑。通雅曰、立泉瀑布也。永州名勝志曰、水流石中湍急曰瀧。品字箋曰、瀑布者水從山崖下、挂高數百尺、望之若垂布然也。正字通曰、懸泉激流スルヲ曰二瀑布一。水品曰、瀑布水雖盛夏不可食、瀑字從水暴、有深義也

［一名］多伎　萬葉集第十五曰、伊波婆之流、多伎毛登杼呂爾、鳴蟬乃　多木　倭名類聚鈔曰、瀧、和名多木。兼名苑云、飛泉一名飛湍、瀑布也。遊名山志、城門山、兩巖有レ水、形如二瀑布一〇萬葉集第九曰、落多藝知、流ル、水之、磐ニ觸云云。山高見、白木綿花爾、落多藝津、夏身之河門云云　〇音羽水　和名集曰、音羽水ノ清水之飛泉也

［集註］萬葉集第九曰、瀧之瀨從、落墮而流レヌ。同第十三曰、三吉野乃、瀧モ動トヾロニ落白浪。同第十二曰、如神、所聞瀧之、白浪之。同第三曰、見吉野乃、瀧之白浪、雖不知ソラニハ。扶桑略記廿三曰、遂至二宮瀧一。其瀧之爲レ體也、廣者廿二町、勢非二觸嶮一。其碧礎急流之色、如レ崩二積雪一。同廿七日、于レ時千觀與、勅使一相共登、向箕面之瀧一。瀧上有二大槻樹一、顛仆横覆二瀧壺一云云。又曰、箕面山瀧下有二大松樹一。明月記曰、建仁三年七月七日、自二去夏在有馬湯泉云云。八日、午時許乘輿攀巖從見山奧飛瀧、其高三許丈、如出雲霧、相次參女躰權現。嘉祿元年正月十四日、巳時許中將相共向北山、見勝地云云四十五尺瀑布碧瑠璃池水云云。百練抄第

こがねのみのり

刊本漢書ハ雨水ノ下一'桃始華'蓋桃方華

八日、治承三年六月三日、山科新御所御移徙云云依レ有二飛泉一、去比被レ造營一。續世繼曰、高陽院の內裏におはしましけるに、瀧の水音凉しくて、岩間の水に月やどし一御覽ぜさせ給て。枕草紙曰、たきは、なちのたきは、くまのにあるがあはれなる之。小島のすさ見曰、みゝらうの瀧などいふ所へ行きて、かのながれにふれぬれば、やまひもやがていへ侍るよし云云。同國雜記曰、軒ちかく瀧おち、さながらねざめのしぐれに聞まがひ侍りければ。更級日記曰、八月に成て廿餘日のあかつきがたの月いみじくあはれに、山の方はこぐらく、瀧の音ども似る物なくのみながめられて。明衡往來曰、有飛泉凉風儲。又曰、艮角有飛泉

にけみつ 袖中抄

集註 袖中抄曰、にげ水とは、あづまぢにあり。人ののまんとすれどもおほかたくまれで、にぐる水なりとぞいひつたへたる

雪消之水（ユキゲノミヅ） 萬葉集第十

漢名 桃花水 卓氏藻林

今名 ユキトケミヅ

一名 ゆきけのみつ

漢書溝洫志曰、來レ春桃華水盛。師古注、月令仲春之月始雨水、桃華水盖桃方華時、既有二州ェ水一山谷冰洋泉流ァ集三ヮ波瀾一盛、故謂二之ヮ桃華水一

廣義抄曰、ゆきげのみづ、雪消水也。仙覺萬葉集註釋曰、雪げのみづとは、ゆきのきえたる水也

ゆきしろみつ 義經記曰、すとうとみちはゆきしろみづに山川まさりてかなふま

時既有ニ雨水ニ川谷氷洋楽流猥集波瞬盛長故謂ニ之桃華水。トアリ

ゆきしろみつノ義郷記ノ例本會本ノニハ見當ラズ

集註 萬葉集第十八曰、射水河、雪消溢而、逝水能。義經記曰、水上は雪しろみかさまさりて、御舟を上せかねてぞ有。太平記第八曰、河上ノ雪消水増リテ、淵瀬モ見ヘヌ大河ヲ

古保利 倭名類聚鈔　漢名 **氷** 通名　今名 **コホリ**

廣東新語曰、陽火之氣下積陰水之氣上凝則爲氷。物理小識曰、雪雹冰霜皆陰氣之所結、而不成冰者陰不純陰也。煮泉小品曰、氷堅水也。窮谷陰氣所聚不洩、則結而爲伏陰也。在地英明者惟水、而氷則精而且冷、是固淸寒之極也

一名 **比** 倭名鈔曰氷、和名比。又古保利。仙覺萬葉集註釋卷第一曰、こほりをひといふは、ひゆと云詞也。倭名鈔國郡部曰、上野國碓氷、宇須比。丹波國氷上、比加三。又曰、氷上、比加美。(塵添壒囊抄曰、夏ノ月氷ヲ酒ニヒタメ用ト申セバ云云

氷凝 萬葉集卷第一曰、川之氷凝、冷夜乎

許保里 萬葉集第二十曰、佐保河波爾、許保里和多禮流、宇須良嬶乃

ひもかゝみ 仙覺萬葉集註釋卷第一曰、ひもかゞみとは氷なるべし

寒氷 明月記曰、寬喜元年五月廿四日、今夕初見寒氷。依最勝講、小舍人之所送歟。六月廿日、幕下有恩問 又被送寒氷、今日炎暑

○古保利 集註 源氏物語さかき曰、とけわたる池のうす氷。同あさがほ曰、池のこほりもえもいはずすごきに。同椎が本曰、汀の氷とけわたるを。同浮舟曰、汀の氷をふみならすむまの足音さへ心ぼそくものがなし。同手習曰、年もかへりぬ。春のしるしもみえず氷わたれる水の、音せぬさへ心ぼそくて。住吉物語曰、すみの江には

校云。延喜ノ制注ハ天慶ノ誤ナリ

霜がれの芦こほりにむすぼゝれたり。榮花物語つぼみ花曰、こほりとくかぜもゆるくふきて、枝をならさず。東關紀行曰、道もいと氷とぢて、さはりがちにあやうかるべきを。公任卿集曰、たけにこほりのつきたるを、女御殿に奉り給とて云々。狹衣曰、汀はこほりいたくとぢこめて。むかし語曰、多の夜のことさらさむきには、池のこほりもむすぼゝれ。高倉院升遐記曰、みねのゆきみぎはのこほりをふみわけて。身のかた見曰、池の氷もむすぼゝれ。西行物語曰、春たちたりけれども猶氷とけやらず。古今著聞集第十七曰、延喜同四年正月下旬に、海邊𡈽(たま)をうつこゑ聞えけり。夜あけて見れば、しまねのこほりのさかひより、栖雞郡のさかひまで、一町あまりが程、こほりをかさねて、塔をつくりてならべたてたりけり。をの〳〵高さ三丈あまり、めぐり七八尺ぞ有ける。後にはきえやうせけん、何のしさひといふことをしらず。おそろしかりける事

○比(ヒ)　倭名鈔　卽氷也

食法　明月記曰、元久元年七月廿八日、自途參和歌所、如昨日家隆朝臣參會、大理被取寄樻二合、有破子瓜土器酒等、又有寒氷、大理自取刀被削氷、入興之甚、雖納涼之中非無外人、稱堪能削之、以白布巾褁氷左手扣之、皐陶之職頗輕々、各變態食之。字彙曰、皐陶爲二堯大理一、世爲二理氏一、紂時有レ逃レ難食レ李得レ全遂改爲レ李建暦三年五月廿六日云云、藏人等催氷、次第居之、經兼居大臣御前、以下六位役之、持通折敷、予在末不向臺盤、藏人等云、無臺盤所、乍折敷可居之　削氷不待居訖食之、食了所居樣々也、不知可否　師經、公宣、光親卿置臺盤下差入土器、予心中愚案、居臺盤物食了、皆返置臺盤、何限削氷指入下乎、又立箸時箸在器內、拔箸之時在器外、食訖之後箸置折敷上、今以折敷爲臺盤代、予器同返置其上、識者定加難歟云云、予參內大臣殿、見參事次被仰削氷事　昨日博陸大臣二人、內左通光、通方卿、食了返置臺

校云。

見參ノ下刊本「移爆、深更歸、廬」トアリ、恐ラクハ誤セルカ

盤上、箸在器傍、師經、公宣、光親、顯俊卿等指入臺盤下、箸在器內、此事不知其說、有故實歟、予所案符合實廬、爲而目。廿九日、午時參內云云、博陸御座定、居削氷、博陸、棟基、右府、經兼、皆乍折敷居之、納言以下六位居之、取折敷返、不另訖各食之、今日顯俊卿指入臺盤下

集註

日本書紀曰、仁德天皇六十二年、是歲、額田大中彥皇子獵于闘鷄。時皇子自山上望之、瞻野中有物、其形如廬。仍遣使者令視。還來之曰、窟也。因喚闘鷄稻置大山主、問之曰、有其野中者何窟矣。啓之曰、氷室也。皇子曰、其藏如何。亦奚用焉。曰、堀土丈餘、以草蓋其上、敦敷茅荻、取氷以置其上。既經夏月而不泮。其用之、即當熱月漬水酒以用也。皇子則將來其氷獻于御所。天皇歡之。自是以後、每當季冬必藏氷、至春分始散氷也。三代實錄卷第二曰、淸和天皇貞觀元年己卯春正月戊午朔、宮內省藏氷樣。同卷第四曰、貞觀二年春正月壬子朔、奏藏氷厚薄。同卷第五曰、貞觀三年春正月丙子朔、奏藏氷厚薄。同卷第七曰、貞觀五年春正月甲子朔、藏氷樣、附內侍奏。同卷第八曰、貞觀六年春正月戊子朔、藏氷樣、所司付內侍所奏。同卷第十曰、貞觀七年春正月癸未朔、藏氷樣、所司付內侍奏進。同卷第三十五曰、元慶三年春正月辛卯朔、奏藏氷樣如常儀。同卷第三十九曰、元慶五年春正月庚戌朔、藏氷厚薄不奏。以去多不沍寒、凌室空虛也。同卷第四十六曰、光孝天皇元慶八年八月十九日丁未、釋奠。去九日丁酉可行此禮、而六日負氷於背之馬、於主水司傷胎。馬主隱藏、不令人知。司以其氷供奉御膳、後途發顯、故延而行之。同卷第五十曰、仁和三年春正月乙亥朔、廢朝、雨也。是日、藏氷樣等、所司付內侍所奏。緣雨濕不奏於庭。餘略之 令義解曰、凡親王及三位已上、暑月齎者謂六月七

有氷凝、箋釋本ハ氷ヲ水ニ作ル

月給ヘ氷ヲ。又曰、宮內省云云氷室氷之厚薄皆申奏之。野府記曰、寛仁元年十一月廿二日、愛宕郡可レ奉レ寄ニ加茂御社ニ間之事云云。又云、氷室左近馬場垣河美七呂池等不レ可レ奉レ寄歟。左經記曰、寛仁元年十一月廿三日丁巳、先是依ニ御願ニ以ニ山城國愛宕郡ニ永可レ奉レ寄ニ賀茂御社ニ之由有レ命。件ノ郡內ニ有ニ靈社并宮城氷室等ニ。豐後國風土記曰、速見郡、柚富峯。此峯頂有ニ石室ニ、其深一十餘丈、高八丈四尺、廣三丈餘。常有ニ氷凝ニ、經レ夏不レ解。日本紀略曰、天長八年八月乙酉、山城河內國各加ニ置氷室三宇ヲ、供御闕之也。百練抄第十三曰、後堀河天皇貞永一年正月一日、節會不レ奏ニ氷様ニ。去年不レ寒之間、氷室等無ニ其實ニ云云。江家次第曰、元日宴會、氷、山城國徳岡、大和國都介、河內國更占、近江國龍華、丹波國神吉ト云云。氷様裹レ顯置ニ於朝餉ノ高欄ニ。延喜式卷第三十一曰、宮內省、凡藏レ氷之處、收ニ氷多少、及氷厚薄ヲ、每ニ處具ニ錄シ、元日群臣未レ喚之前、省輔已上將ニ本司ヲ入奏シ、并ニ進ニ氷ノ様ヲ。其詞曰、宮內省申久、主水司能今年收太留氷合ノ若干處、氷若干室ニ。厚若干寸已下、若干寸已上。益レリ自ニ去年ニ若干室ト、減レリ自ニ去年ニ若干室ト。供奉留事申給久。同卷第四十曰、主水司、凡供御ノ氷ハ者、起ニ四月一日ニ盡ニ九月三十日ニ。其四九月日別一駄、以ニ八顆ニ爲レ駄、准ニ一石二斗ニ。五月八月ニ、二駄四顆。六七月三駄。進物所ノ冷料。五八月二顆、六七月四顆。御醴酒并盛所ノ冷料、六七月一顆。凡供ニ中宮ニ氷ハ者、五八月日別四顆。六七月六顆。進物所ノ冷料、五八月二顆、六七月三顆。御醴酒并盛所ノ冷料、六七月一顆。凡東宮氷ハ者、五六月日別四顆、六七月日別六顆。凡齋內親王妃夫人尙侍起ニ五月ニ盡ニ八月ニ。日別ニ一顆。凡雜給氷ハ者、起ニ五月五日ニ盡ニ八月三十日ニ。侍從ノ料五八月日別三顆、六七月五顆。凡儲氷者、五八月各日別四顆、六七月各日別一駄四顆。凡運レ氷ヲ駄者、以ニ徭丁ヲ充レ之、山城ノ

部花ハ江次第ニ竜華ニ作ル
五撮ノ上「盛」字脫ナラン
丈ハ尺ノ誤カ
二十一ノ下所アルベシ
三ハ四ニ作ル本アリ
國字衍カ

國葛野郡德岡氷室一所。一丁輸一駄。愛宕郡小野一所。栗栖野一所。土坂一所。賢木原一所。並二丁輸一駄。同郡石前一所。一丁半輸一駄。大和國山邊郡都介一所。六丁輸一駄。河內國讚良郡讚良一所。四丁輸一駄。近江國志賀郡部●花一所。三丁輸一駄。丹波國桑田郡池邊一所。五丁輸一駄。率駄丁給食。一人日米四合●五撮、駄別秣稻二把。總計所須、每年申省請受。氷標幡十二流、各長二丈●。料緋帛八尺。幡料六尺、緒料二尺、三年一請。氷室雜用料。氷刀子十二枚、銜二十一口。已上年料。鍬五十六口、掃氷池料。砥一顆、已上三年一請。氷室二十一●。山城十室大半、大和二室半、河內二室、近江二室小半、丹波三室半。以見役徭丁、內隨損修之。其收氷夫、室別一百三●十人、給調食、人別日米一升四合。飯料四合、糟料一升。徭丁七百九十六人半。山城●國四百十四人半、大和百人半、河內七十五人、近江八十八人、丹波百十八人半。散百七十五人半、副丁在之中。長六十七人半、執鑰五十四人、守野山五十四人。見役六百二十一人。山城三百十六人半、大和八十一人、河內五十五人半、近江六十九人、丹波九十九人。氷池五百四十處。山城二百九十六處、大和三十處、河內五十八處、近江六十六處、丹波九十處。源氏物語かけろふ曰、ひを物のふたにをきて、わるとて、もてさはぐ人々、おとな三人計わらはとゐたり。云云白きうす物の御ぞき給へる人の、てにひをもちながら、かくあらそふを云云ひめして人々にわらせ給ふ。とりてひとつたてまつりなどし給ふ。むかし語曰、夏の日はあつくたへがたきに云云ひたどわらせて云云。歌林四季物語曰、院の御さしき、關白の臺など、ひむろといふものをかこひてたてならべたり。又曰、けふもつゐたちの拜をこなはれて、もんとりのつかさくによりたてまつる氷室

保延三年

群本ノ年中行事歌合ト校スルニ少シク異同アリ

今日ハ群本「去年」ニ作ル

こあん群本こんあむ

の雪水を、くすりのつかさたため、鬼くゐをさせて、宮の内のかみをしてまいらすれば。古今著聞集第六曰、六月同廿六日院御所にて御遊有けり。夜ふけて折櫃のうへに折敷をおきて、けづりひをすへて、公卿の前におかれけり。院には御臺にてぞ供せられける。年中行事和歌曰、ひのためしと申は、去年(こぞ)の氷(こほり)をおさめたる所々のためしを、けふのせちゑのつゐでにそうもんするなり。あつさ、うすさ、いかほどの寸法に侍るなどこまかにそうして、其例とて、近比は石などを奉るにや。氷池(ひいけ)とは、水をこほらすいけ也。ゑんきしきにも、ひいけのまつりなどゝのせて侍り。こほりのおほくゐるは聖代のしるしなり。こほりのいぬは凶年のしるしにて侍へれば、氷の御祈りとて大ほうなどおこなはるゝにや。今日もよくこほりて、めでたきよしのためしをたてまつるなり。ためしとはすんはう、ほどらひのふんさいにて侍る也。仁德天皇の御宇、額田大中彥皇子すべらぎへこほりを奉らせ給ふ。そのゝち季冬ごとにこれをおさめて、くに〳〵に氷室(ひむろ)ををかれしなり。花鳥餘情曰、松が崎はひゐの山の麓也。氷室ある所也。吾妻鏡卷第十曰、氷併消而。同卷第四十一曰、建長三年六月廿六日、冷氣尤甚、有レ氷如二冬天一。蜻蛉日記曰、ありつるこほりを、ひとへのそでにつゝみたり、てゝひゆくゆえあるものにやあらんと思程に。明月記曰、安貞元年十月十一日、水盡凍、甚寒。寛喜三年正月七日、在簾中、榱水猶以氷。文曆二年二月六日、池上猶冴氷。元仁二年二月四日、霜凝氷結。春宮年中行事曰、五月もんどづかさ(主水司)ひ(氷)をたてまつる事。こあん(今案)、ふるくは四月一日よりうちにたてまつりあぐ。しかるをきんだいは、五月によきひをゑらびて、おほせをまちて、たてまつりあぐるなり。とうぐうにも、この日よりこれをたてまつる。康富記曰、嘉吉三年四月十一日、早朝諧清外史文亭被語云、丹波氷供

テ群本ケルニ

御人等、今月四日五日之比、爲結山之鹿垣苅山之柴之次、誤而苅取守護押妨之山之間方相支之不令苅之、此山根本者氷所領也、名主泰井之知行山也、彼泰井自守護方討之後件山ヲモ日置(ヘキ)山トテ、細川典廐近年押領也、本氷所領タル由ヲ存與之間、地下人如此令苅取云云、仍自典廐(守護方)方以満將監爲使被尋本所之間、外史今朝向典廐尋被申此子細、所詮守護返事云、御料所之事、上者自本所可被罪科地下人也、万一令對捍本所之成敗者承候爲守護堅可致罪科也、先爲本所可被糺明之由返答之間、悦喜之由被語了、就之下遣人於氷所可致撿斷也、其間事被談合了

形狀

源氏物語あげまき曰、よもの山のかゝ見とみゆるみぎはのこほり、月かげにいとおもしろし。塵添壒囊抄曰、豐後國速見ノ郡溫泉アマタアリ。其中ニ一所ニ四ノ湯アリ。其湯ノ釜ノ東西ニ、自然ノ氷アル室アリ。記曰、開ニ一ノ石門ヲ望見レハ如レ倉ノ、可ニ一丈ニナル内ハ縱橫可ニ方十丈ハ、秉レ燭闚レハ奧遍室氷ッ凝レリ。或ハ如レ鋪ニツ玉(カハラ)塼ヲ、或ハ似タリ竪ニルニ銀柱ヲ、非レ因ニルニ鑿斧(ノミヲノ)ニ片取ルコト難シ。時屬ニシ三炎ニ探セノ氷百數人々自足莉レ酌ニ衢樽ニ、若非ニ龍宮ノ凌室ニ安ッ能多夏不ル消者乎ト云ヘリ。明月記曰、建仁三年十二月十五日、氷如鏡、牛馬不堪。續古事談曰、御堂承香殿ノハザマヲスギ給ケルニ、女房氷ニ歌ヲカキテ御隨身湍武ニトラセタリケルヲ、陣ニツカヒ給ケルニモテマイリタリケレバ、文字ミナキエテミヘザリケリ。ナゲキ給テ、フトコロヨリタ、ウガミニウツシテ、トリイデタリケリ。カヤウニ心バセアルモノニゾアリケル。榮花物語曰、そのころこほりをあふぎのかたにて、御すずりのふたにをきて、東宮の御かたより、この御かたにたてまつらせ給へれば、しきたるかみにあしでにて、いではべん。きみがよにあふぎとみればこほりするちよをかねてぞむすびつらぬく。とかきつけてまいらせ給へり。枕草紙曰、あてなるもの

云云けづりひの云云。俊頼髓腦抄曰、みきはのこほりをばかゞみのおもてにたとへ

【今案】帝京景物略曰、十二月八日。先期鑿氷方尺。至日。納氷窖中。鑑深二丈。氷以入。則固之。封如阜。內氷啓氷。中涓爲政。四月。立夏日。啓氷。賜文武大臣。編氓得賣買。手二銅盞疊之。其聲傖々。曰氷盞。氷蒼灘乃消。畏陰雨天。以綿衣蓋護。他乃不消。闕史曰、藍田縣歲貢冰常在冬杪有臘候尙怒藍水不冰則主吏宣命以祭一夕而成冰形以今承柱之礎方尺數之十及鑴鑿求中矩者亦艱難以其美全於淸虛明潔如椎鑿須而削蚌腹也或有渠砂線葉黏于其中則命鑴取以羅湯補之湯澄藍水沸於中金器赫天不鑠以後其用或沃以冷則澳斂不固甚復脫去用火泉塡之乃水紋絲散交涯如織擘碧以平他邑亦貢其數甚寡且非上品不及藍冰也中和辛丑犂華作蜀僖詔以雲棧嚴險罷貢洞庭丹實是年木奴之屬呼醴且將有雜林僧亦言本國海島上其水多鹵或有如剡髓投其中唯波截海而渡味甘色徹愈病祈醒彼國或一歲息於朝貢則准水窖之不至且多纍疫水旱作厲與冰橋之說符

○うす氷 平家物語

【漢名】溓 正字通

正字通曰、氷薄亦曰溓○平家物語第九曰、ころは正月廿一日、入あひばかりの事なるに、うす氷ははりたりけり

たる日 源氏物語

【漢名】冰柱 俗覽　【今名】ツラヽ

俗覽曰、冬月往觀絲崖滴、水皆成冰柱柱有排次如筍。天寶遺事曰、冰筋。冬至日大雪。至午雪霽。有晴色。因簷所結。簷溜皆爲氷條。妃子使侍兒敲下二條看玩。帝自晚朝視政回。問妃子曰。所玩何物耶妃子笑而答

氣溫ノ下無ニ宿雪一ヲ署セリ

曰。変所玩者氷筋也。事物異名錄曰、氷筋又劉叉有二氷柱ノ詩一卽氷筋也。類書纂要曰、簷溜凝于簷下曰氷箸

一名

立氷 古事記曰、故令取其御手者卽取成立氷

たるひ 八雲御抄曰、たるひ、こほりのきなどよりさがりたるを云。袖中抄曰、倚語抄云、いはそゝぐとは、石の上に水のかゝりたるを云。たるひとは、其水の氷たるを云。ある說云、たるひとは近江國甲賀郡にあり。其所にはたるひさがる事有

垂氷 延喜式第四十七、左兵衛府曰、播磨國垂氷(タルヒノ)牧左寮

垂澌(ツラヽ) 三代實錄卷第三十九曰、陽成天皇元慶元年春正月廿八日丁丑、大雨レ雪、去冬氣溫、今春多レ雪、寒氣彌然。屋溜垂澌長尺餘。

集註

源氏物語椎ガ本曰、つらゝとぢこまふみしだく山川をしるべしがてらまづやわたらん。同浮舟曰、日さし出て、軒のたる日のひかりあひたるに。源平盛衰記曰、池ノツラヽモ打解テ。義經記曰、竹の葉には、やうらくをさげたるに似たるたるひさがりけるに。權中納言定賴卿集曰、正月五日雪のふりて、松にたるひのしたりけるに云云。蜻蛉日記曰、はらへなどいふところに、たるひといふかたなうしたり。おかしうもあるかなと見つゝかへるに。平家物語卷第五曰、ころは十二月十日あまりの事なれば、雪ふりつもりつらゝゐて、谷の小川もをともせず、みねのあらし吹こほり、たきのしらいとたるひとなつて、みなしろたへにをしなべて。同卷第十二曰、谷のつらゝもうちとけず。俊賴髓腦抄曰、いけのつらゝひまなくむすぶほどになりぬれば、たかせのふねもかよはず。又曰、冬はそでのつらゝのこほりてちれるに。古今著聞集卷第五曰、其夜の事にや、殿上人齋院へ參たりけるに、御用意なからんことをはかり奉りけるにぞ。さる程に寢殿より打衣きたる女房あゆみ出て、筐をも

ちて殿上人に給はせけり。雪にて管をつくり、たるひにて竹を作たりけり。内裏へもちて參て、御覽なさせければ、ことに叡感有て、大宮へ奉らせける　【今案】源氏物語末摘花曰、朝日さす軒のたるひはとけながらなどかつらゝのむすほゝるらん。義經記曰、袖は涙にしほれて、たもとにたるひぞながれける。すそはつらゝにとぢられて、かゞみをみるがごとくなり

皇極四年ナリ

庭多泉（ニハタツミ）　萬葉集卷第二

【漢名】潦水　本草

本草綱目曰、降注、雨水謂二之潦一

【一名】爾八太豆美　倭名類聚鈔曰、潦、和名、爾八太豆美

爾波太豆美　天文寫本和名抄○萬葉集第二曰、庭多泉流、涙止曾金鶴

爾波多豆美　萬葉集卷第十九曰、爾波多豆美、流、涕、等騰米可爾都母

庭多豆美　萬葉集卷第十九曰、聞者悲瀰、庭多豆水、流涕・留可禰都母。言塵集曰、庭たづみは、雨の時にたまりたる水也

たつみとり　藻塩草曰、たつみとり、あめの降たるおりの水也と八雲御說也、如何

イサラミヅ　日本書紀傍訓

【集註】日本書紀皇極曰、夏六月丁酉朔甲辰云云是日雨下潦水溢レ庭。續日本紀卷第十八曰、孝謙天皇天平勝寶二年五月辛亥、京中驟雨、水潦汎溢。三代實錄卷第六曰、清和天皇貞觀六年五月廿七日甲午、淫霖未レ止。是日雷電大雨、庭潦奔溢。文德實錄卷第二曰、嘉祥三年七月己亥、大雨。大極殿前龍尾道十二丈、爲二水潦一所二決壞一。日本記略曰、延曆十一年六月乙巳、雷

雨、潦水湧沲タリ。古事記曰、故是口子臣白ス此御歌ヲ之時、大雨、尒不レ避ニ其雨ヲ、参ニ伏前殿戸ニ者云云跪ニ于庭中ニ時、水潦至レ腰、其臣服ニ著紅紐ニ青摺衣ヲ故、水潦拂フレテ紅紐ニ青皆變ニ紅色ニ。狹衣曰、のどかにもたのまざらなん庭たづみかげ見ゆべくもあらぬながめを云云庭たづみ見給ひて、後はいとゞ外ざまにきゝなし給はん事くちおしきを。明月記曰、建暦三年五月八日、天晴、未後午晴大雨如注、行潦如池。都記曰、永保元年五月六日、今夜終甚雨、夜明之後庭中如海。又東川汎溢云云

形状　袖中抄曰、にはたづみとは、雨のふるに庭につぼのやうにまろなる物をいふ

水澁ミシブ　萬葉集　漢名　垽澱　物理小識　今名　タソブ

物理小識曰、池澱者溝水面如油作金色如銹水是也

一名　みしぶ　言塵集曰、みしぶとは水澁也。萬葉集卷第八曰、衣手爾、水澁付ミシブツクマデ左右、殖之田乎

燃水モユルミヅ　日本書紀　漢名　石腦油　本草　今名　クサウヅノアブラ

水經注曰、延壽縣南山出泉水大如筥注池爲溝水有肥如肉汁取著器中始黄後黒如凝膏然極明與膏無異膏車及水碓缸甚佳彼方人謂之石漆水肥亦所在有之非止高奴縣洧水也。陝西名勝志曰、延川縣縣北九十里有ニ石油井ニ井出ニ石油ヲ毎歳六月取レ之塗レ瘡已、瘡疾ニ按過庭錄云延境内有ニ石油ニ舊說高奴縣出ニ脂水ニ即此也生ニ於水際ニ沙石ト與レ泉相雜惘惘而出土人以ニ雉尾ヲ裛レ之乃採入ル缶中ニ頗似レ淳欬燃レ之如レ麻但烟甚濃所レ沾帷幕

皆黒予疑其烟可用試掃其煤以爲墨黒光如漆松煤不及也遂大爲之其識文曰延州石液者是。小知録曰、緬甸石油自石縫流出

一名 **土油** 頓醫抄曰、齒抜爪損ハ本ヲ灸至レ末ニ巻テ血ヲ可出、指ノ尖ヲ少シサスナリ。疵不愈者ハ天蓋ノ灰與塩灰合テ可付。又赤竜ノ血ヲ和テ可付。又土油ニ赤竜ヲ和テ可レ付也。土油者、美濃國谷頭ト云處ニ有ニ山寺ニ、彼佛ノ御足ノ下ヨリ土油出ヅ、其レヲ綿ニシメシ可塗也

集註 日本書紀曰、天智天皇七年秋七月、越國獻ニ燃土與ニ燃水ヲ。元亨釋書曰、延暦中相レ攸ミテトコロヲ至ニ美州谷汲ニ構ニ精舎ヲ當テ平レ基ヲ鑿ルニ一巖ヲ忽石中ヨリ油出ヅ。麗澁埃嚢鈔曰、谷汲ト云、延暦中ニ此地ヨリ油湧出ス、是ヲ汲テ灯明ニ用ル故ニ爾云

形状 ○東奥紀行曰、探ニ北越七奇ヲ記。於テ是先抵ニ黒川ニ入ニ民家ニ見ニ山油在ニ桶中ニ、黒色頗似ニ淳柒ニ、乃本草所レ謂石腦油者也。以レ有ニ悪臭ニ故方言謂ニ之臭水ト。欲レ観ニ其所ニ涌、倩レ童令レ導。自ニ村中ニ、東折行一里許、少下有ニ小泉ニ、下流爲レ渠、幅可ニ二尺ニ、深亦適レ之、泉上設ニ苫屋ニ形如レ篷、油隨レ水而出。距レ苫八九尺、下流構ニ柵於渠中ニ結レ草堰レ之油爲レ之所ニ擁塞ニ湛乎不レ流、猶ニ魚油浮(サカン)ニ煮汁中ニ也。草形似ニ狗脊ニ、土人謂ニ之ヲ太久末草ト。其他如レ是者數十、皆在ニ近地ニ云。同行幸衛者、以レ杖沁レ油ヲ、其杖甚臭、以滌ニ於水ニ水面油浮、爲ニ碧雲之狀ヲ。暫行復滌如レ此三四、油氣未レ消故ニ翌日ニ猶臭、不レ堪レ握、至ニ卒棄レ之、可ニ以概ニ其凝臭ニ矣

宇太加多（ウタカタ） 天文寫本和名鈔

漢名 **水沫** 物理小識

アワ

物理小識曰、水沫滃水中沫取起。令乾爲末。入湯中卽冷而不沸。食之則轉矣。氣暇曰、以此沫調水。令人飮之。則瀉不止。多服甘艸乃解

一名 宇太加多 倭名類聚鈔曰、沫雨、淮南子註云、沫雨、雨ニ潦上ニ沫起ニト若ニ覆盆一、和名宇太加太

水のあは 源氏物語

みなは 源氏物語須磨曰、たみだ川うかぶみなはもきえぬべしたがれて後のせをもまたずて。奥義抄曰、みなは、水の沫也

あは 源氏物語柏木曰、あはのきえいるやうにてうせ給ぬ

三名沫 萬葉集卷第七曰、卷向之、山邊響而、往水之、三名沫如、世人吾等者

水沫 萬葉集卷第六曰、泊瀨女ノ、造木綿花、三吉野、瀧乃水沫ニ、開キニ來受屋。同第十八日、南吹、雪消益ノ而、射水河、流水沫能、余留弊奈美。同第七日、泊瀨川、流ル水沫之、絶者許曾。延喜式卷第八曰、祝詞、手肱爾水沫畫垂。又曰、水沫毛事問天。卽和漢通名也

水阿和 萬葉集第六日、是川ノ、水阿和逆ニ纏キ、行水ノ云云

宇多我多 萬葉集第十七日、安麻射加流、比奈爾安流和禮乎、宇多我多毛

宇多賀多 萬葉集第十七日、宇多賀多母

水つほ 仙覺萬葉集注釋第十五日、水つぼを、うたかたといへるもかりなる心也。又かりねをうたゝねといふもこのたぐひにやあらん。私注水のあはを東國には、水つぼといへる歟

集註 源氏物語東屋曰、いとうれたきやうなる、水のあはにもあらそひ侍かな、かきながさるゝ。源平盛衰記第四十八日、水の泡波ニ隨テ消ヌ。撰集抄曰、おなじ瀨に立水の泡の流れきゆる心ちして侍り。又曰、水の上の泡よりもあやうき身をたすけんとて。榮花物語疑曰、たゞひとわたりのかぜにちりぬるときは、水のあわ

みぎはのちりとこそはなりぬめれ

形狀 源氏物語柏木曰、あはのきえいるやうにてうせ給ぬ。袖中抄曰、奥義抄曰、うたかたは、水の上に、つぼのやうにてうきたる沫也

二月、甲申朔十リ

美泉 續日本紀

漢名 醴泉 本草　資泉小品曰、醴泉、醴一宿酒也、泉甜如酒也

一名 酒泉　走湯山緣起曰、又日金北洲酒泉松居中間萬歲。延喜式卷第二十一曰、治部省、祥瑞、醴泉、美泉也。其味美甘、狀如醴酒。尙書中候曰、醴甘也取名醴酒萬祇德顯僻醴泉出文命盛德俊義在官醴泉出。山水品曰、古稱醴泉非常出者一時和氣所發與甘露芝草同爲瑞應

今名 サケノイヅミ

集註 日本書紀曰、持統天皇七年十一月己亥、遣沙門法員、善往、眞義等、試飮近江國益須郡醴泉。八年己亥、詔曰、粤以七年歲次癸巳、醴泉涌於近江國益須郡都賀山、諸疾停於益須寺、而療差者衆。故入水田四町、布六十端。續日本紀卷第七曰、元正天皇養老元年九月丙辰、幸當耆郡多度山美泉、賜從駕五位已上物、各有差。甲子、車駕還宮。十一月癸丑、天皇臨軒、詔曰、朕以今年九月、到美濃國不破行宮、留連數日、因覽當耆郡多度山美泉、自盥手面、皮膚如滑、亦洗痛處、無不除愈、在朕之躬、甚驗、又就而飮浴之者、或白髮反黑、或頽髮更生、或闇目如明、自餘痼疾、咸皆平愈。昔聞、後漢光武時、醴泉出、飮之者、痼疾平愈。符瑞書曰、醴泉者美泉、可以養老。蓋水之精也。寔惟、美泉卽合大瑞、朕雖痛虛、何違天貺、可大赦天下、改靈龜三年、爲養老元年。同卷第八曰、養老二年二月

壬申、行幸美濃國醴泉。三月戊辰、車駕自美濃至。文德實錄卷第六曰、齊衡元年秋七月丙午、石見國言。醴泉出、三日乃涸。十二月甲寅、策文曰、維仁壽四年九月廿七日、石見國醴泉瑞獻。圖書據勘合。如此不世嘉瑞、非薄德所可感致物非。百練抄卷第七曰、永萬元年六月八日、蓮花王院西御醴泉涌出、承仕有夢想、貴賤汲之。帝王編年記相同

形狀

續日本紀曰、養老元年十二月丁亥、令美濃國立春曉挹醴泉而貢於京都、爲醴酒。文德實錄曰、齊衡元年十一月辛亥、晦詔曰、近來石見國上醴泉、味寫濁醪、狀凝芳醴。雖朕之不德、讓而弗怡、然天意若曰使非人綏之。

古今著聞集卷第八曰、昔元正天皇の御時、美濃國にまづしくいやしきおのこ有けり。老たる父をもちたりけるを、此男山の木草をとりて、其あたひをえて父を養けり。此父朝夕あながちに酒をあひしほしがりければ、なりひさごといふものをこしにつけて、酒うる家に望て、つねにこれをこひて父を養。ある時山に入て、薪をとらんとするに、苔ふかき石にすべりて、うつぶしにまろびたりけるに、酒の香のしければ、思はずにあやしくて、其あたりを見るに、石の中より水ながれ出る所有。その色酒に似たりければ、くみてなむるに目出たき酒也。うれしく覺て、其後日々に是を汲てあくまで父をやしなふ。時に、みかど此事を聞召て、靈龜三年九月日、其所へ行幸ありて叡覽ありけり。是則至孝の故に天神地祇あはれびて其德をあらはすと感ぜさせ給て、美濃守になされにけり。家ゆたかに成て、いよ／＼孝養の心ふかゝりけり。其酒の出る所を養老の瀧と名付られけり。これによりて同十一月に年號を養老とあらためられけるとぞ

酒水　豐後國風土記

豐後國風土記曰、大分郡。酒水。此水之源、出二郡西柏野之磐中、指レ南下流。其色如レ酒水味少酸焉。用療二病癬一

杜陽雜編曰、南昌國其國有酒山、盃山有泉其味如酒、飲之甚美、醉則經月不醒

古名錄水部卷第三　終

古名錄水部卷第四目錄

地水類下

古名錄水部卷第四

紀藩　源　伴存撰

地水類　下

伊豆流湯（イツルユ）萬葉集　【漢名】溫泉 本草　【今名】ユ　イデユ

雲南通志曰、凡溫湯皆有硫礦氣而安寧則無舊有人見其竅出丹砂數粒迺知其下有丹砂故泉甲於他處明楊愼稱爲天下第一湯傳聞徽州黃山溫泉亦類此後周王褒溫湯銘曰白礬上徹丹砂下沈華淸駐老飛流瑩乃溫泉所在必白礬丹砂硫礦三物爲之根乃蒸爲熯流耳。廣東新語曰、溫泉則多爲硫之華丹砂之英之所融液云云故溫泉之旁皆有涼水以和其湯處處皆然。帝京景物略曰、或曰。下有硫黃以爲之根。其臭硫也。而味正淡。西洋熊三拔水法曰。湯泉。硫之華。疾寒服硫。不若服湯泉。其實緣地氣熇烘。溫涼之微變。故壤爲之硫。泉爲之湯。豈根硫也。西國有山焉。七十餘泉皆湯。國王試得其性味氣。各所主治。各標厥泉。以敎國人。不獨硫焉。蘇門答剌國境。有那姑兒山。產皆硫黃。不關其泉湯也。又水火者。陰陽之變精。陰得質而陽得氣。爲泉。爲湯。陽得質而陰得氣。爲餤。爲涼。然水性非熱。火性非涼。湯泉以貯器還涼。

【一名】

温湯 日本書紀、和漢通名也 由 倭名類聚鈔曰、温泉一云湯泉。和名由。國郡部曰、石見國邇摩郡湯泉、由 湯 延喜式神名記曰、伊豫國温泉郡湯神社。倭名鈔國郡部曰、伊豫國温泉湯

出湯 出雲國風土記 三湯 萬葉集曰、三湯之上乃云云 【集註】 竹取物語曰、倉持の御子は心たばかりある人にて、おほやけには、つくしの國にゆあみにまからんとて、いとま申て云云

○攝津有間温湯 日本書紀 【一名】 塩湯 攝津國風土記 有馬温泉 藻塩草 有まの出湯 同上。著聞集曰、有馬の湯、攝津國風土記曰、有馬郡温湯二ヶ所 【集註】 攝津國風土記曰、有馬郡温泉。顯宗天皇二年丙寅、一夜而出温泉、爾來治病者浴此地、其功如遊神境。釋日本紀曰、攝津國風土記曰、有馬郡、又有塩之原山、此近在塩湯、此邊因以爲名。久牟知川、右因山爲名。山本名功地山。昔難波長柄豐前宮御宇天皇世、爲車駕幸湯泉、作行宮於湯泉之。于時採材木於久牟知山。其材木美麗。於是勅云、此山有功之山。因號功地山。俗人彌誤曰久牟知山。又曰、始得見塩湯等云云、土人云、不知時世之号名。但知嶋大臣時耳。日本書記曰、舒明天皇三年秋九月丁巳朔、乙亥、幸于攝津國有間温湯。扶桑略記湯作泉 冬十二月丙戌朔、戊戌、天皇至自温湯。十年冬十月、幸有間温湯宮。十一年春正月乙巳朔、壬子、車駕還自温湯。孝德天皇大化三年十月甲寅朔、甲子、天皇幸有間温湯。左右大臣群卿大夫從焉。十二月晦、天皇還自温湯。而停武庫行宮。帝王編年記曰、龜山院文永四年九月十三日、一院新院御吹田新院於吹田可被召有馬湯云云。百練抄第四曰、後

勢ノ下流布本寮云々仍トアリ

朱雀天皇長久三年閏九月廿三日、關白左大臣下ニ向有馬溫泉一。同第六日、崇德天皇大治三年三月廿二日、太上法皇幸ニ攝津國有馬溫泉一。同第八日、高倉天皇安元二年三月九日、上皇建春門院御ニ幸有馬溫泉一。同第十五日、後嵯峨院寬元元年二月六日、兩女院自ニ天王寺一御幸溫泉一。殿上人已下供ニ奉之一。前內大臣烏帽子直衣自ニ小屋野一供奉云云。廿一日、兩女院自ニ有馬溫泉一還御。同第十六日、後深草院建長三年閏九月十七日甲辰、上皇御ニ幸吹田殿一。大宮院同御幸。七ヶ日可レ被レ召ニ湯山御湯一云云。同四年九月十三日甲午、上皇御ニ幸吹田殿一。爲レ可レ有ニ御湯治事一也。同第十七日正元元年十月五日乙亥、自ニ今日一主上御湯治被レ召ニ有馬溫泉湯一。古今著聞集卷第二曰、行基菩薩もろ〳〵の病人をたすけんがために、有馬の溫泉にむかひ給ふに云云其時上人願を發(おこ)して、堂舍を建立して藥師如來を安置せんと願し、其跡を崇(あがめん)と思ふ。必勝地をしめせとて、東にむかひて木葉(この)をなけ給。山良の木すなはち其木葉の落る所を其所にさだめて、今の昆陽寺を建給つる也。同卷第十六曰、進士志定茂といふさむらい學生ありける。ある人のもとに、有馬の湯へ行とて行縢(むかばき)を人にかりたりけるに。藻塩草曰、有馬溫泉、攝津三輪神まします。珍しき見ゆきを三輪の神ならばしるし有間の出湯なるべし。太平記第三十八、仁木左京大夫賴章ハ病ト稱ノ有馬ノ湯ヘ下ル。明月記曰、建仁三年七月七日、自ニ季夏在有馬湯屋、今朝遷坐此山上人湯屋、此處地形尤幽也。對高山望遠水。今日始水湯。元久二年閏七月八日、午時着湯山宿。上人屋湯屋師茂妻尼數多人勢盛[]何取寄湯台、不向其屋。九日、已時移湯屋、東屋依雨傾不能運湯、仍請受彼所公浴之。十四日、湯已滿七日、依不堪每日一度浴之。早朝。承元二年十月七日、拂曉出路、申時始着湯山。即浴之。曉又浴、湯口屋故平大納言賴盛卿後家宿之。上人法師

治ヲ浴ニ作

浴本渡流

恵本愚流

之後流本「了後疲」ニ作ル

屋播州羽林居住、有闘犬之遊云々。八日、曉更入道左府、具大納言、出京云々、日來坐仲國屋、水湯訖被出云々、不得踰夕浴、又夜半浴。九日平三位下內云々、途使有返事、依老母病不審來由也。播州羽林送山粱志深生、又源中將清信、庄等音信、申時夜半浴。十一日、山中忽寂寥、登臨遊放、入湯屋任意浴之。十二日、寅午子時三度浴、未時七條院堀川殿少將相具下着云々。十七日、昨日自湯山歸京。嘉祿元年三月十八日、性恵房誂高倉殿亭、明曉下向湯山。寛喜元年八月廿五日、秉燭之程、陵長途參入道大納言臨見參。明後日令下向有馬湯給。一條相國新造湯屋云々。寛喜二年二月卅日、酉時許宰相來、明曉一定供奉湯山。八月十一日云々。廿二日、彼女院密々御有馬湯云々。九月三日、侍從言家母堂相共今曉城外云々三ケ月發心地之後稱可向有馬湯云々。寛喜三年八月卅日、來四日太相湯山之儀止。而內府相共行水田。運有馬湯可被浴。九月十六日、昨日被始湯、不可有他出行云々以桶二百毎日運有馬湯云々。天福元年八月廿八日、巳時許金吾來、湯山二七日之由雖被企、惱氣猶不快、依可被歸京、內府明日被向水田云々。九月三日、未明許金吾來、湯山依咳病被皈京。昨日別當相共自今津騎馬皈京云々。林葉集曰、有馬にしほゆあみにまかりたりしに云々。公任卿集曰、哀とも猶きよし共おもほえず人は有まのゆとしきかわば云々

今案　有馬大鑑曰、されば釋行基昆陽寺より爰に徘徊せし時、湯槽をかまへたりとなむ。其後承德元年に、霖雨甚しく洪水山を崩し家を溺らせるまゝに、温湯の所もわかずなりしを、後鳥羽院御宇建久二年二月半に、和州芳野山の僧仁西、熊野權現御告により、彼所に至り、御神の敎へに任せ、蜘蛛の引糸をしるべに山に分入つゝ、ふるき跡を尋出て十二坊舍をたつ。湯槽は村の中程にあり、廣さ方丈ばかり、中を板にてさへぎり、南

を一の湯といひ、北を二の湯といふ。深さ淺さは折によれり。大形一尋の中にたらず。あつからずぬるきにあらず。されども雨の中には聊あつくおぼゆ、きよき事淸水にも增れり武者物語藻塩袋にも見えたり

○伊豆湯泉　[一名]　走溫泉　藻塩草　[集註]　藻塩草曰、走溫泉ハいづの國山の南にいづるゆのはやきは神のしるしなりけり。東國紀行曰、二月十四日あたみを出て走湯山一見。走湯山緣起曰、又以二本誓一化二出溫泉一濟二度蒼生一。因レ之呼レ吾曰二沙訶沙羅一。湯泉之梵語歟。高野天皇御宇天平勝寶年中、八幡大菩薩、自二宇佐一臨二幸洛都一。平城宮。于レ時當山震動七箇日、湯泉沸出

○伊豆小那溫泉　吾妻鏡　[一名]　小名溫泉　吾妻鏡　[集註]　吾妻鏡卷第三十一曰、嘉禎二年四月八日、將軍家依レ可レ渡二御于伊豆國小名溫泉一、以二來十七日一、被レ定二御進發之日一。同卷第三十二曰、延應二年九月八日、戊剋、施藥院使正四位上丹波朝臣良基卒。于レ時在二伊豆國北條小那溫泉一。云云

○相摸蘆苅溫泉　藻塩草　[集註]　藻塩草曰、刀比河内、蘆苅溫泉、相摸。萬葉集第十四曰、相摸歌。阿之(足)我(柄)利能、刀比(土肥)能可布知(河内)爾、伊豆流湯能、余爾母多(絶)欲良爾、故呂(兒)何伊波奈(不言)久爾

○信濃東間溫湯　日本書紀　[一名]　筑摩溫泉　藻塩草　筑摩御湯　同上　[集註]　日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳十四年十月壬午、遣二輕部朝臣足瀨、高田首新家、荒田尾連麻呂於信濃一令レ造二行宮一。蓋擬レ幸二東間溫湯一歟。宇治拾遺物語曰、今はむかし信濃國につくまの湯といふに、よろづのひとの

あみけるくすりゆあり。藻塩草曰、筑摩温泉、しなの、又筑摩御温共云り。扶桑略記第五曰、天武天皇白鳳十五年云云七月改爲二朱鳥元年一。於二信濃國一令レ造二行宮一。擬レ幸二東國温泉一。後拾遺集曰、つかまの湯を見侍りて、源重之。出るゆのわくに懸れる白糸はくる人絶ぬ物にぞありける

信濃七久里温泉 藻塩草　[一名] 七くりのいてゆ 藻塩草　[集註] 藻塩草曰、七久里温泉、しなの〳〵つきもせず直に涙をつくすかなこや七くりのいでゆなるらん 後拾遺集に此歌作者相模と見えたり　[今案] 勢陽雜記曰、七栗湯。八雲御抄、夫木、藻塩草等に、信州に記入と見えたり。當國一志郡に七栗と云郷有。いにしへ榊原と一郷ならし、かゝる例おほし。一志なる岩根に出る七栗のけふはかひなき湯にも有哉。此歌は伏見にゆわかして、大納言經信卿を呼侍りけるに、來ざりければ讀て遣しけり云云

○犬飼御温泉 藻塩草　[集註] 藻塩草曰、犬飼御温泉、しなの〳〵鳥の子はまたひなながらたちていぬかひのみゆるはすもりなりけり 此歌拾遺集物名に讀人不知と出たり

○草津の温泉 北國紀行　[集註] 北國紀行曰、重陽の日、上州白井と云所にうつりぬ。是より棧路をつたひて、草津の温泉に二七日計入て、詞もつゞかぬ愚作などし、鎭守の明神に奉りし。東路の津と曰、草津湯治おそく成ぬべし、さらばたち歸りねとさだまる云云新田の庄に、大澤下總守宿所にして、草津湯治のまかなひなどに六七日になりぬ云云。九月十二日に草津へつきぬ。蓑輪軍記曰、永祿二年五月信貞小幡尾張守草津へ入湯せし留主を伺ひ、玉案の城を責とりて、信貞を國へ不入

○いかほの

以ノ下「山」アル本アリ。拆「折木」ニ作ル本アリ

出湯 北國紀行 【集註】 北國紀行曰、上州白井と云所にうつりぬ云云。又山中をへて、いかほの出湯にうつりぬ。雲をふむかとおぼゆる所より、淺間嶽の雪いたゞき白くつもり初て、それよりしもは霞のうすくにほへるがごとし。一七日いかほに侍りしに、出湯の上なる千巖の道をはるぐ\とよぢ上りて、大たる原あり。麓に流水あり。是をいかほのぬまといへり

○下野温泉 延喜式 【一名】 那須温泉 藻塩草 なすのゆ 同上 【集註】 延喜式神名記曰、下野國那須郡温泉神社。三代實錄卷第七曰、貞觀五年十月七日丙寅、授二下野國從五位上勳五等温泉神從四位下一。同卷第十六曰、貞觀十一年二月廿八日丙辰下野國云云授二從四位下勳五等温泉神從四位上一。藻塩草曰、那須温泉、下野那須の郡神社あり〽なにもかく世をしもおもひなすのゆのたきかゆへをも落字アリ平治物語曰、九郎御曹司ハ秀衡ガ許ニ御座ケルガ、佐殿既ニ義兵ヲ擧給ト聞ヘシカバ打立給云云早白河ノ關堅テケレバ、那須ノ湯詣ノ料トテ通給

○陸奥玉造温泉 續日本後紀 【集註】 延喜式神名記曰、陸奥國玉造郡、温泉神社、温泉石神社。續日本後紀卷第六曰、承和四年夏四月戊申、陸奥國言ス、玉造ノ塞温泉石ノ神雷ノ如ク響振ヒ、晝夜不レ止。温泉流レ河ニ、其ノ色如レ漿。加以ナラス燒谷塞、石崩折ノ、更ニ作ニ新沼ヲ、沸聲如レ雷。如レ此奇恠、不レ可ニ勝計一。仍テ仰セ國司ニ、鎭ニ謝災異ヲ、教ニ誘ス夷狄ヲ。同卷第十三曰、承和十年九月、无位玉造温泉ノ神云云並從五位下

○陸奥宮城郡坪浦温湯 陸奥國風土記 【集註】 陸奥國風土記曰、宮城郡温湯三ケ所、宮城郡坪浦在松

山之右出温湯

○陸奥さはこの御温泉　藻塩草

［集註］藻塩草曰、さはこの御温泉、陸奥へよと、もにたげかし君をみちのくのさはこのみゆといはせてしがな。拾遺集物名曰、讀人不知。あかずして別し人の住里はさはこのみゆる山のあなたか

○陸奥磐城温泉　延喜式

［集註］延喜式神名記曰、陸奥國磐城郡、温泉神社。三代實錄卷第七曰、貞觀五年十月廿九日戊子、陸奥國勳九等云云温泉神等、並授二從五位下一。

○陸奥名取御温泉　藻塩草

［集註］藻塩草曰、名取御温泉、陸奥へおぼつかな雲のかよひぢ見てしがなとりのみゆけばあとはかもなし

○出羽國酢川温泉　三代實錄

［集註］三代實錄卷第二十四曰、貞觀十五年六月廿六日己未、授二出羽國正六位上酢川温泉神從五位下一

○但馬温泉　倭名類聚鈔

［集註］倭名鈔曰、但馬國二方郡温泉由

○出雲意出湯　出雲國風土記

［集註］出雲國風土記曰、意宇郡忌部卽川邊出湯所在兼海陸仍男女老少或道路駱驛或海中沚洲日集成市燕樂一濯則形容端正再浴則萬病悉除自古至今無不得驗故俗人曰神湯也

○出雲仁田藥湯　出雲國風土記

［集註］出雲國風土記曰、仁多郡、湯野小川。卽川邊有二藥湯一、浴之則身體穆平。再濯則萬病消除。男女老少、晝夜不レ息駱驛往來、無レ不レ得レ驗。故俗人號云二藥湯一也

○出雲大原温泉　出雲國風土記

［集註］出雲國風土記曰、大原郡、海潮鄉。

毛間村川ノ下「中温泉出」アルベキカ

伊衍カ

即東北須我小川之湯、淵村川中温泉不用號、同川上毛間村川

○出雲大原川上毛間村温泉 出雲國風土記 【集註】 出雲國風土記曰、大原郡、川上毛間村川中温泉出。不用號

○美作かつまたのみ温泉 藻塩草 【一名】 みまさかの湯 袖中抄

【集註】 袖中抄曰、かつまたの池をば、人皆美作國に有とおもへり。是すなはち、彼國にかつまたの温泉あり。みまさかの湯に罷下し時、かの土民に尋侍しかど、さる池ありと申もの侍らざりき。明月記曰、寛喜三年七月廿二日、午時許能登前司長政來向、晦比下向勝間田湯云云

○石見温泉 倭名類聚鈔 ○長門温泉 無題詩 【集註】 本朝無題詩曰、釐長門壇即事云云。一尋西府温泉地、治病逗留及兩年

○紀伊温湯 日本書紀 【今名】 熊野ノユ 【一名】 牟婁温湯 日本書紀 紀温湯 同上 牟婁湯泉 同上 武漏温泉 續日本紀 御熊野温泉 藻塩草 まくまのゝ温泉 同上 紀温泉 萬葉集

【集註】 日本書紀曰、齊明天皇三年九月、有間皇子性黠、陽狂云云、往牟婁温湯、僞療病、來讃國體勢曰、纔觀彼地、病自蠲消云云。天皇聞悅、思欲往觀。四年冬十月庚戌朔、甲子、幸紀伊温湯。五年春正月己卯朔、辛巳、天皇至自紀温湯。同卷第二十九曰、天武天皇白鳳十四年夏四月丙子朔、己卯、紀伊國司言、牟婁湯

天智：：十二年八天：：：武三年十誤ナノリ赤人ノ歌左ノ下「波彌難

泉没而不レ出也。續日本紀卷第二曰、文武天皇大寶元年九月丁亥、天皇幸ニ紀伊國一。冬十月丁未車駕至ニ武漏温泉一。戊午車駕自ニ紀伊一至。萬葉集卷第一曰、後崗本宮御宇天皇代、幸ニ于紀温泉一之時、額田王作歌云云。中皇命往ニ于紀伊温泉一之時御歌云云。扶桑略記第四曰齊明天皇四年十月、天皇幸ニ紀伊温泉一。有馬皇子謀叛、被レ誅。藻塩草曰、御熊野温泉、きの國みくまのゝゆこりの丸をさすさは　○きの

國ましらゝの浦の走温泉 藻塩草　今名 湯崎ノユ○伊豫温湯 日本書紀　一名

伊豫温泉 日本書紀　伊余湯　古事記曰、故其輕太子者流ニ於伊余湯一也。源氏物語空蟬曰、いよのゆのゆげたもたど／＼しかるまじう見ゆ　集註 日本書紀曰、舒明天皇十一年十二月己巳朔、壬午、幸ニ于伊豫温湯宮一。十二年夏四月丁卯朔、壬午、天皇至レ自ニ伊豫一、便居ニ厩坂宮一。天智天皇十二年冬十月、伊豫湯泉没而不レ出。萬葉集卷第三曰、山部宿禰赤人至ニ伊豫温泉一作歌一首。皇神之神乃御言乃、敷座國之盡、湯者霜、左（○脱アリ）射狹庭乃、崗爾立之而、歌思ヒ、辭思爲師、三湯之上乃、樹村乎見レ者、臣木毛生繼爾家里、鳴鳥之、音毛不更、遐代爾、神ム左備將往、行幸處。扶桑略記廿五日、朱雀天皇天曆七年三月廿日、權少僧都明珍申ニ給官符一、向ニ伊豫國温泉一治レ病。藻塩草曰、伊豫温泉へいよのゆのゐげたはいくつ數しらずかぞへずよまず君はしるらん。ゆげたは多事にいへり　○

豐後温泉 三代實錄　集註　三代實錄卷第十四曰、清和天皇貞觀九年二月廿六日丙申、太宰府言、從五位上火男神、從五位下火賣神、二社、在ニ豐後ノ國速見ノ郡鶴見山ノ嶺一、山

在。島
山之、
宜、國
跡、極
疑伊
豫能」高
讃乃ス
ヲ脫
朱雀ハ
村上ノ
誤
見ハ鼎
ノ誤カ
習ノ下
二石」脫
カ

頂ニ有ニ三ノ池一。一ノ池泥水色青ク、一ノ池ハ黑、一ノ池ハ赤。去ヌル正月廿日池震動ス、其聲如レ雷。俄ニシテ而見ル如ニ硫黃ノ遍ニ滿國內一、●磐飛亂テ上下无レシ數。石ノ大ナル者ハ方丈、小ナル者ハ如レシ甕ノ。晝ハ黑雲蒸シ、夜ハ炎火熾ユ。沙泥雪ノ如ニ散、積ニ於數里一。池中元ト出ス溫泉ヲ、泉水沸騰ス、自成ニ河流ヲ。山脚道路、往還不レ通、溫泉之水、入ニ於衆流一、魚醉死スル者千萬數。其震動之聲經ニ歷ス三日ヲ。塵添壒囊鈔曰、豐後國速見郡溫泉アマタアリ。其中ニ一所ニ四ノ湯アリ。一ヲハ珠灘湯ト云、一ヲハ等峙トジ湯ト云、一ヲハ齊賦ムヒ湯ト云、其湯ノ釜ノ東西ニ自然ノ氷アル室アリ

○豐後日田溫湯

豐後國風土記 集註

豐後國風土記曰、日田郡、五馬山、飛鳥淨御原宮御宇天皇天武御世、戊寅年、大有ニ地震ハ山岡裂崩、此山一峽崩落、溫泉處々出。湯氣熾熱、炊レ飯早熟。但一處之湯、其穴似レ井、口徑丈餘、無レ知ニ淺深一。水色如レ紺常不レ流。聞ニ人之聲一驚慍騰沸、一丈餘許。今謂ニ溫湯一是也

○豐後溫湯井

豐後國風土記 集註

豐後國風土記曰、速見郡、玖倍理湯井。此湯井在ニ郡西河直山東岸一。口徑丈餘、湯色黑。泥常不レ流、人竊到ニ井邊一、發レ聲大言、驚鳴沸騰、二丈餘許。其氣熾熱、不レ可ニ向邇一。緣邊艸木、悉皆枯萎。因曰ニ溫湯井一。俗語曰ニ玖倍理湯井一

○豐後救覃峰二湯河

豐後國風土記 集註

豐後國風土記曰、救覃峯、有ニ二湯河一、流會ニ神河一

○肥前杵島湯泉

肥前國風土記 集註

肥前國風土記曰、杵島郡。郡西有ニ湯泉出之巖一。岸峻極人跡罕及也

○肥前藤津湯泉

肥前國風土記 集註

肥前國風土記曰、藤津郡。鹽田川。東邊有ニ湯泉一、能愈ニ

三代實録巻第十四。貞觀九年二月廿六日

入病

○肥前峰湯泉 肥前國風土記

集註 肥前國風土記曰、高來郡。峯湯泉在郡南。此湯泉之源、出郡南高來峯西南峯、流於東、流之勢甚多、熱、異於餘湯。但和冷水、乃得沐浴、甚味酸云云

○肥後溫泉 倭名類聚鈔

集註 倭名鈔曰、肥後國山鹿郡溫泉

○筑前吹田溫泉 萬葉集

一名 つくしすいたのゆ 髓腦抄

集註 萬葉集巻第六曰 帥大伴卿宿吹田溫泉、聞鶴喧作歌一首。湯ノ原爾、鳴蘆多頭者、如吾、味爾戀哉、時不定鳴。俊頼髓腦抄曰、春はもへ秋はこがるゝかまどやまよみ人しれず霞もきりもけぶりとぞみゆるもとすけ是はつくしのすいたのゆといふ所にて、ゆやのはしらに、たれとはなくて書付たりけるをきゝて、もとすけが付たりける。かのすいたのゆは、かまど山のあらはにみゆるなり。藻塩草曰、竈戸山、ちくぜん

赤湯泉 豐後國風土記

漢名 朱砂泉 煮泉小品曰、新安黄山朱砂泉可食

今名 チノフチ

集註 三代實録曰、豐後國速見郡鶴見山嶺、山頂有三池云云。一池赤。豐後國風土記曰、速見郡。赤湯泉。此湯泉之穴、在郡西北竈門山。其周廻十五許丈、湯色赤而有埿、用足塗屋柱。泥流出外、變爲清水、指東下流。因曰赤湯泉

迴衍カ

綱目流布本ハ地ヲ池ニ作

岐乃宇都保乃美都（キノウツホノミツ） 和名傳抄 漢名 半天河水 本草

陸深玉堂漫筆曰、扁鵲傳飲以上地之水、上地水竹木上未到地水。物理小識曰、扁鵲飲上地卽半天河水也。今綱目必以樹臼中水當之乎。本草綱目、半天河、釋名曰、上地水。弘景曰、此竹籬頭水、及空樹穴中水也

一名 木乃宇豆保乃見豆 倭名類聚鈔曰、半天河。和名、木乃宇豆保乃見豆 木乃宇豆保乃美豆 天文寫本和名抄○本草和名曰、半天河、陶景注云、此竹籬頭水也。和名、岐乃宇都保乃美都 うつほ水 言塵集曰、うつほ水とは、半天河と書 タケノ頭水 本草類編曰、半天河和タケノ頭水 ふるえにたまるあま水 袖中抄曰、神さびてふるえにたゝるあま水のみくさゐるまでいもをみぬかな。ふるえの水と申人も有。ふるえにたまるあま水といへば、雨などのふり入てたまる水にこそ。あま水の心にてもありぬべし

集註 顯百首曰、小壺の木のかぶにたまりたる水と申は、その木なしの木、竹のきりかぶなどにたまる水なり。顯昭抄曰、瀕湖藥、半天河水ヲ取テ煎テ服ス。復ノウツボノ水ナリ

セゝナギ 壓添壒囊鈔 漢名 死水 詹曝雜記

緣ハ綠
自ハ白ノ誤カ

齋曝雜記曰、凡內地諸水不ニ通流一者謂ニ之ヲ死水ト一。久則色變且臭穢ニシテ不レ可レ食。爾雅曰、汧出不レ流。註水泉潛出便自停成ニ汚池一○埤雅鈔曰、不淨ナル水ヲセ、ナギト云ハ何ノ字ゾ。又ハ汚言歟。セ、ナギトハ誤リ也。セ、ラギト云ベシ。溷ト書又潺湲共書也。ヤリ水ノ事ト云ヘリ云云潺或ハ小川ノ事ナルベシ、強チ不淨ノ水ヲシモ云ベカラズ。常ニ不淨ノ水ナンドノ流レタラヌ所ヲ云モ、小水ノ心ナルベシ。不淨ノ義ニハ非ズ。太平記ニモセ、ラギ水ニ馬ノ足冷シテト書ケリ。只小河也
○延喜式第四十一曰、彈正臺云云又嚴ニ禁ジ通ヲ通レ水ヲ勿レ露ニ汚穢ヲ

苦水 筑紫風土記 漢名 毒泉 廣東新語

廣東新語曰、毒泉長樂有兩毒泉、其一在曾洞嶂下、一在黃麖嶺、有軍士誤飲而死、曲江濛濛驛對岸亦有毒泉、沾足潰爛泉所注田數十頃、食其田穀者一二年輒死號囊毒田。廣東名勝志曰、永安縣南嶺其下ッ爲ニ高洋水一、一名毒水、飲者多死○物理小識曰、凡烹苦泉、數沸澄之再烹、則味甘卽水味苦ヲ云與レ此同名異物也

集註 釋日本紀曰、筑紫國風土記曰、肥後國閼宗ノ縣、縣ノ坤二十餘里ニ有ニ一ノ禿山一、曰ニ閼宗岳ト一。頂ニ有ニ靈沼一、石壁爲レ垣ト、清潭百尋、鋪ニ白緣ヲ一而爲レ質ト。彩浪五色、絙ニ黃金ヲ一以ヲ分レ間ノ。時時水滿ニ十八從レ南流レ入ニ自川一。衆魚醉ヒ死ス。土人號ケ曰ニ苦水ト一。風雅和歌集曰、高野の奧院へまゐる道に、玉川と云河の水上に毒蟲のおほかりければ、此流をのむまじきよしをしめしおきて、後よみ侍りける。弘法大師。忘れてもくみやしつらん旅人の高野のおくの玉川の水

黄色なる水 著聞集

僻湖樵書曰、水之黄者慣蒙。名山記云、朝鮮金井山有井、圓十五尺、深七尺許、有水常滿旱不竭、色黄金。一統志、天台縣西北有銅溪、其水色黄如銅色、故名。三才發秘曰、黄者土色、泉者土中之水也。丹鉛總錄曰、地下而黄曰千、韓詩考槃在千、注地下而黄曰千、江南江有吳千、平凉有隴千、樂府有長千、顏延之祭、屈原文曰、身絕郢闕跡偏湘千

集註 古今著聞集卷第八曰、建長五年の比 改葬せんとて 墓をほりたりけるにすべて物なし、猶ふかくほるに黄色(きいろ)なる水のあぶらのごとくにきらめきたるぞ涌出ける。汲ほせども干ざりけり。其油の水を五尺計ほりたるに云云

于之裒(ウシホ) 日本書紀

漢名 潮 今名 ウシホ

廣東通志曰、潮朝潮也汐夕潮也統謂之潮潮與月相應。名物攷曰、月水之精潮有大小月有虧盈。海南日抄曰、案白樂天云潮一月周流六十回、顧炎武曰、大月之潮一月五十八回小月則五十六回無六十回也。正字通曰、皇極經世云、海潮者地之喘息也所以應月者從其類也隨月消長早曰潮晚曰汐○日本書紀齊明天皇曰、彌騰度能、于之裒能阿娜利、于娜倶娜梨。釋日本紀曰、潮下也。高倉院嚴島御幸記曰、これにてみなうしほにてかみをあらひ身をきよむ。頓醫抄曰、潮ノ字ハ、ウシホトヨム也

一名 志保 萬葉集卷第十四曰、多由比我多、志保彌知和多流。源氏物語明石曰、月さし出て、しほのちかくみちけるあともあら

はに、名殘なをよせかへるなみあらきを

鹽　安東郡專當沙汰文曰、專當令入部ニテ在郡之時先窗濱ニ出テ鹽アブベキ也。源平盛衰記卷第四十二曰、塩干潟ニ付テ、山ノソハニ打ソウテ渡ラバ、鐙ノ浸ル程也。百騎モ二百騎モ鹽花蹴立テ押寄バ云云。古事記曰、鹽許袁呂許袁呂邇畫鳴而。出雲國風土記曰、鹽滿時深二尺五寸許、鹽乾時者已如陸地。萬葉集第十三曰、朝奈祇爾、滿來塩之、夕奈祇爾、依來波乃、彼ノ塩乃、伊夜益升二云云

四寶　萬葉集卷第一曰、四寶三都良武香

思保　萬葉集卷第十四曰、思保美都奈武賀。安治可麻能、可家能水奈刀爾、伊流思保乃云云

之哀　日本書紀武烈天皇曰、之哀世能、儺鳴理鳴彌黎㬰、阿蘇珉倶爾、思珉我簸多泥爾云云

海水　伊勢國風土記曰、吹ニ海水ニ乘ニ波浪ー云云。延喜式祥瑞曰、海水不レ揚レ波。釋日本紀曰、海水

之保　萬葉集卷第十五曰、之保美都良武賀。伎欲吉奈藝佐乎、之保美豆婆云云。同第十八曰、奈呉能宇美爾、之保能波夜悲波、安佐里之爾云云、於伎敝欲里、美知久流之保能、伊也麻之爾。同第十七曰、美知久流之保能

海鹽　古事記曰、謂ニ其菟ー云云浴ニ此海鹽ニ當ニ風吹ー伏ニ高山ノ尾上ニ云云其鹽隨ノ乾其身皮悉風見ニ吹拆ー。又曰、入ニ其海鹽ニ而那豆美

得鹽　出雲國風土記曰、大原郡海潮郷。古老傳云、宇能治比古命、恨ニ御祖須我禰命ー而、北方出雲海潮押上、漂ニ御祖之神ー。此海潮至。故云ニ得鹽ー。神龜三年改ニ字海潮ー

志保彌豆　新撰字鏡曰、潮達驕反、平淖也。志保彌豆

潮水　續日本紀卷第十九曰、天平勝寶五年九月壬寅、攝津國御津村南風大吹、潮水暴溢、壞ニ損廬舍一百十餘區ー、漂ニ沒百姓五百六十餘人ー。三代實錄卷第十六曰、貞觀十一年七月十四日、肥後國大風雨、潮水漲溢、漂ニ沒六郡ー

安佐之保

萬葉集卷第二十日、保理江欲利、安佐之保美知爾、與流許都美（木屑）

由布思保

萬葉集第二十日、由布思保爾、可知比伎乎里

由布之保

萬葉集第二十日、由布之保爾、佐乎佐之久太理云云由布之保爾 船乎宇氣須惠○萬葉集第一日、潮左爲二、五十等見乃島邊、搒船荷云云。同卷第六日、明ノ方、潮干乃道乎云云。伊勢國風土記曰、桑名郡潮干神社五座爲ニ宮尾崎ニ

たかしほ

源氏物語曰、たかしほといふ物になん、とりあへず人そこなはるゝとはきけど。明月記曰、嘉祿三年八月十五日、大風高鹽○釋日本紀曰、可三以治ニ滄海原之潮之八百重ヲ也。言海水之深、如レ重ヲ八百ニ言其深也。榮花物語松のしづえ曰、うみのいろも、そらのみどりに見えまがひておかし。廣東新語曰、海色之碧與味之鹹苦、皆火之所爲也

集註

續日本紀第二曰、文武天皇大寶元年八月甲寅、播磨淡路紀伊三國言、大風潮漲、田園損傷。三代實錄卷第四曰、貞觀二年九月十五日壬戌、諸國濱レ海之地、潮水漲溢、人畜被レ害。同卷第二十八日、貞觀十八年三月九日丁亥、參議太宰權帥從三位在原朝臣行平起ニ請二一事一。其一事云云壹伎嶋又亦如レ之。其潮落潮來、不レ似ニ他處ニ。源氏物語明石曰、かぜいみじう吹、塩たかうみちて。權中納言定賴集曰、九月許まかるといふ所に、しほゆあみにおはしたりけるに。又曰、しほゆにおはして、あかつきに波のたてる。宇治拾遺物語曰、今はむかし、河原院は融の左大臣の家なり。みちのくのしほがまのかたをつくりて、うしほをくみよせて、しほをやかせなど、さまぐ\のおかしきことをつくしてすみ給。袖中抄曰、無名抄云 海のしほのみちひる事は、一日に一たびかならずの事也。時こそ月の出入にしたひてもかはれども、つるにみちひる事はあえてたゆる事なし。

ふかさノ下あさきアリ。畧セルカ
心ならずノ下流布本ハ「しほにむ」

高倉院嚴島御幸記曰、しほみちぬ、いでさせたまふべしとて、我も〳〵とふねどもいとなみたり之餘略更級日記曰、尾張の國なるみの浦を過るに、夕しほたゞみちにみちて、こよひやどらんも、ちうげんにしほみちきなばこゝをも過じと、あるかぎりはしりまどひすぎぬ。又曰、夕しほたゞみちにくるさまとりもあへず。筑紫道記曰、赤間關はやともののわたりにいたる。鹽のゆきかひ矢のごとくして、音に聞しにかはらず。又曰、それより姪の濱まで興屋おほく、所のさまもさびしげなるを過て、汀におもしろき山有、浦山といへり。汐みつときは山をめぐりて嶋のごとし。折ふし引しほあらくて、かへる浪もいそがしくみゆ。海道記曰、濱膠には決れるうしほ消〔○消ノ誤〕焉とたまりて數條の沛礙々たり。又曰、橋の下にさしのぼるうしほは、かへらぬ水をかへし、上ざまにながれ。俊頼髓腦抄曰、みちくるしほにそでをぬらし。平家物語第二曰、やしろはわたつみのほとりなれば、しほのみちひに月ぞすむ。しほみちくれば大鳥井あけのたまがきるりのごとし。しほひきぬればなつの夜なれども、御まへのしらすに霜ぞをく。同第七曰、折ふししほみちて、ふかさをしらざりければ。同第八曰、月をひたせるうしほの、ふかきうれへにしづみ。同第十一曰、けあぐるしほの、かすみとゝもに一ぐらふたる中より、白はたさつとさしあげたれば、平家はうんつきて、大勢とこそ見てけれ。又曰、門司、あかま、だんのうらは、たぎりておつるしほなれば、平家のふねは心ならず、しほにむかつてぞ出來る。おきはしほのはやければ。太神宮參詣記曰、まぢかく汐のみちひのときのさまにかはるを見ては。又曰、河のうき洲は、みちくるしほにかくれ。撰集抄第一曰、尾張のなるみ方にも付侍りぬ。墟干のひまをうかがひて、熱田の社に參られ侍り。同第四曰、安藝嚴島云云南北へ三十三間、東西へ廿

かつておしおと。さるの源氏お船はかのづほらしうに追出てぞできたる。おきは云ゞートアリ

五間の廻廊侍。しほのみつ時は、彼廻廊の板敷の下まで海になる。塩の引時は、白すなご五十町ばかりなり。しかあれば塩のさしたる時まいれば、船にて廻廊まで參るなり。同第七日、治承のころ、常陸國かしまの明神に參り侍れば、御社は南むかひに侍り。前は海、うしろは山にて、やしろいらかをならべ、廻廊軒をきしれり。塩だにさせば、御前の打板まで海になり、塩だにも引ば、まなごにて二三里に及べり云云抑も塩のみつ時は、おほくのうろくづ波にしたがつて御てんまで寄、しほの引ときは、はるかに歸れば。吾妻鏡卷第一曰、建久二年正月廿八日云云令レ浴レ潮給。同卷第三十五曰、寛元二年正月十七日、將軍家二所御精進始也。爲三令レ浴レ潮給一。出二由比浦一御。同卷第四十八曰、正嘉二年二月廿五日、將軍家二所御精進始爲二浴レ潮御一、申刻御濱出云云。廿八日、將軍家、御濱出。中御塩。同卷第四十九曰、文應元年十一月十九日、來廿一日、爲レ令レ浴二精進潮一。御濱出事云云。廿二日、將軍家被レ始三二所參詣御精進一。仍爲レ令レ浴レ潮。有三御二出由比浦一之間云云。廿四日、將軍家中、潮、御濱出。同卷第五十一曰、弘長三年四月廿一日、將軍家二所御精進始御濱出。爲二浴レ潮御一也。廿三日、御濱出如二一昨一。是中御潮也。東國紀行曰、しほみちくれば

【形狀】

四條流庖丁書曰、ウシホニ(潮煮)ノ事、ウシホヲ能コスベシ。浦ニテウシホヲ汲テ、鯛ヲ煮テ參ラセシヨリ始ル也。然間ウシホニノ口傳ニハ、ウシホヲ汲テ先センジテ、サテ魚ヲ入、酒シホ入テ參ラスル也。イツモノ如カツホ入ベシ。今ノ代ニモ自然浦ニテ人御所望ノヿ有ランニハ、如此シテ參ラスベシ。今人々鯉ヲウシホ煮ニメナド被申事、如何ナル事ニヤト不審ナルヿ也。雖然塩海ノホトリニテ、浪ノ音近ク聞ナシタラン所ニテ、鯉ヲ切バ、鯛ヲロシノ鯉ヲ可切、又河浪近キ所ニテ、鯛ヲ切事アラバ、鯉ヲロシノ鯛

ヲ可切ナド、コソ、古人モ申置レタルニ、料理ニ至テ鯉ヲウシホニスベキヿ如何。精進魚類物語曰、鯛の赤介は云云うしをにといふ物にぞなられける

海水變レ色

集註　續日本紀卷第十曰、天平三年六月庚寅、紀伊國阿氏郡海水變如ニ血色一。經ニ五日一乃復。吾妻鏡第十二曰、建保四年三月七日庚申、海水變レ色、赤如レ浸レ紅云云。同第三十八日寛元五年三月十一日、由比濱潮變レ色、赤而如レ血。諸人群集見レ之。同第四十一日、建長四年正月廿七日、未尅海濱波濤色如レ紅。就レ中、自ニ由比浦一至ニ和賀江嶋一如レ此。諸人怪レ焉。二月廿八日、申尅、自ニ腰越海上一至ニ和賀江津一。而海之水如レ血。廣三丈許。及レ晩消滅畢。明月記曰、嘉祿元年三月四日、廣田前海水變血色。日來開雜人說、事已實伯朝臣申上云云汲取入桶之后變黃、如紅汁云云。天福二年九月二日、海水至淀河一筋融而爲黑血色、其中魚斃死。食魚者皆死。仍近日不可食鮮魚云々

池水變レ色

漢名　泣血　博物志

博物志曰、江河水赤名曰泣血。集異志曰、晉武帝大康五年四月、魯國池水變赤如血。江陰縣志曰、陳大建四年、江水赤如血、禎明中、江水赤自方州東至海。寄園寄所寄曰、萬曆四十六年四月、禮部奏、城河水赤西自宣

成臭ハ成自死カ

原本鬱

武門外東向閘起至正陽門外御河閘止約長三里許、水色盡赤深紅紫暗狀如積敗之血。四十七年四月中、正陽門外御河水復殷赤如前

【集註】續日本紀卷第三十六曰、天應元年七月丙子、河內國言、尺度ノ池水、以二今月十八日一自レ巳至レ酉、變成二血色一。其臭甚穢。長可二二町餘一、廣可二三丈一。文德實錄卷第八曰、齊衡三年十一月丁巳、御池水色變レ黑、數日乃復。三代實錄卷第二十七曰、貞觀十七年六月壬子朔、相摸國言、大住郡河水變レ赤。廿一日壬申、相摸國言、大住郡河水二處變レ赤。同卷第三十四曰、元慶二年九月七日、有二大鳥一、集二肥後國八代郡倉ノ上一。又宇土郡正六位上蒲智比咩神前河水變レ赤如レ血。緣邊山野草木凋枯、宛如二嚴冬一。扶桑略記第四曰、皇極天皇三年、又池河魚鼈成臭爛、池水皆變爲レ血太甚。吾妻鏡第三十九曰、寶治二年六月九日、相摸河水其流如レ血、觀者恠レ之。試浸二白布一移二其色一、殆如二紅梅一云云。十一日、相摸河、流猶赤而似レ紅。十六日、相摸河水赤色漸薄云云。同第四十曰、建長二年三月廿日、去月四日、依レ爲二太神宮祈年祭例日一、相州被レ奉二幣物一。東條次郎大夫爲二御使一參宮之處、彼御裳濯河水色如レ紅、經二一日一夜一歸二本流一

五色水

【漢名】五香水 格致鏡原　【一名】五しきのみつ 春宮

格致鏡原曰、高僧傳云、四月八日以五香水灌佛頂、都梁香爲青色水、鬱金香爲赤色水、邱隆香爲白色水、附子香爲黃色水、安息香爲黑色水

とす下文に金とすここは誤か

年中行事曰、四月八日御くわん佛の事。云云御ちやうのまにあたりて、山がたをたてたり。そのひだりみぎに、をの〳〵つくゑ貳ざやくをたて丶、五しき(色)のみづのはち(鉢)、ひさご、かうけ(香花)、はなばこ(筥)をゝく。群芳譜曰、歲時記四月八日爲佛誕辰、諸寺院有浴佛會、僧尼競以小盆貯銅像浸、以糖水覆、以花棚鐃鼓交迎徧往邸第富室、以小杓澆灌佛身、以求施利。周昭王二十四年甲寅四月初八日、中天竺國淨飯王妃摩耶氏生太子悉達多。三十五歲於菩提場中成無上道、號曰佛世尊。以周穆王五十二年二月十五日於拘尸那城、娑羅雙樹間入涅槃。法周之四月、夏之二月。芥子園画傳曰、釋迦牟尼佛周昭王二十四年四月八日佛誕生時放大智光明、照十方世界、地湧蓮華、雙足趺坐分兩手指天地作獅子吼。至穆王三年年三十矣道成度世、既而於鹿野苑中論道。又四十九載後、以清淨法付弟子摩訶迦葉、說偈云、法本法無法無法法亦法、今付無法時法法何曾法。遂去那城婆羅雙樹下。泊然宴寂時穆王五十二年二月十五日也（按恐誤）○正字通曰世傳漢明帝永平十年佛法始入中國非也。秦時沙門室利房等至。始皇以爲異、因之夜有金人破戶以出。武帝時霍去病過馬支山得休屠王祭天金人以歸。帝置之甘泉宮。金人者浮屠所祠、今佛象即其遺法也。哀帝時博士弟子秦景使伊存口授浮屠經。中土未之信。迨明帝夜夢金人飛行殿庭。以問于朝。傳毅以佛對曰、天竺國有佛即神也。帝遣郎中蔡愔及秦景使天竺求之、得佛經四十二章釋迦立像併與沙門攝摩騰竺法蘭東還。以是考之秦西漢知有佛久矣。非自明帝始也

【集註】江家次第第六曰、四月八日御灌佛事。當日早旦御浴殿藏人奉仕御裝束、令所衆等垂据御簾、撤晝御座、返燈樓綱、圖書寮立灌佛臺二脚於東廂南第四間、北南北立黑漆机

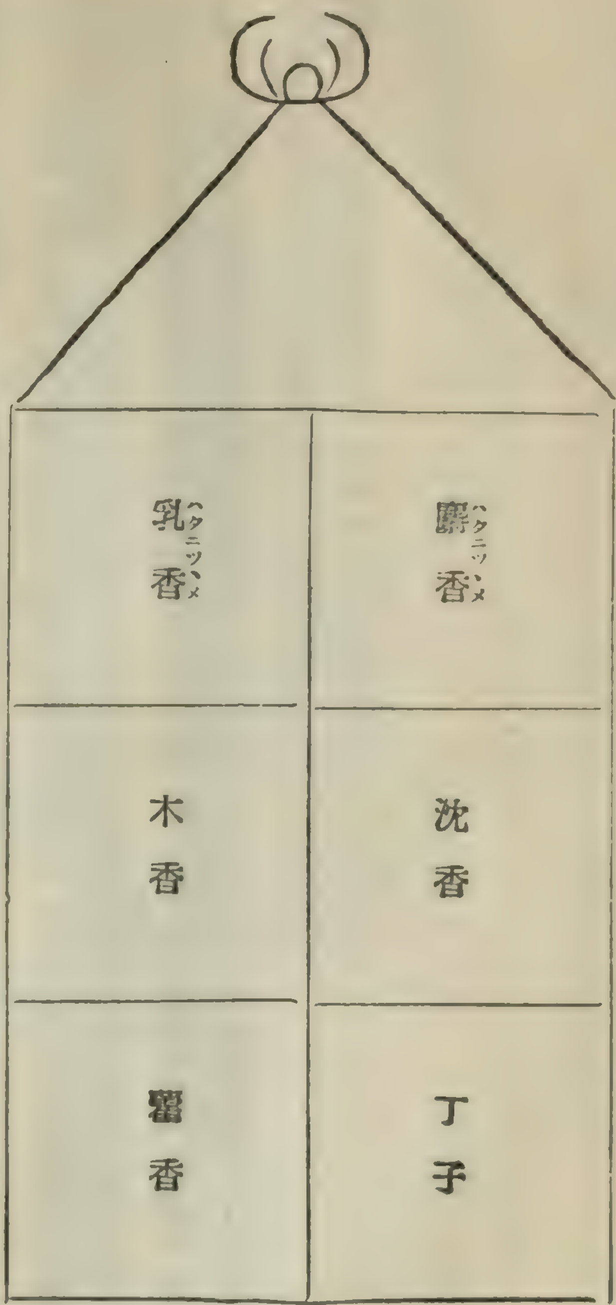
各二脚ヲ。東西妻ニ雙立レ之、南ノ二脚ハ在ニ第三間之中ニ、南一脚ニ置ニ華筥五枚ヲ。入時華 北一脚置ニ垂纓二口ヲ、盛ル時ノ華ヲ、重玉記、有ニ火蛇ニ在ニ中間ニ、散華ノ時ハ無ノ覆、北二脚在ニ第五間之中ニ、南ノ一脚ニ置ニ五色ノ水鉢五口ヲ。大鉢ハ有中央爲ニ御料ニ、白銅也。自餘ハ銀鉢、並ニ有レ輪。北ノ一脚置ニ金銅ノ酌二柄ヲ、御料入給料在南 黒漆酌二柄在北 高僧傳云、四月八日浴レ佛以ニ都梁香ヲ爲ニ青色水ニ、鬱金香ヲ爲ニ赤色水ニ、丘隆香ヲ爲ニ白色水ニ、附子香ヲ爲ニ黄色水ニ、安息香ヲ爲ニ黒色水ニ、以灌ニ佛頂ニ。隔書式ニ、金色ノ釋迦一體ヲ備フ金銅ノ盤一枚ニ。重玉記、青龍山北 赤龍山南 佛在ニ中間ニ、山形二基、一云青龍金銅多羅一口受レ水料。都記曰、永保元年四月八日、依爲太神祭使立日無御灌佛云云但四条宮被行興、仍今所布施一襲了云云申刻參四条宮東南 堀川院 云云次洗用、次起座取金杓各酌四、鉢水入合中鉢、且灌佛且有誦、次撤酌着座、予取笏起座入自此間、指笏膝行取黒漆杓、巽角水汲之如元置之 ○廣東名勝志曰、有百花洲周廻數百歩 相傳洲東有五色水、絢爛如錦、謂之錦江、同名異物也

【附録】 五香散 頓醫抄曰、五香散、無病小兒用之、無瘡 無病南木香丁子去花 沈香乳香別碎 藿香各等分

但シ五香煎ト云、此五ヲ生絹ノ袋面々縫阻入麝香ヲ少シ加合也。

本道人ノ秘事、仍岡本書說ニハアラザレトモ鬮ヲ作テシルスベシ

三群本二ニ作ル



如斯合可然人ニハ可進

喫茶養生記曰、服ニ五香煎ニ法。一者、青木香一兩。二者、沈香一分。三者、丁子二分。四者、薫陸香一分。五者、麝香少。右五種各別末後和合。毎服一錢沸湯和ノ服ス。五香和合之志為レ令レ治ニ心ノ藏ヲ也。萬病ハ起ニ於心ヨリ故也。五種皆其性苦辛。是ノ故ニ心ノ藏妙藥也。榮西昔在唐ノ時、從ニ天台山ニ到ニ明州ニ、時六月十日也。天極熱ノ、人皆氣絶ス。于レ時店主丁子一升ニ水一升半許リ、久ク煎メ二合許リ、與ニテ榮西ニ令レ服レ之。而言ク、法師遠涉

レ路來レリ、汗多流ル、恐クハ發レ病ヲ歟。仍令レ服レ之也云云。其後身涼清潔、心地彌快矣。
以知大熱之時ハ涼ノ、大寒之時ハ能溫也。此ノ五種隨一ニスラ有ニ此德一、不レ可レ不レ知ハアル矣

古名錄水部卷四　終

古名錄鹵石部卷第五目錄

鹵石類

通計十八種

古名錄鹵石部卷第五

紀藩　源　伴存撰

從ヘ正ノ誤カ
相ノ下「魂」ノ字アルベシ

鹵石類

華夷珍玩考曰、天生曰ㇾ鹵、人生曰ㇾ塩、鹵名不ㇾ生ㇾ物曰ㇾ鹵、故沙鹵謂ニ之确薄之地一、今亦通稱ニ斥鹵一也。物理小識曰、水之花鹽硝是也。說文曰、鹵鹽也、東方謂ニ之斥一、西方謂ニ之鹵一、鹻鹹也。河內謂ニ之鹻一。正字通曰、六書故曰、潤下作鹹〇三代實錄卷第十四曰、貞觀九年冬十月十日乙亥、右大臣從二位藤原ノ朝臣良相ニ賜ニ正一位ヲ一云　云嘗仁明天皇前ニ煉ノ五石一試ニ觀ニ近侍一。先嘗ナメテ欲ㇾ知ニ精粗ヲ一。黃門數輩、譏ス無ㇾ下飲ニ服之ヲ一者上。大臣引ㇾ坏ヲ一擧ノ而盡ス。帝感ス藥劑之間君臣不ㇾ忘ㇾ義ヲ焉

多宇佐（タウサ）　本草類編

［漢名］　礬石　本草　［今名］　メウバン

物理小識曰、硫礬等物皆陽气常行、遇水而結者也

［一名］　白礬石　續日本紀　悶石　倭名類聚鈔曰、礬石、此間云悶石　須支太宇佐　本草

陶砂　類編

類聚雜要鈔曰、五尺屛風十二帖。繪雜事云云。陶砂二分。按ニ新猿樂記ニ唐物陶砂ト云、漢渡ノ礬石也。永仁御即位記曰、陶砂十兩、代五十疋

［集註］　續日本紀卷第

一曰、文武天皇二年六月丙申、近江國獻ニ白礬石一。同卷第六曰、元明天皇和銅六年五月癸酉、令レ獻ニ相摸白礬石一。飛驒、若狹並礬石。讃岐白礬石。延喜式卷第六曰、齋院司人給料、礬石十五兩二分二銖。同卷第十五曰、內藏寮、中宮御服料。白礬石小九斤四兩。同卷第三十七曰、典藥寮　諸國進年料雜藥。飛驒國、白礬石二斗一升。長門國、白礬石三斤。本草和名曰、礬石出飛驒國。本草類編曰、礬石、和、須支太字佐。日本飛驒肥後阿蘇神社无時取之。一本康賴本草曰、唐又出長門美牟郡也

形狀　福田方曰、礬石瓦器ニ入テ、炭ノ火上ニ坐テ猛燒クベシ。沸上テ沸シヅマリ白クナル时取下テ冷テ研テ使ヘ。又生シテ使フ者不此例。日本物ハ下品者也、不可用也〇本草辨疑曰、明礬二種アリ、南京ト云ハ色薄黑ク濁リ、透明礬ト云フハ色白クスキトヲルナリ

黃礬石　續日本紀

漢名　黃礬　本草

今名　キメウバン

集註　續日本紀卷第六曰、元明天皇和銅六年五月癸酉、令献相摸、黃礬石。出雲黃礬石。延喜式卷第三十七曰、典藥寮、諸國進年料雜藥、伊豆國、黃礬石二斤一兩。若狹國、黃礬石一斗

青礬石　續日本紀

漢名　綠礬　本草

今名　ロウハ

本草綱目曰、綠礬狀ヲ如ニ焰消一、其中揀出深青瑩淨者即爲ニ青礬一

集註　續日本紀卷第六曰、元明天皇和銅六年五月癸酉、令レ獻ニ美濃、青礬石一。延喜式卷第三十七曰、典藥寮、諸國進年料雜藥、

美濃國、青礬石九斗

朴消 和漢通名

【集註】 本草綱目曰、煎錬ノ入レ盆ニ、凝結在レ下ニ粗朴ナ者爲ニ朴消ト。在レ上ニ有レ芒者爲ニ芒消ト。續日本後紀巻第九曰、承和七年二月庚申、令ニ太宰府停ニ止例進朴消ト。本草和名曰、朴消、出若狹備中國。本草類編曰、朴消日本若狹国備中國 鹹水之湯无時採之。醫心方曰、朴消出信濃若狹備中國。延喜式巻第二十三曰、民部下、交易雜物備中國朴消一百斤。同巻第三十七曰、典藥寮、諸國進年料雜藥、備中國朴消大三斗、備後國朴消大三斗、讃岐國朴消八斤

【一名】 〇芒消 和漢通名

硭硝 新撰字鏡曰、硝硭硝也

【集註】 本草和名曰、芒消出太宰。本草類編曰、芒消、无時採之。出太宰府

焇硝 類聚抄

【漢名】 消石 本草

【今名】 エンセウ

【集註】 本草類編曰、消石、日本讃岐國、无時採之。一本廣韻智燈雜字作ニ燄硝ト。本草綱目作ニ焰消ト。廣博物志曰、劉安作焇硝白蠟本草曰、消石、出太宰府。本草和名曰、消石、出讃岐國

硇砂

本草字典曰、硇玉篇女交切。集韻、尼交切、竝音鐃

蠻名　サルアルモニヤトカ

西域聞見錄曰、庫車云云出硇砂之山在城北、山多石洞春夏秋洞中皆火、夜望如萬點燈光、人不可近。多日極寒時、大雪火息。土人往取砂、赤身而入、砂產洞中如鐘乳形。故爲難得也

藥製　頓醫抄曰、硇砂細ニスリフルヒテ、酒半杯入合テ、ユルキ火ニスエテ、スハ〱ト子ルベシ

形狀　○本草啓蒙曰、硇砂、漢渡アリ、藥肆ニテモウシヤト云。又ドウシヤト云。シホカブラノ如ニシテ淡白色、微ク櫻紋アリ

之保（シホ）

本草類編

漢名　鹽　本草

今名　シホ

山西名勝志曰、呂忱云、宿沙氏煑海謂之鹽、以其滋潤生人。按宿沙、一云夙沙、乃炎帝魁之諸侯、煑海爲鹽富溢於他國。華夷珍玩考曰、黃帝臣夙沙初作煑海塩。古者不煉治之塩曰苦塩、祭祀煉治者曰散塩。名物攷曰、周禮註、鹽之所產不一、有刮地而得者爲苦鹽、有煑海而成者爲散鹽。靜士居詩話曰、會稽亭戶煎鹽法、以海潮水沃沙暴日中、日將夕刮鹵聚而苫之明日又沃而暴之如是五六日乃淋鹵取滷然後試以蓮子每用竹筒一枚長二寸取老硬石蓮五枚納滷筒中　二三蓮浮或俱不浮則滷薄不堪用謂之退滷蓮子取其浮而直者二蓮浮則滷將成四五蓮浮則滷成可用謂之足蓮滷或謂之頭滷然石蓮試以滷取最後升者爲足

蓮足蓮乃可驗滷有無足者必借人已驗蓮滷較蓮之輕重爲之然後爲篠編竹爲槃縮中爲百耳以篾懸之塗以石灰纔足受滷燃烈燄中滷不漏而槃不焦灼一槃可煎二十過淋下滷水或以他水雜之但識其舊痕以飯甑蓋之於中抗去而水至舊處元滷盡在所去者皆它水或以甑篦隔之亦可以他物則不可分矣孔融論太鹹篦不能救鹽池之滷意蓋指此練化術云飲食過鹹以飯篦竹數條炙之擲其中則汁便淡蓋未易以理推也

一名

燒鹽 續日本紀巻第十一曰、聖武天皇天平四年八月八日壬辰、勅、又量ニ便宜ニ造シメヨ粗燒鹽一。同巻第七曰、元正天皇靈龜二年八月癸亥、備中國淺口郡犬養部隱手、昔配ニ飛鳥寺燒鹽戶一。誤入ニ賤例一、至レ是遂許免レ之。萬葉集巻第六曰、塩燒等、人曾左波爾有アル、浦乎吉ヨ美云云諸毛塩燒、蟻アリカ往來ヨヒ云云。伊勢國風土記曰、安濃郡建部鄉貢海鹽。安房國風土記曰、平群郡達良鄉、但食塩貢出、其半達良濱貢食塩白濱食塩獻官。陸奧國風土記曰、宮城郡鹽竈神社、圭田五十六束、所祭鹽土翁也。推古二年甲寅七月始奉圭田行神事或祭等有神家巫戶等、凡當社之境景日本双一之地也。松嶋隣塩竈浦爲左右之景地。凡朝吟暮嘯之作境不可越之○本草類編曰、大鹽、和之保、无吃探之。彰德名勝志曰、山泉多甘而海水鹹。蓋鹹者水歸本。按本草和名ニモ大鹽、和名之保ト見エタリ

也久之保 萬葉集巻第十五曰、之賀能安麻能、一日毛於知受、也久之保能、可良伎孤悲乎母、安禮波須流香母

夜久之保 萬葉集巻第十七曰、夜久之保能、可良吉戀乎母云云

熬イリ塩 延喜式巻第二十四曰、主計上、讃岐國阿野郡鹼熬イリ塩

之褒 日本書紀應神天皇曰、初枯野船ヲ爲ニ鹽薪ニ燒シ之日ニ、有ニ餘燼一、則奇ニ其不レ燼而獻之云云天皇歌之曰、訶羅怒烏、之褒珥椰枳、之餓阿摩離。釋日本紀曰、燒鹽也

志本 古事

記曰 玆舩破壞以燒レ鹽云云。加良怒袁、志本尒夜氣、斯賀阿麻理云云。職人盡歌合曰、しほうり〽あきなひの秋のあたひもたかしほのこよひぞ月の名をもうるなる。おもひそむるむねのやきてのしほけぶりなびきなびかずせめてとはゞや。本朝無題詩曰、賣塩子細土民傳注門前有賣塩之者戯問直洪子細答之

鹹塩　萬葉集卷第五曰、痛伎瘡。鹹塩遠、灌知布何其等久。倭名鈔國郡部曰、武藏國比企郡、醎瀬、加良世。新撰字鏡曰、鹹・加良志

濱鹽　三代實錄卷第二十七曰、貞觀十七年十二月十五日、庶人伴善男沒官墾田陸田、山林庄家稻、鹽濱鹽釜等在ニ諸國ニ皆充下造ニ京城道橋ニ料上

鹽汁　續日本紀卷第二十曰、孝謙天皇天平寶字元年秋七月庚戌、詔 庭中ニノ礼ニ拜シ天地四方ヲ、共ニ飲ニ鹽汁ー。戊午詔曰、六月二十九日ノ夜入ニ大政官坊ニ而、飲ニ鹽汁ニ而誓ヒ、禮ニ天地四方ー

辛塩　萬葉集卷第十六曰、小螺乎云云辛塩爾古胡登毛美、高杯爾盛云云

百味　沙石集卷第五曰、伊豆ノ山ニ中比學匠有ケリ。弟子モ下人モ他行ノ時鹽賣一人來テ、鹽ヤ召候トイフ。坊主誠ニ鹽ハ大切ノモノ也。熊野ノ道ニモ百味ト名テ、萬ノ物ノ氣味ハシホニコソアレトテ、買ハント云。一俵ガ直物ヲ問ニ、唯御計ヒ候テコソ召レ候ハメト云。上品ノ絹一匹ニウリテンヤトイヘバ、子細ニ及ビ候ハズトテ、悦テカヘテ去ヌ。弟子下人歸タルニ、アキナヒコソシタレ、シカジカトイフ。カバカリノ事候ハズ、鹽賣ニ狂惑セラレ給ヘリ。上品一匹ニテ者、鹽俵十バカリモ買ベク候ニト云時、サテハ安カラヌ事ナリトテ、カシタヲカク所ニ云云

白塩　神鳳抄曰、伊勢國一志郡。白塩一石二斗。錄外書曰、春初御消息、御送物ノ日記云云白塩一俵

おいたみ　伊勢守貞陸記曰、しほ、おいたみ、しろ物とも。厨要

徒然壒囊抄モ塵添本モ冷然ニ作ル

端ノ上

類記曰、供寒汁之時云云板目塩都呂ト預橘葉等成于同器居加之。或說云、寒汁云云、ホワサビ、山ノイモヲロシテモルベシ。タチバナノ葉イルベシ云云

しろ物 見上。海人藻芥曰、塩ハシロモノ、如此異名ヲ被付

海塩 駿河國風土記曰、鳥渡郡産海塩食塩。廬河郡貢海塩。益頭郡山西貢海塩

食塩 駿河國風土記曰、鳥渡郡村松、食塩十七駄。但年別供内膳司。矢部渡貢海料食塩。玖乃浦料食塩四十五駄。羅織戸年別食塩卅駄。村松食塩十七駄。但年別供内膳司。此駄郡貢食塩。大津貢食塩。塵添壒囊鈔曰、塩字事。●徒然草ニ、シホト云字ハ何篇ゾト問、土篇ト答タルヲ、サバカリナル才覺トクダサレヌ。知ヌ土篇ニハ非ズト、正字如何是レイカヾ侍ルラム。常ニハ塩ノ字ヲ用ユ、是レ土篇也。作レ去正字ヲバ鹽ト書也。注云、弋占切、宿沙ヲ煑漁リテ爲也。ト入鹽ト書同字也。尓雅ニハ鹹トシ、ワハユシトヨメバ不レ燒潮事ニヤ

海鹽花 蕭集類抄〇倭名鈔、國郡部曰、下野國鹽屋、之保乃夜。和泉國大鳥郡鹽穴、之保之阿奈。伊勢國奄藝郡鹽屋、之保也。相摸國高座郡鹽田、之保多。安房國安房郡鹽海、之保美。近江國淺井郡鹽津、之保津。肥前國藤津郡鹽田、之保多

集註 日本書紀曰、應神天皇三十一年秋八月、詔以令ニ有司ニ、取ニ其船材ヲ爲レ薪而燒レ鹽。於是得ニ五百籠鹽ヲ。續日本紀卷第三曰、文武天皇慶雲四年夏四月丙申、賜ニ正六位下山田史御方布鍫鹽穀ヲ、優ニ學士ヲ也。同卷第五曰、元明天皇和銅五年二月戊午、詔賜ニ京畿高年鰥寡惸獨者、絁綿米塩ヲ各有レ差。同卷第六曰、和銅六年六月辛亥、右京人支半于刀、河內國志紀郡人刀母離余叡色奈、並染作暈繝ノ色ニ而獻レ之。勞各授ニ從八位下ヲ、並賜ニ絁十疋、絲四十絇、端、塩十籠、穀一百斛ヲ。同卷第九曰、神龜三年三月辛巳、舍人、兵衛等、皆

脫アルカ

名ノ下「鯤、魚名」脫カ

喚シテ御在所ニ、給鹽鍬ヲ各有數。同卷第十一曰、天平五年閏三月戊子、諸王飢乏セル者二百十三人召入於殿前ニ、各賜米鹽ヲ。同卷第十二曰、天平九年九月己亥、詔曰、因施兩京四畿ノ二監、僧正以下沙彌已上、惣二千三百七十六人綿幷鹽ヲ、各有差。同卷第十七曰、天平十九年二月丁卯、詔賜大臣已下諸司才長上已上稅布幷鹽各有差。同卷第廿六曰、稱德天皇天平神護元年六月庚午、左右京籾各一千石。大膳職塩一百石。糶ス於貧民ニ。同卷第三十曰、神護景雲三年冬十月乙卯、難波宮綿二万屯、鹽卅石ヲ、施入龍華寺ニ。同卷第三十七曰、桓武天皇延曆二年春正月辛巳、陰陽頭正五位下榮井宿禰蓑麻呂、今年始登八十。仍詔ノ賜絁布米塩ヲ。同卷第三十七曰、延曆二年秋七月庚子、太宰帥正二位藤原朝臣魚名贈正一位。詔別賜絁布米塩及ヒ役夫等ヲ。續日本後紀卷第十七曰、承和十四年五月丙戌授白丁膳臣立岡正七位上ヲ、立岡若狹國百姓也。代ノ窮民ニ輸ス塩五斛、糒米百五十二斛ヲ。准ニ稻四千六百八束ニ。文德實錄卷第五曰、仁壽三年三月丁巳、以穀倉院籾塩ヲ、給ス京師患ニ疱瘡ヲ者ニ。同卷第九曰、天安元年六月己丑、勅遣左右近衛各五六人ヲ、於西北深山ニ、錄ノ寺並修行者ヲ、各施供米塩各有差。同卷第十曰、天安二年夏五月己丑、出穀倉院穀二千斛、民部廩院ノ米五百斛　大膳職ノ塩廿五斛ヲ、賑給左右京苦霖之窮民ニ。三代實錄卷第四曰、淸和天皇貞觀二年五月十一日庚申、天皇及皇太夫人、以塩三十二斛云云ヲ施僧尼優婆塞優婆夷及隱居飢窮之輩二萬九千六百七十四人ニ。同卷第十四曰、貞觀九年二月十七日、承去年ノ之災旱ヲ、京邑飢儉ス。詔以米三百二十石、籾二千石、鹽三十五斛、新錢一百貫ヲ、賑恤ス東西京乏絕之人ニ。同卷第二十曰、貞觀十三年閏八月十一日甲寅、霖雨未止、東ノ京ノ居人遭水損者三十五家百三十六人。西京六百三十家三千九百九十五人、賜穀鹽ヲ、各有差。

娵入記ハよめむかへの事

齊衡三年十二月戊戌

同卷第三十九日、陽成天皇元慶五年夏四月廿八日乙巳、先レ是、去年四月八日、大膳史生矢田部ノ氏永奸私、作ニ諸司收文一、偸ニ取淡路ノ國塩代米五十斛餘一云云。同卷第四十九日、光孝天皇仁和二年六月七日乙卯、勅、唐僧湛誉供料、日云云テ鹽三合。賦役令曰、若輸ニ雜物一者、塩三斗、其調副物正丁一人、塩一升。軍防令曰、凡兵士人別備ニ塩二升一。常陸國風土記曰、乘濱里、所レ居百姓、火レ鹽爲レ業。行方郡板來村、其海燒レ鹽。云云塩囊抄曰、塩一皿煎（シホイリ）テスルベシ云云塩錢十錢。類聚國史曰、延暦二十一年六月丁酉、失火燒ニ左京ノ百姓ノ宅四十一烟一、賜ニ米鹽一各有レ差。扶桑略記廿三裡書曰、延喜十四年五月三日、失火宅、給ニ米塩一有レ差。同廿四裡書曰、延長八年云云稟ニ院米五石、大膳塩二斗一、被レ資ニ給病人一。源氏物語須磨曰、けぶりのいとちから時〻たちくるを、これやあまのしほやくならんとおぼしわたるは。延喜式卷第二十四曰、主計上、凡諸國輸庸。一丁鹽一斗五升。類聚雜要抄曰、母屋大饗饗膳塩。皇太神宮儀式帳曰、次取吉日山口神祭、用物塩二升。室町殿日記曰、塩五十俵、右差登せ申候、御請取可被成候。娵入記曰、しき三こんのとゝのへの事。しほもるやうは、すきなりに、たかさ一すんほどなり。

【形状】

文德實錄曰、齊衡三年、常陸國上言云云。初郡民有ニ煮レ海爲レ塩者一云云。參河國風土記曰、形原郡友尾里、無公穀假粟等、以海鹽煮而充日糧。袖中抄曰、奧義抄云、あまはしほやくとては、しほひのかたのすなごをとりて、すゝぎあつめて、そのしるをたれてやくなり

〇淡路塩 延喜式

【集註】 延喜式卷第三十九日、內膳司六月神今食料、淡路塩二升

〇紀伊鹽 延喜式

【集註】 延喜式卷第三十三日、大膳下、年料、索餅料、紀伊鹽二斛七斗。手束索餅料、紀伊鹽

是日ノ二字ハコヽニアルベキニアラズ

書紀廿五、大化五年三月

八斗九升。同手東索餅料云云紀伊鹽八斗八升五合。同卷第四十曰、造酒司九人ニ御酒料紀伊鹽三斛。令義解曰、假有人紀伊國盜塩、攝津事發、即販ニ紀伊、國中沽之鹽、准ニ紀伊國上布之沽、於ニ攝津國ニ斷決之類

○備前國鹽　延喜式　［集註］延喜式卷第三十四曰、木工寮、諸國所進雜物。鹽二十斛、六十四斛內、配ニ修理職ニ之遺。備前國

○佐渡國

鹽　日本記略　［集註］日本記略曰、延曆二十一年正月庚午、是日越後米一萬六百斛、佐渡國鹽一百二十斛、每年運ニ送出羽國雄勝城、爲ニ鎭兵粮

○岐拕志（キダシ）　日本書紀

［一名］木太師　倭名類聚鈔曰、今案俗呼ニ黑鹽ニ爲ニ堅鹽ニ。日本紀私記云、堅鹽、木太師是也。天工開物曰、凡鹽見水即化、見風即鹵、見火愈堅

岐多之　天文寫本和名抄、日本書紀曰、堅鹽、此云岐拕志

岐多斯　古事記曰、宇賀之稻目宿禰大臣之女、岐多斯比賣

堅鹽　日本書紀孝德天皇曰、皇太子妃蘇我造媛聞ニ父大臣爲塩所斬、傷心痛惋、惡聞ニ塩名、所以近ニ侍於造媛ニ者、忌稱ニ塩名、改曰ニ堅塩ニ。藻塩草曰、いよの海の岩木のしまは我なれやあふ事かたきしほのみぞやく

生道鹽　延喜式卷第二十四曰、主計上、尾張國調、生道鹽一斛六斗。同卷第三十三曰、大膳下、東寺中台五佛左方五菩薩右方五忿怒料、生道鹽日別五合七勺、頭書曰、生道塩讀云イクチ堅塩也。大如大豆元一顆搗得塩一斗許、生道尾張國郡中名也

固鹽　江家次第卷第六曰、四月幼主二孟旬云云次下物下器渡、四種、交飯、固塩、茹物、堅魚、干鯛。二孟旬儀次下物云云一枚炊交、一枚堅鹽、一坏薯蕷物。按ニ固鹽即堅鹽之證可觀

破鹽　延喜式卷第二十四曰、主計上、凡

中男一人輸作物、破鹽七升五合

石鹽 延喜式　**也支之保** 本草類編、江家次第十二日、群行内物忌九人云々 御鹽燒御忌父二人、子等三人、御鹽燒物忌子

やきおいた 伊勢守貞陸記曰、やきしほ、やきおいた○楊州名勝志曰、按鹽出于煎煉者謂之末鹽、即周官所謂散鹽也。若山西解州鹽池出者得南風水化而成謂之顆鹽、則周官所謂盬鹽也。宋食貨志引、池而成者曰顆鹽。本草綱目曰、大鹽即今ノ解池顆鹽也、廣輿記曰、陝西寧夏衛鹽池有大小二池、其鹽皆不假人力自然結成ト云、岐多之ハ燒製者ニメ自ラ別也

集註 續日本紀卷第十曰、聖武天皇神龜四年二月丙寅、詔曰、宜レ賜ニ京邑六位已下、至ニ庶人戸頭人ニ、鹽一顆、穀二斗ノ、同卷第三十日、寶龜元年三月癸未、外正八位下周防凡ノ直葦原、献ノ錢百万、鹽三千顆ヲ、授ニ外從五位上ニ。延喜式卷第三十三日、大膳下、諸節堅鹽一千五百顆。萬葉集卷第十七曰、寒之安禮婆、堅鹽乎、取都豆之呂比、糟湯酒、宇知須須呂比豆之云々

今案 延喜式卷第三十二日、大膳上、釋奠祭料。石鹽十顆。同卷第二十日、大學寮、凡釋奠堅鹽五顆。同卷第五十日、諸國釋奠式、凡盛物幾實石鹽五顆。觀此則石鹽堅鹽爲同物明也

○**藻**（モ）**塩**（シホ） 萬葉集　漢名 **蓬鹽** 天工開物　今名 **モシホ** 蒹葭珍玩考曰、鹽今淮浙最盛、海濱地曰ニ塩場ト、籍ヲ曰ニ竈戸ト、民ヲ曰ニ鹵丁ト、煮ルニ盤或ハ鐵或ハ竹、有リ沙泥ニ燒レ塩ヲ、有リ艸灰トノ燒ク塩所レ產甚廣シ。天工開物曰、海水順風飄來斷草、勾取煎煉名ニ蓬鹽ト○萬葉集卷第六曰、暮菜寸二、藻塩燒乍云々

集註 常陸國風土記曰、行方郡。郡西津濟、所レ謂行方之海。生ニ海松、及燒レ鹽之藻ト。源氏物語須磨曰、所は行平の中納言の・もしほたれつゝわびけ

る家ゐちかきわたりなりけり。同明石曰、しほやくけぶりは、かすかにたなびきて、とりあつめたる所のさまなり。「このたびはたちわかるともしほやくけぶりはおなじかたになびかん。との給へば「かきつめてあまのたくもの思ひにも今はかひなきから見だにせじ。平家物語第七曰、あまのたくもの夕けぶり。源平盛衰記第四十八曰、海士ノ燒藻ノ夕煙、物ヤ思ト燃焦(コガレ)云云浦路遙ニ藻鹽ノ煙ヲ見ル。撰集抄曰、もしほの煙の風になびくを守り。榮花物語見はてぬ夢曰、くまのゝみちに、御心ちなやましうおぼされけるに、あまのしほやくを御らんじて「たびのそらよはのけぶりとのぼりなばあまのもしほびたくかとやみん。との給はせける。六代勝事記曰、もしほのけぶり東になびき。太神宮參詣記曰、いそべによするもしほ草かきをくすさびばかりは云云。狹衣曰、今さらに日に二たび三たび、もしほ草かきつめつゝ。堀河院百首曰、藻塩草ほす隙もなき五月雨に燒てぞ海士の塩を垂らん

○阿和之保(アハシホ) 本草類編　漢名 鹽霜 天工開物　本草蘇頌曰、并州末鹽乃刮鹹煎煉者不甚佳、所謂鹵鹹是也。天工開物曰、候二潮一過一明日天晴半日、晒一出鹽霜一、疾趨掃起煎煉　集註 本草和名曰、鹵鹹。和名阿和之保。本草類編曰、无吃探之

○之保美川(シホミツ) 本草類編　漢名 鹵水 本草綱目　今名 ニガリ　本草綱目曰、凡鹽未レ經二滴去苦水一、則不レ堪レ食、苦水即鹵水也。鹵水之下澄鹽凝結如レ石者即鹵鹹也。本草謂鹵鹹、一名鹵鹽者、指二鹵水之鹽一、非二鹵地之鹽一也

○之保乃太末(シホノタマ) 本草類編　漢名 凝水石 本草　本草綱目曰、凝水

石。拆片ヲ投ニ水中ニ與レ水同レ色。生ニ於鹵地積鹽之下ニ精液滲ミ入土中ニ、年久ク至ニ泉結ニ而成レ石大塊、有ニ齒積ニ如ニ馬牙消ニ、清瑩如ニ水精ニ、亦有下帶ニ青黑色ニ者上、皆至ニ暑月ニ回潤、入レ水浸久ク亦化

一名 之保不久利 本草類編曰、之保乃太末、今者之保不久利。塩地下鑿取之

漢名 石硫黃 本草

今名 ユワウ

由乃阿加 本草和名

一名 由乃阿和 倭名類聚鈔曰、流黃、和名由乃阿和。俗云由王。新猿樂記曰、本朝物流黃、奇効良方ニ倭硫黃ト出タリ 由王 見上。延喜式卷第二十一曰、治部省、祥瑞、流黃出レ谷。土精也 由和宇 本草類編 由乃安和 同上 いわう 平家物語 湯黃 古老口實傳、頓醫抄曰、癩病ハ鴨燒ケハ黑藥可付、又漆可付、又湯黃苦参合テ可付也。塵添壒囊鈔曰、流黃或流礦ト書ク。流黃ヲユワウト云ハ俗語也。海東諸國記曰、伊豆州產硫黃、下野州有火井、產硫黃。筑前國有山距、海濱三里山頂有火井、日正照煙焰漲天水沸、而溢凝而爲硫黃。凡產硫黃嶋皆同。薩摩州產硫黃

集註 本草和名曰、石硫黃。和名由乃阿加。出大宰。本草類編曰、石硫黃、和由和宇。又云、由乃安和。日本所々有之。續日本紀卷第六曰、元明天皇和銅六年五月癸酉、令レ獻相摸石流黃、信濃石流黃、陸奧石流黃。肥前國風土記曰、高來郡。峯湯泉。有ニ流黃ニ云云。延喜式卷第十五曰、內藏寮。諸國供進。石硫黃、信濃國二百斤。下野國二百斤。同卷第三

十七日、典藥寮、諸國進年料雜藥。相摸國、石硫黃一斗。信濃國、石硫黃三斗八升。下野國、石硫黃二斗三升。同卷第四十八日、左馬寮、凡馬藥毎レ季硫黃一升六合。平家物語曰、しまの中には高き山有、とこしなへに火もえ、いわうといふ物みちみてり。かるがゆへにこそいわうがしまとは名づけたれ。又曰、此嶋には人のくひ物もたえてなき所なれば、身に力の有し程は、山にのぼッて硫黃といふ物を取、九國よりふあきんどにあひ、くひ物にかへなどせしかども、日にそひてよはり行ば、今はさやうのわざもせず。源平盛衰記卷第七曰、丹波少將ヲバ奧七嶋ガ内三ノ迫(トマリ)ノ北、硫黃カ島ニゾ捨タリケル云云眼ニ遮ル物ハ燃上ル火ノ色、耳ニ滿ル物ハ鳴下(ナリクダ)ル雷ノ音、肝心モ消許ナレバ、一日片時堪テ有ベキ心地モセズ云云昔ハ鬼ノ住ケレバ、鬼界ノ嶋トモ名付タリ。今モ硫黃ノ多ケレバ、硫黃ノ嶋トゾ申ケル。餘略之

石膽　〔今名〕タンパン

〔集註〕本草和名曰、石膽、出備中國。本草類編曰、石膽、日本備前國、二月庚子辛丑日取之

〔形狀〕○本草辨疑曰、膽礬今二種アリ、一種透明スルヲ者膽礬ト云、煎煉シタル者ナリ。一種ハ練サル者也。火ニ燒テ汁出ルト不出ルトアリ

古名錄鹵石部卷第五　終

古名錄火部卷第六目錄

火類

香切火（カギリビ）　陽燧　　介布利（ケフリ）　烟

暴火

通計二十五種

古名錄火部卷第六

紀藩　源　伴存撰

火類

比ヒ　倭名類聚鈔　〔漢名〕火　〔今名〕ヒ

蠡海集曰、五行惟火無定著、由木而見形、依土而附質、因金而顯性、遇水而作聲。物理小識曰、火本無形。藉物發光。或兩物相擊而出。或兩光相照而生。無處非火。但不見耳。如鐵擊石。竹擊木。舟擊水皆有火出。正字通曰、火之爲言化也。萬物變化也。時珍食物本草曰、姚可成曰、火乃有形無質、性烈而人畏焉。農政全書曰、火之爲災尤其暴者也。春秋左氏傳云、天火曰災、人火曰火。人之飲食非火不成、人之寢處非火不明、且火得木而生得、水而熄、至土而盡

〔一名〕**穗**ホ　日本書紀曰、火闌降此云二穗能須素里一。三代實錄卷第三十八曰、宣化天皇第二皇子火焰親王。狹衣曰、ほかげのにほひあひ行キヤウに似たるものなかりき。榮花物語鶴林曰、ほかげにみたてまつらせ給へば、くろつるばみの御こうちぎに、けざやかなる御いろのほどありさまなど、いとさゝやかにうつくしげにおはします。同殿上花見曰、でんじやう人て

亦一林一ノ四字ハ燧ノ訛カ

ごとにひをともして、御くるまにそひたるほかげども、やまがくれいとおかしうみゆ

コ 太平記三十二曰、佐野火作(コックリ)宇多。河澤。敷美以下宗徒ノ侍云云。江家次第第七曰、六月忌火御飯(インゴン)。六月、十一月、十二月一日、早旦供レ之、內膳司。忌火每レ至ニ神態一鑽レ火炊。亦一林一謂ニ之忌火一也。延喜式、忌火庭火祭、主於ニ內膳司一行レ事。天安元年四月內膳司忌火庭火神奉レ授ニ從五位上一

毛由流(モユル)肥(ヒ) 古事記曰、佐賀(相)牟能、袁怒(小野)迩、毛由流肥能、本那(火中)迦迩多(立)知氏云云

本 見上註

肥 古事記曰、墨江中王、火著ニ大殿一云云。望ニ見難波宮一其火猶炳(サヤカナリ)。尒天皇亦歌曰云云。迦藝漏肥能、毛由流伊斃牟良云云。萬葉集第九曰、入水(ミヅニイリ)、火爾毛將入跡(イラムト)、立向(チヒ)。續日本紀三十六曰、放レ火而燒焉

番 古事記曰、日子番(ホ)能迩迩藝命。日本書紀曰、天津彥火瓊瓊杵尊

嚴香來雷(イツノカクツチ) 日本書紀曰、又火名ヲハ、爲ニ嚴香來雷(イツノカクツチ)一

大たい松 平家物語曰、御さらし、れいの大たい松はいかに、との給けり。土肥の次郎、さる事候とて、小野原のざいけに火をぞかけたりける。是をはじめて、野にも山にも、草にも木にも火をかけたれば、ひるにはちつともおとらずして、三里の山をそこへ行ける

世叓ノ火 左記曰、以ニ世叓ノ火一用ニル燈明燒香等ニ叓甚以可レ禁處也。尤以ニ新(アタラシキ)火(ヒ)ヲ可レ供ニ本尊ニ。唐ノ和尚道場ノ張文(ハリフミ)四十五ヶ条ノ隨一也。但シ自ラ承仕自行之時、若臨レ期ニ新火爲ニ難レ得(タラハ)者ニ、秉(トツテ)ニ世叓ノ火ニ加ニ持シテ之ヲ可レ用也

[集註] 扶桑略記二十八曰、長元五年十二月八日、九條ノ御厩有レ火、餘焰延(ヒイテ)及ニ于法住寺ニ、爲ニ灰燼一。同三十日、承曆三年二月二日、午刻火起ニ春日小路與ニ町北一、至ニ一條以北一。東西洞院合數十町燒亡。貴賤舍宅不レ知ニ其員一矣。引及ニ申刻一、火勢漸消。吉記曰、治承五

年三月三日、亥時許有火。明月記曰、嘉祿二年十月六日、夜方長、曉鐘之程北方有火。舍屋相連無空地。北
方殊恐思之間、無爲ニ滅了。宣胤卿記曰、長享三年五月八日、今夜火事云云。園太曆曰、康永四年八月十七
日、今夜當南有火云云。續日本後紀卷第十六曰、承和十三年十二月戊寅、火燒ニ西大寺講堂ヲ、佛像一時ニ與ニ
煨燼一ナリ。榮花物語つぼみはな曰、かくてうちわたりめでたくてすごさせ給ほどに、火いできてやけぬ。同
玉村菊曰、皇后宮の御やどのつかうまつりけるに、いかゞしけん、その火いできてうちやけぬ。又曰、七月
廿よ日に火いできて、つちみかどのやけぬ云々。又曰、なをよのなかに火さはかしくて、またところ〴〵
やけぬ。同後悔大將曰、御だうにひいできて候と申せば。宇津保物語俊蔭曰、人々火をとぼしてのゝしる
に。應永廿五なぐさめ草曰、夜もすがら火などたきあかしてまどろまず。管見記曰、嘉吉二年五月三日、
巳刻有火事。百練抄第五曰、寛治三年二月五日、山階寺東金堂有レ火、但打滅了。同卷第八曰、治承元年四
月廿八日、亥刻火起レ自ニ樋口富小路一、火焰如レ飛云云。同卷第十三曰、寛喜三年四月廿五日、亥尅大炊御門
堀川有レ火云云。日本紀略曰、天慶三年三月十日、野寺四王院火。蜻蛉日記曰、火ともしつけて。又曰、日
も暮はてぬ、雨や風猶やまず、火ともしたれど、ふきけちていみじくくらければ　ともしたれどふきけち
て、夢の見ちのこゝちして。又曰、火しめりはてゝ。又曰、三四日のほどにちから火のさわぎす。更級日
記曰、遠キ火のひかりに。五代帝王物語曰、山僧手づから火をつけて燒拂、淺猿とも云ばかりなし。親長
卿記曰、明應四年五月五日有火事。帝王編年記曰、建長元年三月廿三日、蓮華王院御塔幷御所燒亡。火起
自姉小路室町邊至八条、餘炎飛付彼御塔。太平記三十八曰、燒捨タル火、陣屋ニ燃着テ、燎原ノ焰盛ナリ。

應仁記曰、猪熊ナル一色ノ五郎ガ舘ニ火ヲカケ。又吉田神主ガ宅ニ同時ニ火手アガリ、折節南風烈シク吹テ、下ハ二条上ハ御靈辻子、西ハ大舍人東ハ室町ヲ境ヒ、百餘町、細川兵部大輔勝久、淡路守成春、刑部少輔勝吉ノ屋形、佛心寺窪皆灰燼トナル。紫式部日記曰、ひとりに火をかき入て、身もひえにけるもの丶はしたなさをいふに。薩戒記曰、應永卅三年二月七日、南方有火

【形狀】塵添壒囊鈔曰、以レ火爲ニ地性一ト、是故ニ形チ三角ニメ赤シ。榮花物語うら／＼のわかれ曰、火のいとあかきに

○褒倍（ホヘ）　日本書紀

日本書紀曰、熛、火此云ニ褒倍一。字典曰、熛、說文火飛也、史記淮陰侯傳熛

於支比（オキヒ）　新撰字鏡

物理小識曰、若爐中之火乃炭土無焔之火得木則烟見濕則㸐須以炭培之幻影傳曰時歲多房中有大禪爐熾炭甚盛

【一名】於岐比　倭名類聚鈔曰、熛煨、唐韻云、熾猛火也。又盛也。漢語抄云、於岐比。四聲字苑云、熛煨熱灰新火也。和名同上。字鏡曰、燠鳥廻於廻二反、熾字同。熱灰也。於支比。又阿豆波比。續古事談曰、小庭ニウチイタヲシキテ火ヲ丶コ爪

於支火　字鏡曰、熛煨、於支火。又保太久比

いけ火　言塵集

うつみ火　同上。藻塩草曰、はいの下なるうづみび、ねやのうづみ火

【集註】源氏物語幻曰、うづみたる火おこしいでゝ、御火おけまいらす。朗詠集曰紀齊名野爐火發末揚煙。延喜式卷第十三日、圖書寮云云官人二人、史生四人、供ニ火爐火一。江家次第十一日、十二月內侍所御神樂事。殿上人召人等座ノ前主殿

生レ火、大臍居レ瓮。毎ニ座ノ前ニ居ニ御貢ニ生レ火。百練抄第十五曰、寛元元年十月廿四日、今日五節儉約要云云出火桶可レ停ニ止金銀銅餝等風流ニ事。更級日記曰、すびつに火などおこして、まちゐたりけり。又曰、

多の夜の雪ふれるよは思ひしられて、火をけなど
をいだきても、かならずいでゐてなんみられ侍る

度毛師比（トモシビ） 倭名類聚鈔 〔漢名〕 **燈火** 本草 〔今名〕 **トモシビ**

物理小識曰、陽火日陰火燈宜膏油蓋之入寒水則滅矣。天工開物曰、燃燈。則桕仁內ノ水油爲レ上、芸薹次レ之、亞麻子次レ之、棉花子次レ之、胡麻次レ之。燃燈最易レ竭。桐油與桕混油爲レ下。小知錄曰、物原軒轅作燈學齋佔畢、九經中有燭字而無燈字。劉氏雜志曰、如點燈者正當爐焰炎熾之尖所衝射則燈反不然矣 〔一名〕 **安夫良火** 萬葉集第十八曰、安夫良火能、比可里爾見由流、和我可豆良

等毛之火 萬葉集第十八曰、等毛之火能、比可里爾見由流、佐由理婆奈 **度毛之比** 天文写本和名抄。令義解曰。燈謂油火爲燈也。和名鈔曰、四聲字苑云、器照曰燈、堅燒曰燭。和名並度毛師比。萬葉集第十一曰 燈之、陰爾蚊蚊欲布 虛蟬之。同第二曰、燃火物、取而裹而、福路庭、塵添嚢鈔曰、油盡レハ火消物常ノ理也。又曰、夜灯ハ縱ヒ油アリ共夜明バ必ズ可レ滅歟。又隨レ油可レ燃歟。又曰、燈（トモシビ） 燭同。山密往來曰、燃燈續命之光照地。明月記曰、寛喜二年七月十四日、近年民家今夜立長竿、其鋒付如燈樓物。張帋。晝燈、遠近有之。逐年其數多、似流星、人魂 **登毛**

さはしハさいし（釵子）カ

之備　萬葉集第十八曰、保登等藝須、許欲奈枳和多禮、登毛之備乎、都久欲爾奈蘇倍、曾能可氣母見牟

留火　萬葉集第三曰、留火之明大門爾

止毛志火　新撰字鏡

曰、炬苣同亘音也。大比、又止毛志火。蜻蛉日記曰、すのこに火ともして○延喜式第十六、陰陽寮曰、調布三丈六尺。燈心料。月別ニ三尺。布一尺燈炷料。同第三十六、主殿寮曰、燈炷布一丈三尺。雅輔裝束抄曰大將あるじのみさうぞくのやうは、しんでんにて、ひさしのたいきやうのおなじことなり云〻火をともす事は三人のやくなり。とうだいにあぶらつきすえてもつこと、さらにすべからず。まづうちしき、次にとうだい、あぶらとよるべし。さしあぶらによらむには、ともしてもちて、もとゝうだいにあるに、すへかへて、もとのをとりてかへれ。いれくはへなどすることなかれ。うるはしくはかねのあぶらつきなり。かねのはさみとて、さはしのやうなるものを、かきあげぎにくしたるなり

みあかし　藻塩草曰、みあかしの事、佛に灯明奉る事也。源氏物語あげまき曰、みあかしの火けざやかにかゝげさせて。蜻蛉日記曰、みあかしなどたてまつりて。辨内侍日記曰、みあかしのひかりに、ほのみしりたりし。袋草紙曰、御明之光黄ニ變ズ。水左記曰、承保四年八月九日、俊兼參來、只今自金山還向云〻去六日奉供御明等者

かいともし　藻塩草曰、かいともし、掻燈とかく。神興守護のため終夜ひをけたぬ也

集註　續日本紀卷第十五曰、天平十六年十二月丙申、此夜於金鐘寺及朱雀路燃燈一万坏。同卷第十九曰、天平勝寶六年正月辛丑、行幸東大寺燃燈二萬。類聚國史曰、延暦十八年九月、是月禁京畿百姓奉北辰燈、以齋内親王入伊勢齋宮也。延喜式卷第五曰　凡齋王將

レ入二太神宮一之時、自二九月一日一迄二三十日一、京畿内伊勢近江等國不レ得レ奉二燈北辰一、及擧レ哀改葬上。同第三
十六日、主殿寮、十二月晦夜、官人當日晩頭率二史生殿部今良等一、大内ノ前庭東西ニ相分チ立二燈臺一、隨即燃
レ燈、于レ時追儺、已畢供二奉御湯一。續日本後紀第四曰、承和二年八月乙亥、且ク禁二京畿之内、來月供二ヘルコトヲ北辰
灯一ヲ、以二テナリ齋内親王可レ入二伊勢一也。榮花物語月のえん曰、ひをうちけちたるやうなるを。同花山曰、のこ
るところなくひなとなしていだしぬ云云。同初花曰、ともしたる火のひかりに云云。同疑曰、あるはとも
しびをかゝげて、きやうろんをならひ。又曰、さんまいのともしびをけたずかゝげつぐべくは。同御裳
曰、日のいるほどに、ひともしつけたる、四てうがうちに、ひともさぬところなし。まんとうゑにはあらで、
おくせんまんとぞみえたる云云こよひのともしびのひかり、十二ほうじやうどぶつせかいにいたるらん
と見えて。江家次第第二曰、叙位所司供燈。同第六曰、御燈燈奉北辰。百練抄第四曰、寛弘元年三月十三
日、左大臣於二法興院一行二万燈會一。同三年十月廿八日、左大臣於二法興寺一万燈會。同第十曰、元暦二年三月
三日壬辰、有二御燈由祓一、雖二天下穢中一猶被レ行レ之、代々例也。同第十二曰、承久三年九月三日乙酉、被レ止二
御燈一、依二日次不一レ宜云云。同第十四曰、天福二年三月七日、今夜群盜乱二入鳥羽安樂院法華堂一云云鳥羽院御
自令レ獻給常燈消畢。扶桑略記第四曰、孝德天皇白雉二年十二月、此夕、勅燃二二千餘燈一。同廿九曰、永承四
年七月十一日、奉レ供二御燈一。明月記曰、寛喜二年五月廿三日、今年之夏未煩熱、今日已難堪。今夜始隱外掌
燈。七月十七日、取入燈見舊記。寛喜三年八月十七日、終日着綿小袖、夜下部取入燈、俄涼氣存外。着綿小
袖、又着綿衣。合記別記曰、長承四年二月八日、大納言殿令レ任二右大將一給御裝束、此間堂上供レ燈、上達部

座上下各一燈、殿上人床下一燈、西透渡殿一燈、將監座前一燈。水左記曰、承保四年九月二日、入夜勘解由次官知綱爲殿御使來、雖爲物忌予於東侍所相遇、御消息云、主上月日可令修御燈御祓給也。而依一品宮良子御衣有御服暇前々如此御服暇之時、御燈御祓有無甚以不審也。但後朱雀院御時、長暦三年八月廿八日、中宮嫄子崩、其年九月御燈御祓修歟如何、若故殿御記中被注置者可被尋給也者、引見件御記之處、彼年九月三日有御祓之由被經載、其由注、別紙奉了。承暦五年九月一日、今日御燈仍出河原除歸了。世繼物語曰、やすく御とのごもる事なければ、殘のともし火かへをそむけるかげも心ぼそく覺さるゝに。蜻蛉日記曰、ともし火のきへてはひいりにくらければ、あなくら、ありつるものをたのまれたりけるにこそありけれ。更級日記曰、よるはめのさめたるかぎり火をちかくともして。都記曰、治暦四年十一月廿四日云々左右長押居燈。弁内侍日記曰、二月一日よふくるほど、大ばん所より參りて、鬼の間のぬのしやうじかけんと思ひしかども、ともしびのかげかすかにて、つねよりはいかにやらむおほえて。河越記曰、于レ時天文六丁酉中の秋、ひとりあるつれ〲夜ながさのあまり、かすかなる灯をかゝげ、はかなき筆を染て云々。東關紀行曰、ともし火殘て心ぼそきひかりなるに。春日社參記曰、ともしびの許にむかひて。狹衣曰、佛の御まへのみあかしのひかりばかりほのかにて、はか〲しう物も見えぬに。山賤記曰、ともしびのひかりとともにきえはてたまひ。雲圖抄曰、七月七日乞巧奠事。燈云々燈一向逐レ南、或又相對各有二折敷一。北山抄曰、即位事云々但殿上不擧燈。土御門院御記曰、入夜之間、階間左右柱供掌燈、女孺役之挂竹釘、兼仰南座打之。後光嚴院御佛事記曰、燈明ニ備之。上卿故實曰、入夜事史二人參上擧掌燈。類聚雜要抄曰、頗若裝束云々前

亟於南庭燈火立二行川門云々。高野參詣日記曰、御廟の前の堂、燈明そのかずなくひかりかゞやきてえもいはず。更級日記曰、あれはとうろの火のいとほのかなるに。平家物語曰、たそがれ時もすぎぬれば、竹のあみ戸をとぢふさぎ、ともしびかすかにかきたてゝ。又曰、かべにそむける、のこんのともしびの、かげかすかに、夜もすがら、まどうつくらき雨のをとぞさひしかりける。塵添𡋽囊抄曰、又掻灯(サウトウ)ト八夜ノ御殿ノ灯火也。夜ノヲトゞ八君ノ御寢所ナリ。劔璽ヲ置ル、故ニ、何モ灯火ヲケサズ。常是ヲ掻上ルニヤ、掻灯ト申ラン。又曰、御燈事、九月三日也。是ハ天子ノ北斗ニ灯ヲ奉リ給事也。今ハ久ク其儀絶テ、只御祓ヘ許リ侍ルトナン。是ヲ行レシ時ハ、北山ノ靈巖寺ト云所ニテ、高キ嶺ニ火ヲ燃(トボ)メ、北辰ニ供セラレケルトナン。吾妻鏡第十曰、文治六年七月十五日、今日盂蘭盆之間、二品參二勝長壽院一給。被レ勤二修萬燈會一。是爲レ照二平氏滅亡衆等黄泉一云云。同第十五曰、建久六年七月十五日、於二勝長壽院一、被レ修二盂蘭盆御佛事、萬灯會等一云云。同第十九曰、承元三年十一月八日、鶴岡神宮寺可レ奉二常燈一之由、被二仰下一。以二駿河國益頭庄乃貢一可レ爲二彼燈油一之由、被レ仰二相州一。明月記曰、大臣殿嵯峨御川逍云云以信光乘小舟被供燈明、法輪寺云云以予被供燈明清涼寺。建武元年東寺塔供養記曰、佛供燈明造花以下急被付其口之事云云燈明二燈。太平記第一曰、金屋ニ人無フ〆、皎々タル殘ンノ燈ノ、壁ニ背ケル影。義經記曰、ともしびのあかりにて、つねにすみなれ給ひつる御しやうじの、ひきての本を見ければ。又曰、よまの御ていに、ともし火あまたかきたてゝ

形狀

源平盛衰記卷第二十曰、高燈臺ニ火白ク掻立タリ云云寢殿ヲサシノゾヒテ見レバ、𥧄突(ツヒツキ)アリ。燈白ク掻立テ云云

ちやうしがしら 今物語　【漢名】燈花 本草

【一名】燈の花 藻塩草曰、燈の花、光りの事也。又丁子頭を言共いへり　丁子頭 見上。江家次第第一曰、御明作ﾚ花

【集註】今物語曰、待賢門院の堀川、上西門院の兵衛、をとゞいなりけり。夜ふかくなるまで、さうしをみけるに、ともし火のつきたりけるに、あぶらわたをさしたりければ、よにかうばしくにほひけるを、堀川、ともし火はたきものにこそ似たりけれ。といひたりければ、兵衛とりもあへず、ちやうじがしらの香やにほふらん。とつけたりける　【形状】頓醫抄曰、燈花ノサキノ油ツギノ上ニ、アカリテモエタル頭ノ大ナルヲ取ナリ。此ヲバ丁子頭ト云也

比岐利(ひきり) 倭名類聚鈔　【漢名】木遂 周禮疏　【今名】木ヨリモミ出ス火

名物攷曰。河圖挺佐輔云。伏羲禪於伯牛鑽河圖始圖鑽作錯木作火。禮含文嘉云。燧人始鑽木取火。炮生爲熟。使人無腹疾。文中子曰。木中有火。不鑽不發。鑫海集曰。火隨ニ五行ニ而發見。金木陽也。鑽ニ斫竹木ニ而生。戛ニ擊金石ニ而出。皆能焚燎。乃有ﾚ形復有ﾚ質。形質全備者也。岣嶁鑑撮曰。燧人氏教民火食之帝也。鑽木取火烹飪始興。民人得遂其生。號曰遂人。又曰燧人。　【一名】切火

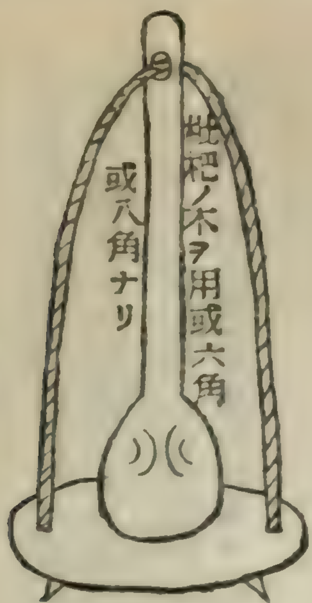
火ハ木ガヨキカ

下ノ空白ハ圖ノタメナリ

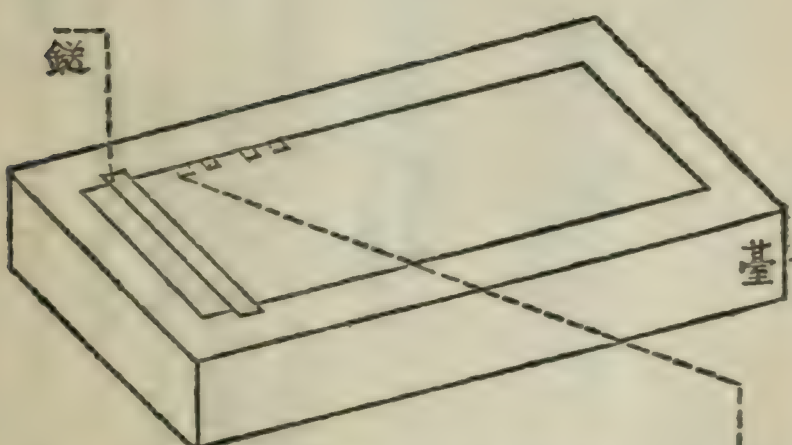
〔言塵集〕火切 江家次第曰、供御齒固具云々有餅鏡用近江火切。倭名鈔曰、火鑽、內典云、譬如因燧因鑽、而得生火。和名比岐利。塵添壒囊鈔曰、ヒウチト云字ハ何ゾ。鑽ノ字ヲモ用、鑽ヲバ火ヲキルトヨメバ心叶タリ

〔集註〕延喜式卷第七曰、踐祚大嘗祭、九織神服者、火鑽三枚云々九十一月卯日云々悠紀在左行云々次火燧一荷、納筥二合、以呉竹爲足、覆以緣綱、夫一人云々伴造燧火兼炊御飯。古事記曰、鎌海布之柄作燧臼、以海蓴之柄作燧杵而鑽出火云是我所燧火者云々天之新巣之凝烟。人車記曰、仁安三年十一月、大嘗宮點地事云々次取火燧童女云々授稻實公云々鑽出火云々。都記曰、承曆四年閏八月三日云々巳刻束帶先參殿、使定俊朝臣申云、爲申行斬廊御卜所參內候也云々爲御卜云々主殿寮生火主水居水

◉宮川日記曰、神事ノ時キリ火ニテ禰宜ノ食ヲナス。神饌ヘ毎々ゴトニキリ火ナリ。其器ニ之神主見セラル、マ、圖レ之如レ左



ロクロノ如クマハセバ両方ノ紐ジクノ木ニマトフキリ、トスルト火ヲウルナリ



檜木ニテ廣四寸許厚三寸許長一尺余

如此ノキサミカケテ此処ヲモメバ粉ニナツテ其中ヨリ火出ルヲスリカヘウツセバ火ヲタモツナリ。ソレヲ松ニ點ズルト云

比宇知（ヒウチ） 倭名類聚鈔 【漢名】金石之火 本草 【今名】ヒウチノ火

本草綱目曰、地之陽火三、鑽木之火也。擊石之火也。戛金之火也。物理小識曰、金石之火烈于艸木之火。又曰、破石以鋼鎌刮之則火星出紙煤承之卽燃。柳河東集註曰、敲石擊石出火也

打火 【一名】

言塵集、新撰字鏡曰、鈥火打。倭名鈔曰、燧。古史考云、燧人氏造鑽燧、始出火。和名比宇知。軍防令曰、凡兵士云云每五十人火鑽（ヒウチ）一具。塵添壒囊鈔曰、燧ノ事、ヒウチト云字ハ何ゾ、三寶字類鈔ニハ、燧ノ字ヲヒウチトヨメリ

火打いし

古事記、延喜式卷第三十曰、織部司、雜織、韓紅地火打、錦一疋、料絲六斤八兩、織手一人、共作一人、長功二尺九寸、中功二尺六寸、短功二尺三寸

の火

平家物語卷第十曰、老少不定のさかひは、只いしの火の光にことならず

打出す火

藻塩草曰、打出す火の石のほくそ

【集註】

御堂關白御記曰、寛弘二年十月十九日、淨妙寺供養云云此前打レ火可レ付レ香者レハ、余取テ火打ヲ白レ佛言サク云云打火ハ、先爲レ用ニンカ清淨火ニ也。早付爲レ悦、晩ク付不レ爲レ恨ト、祈請ノ打レ火ヲ、不レ及ニ二度ニ、一度得レ火。撰集抄曰、火打てすでにやかんとし侍りし程に。古事記曰、解ヨ開ケ其倭比賣命之所レ給囊口ヲ而見スレハ者、火打有ニ其裏ニ、於是先以ニ其御刀ヲ苅ニ撥ハラヒ草ヲ以テ其火打ヲ而打チ出シ火ヲ云云。古今切紙次第曰、火うちに石をそへても、うたねば火出ず

【附錄】火打袋

公方樣正月御吏始之記曰、刀を人に遣候時、自然火打袋をさげ申候時は、取候て懷中仕候て、さて可出候。袋共に遣事不可有之。源平盛衰記卷第四十四曰、第二度ノ御鏡

ヲ取上御覽ジケルニ取弛メ打落シ三ニ破タルヲ燧ニナシ給ヘリ。彼燧ヲ錦ノ袋ニ入劒ニ被付タリケル也。今ノ世マデニ人腰刀ニ錦ノ赤皮ヲ下テ、燧袋ト云事ハ此故也。萬葉集第十八曰、須理夫久路。兼盛集曰、

旅にて山だちにあひたる所を繪にかけるを、旅人はすりもはたごもむなしきをはやくいましね山のとねたち。敦忠家集曰、親盛唐物使にていくに、金の火打火囊に沈をして、緒を摺りたる袋に入うちつけに思

ひいづやとふるさとの
忍草にてすれる也けり

安之布　萬葉集

漢名　蘆火　本草

今名　アシタケルヒ

一名　あし火

藻塩草曰、あし火、あしぶ共いへり。あし火の事也。萬葉集第二十曰、安之布多氣騰母、須美與氣乎云云。言塵集曰、あしぶとはあし火也

集註　萬葉集第十一曰、難波人、葦火燎屋之、酢四手雖有、東路のつと曰、葦を折たき云と

竹ノ火　壒囊鈔

漢名　竹火　本草

今名　タケノヒ

集註　塵添壒囊鈔曰、火ハ一ツナレ共、薪ニ因テ、松ノ火、竹ノ火ト云ガ如シ○物理小識曰、取火于竹。以乾竹破之、布紙灰而竹瓦覆上。竹穿一孔。更以竹刀往來切其孔上。三四回。煙起矣。十餘回。

火落孔中。紙灰已紅。石
火烈竹火易取常用無毒

安米能火（アメノヒ） 萬葉集　【漢名】大陽眞火 本草　【今名】日ノ火

本草綱目曰、天之陽火二、大陽眞火也。星精飛火也。注、赤物暾暾降則有灾、俗呼火殃。耳目記曰、唐開元二年五月、頻有火災。其時人盡皆見物大如甕、赤如燈籠、所指之處尋而火起、百姓咸謂之火殃。物理小識曰、火珠、承日取太陽眞火。字典曰、周禮秋官司烜氏、掌以夫燧取明火于日。註、夫遂陽遂也。疏、取火於日、故名陽遂。猶取火於木爲木遂也。偶書曰、陽燧映則火出。廣博物志曰、周禮金錫半 金一半錫一半 謂之鑒燧。之齊註。鑒取水于月、燧取火於日。皆以潔白爲上。故金錫半之。搜神記、以五月丙午日中鑄爲陽燧、以十一月壬子夜半鑄爲陰燧。註言、丙午日鑄爲陽燧、可取火。壬子夜鑄爲陰燧 可取水也

【一名】

天火

仙覺萬葉集註釋十五曰、あめのひとは天火（くわ）なり。萬葉集第十五曰、也伎保呂煩散乎、安米能火毛我母。令義解曰、謂大陽者日也

備（ヒ）

日本書紀曰、化‐生熯之速日命‐熯干也、此云‐備。字典曰、熯、人善切。說文、乾貌。玉篇、火盛貌。廣韻火乾。廣韻、韻會、呼旰切。集韻虛肝切。正韻虛汗切、竝音漢。地理孝思集曰、火。日之精也。水。月之華也。故陽燧取於日而得火、方諸取於月而得水、方諸陽燧地之氣也。日精月華天之氣也。本草時珍曰、陽燧火鏡也、以銅鑄成、其面凹、摩熱向‐日、以‐艾承‐之、則得‐火。周禮司烜氏、以火燧取明火于日、是矣。物理小識曰、物透明者、再論水晶琉璃琥珀陽燧冰臺。凡物圓

形。皆能取火。日射物中。物中必有一日。日本圓體。遇圓物則光聚。內外相照。光必相交。凹交于前。凸交于後。故于交際得火也。名物攷曰、淮南子云。陽燧見日。則燃而爲火。陽燧金也。取金猛無緣者。日高三四丈。持以向日。燥艾承㆑之。有頃即焦吹之得火。今亦不必用猛金也。以水精大珠。向日對照。以草紙承其下。一點透明。紙焦烟起。即得火矣。大火珠。在占城國出。大如鷄卵。狀類水晶。當午置日中。以艾藉之。火出是也。又曰。禮統云。日者實也。形體光實。人君之象。春秋內事云。積陽之熱氣生火。火氣之精者爲日。故陽燧見日。則然而爲火。范子計然云日者火精也。物理論云、日者大陽之精也。舊曆說云日猶火也

[集註] 延喜式卷第二十日、大學寮云 云大炊寮取㆓明火於陽燧㆒以供㆑饗

地裂ヶ破㆑火炎燃出　吾妻鏡

[漢名] 寒火　本草綱目

研北雜志曰、吾家大史在征西幕府小校言火山軍地枯燥不可耕鋤犁入地不及尺烈火隨出矣。本草綱目曰、陸游云、火山軍其地鋤耘深入則有烈焰、不㆑妨㆓種植㆒亦寒火也

[集註] 吾妻鏡卷第四十七日、正嘉元年八月廿三日、戌剋大地震、有㆑音。神社佛閣一字而無㆑全。山岳頽崩、人屋顛倒、築地皆悉破損。所々地裂、水涌出。中下馬橋邊地裂破、自㆓其中㆒火炎燃出。色靑云 云

有㆘如㆓キ火光㆒ノ者㆖　文德實錄

[漢名] 遊光　閱古隨筆

閑古隨筆曰、火之怪曰遊光、

集註 文德實錄卷第三曰、仁壽元年秋七月壬辰、夜有下如二火光一者上、墜二於殿前一、左右驚亂、須臾乃定。今昔物語曰、冷泉院より南、東洞院より東の隅を僧都殿といひて、あしき所なり。冷泉院より北は、左大辨宰相源扶義の家なり。扶義の舅は讃岐守源是輔なり。扶義の家の邊なり。是輔の家より見れば、向の僧都殿の戌亥のすみに、大に高き榎木あり。誰彼時になれば、寢殿の前より赤き單衣飛行て、榎木のすゑにのぼりけり。讃岐守の家に宿直したる男、此單の飛行を見て、射おとさんといひけるに、これをきく者ども、射あてじとあらそふ。此者はかならず射んといひて、夕暮方に僧都殿にて、南面の簀子に上りて待けるに、東の方の竹の中より赤き單衣飛てゆきけるを、男鴈股をもつて射けるに、單衣眞中を貫れながら、榎木のすゑにのぼりけり。箭のあたりしと見えたる所の地に、血おほく流れけり云々

於爾比(おにび) 倭名類聚鈔 **漢名** 燐火 物理小識

物理小識曰、凡鬼火色綠而細、人立則不見、蹲則見。蠡海集曰、亘海夜有火光、曠野夜有燐火、近之則方無。乃有形無質者也。本草綱目曰、野外之鬼燐、其火色青其狀如炬。或聚或散。俗呼鬼火。或云、諸血之燐光也。博物志曰、鬪戰死亡之處、其人馬血積年化爲燐。燐著地及草木如露、略不可見。行人或有觸者、著人體便有光。拂拭便分散無數愈甚。有細咤聲如炒豆。唯靜住良久乃滅。後其人忽如失魂。經日乃差。荊州名

勝志曰、耶老播火青如燐。三楚新錄曰、李興以江陵古之重地又當天下多事有割據之志乃大興力役重築城壘執吞諸十數萬人皆將校賓友負土助焉郭外五十里墳冢皆令發掘取磚以甃之及土工畢陰慘之夜皆聞鬼哭鬼火數起累月方定論名以爲幽魂不安故也

一名 於邇火 天文寫本和名抄〇倭名鈔曰、燐火、文字集畧云、燐鬼火也。人及牛馬兵死者血所レ化也。和名於邇比 狐火 言塵集〇塵添壒囊鈔曰、狐火ヲ云ニ燐火ト事、又狐火ヲ燐火ト云コトアリ。此ヲ以テ世俗ニ狐火トハ、馬ノ骨ヲ燃ナントヽ申ニヤ。諸皐記曰、舊說野狐名紫狐。夜擊尾火出。精進魚類物語曰、狐ばかりぞ火はとぼす

集註 續日本紀卷第四十日、延曆八年秋七月丁巳、勅云云海浦窟宅、非レ須人烟一山谷巢穴、唯見ニ鬼火一。扶桑略記第四曰、齊明天皇七年五月、天皇遷ニ居筑紫朝倉橘廣庭宮一。此時、切ニ除朝倉社木一作レ宮。由レ之神忿壞レ殿。亦見ニ鬼火一。于レ時大舍人并諸近侍病死。古今著聞集曰、西京邊に住者あり云ヽたヾひとり出て內野通をゆきけるに、夜うち更て多ごろの事なれば、風吹てさむくおそろしき事かぎりなし云ヽ應天門と會昌門との間を通るに、應天門の上を見上たれば、層の上に眞靑に光る物ありて、からくと笑ふ聲しけり。身の毛よだちたりけれども、狐にこそ有らめと思ひて、西の方にゆくに、豐樂院の北の野に圓なる光ありて、男か前にころび來りしを、箭をはなちたりけるに、射とをすと見けれども、いづち行けん失にけり

雷火 和漢通名 今名 カミナリノ火

本草綱目曰、天之陰火二、龍火也。雷火也。注、霹靂之火、神火也。論衡曰、雷者太陽之激氣也。三國志操曰、雷乃天地陰陽擊搏之聲、何足爲驚怕。地理孝思集曰、雷生於石。雷生於火。有雷有電。火出於石也。雷者石氣之所化也。雷與風爲陽之極也。故皆火氣之化也

一名 **神火** 續日本後紀卷第十五曰、承和十二年三月己巳、武藏國言ス、國分寺七層塔一基、以ニ去承和二年ヲ爲ニ神火ニ所レ燒、于レ今未ニ構立ニ也。類聚國史曰、不レ問ニ神火人火ニ。蜻蛉日記曰、ときしもあれ、雨いたくふり、神いといたくなるを。又曰、雨もやふらん、神もやなりまさらんと思ふに云々雨もやいたくはべると思へば、神のなりつるをとになん云々

天火 百練抄第十五曰、寛元三年十二月十三日甲戊、此日内裏宜陽殿上有ニ天火ニ、打消云云

集註 帝王編年記曰、天喜三年八月廿一日、東寺塔爲雷火燒亡。久安五年五月十二日、高野大塔爲雷火炎上。承元二年戊辰五月十五日、法勝寺九重塔爲雷火燒失。百練抄第四曰、正曆四年七月廿日、雷落ニ美福門下ニ、猛火付レ柱令レ燒。關白隨身、右大將隆家朝臣雜色、避ニ暑於此處ニ。見付打滅ニ。長保二年四月七日、豐樂院松後堂爲ニ雷火ニ被レ燒。寛仁元年六月廿二日、興福寺塔并東金堂爲ニ雷火ニ燒亡。同第五曰、嘉承二年六月廿一日、前大相國京極堂爲ニ雷火ニ燒。同第七曰、久安五年五月十二日、高野大塔金堂灌頂堂等爲ニ雷火ニ燒亡。同第八曰、嘉應元年十一月十二日、戌時雷落ニ法勝寺九重塔第三層ニ、欲ニ燒損ニ打消之。同第十曰、建久七年八月十七日甲子、雷雨殊太、亥時中納言隆房卿八条堀川堂爲ニ雷火ニ燒亡。同第十七曰、建長六年七月五日、權右中弁資定朝臣下ニ向南都ニ、爲レ實ニ撿東大寺寶藏戸燒損ニ也。去比爲ニ雷火ニ令ニ燒損ニ云云。建長七年八月廿八日、雷落 懸法勝寺九重塔上ニ雷火出來、然而

打二消之一。高野御幸記曰、抑往年之比、影堂之後食堂并大塔等、依二雷火災一皆爲二灰燼一。吾妻鏡卷第五十一
曰、弘長三年九月十二日、終夜甚雨、戌刻雷鳴。武藏大路霹靂、蹴二裂率都婆一、其上三尺余爲二雷火一燒、蹴裂
之聲響二声人屋一、聞者甚多云云。十三日、今朝諸人擧〔コゾッテ〕登レ山、而見二去夜雷火燒之率都婆一。相國寺塔供養記
曰、白川院の御時、法勝寺の塔をたてられしに、大塔の七重に過たる事は例なきよしさだめ有て、七重にて
すでに供養有べきにさだまりたりしを、唐土にさるためし有よし、良眞座主勘申されしかば、さらばとて
又二重をくみあげられて、遂に九重の塔供養とかや。これは上なき御塔にて侍りしかども、あまり分に過
たゞ故にや、承元二年に、雷火にやけたりしを云云。明月記曰、承元二年五月十五日、天晴、午時許大雷鳴
猛烈。静律法師來談之間、雷電冥晦、大雨如麗。此間東方煙忽見。人云九重塔也。遽以騎在乘車馳參法勝
寺云云馳入西大門、舊塔炎焔滿甚熾盛。此間天不風。上下群參無所、飛熖付樹木等。即伐木、心柱燒落了。
南に顛到。人數千万、火勢漸滅之間即歸宅。關白殿此間參入給云云鎭護國家之道場、海内無雙之寶塔、爲
雷火滅亡、可悲可怖。太平記第三十三曰、俄ニ雷火落懸リ、入間河ノ在家三百餘宇、堂舍佛閣數十箇所、一
時ニ灰燼ト成ニケリ。扶桑略記第廿二曰、小松天皇仁和二年三月十三日壬辰、暴風雷雨。東寺新造塔燒。
時人謂、雷火也。同第廿四曰、延長六年七月十一日、夜雷震、西大寺塔有火、一基蕩盡。裨書曰、延長八年六
月廿六日、是日申一刻、雲薄雷鳴云云又雷火着二清涼殿南簷一、右近衞茂景獨撲滅。同第廿五曰、承平四年十
月十九日雷火燒二亡東大寺西塔一。天暦二年十一月十一日、雷火大安寺西塔燒亡。同第廿七曰、長保二年四
月七日、雷零二豐樂院一、招俊堂雷火。建治三年日記曰、八月五日、興福寺去月廿六日爲雷火炎上之由、自西園

寺殿被
注申也

火柱（ヒノハシラ）吾妻鏡　【漢名】塔光 物理小識　【今名】ヒノハシラ

物理小識曰、塔光。塔放光者地中貫火、以上騰爲本性　【集註】續日本後紀卷第八曰、承和六年六月丁丑、是夜有赤氣、方卅丈從坤方來、至紫宸殿之上。去地廿許丈、光如炬火。須臾而滅。文德實錄卷第三曰、仁壽元年秋七月壬辰、夜有如火光者。墜於殿前、左右驚亂。須臾乃定。吾妻鏡第三十四曰、仁治二年二月四日、晴陰、戌尅、白赤氣三條出現。件變消。其東傍赤氣又出現、長七尺。彼變滅、猶西傍赤氣一條出現四尺。觀之怖之。泰貞朝臣最前馳參御所申云、此變、爲其形、異名火柱也。村上御宇康保年中出見、同變云云

人玉（ヒトダマ）宇治拾遺物語　【今名】ヒトダマ

等實櫻雜說曰、吾郡讓村嚴氏女適吾邑徐尙介乙夜解衣欲眠忽有火自裾帶間出轉摺至榻前晶瑩流落漸微而滅時明崇禎中事也。集異志曰、新野庾謊得病。兒弟三人。白日侍疾。常燃火。忽見帳帶自捲上。自舒下。如此數遭　【一名】人たま 更級日記曰、此曉にいみじくおほきなる人だまのたちて、京ざまへなむきぬるとかたれど　人魂 萬葉集第十六曰、人魂乃。佐靑有公之、

魂ノ下流布本「螢」アリ
去流布本ナシ
乾ノ下流布本「挾」ア

但獵、相有之雨夜葉、非左思所念云々。袖中抄曰、靑は草木のあをく萠いづれば、靑をばさほといへば云々。按ニ人魂ノ火ハ、宇治拾遺ニ靑ク螢ニ譬、明月記ニハ、其色白又如レ赤ト云エリ。淸輔雜談抄曰、見人魂哥、玉はみつぬしは誰ともしらねどもむすびとめつゝ下かへのつま。十訓抄曰、和泉式部が男のかれ〴〵なりける比、貴船に詣たりけるに、螢の飛をみて「物おもへば澤の螢も我身よりあくがれ出る玉かとぞみる。袖中抄曰、はたるをたましゐになして、これ出ていなばかぎりなるべしといふ之（）遺告勘註曰、魂訓ニ於多广志爲ー。正字通曰、魂人死陽氣也。黃幹曰、氣之神謂之魂

集註

中右記曰、御所三條殿中大人魂出也。去月下旬云々。大治四年十月九日、今夕有火人魂飛渡天云々。万人見日余物□之也。扶桑略記廿四裡書曰、延長八年七月十五日、酉刻流星差ニ艮方ー渡。俗云ニ人魂ー也。明月記曰、建永元年六月廿七日、今夜有光物之由有其聞。召陰陽師等有招魂御祭。泰忠申云、非人魂。業弘申云、人魂也。建永二年四月廿二日、入夜南方有光物。人魂歟。後聞所々一同云々。寬喜元年七月十六日、夜前南隣竹邊人魂見云々。依卒爾今夜令修招魂祭

形狀

宇治拾遺曰、いまはむかし、あづまうどの、うたいみじうこのみよみけるが、ほたるを見て「あなてりやむしのしや尻に火のつきてこ人玉ともみえわたる哉。明月記曰、正治二年三月五日、白坊門被告送云、夜前小童見竹邊有人魂飛去云々。令卜筮卦申歳相當云々。多日病者之過如此。更不及左右者也。二見女房云、其色白非丸、如折敗四方也。弘又如折敗。土ニ付天東ニ行。依怖畏不能見、始終隱乾了。又今一人小女云、其色如火如赤云々。疑若非人魂歟。平家物語卷第三曰、とうろうの火のやうなる物の、大臣の御身より出て、ばつときゆるがごとくしてうせにけり。

リイ「攻」トス

人あまた見奉りけれども、おそれてこれを申さず

○丙丁君火 本草綱目

神系通考曰、丙爲陽火化水、丁爲陰火喜遇陽。本草綱目曰、人之陽火一丙丁君火也。注、心小腸離火也。正字通曰、僨、徒回切、音頽順也。莊子外物篇、僨然而道盡。註、郭象云、僨然無矜、遺形自得道乃盡也。呂吉甫云、焚和之火出于有心、僨然則縱心而至于無心、道盡于此矣。物理小識曰、晉惠羊后出火、女子積思發レ火焚レ身、則人身心有火○萬葉集第十七曰、心爾波（ココロニハ）、火佐倍毛要都追（ヒトヘモエツ）。五雜組曰、思慮多則心火上ニ炎ニ。致富全書曰、火ハ本ト南方離卦離ハ屬レ心心者神也。又曰、念不可起、念起則火炎、正字通曰、心火藏也。管子道之扗天猶日也。其扗人者心也。釋名、心纖也。所識纖微無物不貫于心也。撰集抄曰、胸のうづみ火きえやらで

○腹中ヨリ火出 續古事談

【漢名】**三昧之火** 本草綱目

本草綱目曰、人之陰火ニ命門ノ相火也。三昧之火也。純陽乾火也。正字通曰、梵言ニ昧、此云正定。李肇翰林志翰苑學士得下直出門謂之小三昧、出銀臺上馬謂之大三昧、言太繁縛就解脫也。又國史補、僧懷素好艸書自言得艸書三昧。清涼山志曰、張無盡戊辰六月、至清涼山至眞容院止、淸輝閣文殊所化宅也。知客嘗曰、此處有ニ聖燈一無レ盡、遂稽首敬禱、戌初北山有ニ大火炬一、瞻拜之次東臺龍山羅睺殿左右各見ニ一燈一、浴室之後見ニ大光一如ニ掣電一、金界南溪上見ニ二燈一、亥後燈光忽大忽小曜林木郎獻省曰、此三昧火也。俗謂之燈。耳譚史曰、丹出不溫、三昧火一縷將絕

【集註】續古事談曰、大二条殿（教通公）ノ日記ニコソ不思議ノ事ハ侍レ。六条壬生ニ尼ノ死タルヲヒキステタリケルヲ、犬ノハラヲ一クチクヒカブリタリケレバ、腹ノ中ヨリ火イデキテ、ソノカバネヲヤキウシナヒテケリ。榮花物語

疑曰、さんまいのともしびを、けたずかゝげつゞくべくは、この火とくいづべし、との給はせ、うたせ給しに、その火一どにいでゝ、この廿餘年いまだきえず()大和本草曰、大藏一覽記、佛入滅之事曰、如來胸中三昧之火、隨聲而發迸出棺外、漸々茶毗。翻譯名義集曰、三昧此云調直定。又云、正定。亦云、正受。池北偶談曰、南昌府驛路旁有精舍、康熙初忽有偉丈夫、襆被來宿、貌甚雄、奇居止旬日、語操西音自言愛此地風土、欲爲僧云云乃從之盡薙髮云云戊申處忽沐浴禮佛遍別寺僧云明日當涅槃。衆皆不信。至期登臺趺坐少頃火自鼻中出、煙焰滿室。有白鶴自頂中飛出、旋繞空際。久之始沒。優古堂詩話曰、得茶三昧。錢塘南屏謙師妙於茶事、東坡贈之詩云、道人曉出南屏山、來試點茶三昧、手劉貢父亦贈詩云、瀉湯舊得茶三昧云云南里志曰、保聖寺宋祥符六年、僧維吉重建大雄殿供釋迦牟尼佛、僧旁列羅漢一十八尊、爲聖手楊惠之所塑、神光閃爍形貌如生、眞得妙手之三昧者

聖燈 洪燈國師年譜　漢名 佛燈 盤山志　今名 リウトウ

盤山志曰、宋犖筠廊二筆盤山佛燈每於除夕見之雲罩寺定光佛舍利塔與薊州獨樂寺觀音閣通州孤山破塔皆有燈出互相往來漏盡各返原處好事者恒裹糧候之阮旻錫燕山紀遊盤山異蹟有除夜佛燈路出通州孤山塔上分爲數千百遠繞盤山諸寺至定光佛塔而止或曰塔中舍利光也薊州志載獨樂寺在蘇州治西南中有佛閣設大士像相傳盤山舍利塔神燈自塔而下先獨樂而後及諸佛刹云朱彝尊日下舊聞引智朴志云盤山之頂有雲罩寺相傳爲

寶積禪師卓錫地一名降龍庵東嶺有舍利塔中藏戒珠六十顆佛牙一具又有彌勒殿資龍殿每歲除夕有神燈之異智朴佛燈紀異按字內名勝僉有佛燈如五臺九華峨嵋普陀匡廬南嶽百花山人常言之即盤山之燈人亦常見之丙辰春二月與灝居士洪應灝及二客僧夜話見燈現於山西南樹杪狀如蓮花大如車輪焰色披敷下有練光數丈搖曳而西己未八月夜將半朴出戶甫啓扉見燈大如屋起澗中紅光燄燄照衣裾作赭色召諸禪侶共相瞻望壬戌二月見燈二現於屋角東南大小各一去人僅丈許若可攀攬久之而沒乙丑六月廿九日晚課畢見燈現於正南方初如斗忽大如山如燈如雲倏起隨遍山南面作雨後霞色其光中隱隱有大悲菩薩千手相光外重光東射莫可名狀禪者瞻禮歎未曾有戊辰四月夜厲風作王子千比部見紅光團團如車輪橫空而過要知佛燈之異不止除夜時時有之即厲風暴雨隆寒溽暑之夕亦常有之但人酣眠長夜苦不自覺耳謹按朱子嘗於廬山天池院見佛燈諸生或疑其妄曰僧言則妄而此光不可誣豈地氣之盛然耶盤山之鍾靈毓秀不減諸嶽精氣所聚發爲榮光理固宜然釋氏好爲詭異之說必欲以竺乾靈蹟實之又烏知名山勝地乃古佛過化之所愚曰法炬夫且照耀大千世界不必假此區區者震人耳目也

集註

法燈國師年譜曰、洛陽四條坊ノ畔ニ有二一宇一、安二觀音ノ聖像一、天童龍神獻二聖燈一、靈異甚多

之良奴日（シラヌヒ）　萬葉集

湧幢小品曰、姑江有二神燈一每歲春月初昏無風雨遠望火光數點起自大黃山東嶽廟前已而跨江南北散漫數十百點多至萬億燦然若繁星明滅聚散參差不定漸移而西至夜分隱隱向白山沒凡遇天氣鬱蒸往往有之。按二不

燎ノ上「所」脫カ

知火モ此類也

【一名】不知火　言塵集。萬葉集二十曰、之良奴日、筑紫國波

【集註】言塵集曰、しらぬひのつくし云々不知火と云々　昔景行天皇從北郡發舟し給ひて、火の國に至と云り。八代と云浦に火みえけるを、何れの火ぞととひ給ふに、誰人のともしたる火とも不知火なり、と申けるを初にて云りと云々。釋日本紀曰、景行天皇誅球磨噌唹、兼巡狩諸國云々　云幸於火國、渡海之間日沒。夜暗不知所著。忽有火光遙視行前、天皇勅棹人曰、行前火、日行前也、火ヲ見直指而往、隨勅往之。果得著崖。即勅曰、火燎之處此号何界、所燎之火亦爲何火。土人奏言、此是火國八代郡火邑也。但未審火由。于時詔群臣曰、燎之火非俗火也。火國之由知所以然。

【今案】〇中島廣足か不知火考曰、今の火は國人龍燈といひ、又不知火ともいへり。毎年七月晦日（小の月は廿九日）の夜は、いとおほく出れば云々　おのれもあまたゝび見にゆきつるに、火の出る所は八代郡の海上二三里も沖の方とおぼし。時しも晦の暗なれば、其所はさだかに見わきがたし。半夜うち過るころより、まづ一二みえそむる、是を俗に親火といへり。はじめは火の間やゝはなれて見ゆるを、やう〱其間々に、大小の火どもいでゝ、つき〲かずそはりゆくに、曉に至りて盛なる時は、海上一つらにつらなりて見ゆ。其光また大小のさまもすべて星の如く、大かた横ざま二里ばかりにつらなれり。かくていよゝ盛なるに、ほどなく東の空しらみて、夜も明ゆけば、其光に消たれて、やうやう火きえゆく。明はてぬればあともなし。風雨の夜は一つも出ることなし。風はたえても餘波あれば出る事すくなし。いとよく晴て、浪しづかなる夜は殊に多くいづ。里人談曰、不知火豐後國宮古郡甲浦の後の森

ら、挑灯のごとくの火、初更の比ら出る。又松山ら右の火出、空中にて行合、戰ふごとくして海中へ飆と落る。又波上にて鷄の跡合に等しくして、少時捻あひて後出たる所の山森へ入ル。四五月八九月に必あり。是を筑紫のしらぬ火と云也 ○浪火 正字通曰、陰火海中鹹氣所生、凡海水遇陰晦波如燃火滿海、以物擊之迸散如星。有月即不復見。木華海賦陰火潛然 集註 海道記曰、磐をうつ夜の浪は千光の火を出し○大和本草曰、海潮夜擧之光アリ。月夜ニ光ナシ

ほてり 藻塩草

漢名 赤游 廣東新語

廣東新語注風曰、其氣赤、亦曰赤游、赤火氣也、游謂火之游氣也

集註 藻塩草曰、山のはにほてりせぬ夜はむろのうらにあすは日よりといづる舟人。吾妻鏡第五十一曰、弘長三年正月十七日、紅霞纏白雲、天氣甚晴。戌刻乾巽有如火光色。一方光盛之時、一方光薄。亦相交厚薄。觀者怪之。十八日、陰、乾巽亦光如去夜。明月記曰、元久元年正月十九日、秉燭以後北并艮方有赤氣、其根如月出方、色白明、其筋遙引如燒亡遠光、白色四五所、赤筋三四筋、非雲非雲間星宿也。光聊不陰之中、如此白光赤光相交、奇而尚可奇、可恐々々。廿一日、秉燭以後北艮方又有赤氣、如隔山燒亡、重疊尤可恐

雲ノ下流布本非アリ
也流布本騷

武呂八嶋煙 本朝鬪諍集

漢名 澤中之陽焰 本草

今名 ミヅノケムリ

丹鉛總錄曰、易澤中有火。素問云、澤中有陽焰、如火烟騰々而起于水面者是也。燕澤有陽焰、乃山氣通澤。本草綱目曰、澤中之陽焰、狀如火焰、起於水面

【一名】いたづら

煙 言塵集曰、室の八嶋は、野水のけぶり之。いたづら煙と云り。狹衣曰、先かのむろのやしまの煙たちそめし。本朝闘諍集曰、立二武呂八嶋一煙云二燃思有擽一

【形狀】袖中抄曰、むろのやしまとは、下野國の野中に島あり。俗はむろのやさまとぞいふ。その野中にしみづの出るけのたつが、けぶりに似たる也。是は能因が坤元儀に見えたる也。俊頼判云、このむろのやしまは、まことの火をたくにはあらず。野中にし水のあるが、氣のたつが煙とみゆる也。雜談抄曰、室の八嶋の事、源經兼下野守にて在國之時、或者便書を持て向二國府一雜事など乞に云々經兼云、あれ見給へ、むろの八嶋は是之。都にて人に語給へと云けるに、いかでかはおもひありとはしらすべき室の八嶋の煙ならでは。下野國の野中に嶋あり。淸水の出て、氣の立がけぶりに似たる也

香切火（カギロヒ） 萬葉集

【漢名】陽餤 天祿識餘

【今名】カゲロフ

物理小識曰、燕趙齊魯之郊、春夏間野望曠遠處、如江河白水瀲漾、近之則復不見。土人毎爲陽餤。燕眞火之氣、望日上騰、而爲滋潤之水土所鬱嵒、搖颺重蒸、故遠見其動搖蒼々之色。得气而爍㸌。故又見其一片、浩然如江河之流也。愚者曰、日中野馬飛星爍然者、陽餤之燦也。唐詩鼓吹曰、莊子消遙篇云、野馬也。塵埃也。注、野馬春月澤中之遊氣、塵埃之細者也。天祿識餘曰、野馬、莊子野馬注云、日光尙未詳悉。按内典龍

枝大士曰、日光看㢡微風吹之曠野中轉、名之爲陽燄。愚夫見之謂之野馬、渴人見之以爲流水。摭言曰、韓偓詩窓裡、日光飛野馬。淸異筆談曰、廣野中陽燄、望之如波濤奔馬、及海中蜃氣爲樓臺人物之狀。此皆天地之氣、絪縕盪潏回薄變幻何往不有、故知萬象者一聚之氣兩間之幻有也

一名　蜻火　萬葉集卷第十曰、今更ニ、雪零目八方、蜻火之、燎留春部常、成西物乎。同卷第二曰、蜻火之、燎流荒野爾。同第二曰、香切火能、燎流荒野爾。同第六曰、炎乃、春爾之成者。字典曰、炎、集韻本作爓。亦同燄爓

介布利　倭名類聚抄

漢名　烟

名物攷曰、劉書云、烟ハ生ス於火ニ、而鬱火者烟也。正字通曰、煙火鬱氣。又曰、黑、說文所レ熏スル之色、鬲上ニ出ヅル煙孔ナリ也。又曰、陸機演連珠、煙出于火、非火之和、情生于性、非性之適。故火壯則煙微、性充則情約。又曰、煙烟

火鬱氣

一名　介夫利　新撰字鏡。倭名鈔曰、烟、四聲字苑云、烟、火燒草木黑氣也。於賢反、字亦作煙。和名介布利。唐韻云、爩、烟氣也。音鬱　俗語云、介布太之

火氣　萬葉集第十二曰、吾山爾、燎流火氣能、外見申尾。同卷第三曰、綱乃浦爾、塩燒火氣、夕去者、行過不得而、山爾棚引。同第五曰、可麻度柔播、火氣布伎多弖受。字典曰、煙、說文火氣也 () 萬葉集第二曰、手結我浦爾、海未通女、塩燒炎

集註　百練抄第七曰、仁安二年九月廿七日、子尅皇居燒亡。內印雖レ在ニ煙中一不レ燒云云。明月記曰、承元二年五月十五日云云東方煙忽見。九月廿七

龍ノ下「命」アルベキカ
下ノ下「姫神」アルベキカ

日、夜半許西方有火、望之煙甚細高

暴火 三代實錄

一名 奇光 三代實錄

集註

大隅國於曾國

續日本紀第三十九日、延暦七年秋七月己酉、太宰府言、去三月四日戌時、當二大隅國贈於郡曾乃峯ノ上一火炎大熾、響如二雷動一、及二亥時一火光稍止、唯見二黒烟一。然後雨レ沙、峯下五六里沙石委積、可二二尺一、其色黒焉

肥後國阿蘇山

三代實錄卷第九曰、貞觀六年十二月廿六日己卯、太宰府言、肥後國阿蘇郡正二位勲五等健磐龍命神靈池、去十月三日夜、有レ聲震動。池水沸二騰空中一、東西洒落。其落二東方一者、如レ布延縵、廣十許町。水色如レ漿、黏二着草木一。雖レ經二旬日一不二消解一。又比賣神嶺、元來有二三石神一、高四許丈。同夜一石神嶺崩。同卷第十四曰、貞觀九年八月六日壬申、太宰府言、肥後國阿蘇郡正二位勲五等建磐龍神、正四位下所レ居山嶺、去五月十一日夜、奇光照耀。十二日朝震動乃崩。廣サ五十餘丈、長サ二百五十餘丈

薩摩國開聞山

三代實錄卷第二十六曰、貞觀十六年秋七月二日戊子、地震。太宰府言、薩摩國從四位上開聞神山頂、有レ火自燒。煙薫滿レ天、灰沙如レ雨、震動之声聞二百餘里一。同卷第四十八曰、仁和元年冬十月、薩摩國言、同月十二日夜、晦冥、衆星不レ見、砂石如レ雨。撿二之故實一、頴娃郡正四位下開聞神、発レ怒之時、有二如レ此事一。國宰潔齋

レ將、雨砂乃止。八月十一日震聲如レ雷、燒炎共熾、雨砂滿地。晝ニシテ而猶レ夜。十二日自レ辰至レ子、雷電砂降未レ止。砂石積レ地、或處一尺已下、或處五六寸已上。田野埋瘞、人民騷動云云

豐後國

救覃峯 豐後國風土記曰、救覃峯、此峯頂恒燎レ之

上野國赤木嶽 吾妻鏡卷第四十一曰、建長三年四月廿六日丙辰、去十九日、上野國赤木嶽燒。爲ニ先例兵革兆ニ之由云云

駿河國富士山 續日本紀卷第三十六曰、天應元年秋七月癸亥、駿河國言、富士山下雨レ灰、灰之所レ及、木葉彫萎。日本記略曰、延曆十九年六月癸酉、駿河國言、自ニ去ル三月十四日ニ迄ニマデ四月十八日ニ、富士山巓自燒ク。晝ハ則烟氣暗瞑、夜則火光照ラス天ヲ。其聲如レ雷、灰下ルコト如レ雨。山下川水皆紅色也。延曆二十一年正月乙丑、是日勅、駿河相摸國言、駿河富士山、晝夜恒燎。砂礫如レ霰者云云。五月甲戌、廢ニ相摸國足柄路ヲ、開ク筥荷途ヲ。以ニナリ富士ノ燒碎石塞グレヲ道也。承平七年十一月某日、甲斐國言、駿河國富士山神火埋ニ水海ヲ。三代實錄卷第八曰、貞觀六年五月廿五日云云駿河國言、富士郡正三位淺間大神大山、其勢甚熾。燒クコト山ヲ方一二許里、光炎ノ高二十許丈。有レ雷、地震三度。歷ニ十餘日ヲ、火猶不レ滅。焦レ巖崩レ嶺、沙石如レ雨、煙雲鬱蒸、人不レ得レ近。大山西北、有ニ本栖水海、所レ燒巖石、流レ埋ニ海中ヲ、遠サ三十許里、廣サ三四許里、高サ二三許丈。火焰遂屬ニ甲斐國堺ニ。同卷第九曰、貞觀六年七月十七日辛丑、甲斐國言、駿河國富士大山、忽有ニ暴火ニ。燒ニ碎岡巒ヲ、草木焦熱、土鑠石流、埋ニ八代郡本栖并ニ剗兩水海ヲ。水熱如レ湯、魚鼈皆死。百姓居宅、與レ海共埋ル。或有レ宅無レ人、其數難レ記。兩海以東、亦有ニ水海、名曰ニ河口海ニ。火焰赴ニ向河口海ニ。本栖剗等ノ海、未ニ燒埋ニ之前、地大震動、雷電暴雨、雲霧晦冥、山野難レ辨。然後有ニ

此災異㆒焉。扶桑略記第三十曰、永保三年三月廿八日、有㆓富士山燒燃恠㆒焉。萬葉集第三曰、詠不盡山歌。燎(モユル)火乎、雪以滅(モチケチ)、落雪乎、火用消通(モチケチツヽ)都。太平記第二曰、富士の高峯を見給へば、雪の中より立烟。更級日記曰、富士の山は此國なり。我生出國にては、にしおもてにみえし山なり。その山のさま、いと世にみえぬさま也。さまこと成山のすがたの、こんじやうをぬりたるやうなるに、雪の消る世もなくつもりたれば、色こききぬに、しろきあこめきたらんやうに見えて、山のいたゞきの、すこしたいらぎたるより、烟は立のぼる。夕暮は火のもえたつも見ゆ○萬葉集第十四曰、佐奴良久波、多麻乃緒婆可里、古布良久波、布自能多可禰乃、奈流佐波能其登。袖中抄曰、ふじのなるさはとは、ふじのやまのみねに、いけのごとくにおほきなるさはあり。その水と火と相鬪して、けぶりと水氣と相和して、たちのぼる。火もえ水のわきかへるを と、つねにたえず。されば鳴澤とは申と云々。古老傳云、山に神ます、淺間(アサマ)の大神となづく。いたゞきの上に、平地一里許、中央の外にして躰こしきをかしぐがごとし。こしきのそこに神池あり。池のなかに大石あり。石躰あやしくて、うづくまれるとらのごとし。そのこしきのなかに、つねに氣あり。その色純青也。そこをみれば湯のごとくにわきあがる。とをくしてのぞめは常に烟火のごとし。宿雪はるなつきえず。山のこしよりしも腹(フトコロ)のもとにとゝまて、達することえず。白沙のながれくだる故也。竹取物語曰、かのたてまつるふしの藥に、またつぼぐしして御つかひにたまはす。ちよくしには、月のいはかさといふ人をめして、するがの國にあなる山のいたゞきにもてゆくべきよしおほせ給ふ。峯にてすべきやうをしへさせ給ふ。御ふみふしのくすりのつほならべて、火をつけてもやすべきよしおほせ給ふ。そのよしうけ

たまはりて、つはものどもあまたぐして、山へのぼりけるよりなむ、そのやまをふじのやまとなづけける。そのけぶりいまだ雪の中へたちのぼるとぞいひつたへける

伊豆國

扶桑略記第廿二日、宇多天皇仁和三年十一月二日、伊豆國獻新生島圖一張。見其書中。神明放火、以潮所燒。則如銀岳、其頂有綠雲之氣。細事在圖中、不更記之

附錄 諸火

百練抄第四日、一條天皇永祚元年六月十九日、鴨社御殿前大樹顚倒。數星自樹中飛、指南連去。同卷第五日、寛治七年十月廿八日、御笠山上有光耀。放其光五ヶ度。同第七日、嘉應二年正月四日、日吉社有光物、其色如虹。出大宮正面指南上畢。承安元年正月廿二日、南方有赤光、其勢如車輪。同第八日、治承三年三月二日、洛中有光物。治承四年七月十九日、有大流星、其光如炬火。十月七日、亥刻有流星變、出紀伊國方、入福原東北山。大如大土器、渡北斗中舍輝二許丈。入山之後、其光不消及一町。本朝無此變、若可謂天裂歟。建長四年十一月十八日云云、同日卯時許、北野早取社後自芝上火出來。炎高五許丈、登梢梢。即其間及雷鳴。吾妻鏡卷第十二日、建久三年四月卅日、丑剋若宮職掌紀藤大夫宅燒亡。不移他所、諸人走集之處、家主云、是非放火等之疑、偏存天火之由云云。明月記曰、嘉祿元年十一月八日云々去月廿七日、廣田寳殿以下炎上。件社垂跡以來無火事、忽神火出燒給、非如失火事云々。太平記二十三日、遙ナル海上ニ、裝束ノ唐笠程ナル光物二三百出來タリ。海人ノ罐燒居去火カ、鵜船ニ燃ス篝火歟ト見レバ云云

古名錄火部卷第六　終

古名錄金部卷第七目錄

金類

久我禰（クガネ） 金　○靑金　○ゆりかね砂金　○大和金

○駿河金　○なすのゆりかね　○佐渡金

○金薄

○古加祢乃須利久都（コガネノスリクヅ）金屑

之呂加祢（シロカネ） 銀　○ひた地がね　○飛彈銀　○信濃銀

○備前銀　○長門銀　○伊豫銀　○肥前銀

○しろばく銀薄

○銀乃須利久都（シロカネノスリクヅ）銀屑　黃銀

阿加々祢（アカヾネ） 銅　○山城銅　○攝津銅　○因幡銅

○石見銅　○備前銅　○美作銅

○備中銅　○備後銅　○周防銅　○長門銅

○豐前銅　○銅薄　○熟銅　○半熟銅

金銅　黃銅　〇金銅薄　白銅
〇ちうでい
滅金　滅銀
しやくどう　紫金　四分一
中尺(サウジャク)　鍮　奈萬利(ナマリ)　鉛　〇鉛錢
〇蜜陀僧
之路奈麻利(シロナマリ)　錫　〇白鑞薄

鑛

美都加祢(ミツカネ)　水銀
〇美豆加祢乃加須(ミツカネノカス)　水銀粉　久路加祢(クロガネ)　鐵　〇駿河鐵
〇美豆加祢乃介布利(ミツカネノケフリ)　〇常陸鐵
〇美作鐵　〇備後鐵　〇出雲鐵　〇近江鐵　〇能登鐵
〇安良加祢(アラカネ)　砂鐵　〇布介留加祢(フケルカネ)　鋼鐵

久呂加祢乃波太（クロカネノハタ）鐵落

加祢乃佐比（カネノサヒ）鐵鏽　○ふしかね鐵漿

通計六十八種

古名錄金部卷第七

紀藩　源　伴存撰

金類

山堂肆考曰、金者金銀銅鐵鉛錫之總名。海南日抄曰、金味辛。白虎通金味所以辛何西方煞傷成物金所以殺傷之也。猶五味得辛乃委煞也。元王天與。尙書纂傳云、金之在火別有辛氣○古事記曰、訓金云迦那、訓金云加尼。倭名鈔國郡部曰、伊勢國朝明郡大金、於保加禰。筑前國蓆手郡金生、加奈布○柳河東集、注曰、礦、金銀銅鐵璞也

久我禰 萬葉集　漢名 金 本草　今名 コガネ

一名 古我禰 倭名類聚鈔曰、金、和名古我祢。萬葉集、卷第十八曰、賀下陸奧國出金詔書上哥一首并短歌云云吾大王能、毛呂比登乎、伊射奈比多麻比、善事乎、波自米多麻比弖、久我禰可毛、多能之氣久安良牟登、於母保之弖、之多奈夜麻須爾、鷄鳴、東國能、美知能久乃、小田在山爾、金有等、麻宇之多麻禮、御心乎、安吉良米多麻比、天地乃、神安比宇豆奈比、皇御祖乃、御靈多須氣弖、遠代爾、可可里之許登乎、朕御世爾、安良波之弖安禮婆、御食國波、左可延牟物能等、可牟奈我良、於毛保之賣之弖云云。反歌云云須賣呂伎能、御代佐可延牟等、阿頭麻奈流、美知能久夜麻爾、金花佐久。天平感寶元年五月十二日

於㆓越中國守館㆒大伴宿禰家持作之。扶桑略記曰、聖武天皇天平廿一年四月十八日、改爲㆓天平感寶元年㆒是自㆓去正月黄金始出㆒也。孝謙天皇天平感寶元年己丑七月二日甲午、於㆓大極殿㆒即位。即日改㆓天平勝寶元年㆒。榮花物語曰、又みちかせが本などいみじきもの、しろがねこがねのはこに入たるなどをぞたてまつらせ給へる。源氏物語若菜曰、こがねの鳥云々。同横笛曰、又心ざし給て、こがね百兩をなむべちにせさせ給ける。同寄生曰、こがねもとむるゑしもこそなど云々。同かげろふ曰、宮より右近がもとに、しろがねのつぼに、こがねいれて給へり。職人盡歌合曰。金ほり、ながむとてこがねもほらぬつんさひのさびてぞ見ゆる秋の夜の月云々 一さほにあまるこがねのをもばかりいく目ともなく人ぞみらるゝ○海東諸國記曰、陸奥產金、出羽州有温泉產金。新猿樂記曰、本朝物金銀。大明一統志曰、日本國土產金、東奥州出
さ

かね 源氏物語若菜曰、おなじきがねをも宮づかひなしたる心ばへあり

小金 水戸藥王院、永祿元年柱立注文曰、御はしら立御ゆわい事、小金三りやう。伊勢貞丈雜記曰、旧記に黄金、又金子などゝあるは、その大判小判の事にあらず、板金竿金などを切て進物にするを云。何兩と云は、秤の目也。板金と云は、金を吹たてゝ、盆の如く丸くして、板のやうにうすく打のばしたるを云なり。蜷川記ニ云、板金ひろうの事、五枚十枚百枚にと候へば折又は唐の盆などにすへ候テ披露候。又只一枚二枚も同前に候。御前などにて包をあけ候事などはなく候。但時宜により相變事可有之云々竿金と云ハ、竹ながしとも、金にても銀にても、火にてとかして、細き竹の筒へ流しこみ、竿のごとくしたるを、入用程ツヽに切てつかひ進物などにもしたるゝ

金子 大内問答曰、柄香の糸金子ぬり金子目貫前のごと

廿八　廿三ノ課　延喜十五年三月

し。金銀圖錄曰、多門院日記畧、天正八年十二月金子一枚、同九年八月金子一枚、十一月先頃安土ニテ御借用金子二枚七兩本利今日持參了。私ヨリ一枚一兩調借了之下略　神龜院梵舜記ニ、天正十三年十二月盛方院ヘ金子借狀云〻〇太閤記天正十三年金賦ニ金子五千枚、銀子三万枚ト觀ユ〇續博物志曰、印子金、世傳淮南王安藥金上ニ有ニ印子一、篆ニ文劉主字一、壽州八公山土中、耕者往往得レ之。小餅重半兩有ニ一印一、大餅至ニ七兩一有ニ二十許印一。閱長前後、花印子、舟印子等ノ目アリ。金銀私考ニ、金位極上々ヲ印子ト云。又印子銀ヲ載タリ〇類聚雜要抄曰、瓶宮一双云云中ノ身納云云同小宮納十二合。丸合歯ノ丸玉卅顆。同平玉卅。

爾雅曰、黃金謂ニ之盪一

磨金

吾妻鏡卷第九曰、次觀自在王院佛壇者銀也。高欄者磨金也。扶桑略記廿二日、延喜五年四月十四日、法皇於ニ叡山戒壇院一、以ニ增命阿闍梨一、爲レ師、受ニ廻心戒一。〻壇之上、現ニ紫金光一。見者奇レ之。同廿三日、慈覺大德、坐ニ於內院磨金師子一。後宇多院御灌頂記曰、倩案ニ往事一、寬平法皇延喜十年、於ニ台岳一御入壇之時、有ニ紫金之光一云云廣博物志曰、孔融聖人優劣論、金之優者名曰紫磨、猶人之有聖也。續博物志曰、華俗謂ニ上金ニ爲ニ紫磨金一。夷俗謂ニ上金一爲ニ揚邁金一

こん

榮花物語本の雫曰、いはんや、こんごん、るり、しんずとうをもて、かきうつし、くやうじ給へる。萬葉集第十三曰、今還金。倭名鈔曰、金錢、俗云古無歃。高倉院嚴嶋御幸記曰、こんぐのへいは、かねみつの弁つたへとりて云〻。明月記曰、建仁三年十二月十五日、右大將、金銀御幣之儀同存日。廿二日云〻取金銀幣。天下南禪寺記曰、平治元、金吾將軍藤信賴伏レ誅、其子以レ幼流ニ刑奧州一。治承中召還、家ニ于此一。埋ニ金於茲山一。故曰ニ福地一。又曰、以ニ其家多レ金、人呼ニ金侍從一。而遂埋ニ金龍一以鎮ニ此地一云〻東大寺別當次第曰、長久

二年大衆供ニ養飛驒會ニ。十二月廿九日自ニ撿非違使廳ニ糺ニ反黃金等ニ送レ之。後宇多院御灌頂記曰、黃金百兩、薄様褁之

練金

延喜式卷第五曰、齋宮、造備雜物。練金小十一兩一分二銖。同卷第二十三曰、民部下、交易雜物。下野國、練金八十四兩。同卷第二十四曰、木工寮、禁ニ太刀ニ練金一兩。同卷第四十九曰、凡二季大祓横刀八口。其料、練金一分。觀世音寺資財帳曰、錬金貳拾貳兩〇新撰字鏡曰、錬冶金也。祢利加祢。品字箋曰、鑠金而久之曰錬。正字通曰、錬前治銅鐵使精熟。皇極經世曰、金百錬然後精

生色

塵添壒囊鈔曰、相應論音義ニ云、信行生色可レ染ト者、生色ハ即金也。言ク生ヲ便黃色ニメ不レ可レ變レ改メ也。可染ハ即銀也。言ハ色可レ染變故也ト云云。或日記ニ云、白河院此生色可染詞ヲ諸宗ニ勅問アリケルニ、法宗ヨリ信與僧都註シ申テ云、生色トハ金也。可染ハ銀。但訓讀ハ不レ知ト云云。又江中納言匡房卿ニ御尋アリケルニ、申上テ云、從ニ唐人ノ許ニ給解文ニ云、進上生色可染開テ箱見レハ之ヲ、只金銀計リアリキ。爰ニ知ヌ、生色ハ金、可染ハ銀也ト云云〇品字箋曰、生。又生熟之對也。如俗以物之未成熟、人之未識熟者、皆謂之生〇日本書紀卷第一曰、韓郷之島ハ是有ニ金銀ニ。又曰、推古天皇十三年夏四月辛酉朔、天皇詔ニ皇太子大臣及諸王諸臣ニ、共同發ニ誓願ニ、以始造ニ銅繡丈六佛像各一軀ニ。及命ニ鞍作鳥ニ為ニ造佛之工ニ。是時、高麗國大興王聞ニ日本國天皇造ニ佛像ニ、貢ニ上黃金三百兩ニ。天武天皇白鳳八年、甲子、新羅遣ニ阿飡金項那、沙飡薩藥生ニ朝貢也。調物、金銀鐵云云亦別獻ニ物天皇皇后太子ニ。貢ニ金銀刀旗之類ニ各有レ數。十年冬十月乙酉、新羅遣ニ沙喙一吉飡金忠平、大奈末金壹世ヲ貢レ調。金銀銅鐵、錦絹鹿皮、細布之類各有レ數。別獻ニ天皇皇后太子金銀錦霞𦅸皮之類ニ各有レ差。朱鳥元年夏四月戊子、新羅進調從ニ筑紫ニ貢上云云金云云

延長七年三月

持統天皇二年二月庚寅朔、辛卯、太宰獻ニ新羅國調賦、金銀、絹布、皮、銅鐵之類十餘物、并別所ㇾ獻佛像、種々彩絹、鳥馬之類十餘種、及霜林所ㇾ獻金銀彩色、種々珍異之物、并八十餘物一。續日本紀卷第三十四曰、寶龜八年五月癸酉、賜ニ渤海ノ王一書曰云云、又緣ニ都蒙請一、加ニ附黄金小一百兩一。侍中群要卷第八曰、諸使事云云交易金銀朱砂雜丹雜器造茶三月一。日本靈異記曰、道頭有ニ黄金山一。又曰、入ニ宮門一見有ニ王坐于黄金之座。令義解曰、金水桶金線柱ヲ奉ルコハ伊勢神宮ハ、楯戈奉ハ住吉之神一之類是也云云。伊勢大社奉ル金麻笥金ヲケ多々利一。日本紀略曰、延暦二十二年三月庚辰、遣唐大使葛野麻呂、副使石川道益賜ㇾ餞云云賜ニ葛野麻呂云云金二百兩、道益云云金一百五十兩一。扶桑略記廿四曰、造ニ純金觀世音菩薩一。高三許寸。續日本後紀第十九曰、嘉祥二年十月、嵯峨太皇太后遣ㇾ使奉ㇾ賀ニ天皇卌寶算一也。其獻物御挿頭。造ニ沈香山一以ニ純金一爲ㇾ鶴、令ㇾ銜ニ挿頭花一云云壬申、皇太子上ㇾ表、奉ㇾ賀ニ天皇卌寶算一。其獻物、机二前。一前、居ニ御挿頭花一、一前、置ニ純金御杖一。○令義解曰、金ハ貴ニ於銀一ヨリモ、鐵ハ賤ニ於銅一ヨリモ。即貴者用ㇾ小、賤者用ㇾ大

今案

本草啓蒙曰、聖武天皇天平二十一年奥州小田郡ヨリ黄金ヲ貢ス。是人皇ニナリテ千四百九年ヲ經テ始テ出ルナリト云。杜撰也。日本金ノ出ル始ハ、文武天皇大寶元年也。續日本紀ニ三月令ニ遣一凡海宿禰麁鎌ヲ于陸奥ニ冶ヒ金ト云。天平二十一年ニ先タツコ、元明元正二帝ヲ經テ暦數四十九年已前既ニ陸奥ニ金ヲ出セリ。萬葉集ニ天平感寶元年、賀ニ陸奥出スㇾ金ヲ詔書一哥ニ曰、遠代爾可可里之許登乎、朕御世爾、安良波之弖安禮婆、遠代爾可可里之許登トハ文武天皇大寶元年也。朕御世爾安良波之弖安禮婆ト云ハ、文武帝ノ時、金始テ陸奥ニ出デ、夫ヨリ冶ハセタマヒシニ、聖武帝天平二十一年ニハ、陸奥ヨリ多ク金ヲ冶出セルヲ

云ル也（）官本可可里ニ作ル。山當百首ニ可ヲ奈ニ改ム。杜撰也。丹鉛總錄曰、古書不可妄改、聊舉一端、如曹子建名都篇膾鯉臇胎蝦、寒鱉炙熊蹯、此舊本。五臣改作炰鼈、蓋炰鼈膾鯉毛詩之舊句、淺識者孰不以爲寒字誤。而從炰之字邪。不思寒與炰字形相遠、音呼又別。何得誤至於此。文選李善注云、今之時䏑謂之寒、蓋韓國饌用此法。鹽鐵論羊淹鷄寒、崔駰傳亦有鷄寒、曹植文寒鵠蒸麑。劉熙釋名、韓鷄爲正、古字寒與韓通也。王維老將行恥令越甲鳴吾君、此舊本也。近刻本爲不知者改作吳軍。蓋起甲吳軍似是適對、不思前頭已有詔書五道出將軍五言古時有用重韻、未聞七言有重韻也。維豈謬至此耶。按劉向說苑、越甲至齊雍門、狄請死之曰、昔者王田於囿左轂鳴軍左請死之曰吾見其鳴吾君也。今越甲至其鳴君豈左轂之下哉、正其事也見其事與字之所出、始知改者之妄。

集註

本草和名曰、古加祢川陸奧國。令集解曰、古記云、金黃金也。謂金生麗水也。續日本紀卷第十七曰、聖武天皇天平勝寶元年二月云云天平二十一年二月丁巳陸奧國始貢黃金。於是奉幣以告畿內七道諸社。夏四月甲午朔、勅曰、此大倭國者、天地開闢以來黃金波人國用理獻言波有登毛斯地者無物止念部流仁聞看食國中能東方陸奧國守從五位上百濟王敬福伊部內少田郡仁黃金在止奏弖獻此遠聞食驚伎悅備貴備云云食國乃東方陸奧國乃小田郡爾金出在止奏氏進禮利云云又見出金入及陸奧國國司郡司百姓爾至麻弖治賜比天下乃百姓衆乎撫賜比惠賜久止宣云云授從五位上百濟王敬福從三位。乙卯、陸奧守從三位百濟王敬福貢黃金九百兩。甲辰、陸奧國介從五位下佐伯宿祢全成、鎮守判官從五位下大野朝臣橫刀、並授從五位

上。大掾正六位上余足人、獲金人上總國人丈部大麻呂、並從五位下、左京人无位朱牟須賣、外從五位下、私度沙弥小田郡人丸子連宮麻呂授法名應寶入師位。冶金人左京人戸淨山、大初位上。出金山神主小田郡日下部深淵、外少初位下。同卷第十八曰、天平勝寶四年二月丙寅、陸奧國調庸者、多賀以北諸郡、令輸黃金。其法、正丁四人一兩。以南諸郡依舊輸布。同卷第二十曰、天平寶字元年秋七月、庚戌云云又去年四月全成貸金入京。于時、奈良麻呂語全成曰、相見大伴古麻呂以否云云同卷第廿一曰、廢帝天平寶字二年八月戊申、勅曰、昔者、先帝敬發洪誓、奉造盧舍那金銅大像。若有朕時不得造了。願於來世改身猶作。既而鎔銅已成、塗金不足。天感至心也、信終出勝寶之金。我國家於是初有奇珍。開闢已來、未聞若斯盛德者也。同卷第二十七曰、稱德天皇天平神護二年六月壬子、刑部卿從三位百濟王敬福薨云云天平年中、仕至從五位上陸奧守、時聖武帝造盧舍那銅像、冶鑄云畢、塗金不足、而陸奧國馳驛、貢小田郡所出黃金九百兩。我國家黃金從此始出焉。聖武皇帝甚以嘉尚、授從三位。延喜式神名記曰、陸奧國小田郡小。黃金山神社。百練抄第五曰、寛治七年四月廿八日、於大膳職勘問宇佐前大宮司公則、依犯用黃金也。扶桑略記廿四曰、延長四年五月廿一日、召興福寺寛建法師、於修明門外奏請。就唐商人船入唐求法、及巡禮五臺山。許之。又給黃金小百兩以宛旅資。云云六月七日、依有院仰、勅奉黃金五十兩。此爲給入唐求法沙門寛建也者。太神宮諸雜事記曰、天平廿一年四月日、從陸奧國金進官。是率爲公家重寶也。仍以同年七月二日、改天平勝寶元年。（己丑）當唐天寶八年、件出來之由、二所太

神宮仁令レ申給稲。延喜式巻第四曰、伊勢太神宮所須金四兩一分。北山抄曰、御元服儀云云天皇於拔陣給黄金。類聚雜要抄曰、香壺筥一双云云蒔繪料金廿九兩二分。各十四兩三分。蒔繪料金二百五十二兩二分ノ内、蒔繪ノ料一兩。明月記曰、寛喜二年六月廿一日、十三日行幸、被置物云云黄金廿兩爲金物。永享行幸記曰、從ニ御幸ニ參る物。金五十兩。宇治拾遺物語第十三曰、ひらなる小幸櫃のやうなる石のあるに、尻をうちかけてゐたり。小石をもちて、この石を手まさぐりにたゝきゐたれば、うたれてくぼみたるところをみれば、金色になりぬ

【貨用】大内家壁書曰、金銀兩目御定法之事。こがねしろがねの兩目之事は、京都之大法として、何れも一兩四文半錢にて、貳兩九文目たる處、こがねをば一兩五匁にうりかふ事、そのいはれなし。殊に御分國中如レ此云こ代はたかくもやすくも、其身〳〵のはからひたるべし。兩目の事は、京都の法をまもるべし。若此旨を背やからあらば、經ニ上裁ニ罪科有べし。自然又此御法を破畧を聞出事あらば、惜逢ニ糺明ニ其科不レ遁者、重科にをこなはるべし。仍下知如レ件。文明十六季五月日云こ

○青金

【今名】アヲガネ

【集註】格古要論曰、金其色七青八黄九紫十赤、以赤爲足色金也。天工開物曰、其高下色分七青八黄九紫十赤

類聚雜要抄曰、久安二年十一月廿五日、左衛門權佐殿聟娶料、私ニ調進手筥蒔繪ノ料、金廿兩燒十五兩加ニ小筥ニ定青五兩

○ゆりかね 藻塩草

【漢名】沙金 臺灣紀略

東西洋考曰、沙金卽金山所レ採者、排レ沙揀レ金、金未レ在レ鎔ニ、雖ニ黄光閃鑠ストレ視亦復類レ沙ニ、既ニ煎乃始成レ塊。朝野僉載曰、黄金出沙。天工開物曰、水沙中所レ出大者名ニ狗頭金ニ。小者

迗ハ迎ノ誤

使ハ便ノ誤カ

上ノ下「行」ア

名ニ麸麥金糠金ー。永昌府名勝志曰、永平縣、縣西山高四十里、越之得瀾滄水、有金沙、以火融之爲黄金

一名 ゆり金　八雲御抄曰、金。こ。ゆり。あを。やき。藻塩草曰、金こがね、ゆりがね、たすのゆりがね○永仁御即位用途記曰、砂金九兩二分。代二千八百五十疋○塵添壒囊鈔曰、沙汰ト云ハ何ゾ。沙汰ト云字ヲバ、イサゴヲソロフトヨム。汰（ソロフ）トハ選スル心也。沙汰デ金ヲ取ル如ク。伊勢貞丈雜記曰、古は云云金は砂金とて、金山より金をほり出し、白き石に取つきてあるを、石を打碎き、水に入ゆりて、砂をゆりて、砂をゆりすてゝ、金ばかりをえり取て、いまだ吹たてずして、すなの如くなるを、袋に入て進物にしける也。日記に、砂金何兩と云は、秤の量目也

集註　續日本紀卷第三十四曰、光仁天皇寶龜七年夏四月壬申、御ニ前殿ー賜ニ遣唐使節刀ー。詔曰云云賜ニ前入唐ノ大使藤原ノ河淸ニ書ヲ云云故今因ニ聘使ニ、便命ノ迗レ之、仍テ賜ニ絁一百匹、細布一百端、砂金大一百兩ヲ。續日本後紀卷第五曰、承和二年春正月乙丑、詔ノ寮レ充ニ陸奧國白河郡從五位下勳十等八溝黄金神封戸二烟ヲ。以テナリ應ニ國司之禱ニ令ルヽ採ニ得砂金ヲ、其數倍レ常ニ能ク助ケ遣唐之資ヲ也。同卷第十五曰、承和十二年春正月壬申、美濃國言、凡ソ上下ノ諸人、隨ヒ其位階ニ乘リ用ル「人馬ヲ、灼カニ立ツ條章ニ、而貢ス御鷹馬熊膽昆布并沙金藥草等ヲ使。或ハ以ニ遷替之國司ヲ、使レ宛ニ綱領ヲ、或差ニ浮遊之輩ヲ令レ得ニ公乘ヲ。而ノ公物有レ限、私荷無シ數。使等偏ニ假ニ威勢ニ、不シ憚ニ憲法ニ、驛子無レ由ニ告訴スルニ、運ニ迗山谷ニ、人馬斃亡スル、職トシテ此ニ之由ル。望請フ、除ニ非レ貢ス御鷹馬ニ并四度ノ使上之外、諸使等ヲ、以ニ初位已下子弟ヲ、被レ差ニ宛之ヲ者レハ。勅ノ依レ請、宜ク仰ニ陸奧出羽兩國、及東山道ノ諸國ニ、令メ知ラ此ノ制ヲ。三代實錄卷第十四曰、淸和天皇貞觀九年冬十月四日己巳、從五位上掃部ノ頭藤原朝臣貞敏

カルベキ

給ハ准ノ誤カ
十ノ上「綿」アルベキカ
勘ノ下「却」アルベキカ
常ハ當ノ誤カ

卒云云承和二年爲ニ美作掾兼遣唐使准判官一、五年到ニ大唐一、達ニ上都一、逢下能彈ニ琵琶一者劉二郎上。貞敏贈ニ砂金二百兩一。劉二郎曰、禮貴ニ往來一、請欲ニ相傳一ト。即授ニ兩三調一、二三月間、盡ク了ニ妙曲一。劉二郎贈ニ譜數十卷一。因問曰、君ノ師何人、素ヨリ學ニ妙曲一乎。貞敏答曰、是我累代之家風、更無ニ他師一。劉二郎曰、於戲昔聞ニ謝鎭西一、此何人哉云云。同卷第三十二曰、陽成天皇元慶元年十二月八日甲戌、先レ是ヨリ、大宰府言ス、資財、蕃客、遣唐使留置、進上等四箇帳、貢綿千一百五十二屯、從テ積ニ庫ノ底一、將レ致ニ腐損一。請相ニ轉沙金五百七十二兩一、以テ爲ニ永貯一、至レ是許シ玉フ之。同卷第三十六曰、元慶三年冬十月十三日己巳、勅ノ令上ニ太宰府ノ庫物之代、砂金六百三十三兩云云注ニ附ス官帳一。先レ是ヨリ、府司申請、毎ニ唐人來ル、募ニ貨物一直ニ借リ用庫物一、交關畢後、以ニ砂金一給レ官ニ、給綿、惣ヘ計返納。其ノ砂金一兩充ニ綿十六屯一、絹一疋宛ニ十四屯一。府司不レ能ニ勘ルコト、行來ニ尙シ矣。今常ニ交替之日。新司論シテ曰、物非ニ其ノ實一、相ニ違官帳一。仍テ不ニ受領一。而太政官去年八月四日符、只免ニ唐人諸譯之時返ニ上砂金三百六十一兩一。望請ノ准ニ據彼例一、被レ許レ注レ帳。從レ之。百練抄卷第七曰、仁平元年九月廿四日、左大臣送ニ砂金於宋客劉文冲一、去年進ニ送書籍一之故也。扶桑略記廿二曰、宇多天皇寬平二年十二月廿六日云云奏曰、天台前阿闍梨所レ寫一切經、未ニ校正一也云云今我國所レ書、經二千卷也。圖元貞元等目錄所レ來、四千餘卷也。爰爲レ求ニ加其卷數一、差ニ從僧一、令レ向ニ彼天台山一。即便書ニ件經ニ可レ送之狀、囑ニ送彼楊州人所一。彼人信ニ其言一、送ニ五十卷一。感喜贈ニ沙金一云云。同廿四日、延長七年九月十七日、左大臣忠平子息四人、共於ニ法性寺一設ニ五十賀齋會一。沙金百兩納ニ銀壺一、裹ニ青朽葉紗一、付ニ五葉松枝一。兵範曰、仁安元年九月十三日御佛事。木地硯宮皆具砂金十兩加納。續古事談曰、後一条院ヲサナクヲハシマ

シケル時。傅大納言參テ御前ニ候テ。金百兩ナゲチラシタルヤ御覽ジタル、イミジク興アル物ナリ。ト申サレケレバ、イマダミズ、イカナルゾト被レ仰ケレバ、大納言、マコトニヲモシロキ物ナリ、御覽ズベシトテ、ヲノコドモメシテ、ヲサメ殿ノ砂金百兩タテマツレトアリケレバ、藏人トリテ參タルヲヒキアゲテ、御前ニナゲチラサレタルヲ御覽ジテ、イヅラヲモシロキト被仰ケレバ、大納言、サラバステ候ナムトテヒキツ、ミテ、フトコロニ入テイデラレニケルトゾ。後嵯峨院宸筆御八講之記曰、砂金百兩を、かみや紙につゝみつゝ、柳筥にすへて、藏人頭これをもつ。五代帝王物語曰、砂金を宿紙につゝみて、柳筥に居られたり。園大曆曰、康永四年八月廿九日、今日天龍寺供養也云云有加布施云云砂金一裹蒔様入奥器置金折敷。古今著聞集卷第四曰、仁平の比、宋朝商客劉文冲、東坡先生指掌圖二帖、五代記十帖、唐書九帖、名籍をそへて宇治左府に奉り云云砂金卅兩をたまはせけり。太平記卷第三十三曰、四番頭人は沙金百兩充、金絲花ノ盆ニ入テ置。吾妻鏡曰、養和二年正月廿八日、可レ被レ奉ニ太神宮一之神馬砂金等事。日者有ニ其沙汰一。今日潔齋之儀、獻ニ此等於營中一覽レ之。直所レ令ニ採用一給也。先金百兩。千葉介常胤、小山四郎朝政等進レ之。二月八日、被レ奉ニ御願書於伊勢太神宮一。云云御願書云云砂金神馬等令レ捧云云。同卷第六曰、文治二年四月廿四日、陸奥守秀衡入道請文參著。貢馬貢金等、先可レ沙ニ汰進鎌倉一。可レ令レ傳ニ進京都一由載レ之云云又如ニ貢馬貢金一者、爲ニ國土貢印一爭不レ管ニ領一哉。自ニ當年一早予可ニ傳進一。且所レ守ニ勅定之趣一也云云。八月十六日、西行上人退出。頻雖レ抑ニ留一、敢不レ拘レ之。二品以ニ銀作猫一、被レ充ニ贈物一。上人乍レ拜ニ領之一、於ニ門外一與ニ放遊嬰兒一。云云是請ニ重源上人約諾一、東大寺料爲レ勸ニ進沙金一、赴ニ奥州一。以ニ此便路一、巡ニ禮鶴岡一云云十月一

施三井寺ノ下「青瀧院修理料ニ云」トアリテ此下ノ文ト合ハズ

日、陸奥國今年貢金四百五十兩、秀衡入道送ニ獻之一。二品可下令ニ傳進一給上之故也。三日、貢馬並秀衡所レ進貢金等、所レ被ニ京進一也。主計允行政、書ニ解文一云云。同卷第七日、文治三年十二月二日、被レ進ニ飛脚於京都一。行程被レ定ニ七箇日一。是來十一日、法皇熊野御參詣之間、依レ被レ進ニ砂金一也。同卷第八日、文治四年六月十一日、泰衡京進貢馬、貢金、桑絲等。昨日著ニ大磯驛一。可ニ召留一歟之由、義澄申レ之。泰衡、同ニ意豫州一之間、二品依下令ニ憤申一給上。度々被ニ尋下一云云。同卷第九日、文治五年三月云云奧州貢金事、云ニ明年御元服料一、云ニ院中御用一、旁有ニ所用等一。而泰衡空以懈怠、尤奇恠事也。早可下令ニ催進一給上。且又被レ仰ニ國司一畢。以前條々院宣如レ此、仍執啓如レ件云云。同卷第十日、建久元年十一月十三日、砂金八百兩云云。所レ被レ進ニ禁裏一也。十二月八日、前右大將家、砂金十兩、施ニ三井寺御光料一也。被レ下ニ佛師院尊ニ支度。可被進二百兩旨。有御教書。五月十日被進砂金百三十兩於京都　且可傳獻由。被仰遣二條前中納言能保卿之許云云是東大寺大佛御光料去春之比被進之殘也。三百兩可入之由云云。天龍寺供養記曰、砂金一裹。裹ニ薄様ニ入ニ置口之器ニ置ニ金折敷一。相國寺供養記曰、翌日被レ送ニ御布施一。導師。砂金百兩。居ニ銀折敷一。類聚雜例曰、長元九年六月十九日云云入レ夜以後、院別當定經朝臣日被レ奉ニ砂金等於女院并宮々一。院沙金七百卅余兩。中宮四百兩。一品宮二百兩。齋院二百兩。義滿記曰、砂金百兩云々。義輝公御元服記曰、定額進上折紙目錄也。砂金十兩包金銀同盆白銀。御元服儀式終而禁裏ヨリ御使、從ニ若君一砂金卅兩、居ニ銀盆一被レ令ニ進上一レ之。又曰、同日勅使公家面々下ニ向坂本一云云先大外記持ニ參大將一。聞書ニ入覽筥中次右衛門佐藤原永相取之進ニ覽中一、沙金十兩入ニ筥中一被レ返ニ下之一云云大外記長雅沙金一袋拜ニ領之一、大外記枝賢沙金二袋拜ニ領之一。

室町殿行幸記曰、御引物、沙金百兩。銀御器ニ入、同臺銀。康富記曰、嘉吉二年十月廿五日、是日禁裏樣御瘡物平癒御候間、御付藥洗落之。御内藥ヲ今日まで被食也云云早々御本復天下大慶也、珍重候ヘ。藥師下郷(シヤガウ)也。盆一砂金三十兩被下云云。台記別曰、久安三年知足院禪閤七十賀、砂金二百兩、已上女院御沙汰

○大和金　源平盛衰記〔陸奧ノ金ハ即日本ニ多出レ金ヲ始也。故載ニ本條ニ不レ列ニ于此ニ

集註　源平盛衰記卷第卅六曰、金嶽ハ金ノ多ケレバ金峯山ト名ヲ得タリ。塵添壒囊鈔卷第九曰、凡ソ金ハ三國ニ有共、昔ハ此國ニハ希也。サレバ聖武天皇、東大寺御建立ノ時、大佛ノ薄ノ爲ニ金ヲ求メ給フニ、无カリシカバ、和州金峯山ハ金ノ山也ト申セバトテ、良弁僧正ニ仰テ、藏王權現ニ申請(ウケ)サセ給ヒケルニ

○駿河金　續日本紀

集註　續日本紀卷第十八曰、孝謙天皇天平勝寶二年三月戊戌、駿河國從五位下楢原ノ造東人等、於ニ郡内廬原郡多胡ノ浦濱ニ、獲ニ黃金ヲ献ノレ之。練金一分、沙金一分。於レ是ニ東人等ニ賜フ勤臣姓ヲ。五月丙午、伊蘇志臣東人之親族三十四人ニ、賜ニ姓伊蘇志ノ臣族ヲ。十二月癸亥、授ニ駿河國ノ守從五位下勤ノ臣東人ニ從五位上、獲レ金ヲ人无位三使ノ浦淨足從六位下ヲ。賜ニ絁二十疋、綿四十屯、正税二千束ヲ。出セル金ヲ郡ニハ免ス今年ノ田租ヲ。郡司主帳已上ニハ進ム位ヲ有レ差。文德實錄卷第四曰、仁壽二年二月乙巳、參議正四位下兼行宮内卿相摸守滋野朝臣貞主卒。貞主者、右京人也。曾祖父大學頭兼博士正五位下猶原東人該ニ通九經ニ、号爲ニ名儒ト。天平勝寶元年爲ニ駿河守ニ、于レ時土出ニ黃金ヲ。東人採而献レ之。帝美(ホメテ)ニ其功ヲ曰、勤哉臣也。遂取ニ勤臣之義ヲ賜ニ姓ヲ伊蘇志臣ト。駿河國風土記曰、廬河郡貢黃金、鞠込貢黃金

○なすのゆりかね　八雲御抄曰、

操　雲州本「採」ニ作ル

なすのゆりかね。倭名鈔國郡部曰、下野國那須郡那須

集註　續日本後紀卷第四曰、承和二年二月戊戌、下野ノ國武茂ノ神ニ奉レ授ニ從五位下一ヲ。此ノ神ハ坐セリ採ニ沙金ヲ之山上ニ。延喜式卷第二十三曰、民部下、交易雜物。下野國、砂金百五十兩。陸奧國、砂金三百五十兩云云。但下野國ノ砂金者、使ニ俘夫操一ヲ食亦充ニ正税ニ

○佐渡ノ金　宇治拾遺

集註　宇治拾遺曰、佐渡國にこそこがねのはなさきたる所はありしかと人にいひけるを、守つたへきゝて、そのおとこを守よびとりて、物とらせなどして、すかしとひければ、さどの國には、まことに金の侍るなり。候し所を見をきて侍るなり、といへば、さらばいきてとりてきなんや、といへば、つかはさばまかり候はんといふ。さらば舟をいだしたてんといふに、人をば給り候はじ。たゞ小舟一と、くひ物すこしとを給候て、まかりいたりて、もしやとりてまいらんといへば、たゞこれがいふにまかせて、人にもしらせず、小船一と、くふ物すこしとをとらせたりければ、それをもてさどの國へわたりにけり。一月ばかりありて、うちわすれたるほどに、このおとこふときて、守に目を見あはせたりければ、守心えて、人づてにはとらで、みづから出合たりければ、袖うつしに、くろばみたるさいでにつゝみたる物をとらせたりければ、守をもげにひきさげて、ふところにひき入て歸入にけり。そのゝちかねとりのおとこは、いづちともなくうせにけり。よろづに尋けれども、行方もしらずやみにけり。いかに思て失たりといふ事をしらず。金のある所をとひたづねやすると思けるにやとぞうたがひける。その金八千兩ばかりありけるとぞかたりつたへたる。かゝれば佐渡國には金ありけるよしと。能登國のものどもかたりけるとぞ。伊勢貞丈雜記曰、東照權現宮の御代、慶長年中よ

り佐渡の金山を初メ、諸國も年〻に増して、天下財寶とぼしからぬやうに成たり

○金薄

品字箋曰、箔帷箔。布帳。箔。薄簾也。又珠箔。珠簾之謂。又箔薄也。今金銀銅錫箔之謂也。又曰箔。簾也。又薄也。故曰箔。天工開物曰、凡金箔毎ニ金七厘ニ造ル方寸一千片ヲ。粘シ鋪シ物面ニ、可レ蓋フ縦横三尺ヲ。凡造ニ金箔ヲ既成ニ薄片ト、後包ミ入烏金紙内ニ、竭レ力揮レ推打ニ成

集註

延喜式巻第五曰、齋宮造備雑物、金薄四十枚。同巻第十七曰、内匠寮、屏風一帖云云料金薄卅枚。同巻第三十四曰、木工寮、供神料、金装太刀一口料、金薄六枚。金装太多利一基料、金薄三枚。金装麻笥一口料、金薄十枚。金装加世比一枚料、金薄七枚。御贖料。金銀人像一枚料、金薄銀薄各三枚。同東宮金銀薄云云各八枚。御贖鐵人像料、金薄千四百四十枚、九月一日申レ省請受。十訓抄曰、大納言俊明卿、丈六の佛を造らるゝ由を聞て、奥州の清衡薄の料に金を奉けるに、不取して返しつかはしける。永享九年行幸記曰、云〻皆金薄之平文直垂。砂石集曰、鎌倉二町ノツボ子トヤランキコヘシ徳人有ケリ云云主年始ノ勤ナンドセントテ、持佛堂ニ詣デ、本尊ノ阿弥陀佛金色ノ立像ヲ拝ミ奉レバ、御ホウニ錢ノ形クロク付テ見ヘケリ云云佛師ヲヨビテ金薄ヲオサスルニ、薄ハイクヘトモナクカサナレドモ、疵ハスベテカクレズ

形狀

中右記曰、金薄弘重九千二百枚、大當金九兩、交易万五千五百九十五枚、相加當金十三兩、人々訪南御方五百枚ホ中御前六十枚。福田方曰、凡金銀箔ヲバ瓷器(カハラノウツハ)物ノ内ニ入テ、膠ヲ洋テ一シヅク落シ入テ、指ニテ手ヲ早メ研マワシテ、泥ドロノ如ニメ、後ニ水ニタテ、スマシテ、上ヲ捨テ瓦器ニウツシ入テ、焙干テカタメテ、藥ニ入テ使ヘ。其法繪師ノ泥ヲトクニ同ジ。藥ノ衣ニ貼(ツクル)者不可多服ト云ヘリ ○本草辨疑曰、唐ノ箔ハ方

一寸許アリ。本朝ノ箔ヨリ甚厚シ。徑ハ小ナレドモ、厚薄ヲ以テ考ル時ハ、方中ノ數半分ヲ用テ可然者歟。百片トアルニハ五十片ヲ用ユベキナリ。宇治拾遺曰、今はむかし、七条に薄うちあり、みたけまうでしけり。まいりてかなくづれをゆいてみれば、まことの金の樣にてありけり。うれしく思て、件の金を取てそでにつゝみて、家にかへりぬ。おろしてみければきらきらとして、まことの金なりければ、ふしぎの事也。此金とれば神なりぢしん雨ふりなどして、すこしもえとらざんなるに、これはさる事もなし。この後も此金をとりて、世中をすぐべしとうれしくて、はかりにかけてみれば、十八兩ぞ有ける。これをはくにうつに、七八千枚にうちつ云々かみにつゝみたるをとり出したり。みればやれずひろく、色いみじかりければ、ひろげてかぞへんとてみれば、ちいさき文字にて金御嶽云々ことごとくかゝれたり云々 薄をば金峯山にかへして、もとの所にをきけるとかたりつたへたり

附錄 切金薄 延喜式卷第十七曰、内匠寮、切金薄革一條云々 云金薄料、綿一兩云々 云薄紙十四枚

○古加禰乃須利久都 倭名類聚鈔

漢名 金屑 本草 今名 キンフム 一名 金ふん

室町殿日記曰、御刀筒云々銀なし地五寸の御文を貳ツかつかうよく金ふんにて、いかにも手ぎわ能仕立候て、御硯箱云々蒔もいつかけ金ふん御料紙箱云々赤ためぬり、一寸四方の丸つくし、金ふんにてかゝけらるべく候

こがねの泥 落くぼ物語曰、今五部は紺の帋に、こがねの泥して書て、軸に水晶して。倭名鈔曰、金屑、和名古加禰乃須利久都

こんでい 榮花物語曰、

第六八 養老六年十二月
廿四八 延長七年三月
廿六八 應和元年五月
廿七八

またこんでいの一さいきやうをかきくやうせさせ給。同鶴林曰、御きやうはこんでい

金のてい 榮花物語本の雫曰、金のでいしてかきたれば、こんでいのきやうなり。續日本紀卷第十四曰、金字云云。三代實錄第五曰、金字大般若經

泥金 吾妻鏡卷第十五曰、建久六年三月十二日云云天平勝寶四年壬辰三月十四日、始奉レ泥ニ金大佛ー。金天平廿年、始自ニ奧州ー所レ獻也。是爲ニ吾朝砂金之始ー云云

集註 續日本紀卷第九曰、元正天皇養老六年十二月庚戌云云其願ノ經記ハ、寫ニ以ニ金泥ー。同卷第卅曰、称德天皇神護景雲三年冬十月、詔曰、其ノ帶ハ皆以ニ紫綾ー爲レ之、長各八尺、其ニノ端ニ以ニ金泥ヲ書ニ恕ノ字ヲ、賜ニ五位已上ニ。延喜式卷第四曰、伊勢太神宮神寳云云須我流横刀一柄云云其鞘以ニ金銀泥ー畫レ之。同卷第六曰、齋院司、畫ニ祭日ノ服并陪從女衣裳ー料。金泥四兩一分二銖。同卷第四十一曰、彈正臺、凡金銀ノ薄泥ハ、不レ得レ爲ニ之ヲ服用并雜器ノ飾ニ。續日本後紀卷第三曰、二月癸巳勅ノ曰、金銀薄泥、用ニ之ヲ公私ニ、有レ費无レシ益。宜レク禁ニ斷之ヲ。扶桑略記第六曰、云云其本願縁起、寫以ニ金泥ー。同廿四日、寫ニ紺紙金字最勝王經觀世音經心經等ー。同廿六日、金泥自在王菩薩經、最勝王經。同廿七日、奉レ寫ニ金字妙法蓮華經ー。人車記曰、金字法華經一部。明月記曰、建永元年七月廿三日、聖覺僧都供養金泥小字大般若經。天福元年十月廿六日、北政所御事云云、聖覺導師、經化城喩偈及人記品一枚、剃頭之間彌不及枚數一品經、予分金光明功德天品、相具綾白被物、房任調送相具、衛門督可進由示含了。皆悉金泥經也。但水精軸。㞕瀬記曰、久壽三年正月十四日、今日高陽院四七日御佛事、法花經十一部、一部金泥、一部色帋、書寫九ア、素帋摺字。仁安元年九月七日御法事也。次揚御經題名、金泥一ア、墨字百部、法華經十部、金泥一ア、例帋九ア。

正曆二年閏二月

合記別記曰、知足院禪閤七十賀、東机安金泥法華經一部。水左記曰、承保四年七月廿三日、參高倉殿、今日御逆修御念佛始也云云妙法華經一部八卷、開結阿彌陀轉成佛般若心等經各一卷、水精軸表紙以金泥書唐紙形。帝王編年記十九曰、金泥五部大乘經。又曰、金字御經供養。百練抄第五曰、大宋皇帝被ㇾ献二金泥法華經一云云。五代帝王物語曰、宸筆の金泥の唯識論御供養有。椿葉記曰、紺紙金泥のほけきやう云〻。古今著聞集卷第二曰、時弘仁九年春天下大疫、嵯帝自染黃金於筆端一、紺紙於爪掌二率ㇾ寫二般若心經一卷一。吾妻鏡卷第十四曰、金泥法華經云云。同卷第二十六曰、寬元三年六月十日、被ㇾ供二養金泥法華經五種行一也。阿彌陀院寶物目錄曰、聖僧𢃇一前以水精并金泥。南禪寺記曰、金泥宸畫二字。建武元年東寺塔供養記曰、金泥法華經七卷。類聚雜例曰、金泥法華一部。又曰、各探法華有緣之品、自以金泥書紫色紺。砂石集曰、火鉢ニ火ヲ、キテ、紺紙ニ金泥ニテカキタル經トリチラシテ居タル者有レバ云云大般若ノ泥ヲトラムトテ燒ツルホドニ。高倉院嚴嶋御幸記曰、ほきやう供養あり、金でいの法花經一部云〻

之呂加禰（シロカネ） 本草和名

漢名 銀 本草

一名 之路加禰 倭名類聚鈔曰、銀。和名之路加祢

白かね 職人盡歌合曰、白がねさいく、なんりやうのやうなるかねかな。紫式部日記曰、白がねの衣ばこ。

しろかね 源氏物語若菜曰、しろがねの枝に。同鈴虫曰、しろがねのいろ〳〵の色紙に、色〻のこがね白かねまぜて書せ給ふ狹衣曰、白がねこがねを打かさね。落くほ物語曰、四部には、

はながめに。同寄生曰、しろがねのやうき。古今著聞集卷第九曰、洲濱をつくりて、しろがねの松をうへたり。又おなじき鶺鴒をすへたり。其あいだに銀のやり水をながして云云しろがねをのべて表紙として云々しろかねをひもとす云々其根の上にをの〳〵和歌をかく、みな銀をもてつくれり。榮花物語玉村菊曰、しろがねこがねの御たからものどもは、なのづからいできまうけさせ給てん。同音樂曰、しろがねこがねの香炉に。同御裳曰、しろがねこがねの御はこども。同衣の珠曰、しろがねの御はこにいれさせ給て。同鳥部野曰、しろがねのはちども。同本の雫曰、あるはしろがねこがねのふだをつけ。東大寺別當次第曰、正暦三年八月廿三日、千手院銀佛盜穿所々。別當前後兩司五師共撿錄之間、前別當法橋称從童部手傳、得被出銀三分三銖。今物語曰、宇治のひだりのおとゞの御前に、銀をきり火桶につませられて。狹衣曰、庭のまさごの、しろがねかと見えたるに。紫式部日記曰、しろがねのさうしばこをすえたり。かゞみをしいれて、ぢんのくし白がねのかうがいなど。枕草紙曰、ありがたきもの、ものよくぬくるしろがねのけぬき。扶桑略記廿八日、治安三年十月十七日、入道前大相國詣二紀伊国金剛峰寺一云云　次留二宿東大寺一。十八日、早旦叅レ礼二大佛一。又寺内東去五六許町、山上有レ堂、謂二之銀堂一。々中安二銀丈六盧舍那佛像一。蓋以レ之爲二堂号一也。破損殊甚、銀像過半爲レ賊穿取。衆人私相語云、此佛非レ無二鎮護之攝一、此堂非レ無二守護之司一、頻入二偸見之手一、如レ無二鎮凋一、或以二彈指一、或以二流涕一。仍召二仰威儀師鴻助一云、此佛此堂尤可二哀愍一、且令レ勸二中材木等支度一、至二于斷物一、隨二申請一可二宛給一。又示下陪從人々之知識、各可レ加二銀一兩一之由上、被二定仰一了。則召二御飾嚢銀鋺一噐一、且預二鴻助一。思ひのまゝの日記曰、左右のすはまのたい、しろがねこがねをつくし。

落くぼ物語曰、たゞしろがねをのみよろづにしたりける。日本靈異記曰、吾得ニ銀卅片許一。令義解曰、內命婦禮服。四位深緋衣、淺紫深綠紕帶、烏舃。以レ銀飾レ之。日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳八年十月甲子、新羅遣ニ阿飡金項那、沙飡薩虆生ニ朝貢也。調物云云銀。朱鳥元年夏四月戊子、新羅進調從ニ筑紫一貢上云云銀。同卷第三十曰、持統天皇五年九月己巳朔、壬申、賜ニ音博士大唐續守言、薩弘恪、書博士百濟末士善信、銀人ドニ二十兩一。十二月戊戌朔、己亥、賜ニ醫博士務大參德自珍、呪禁博士木素丁武、沙宅万首銀人ドニ二十兩一。六年二月丁酉朔、丁未云云陰陽博士沙門法藏、道基、銀人コトニ二十兩。續日本紀卷第三曰、文武天皇大寶三年五月己亥、令ドニ紀伊國奈我名草二郡、停ニ布調ニ獻セ絲、但阿提飯高牟漏三郡獻レ銀也。同卷第十曰、聖武天皇天平元年夏四月庚午、諸國兵衛、資物ハ、令下メ當郡見在ノ司ヲ簡ニ綴ノ輸サ之。仍附ニ貢調使ニ送シム所司一、其輸以上絁一疋ヲ充ニ銀二兩、以ニ上絲ハ小二斤、庸綿ハ小八斤、庸布ハ四段、米ハ二石ニ並ニ充ニ銀一兩一。即依ニ當土所出ニ准銀二十兩一

しろ金

落くぼ物語曰、國〻に絹糸、しろ金こがねなど召す

白金

和漢通名（　）續日本紀卷第二十曰、孝謙天皇天平寶字二年秋七月丙子、授ニ山田史銀、並外從五位下一。同卷第廿二曰、廢帝天平寶字三年十二月壬寅、外從五位下山田史白金云云等七十四人賜ニ姓連一。同卷第廿四曰、廢帝天平寶字七年夏四月丁亥、外從五位下山田連銀爲ニ河內介一。令義解序曰、從五位下山田連白金（　）爾雅曰、白金謂ニ之銀一。水東日記曰、珍珠云云計一斤重云價近ニ白金五千兩一。宗五大草紙曰、式の御成の時は云〻其時進物御太刀白金御馬云〻三獻めの御盃は亭主拜領其時御太力白金云〻

軟挺（ナンテイ）

砂石集第六曰、銀ノ軟挺六アリケリ。塵添壒囊鈔曰、平家物語ニモ宗盛卿鏡ノ瀧口ニ歟

二十三日なり

文暦二年十二月卅日

擽ヲ踏マレテ、餘リニ腹ヲ立テ、ヲドリアガリ〳〵シ給ヒケレ共、軟挺ガ尾髮モ生セズ、金燒モナヲラズト語メリ。源平盛衰記曰、右大將此ノ馬ヲバ惜ミテ、其代リト覺シクテ、南鐐ト云馬ヲ賜タリケリ。極テ白馬也ケレバ南鐐トハ呼ケリ。又曰、軟挺ナンド云ハ何ナル金ゾ、常ニ軟挺ト書共、獨南鐐ヲヤ善シトスベキ。只銀ノ上品ナルヲヤ。字鏡曰、鐐力招反、銀莫也、好也、比良加祢。爾雅曰、白金其美者謂二之鐐一

南廷　吾妻鏡卷第五曰、文治元年十月廿日、御堂供養云云南廷三十云云。同卷第九曰、文治五年八月廿二日、著二御于泰衡平泉館一。有二一宇倉廩一。令レ見レ之給云云南廷百、各盛二金器一等也。同卷第三十六曰、寛元二年十一月二日、布施百物幷南廷二云云。同卷第四十六曰、康元元年八月云云以二金銀以下一作二屋形船一云云南廷三云云南廷五置二銀折敷一

南庭　吾妻鏡卷第五十二曰、六月三日、故秋田城介義景十三年之佛事也。布施物南庭九、砂金卅兩、錢百貫文。同卷第五十曰、弘長元年六月廿五日、今日奧州禪門被レ遣二南庭五劍等於若宮僧正坊一。又室家生衣二、南庭三、絹三十疋、武州劍、南庭二等。同衣遣レ之。依二所勞之中減一也。同卷第四十九曰、文應元年三月廿七日、將軍家御吉事有二露顯之儀一云云頃之(シハラクアッテ)有二進物一。相摸太郎殿、南庭、置二同扇一。同卷第四十四曰、建長六年六月三日云云頓寫供養也。布施南庭十云云。同卷四十二曰、建長四年四月一日、親王自二閑本一御出云云入二御相州御亭一。亦砂金百兩、南庭十、羽一箱被レ添レ之云云次被レ納二御厨子中一物、砂金百兩南庭十兩云云。同卷第二十九曰、以二卷絹十疋南庭一一、被レ充二布施物一

○品字箋曰、鋌又金銀餅曰南子。廬陵歸子。懸、不舉。見內庫金鋌。間左右。此可食。六書故。五金。鍛爲條樸者。金曰鋌木曰梃竹曰筳、皆取其長也

煖遜　平家物語　**軟丁**　異本平家

物語 なんりやう 職人盡歌合曰、白がねざいく、なんりやうのやうなるかねかな。はくうち、なんりやうにて、うちいでわろき。伊勢貞丈雜記曰、うちいでわろきとは、なんりやうは、性のよき銀にてかたき故、はくにうつにも、かたくてうちのばし難きをいふ之。按此說非也。なんりやうのやうにて、うちいでわろきとは、此頃の南鐐に交リアリテ、堅ク不レ宜トミエタリ。銀ノ最上ノ品ハ至テ軟ニメ白色也。今薄地ト呼ブ

南鐐 永享行幸記曰、南鐐茶匙二 御引出物別當南鐐盞同臺

しろ物 水戸藥王院永祿元年柱立注文、しろ物七、小金三りやう〇四條流庖丁書曰、箸ノ事、白ハシハ銀ヲ學、銀ハ毒ヲ消故ニ學之也。永仁御即位記曰、銀四十二兩、代四千二百疋〇釋日本紀曰、錐。私記曰、師說未レ練白銀也

集註 本草和名曰、之呂加祢。出對馬國令曰、凡度地量ニ銀銅穀ヲ者皆用レ大此外私悉用レ小者。日本書紀第二十九曰、天武天皇白鳳三年三月庚戌朔丙辰、對馬國司守忍海造大國言。銀シロカネ始テ出ニ于當國ニ、卽貢上。由レ是大國授ニ小錦下位ヲ。凡銀有ニ倭國ニ、初出ニ于此時ニ、故悉奉ニ諸神祇ニ。亦同賜ニ小錦以上大夫等ニ。三代實錄卷第十一曰、淸和天皇貞觀七年八月十五日癸亥、太宰府言ス、對馬嶋ノ銀穴在ニ下シモツアカタ縣郡ニ、自ニ高山底ニ穿ニ鑿巖ヲ掘入コト四十許丈、白晝執テレ炬ヲ而得レ入ルコトヲ。頃年以來、處々崩塞、嶮難ニ費ス人ノ功ヲ、而去ヌ、夏霖雨メ穴底水湛タリ。計ルニ其ノ功ヲ力非レ可ニ堪。司私ニ輙ク穿開、望請、准ヘニ延曆十五年ノ例ニ、以ニ彼嶋ノ例ヲ擧ニ大豆ヲ遣ニ百斛并ニ租地子穀百斛ヲ、且充ニ其料ニ令ニ掘開ニ。許シ玉フ之。同卷第十七曰、貞觀十二年三月五日丁巳、詔ノ、授ニ對馬ニ云云銀山神、並從五位上ヲ。延喜式神名記曰、對馬國下縣郡、銀山上神社。銀山神社。同卷第四曰、伊勢太神宮惣所須銀七兩五銖。同卷第五曰、齋宮造備雜物、銀大五斤十一

操　雲州本「探」ニ作ル

兩。同卷第十七曰、內匠寮、銀器、御飯笥ヲモノケ一合云云料、銀大二斤八兩。酒壺一合料、銀大七斤八兩。杓一柄料、銀大十兩。酒臺一口料、銀大一斤四兩。盞一口料、銀大一斤。水鋺一口料、銀大一斤二兩。盤料、銀大十四兩。御鏡一面云云料、銀大十二兩。鏤具石一顆云云牛裏并鈌料、銀大六兩。御太刀一口料云云裝ツクリ料銀大五兩。同卷第二十四曰、主計上、凡諸國輸調、銀一分、對馬嶋調銀。同卷第三十四曰、木工寮。營二太刀一銀一兩。同卷第四十九曰、兵庫寮。凡二季大祓橫刀八口、其料銀一兩。同卷第五十曰、凡對馬嶋銀者、任二聽百姓私採一。但馬國司不レ在二此例一。百練抄卷第七曰、永曆元年四月廿八日、對馬嶋司言上、高麗國金海府禁銅林進房并貢銀採下支。令二諸道勘申一。扶桑略記第五曰、文武天皇五年三月廿一日甲午、對馬嶋國始貢二白銀一、仍改爲二大寶元年一。自レ是以後、年号相續不レ絕　對馬島出二白銀一郡司等、授二二階位一并賜二絁綿布鍬等一。小右記曰、注太宰府言上賊徒合戰之間雜事對馬島銀穴燒損了云云。吾妻鏡卷第十五曰、以銀作筥納砂金三百兩。類聚雜要抄曰、香壺八口用途銀百卅兩樣々ノ莒納物作物銀九百十二兩一分　○ひた地かね　職人盡歌合

【集註】職人盡歌合曰、はくうちなんりやうにて繼すとてあをうちいでわろきみはてたるひた地がねいつ色よしとひとに見えまし

○飛彈銀　醫心方

【集註】醫心方曰、銀出對馬長門飛彈國

○信濃銀　駿府政事錄

【集註】駿府政事錄曰、慶長二十年閏六月九日、信州松本山初出銀及鉛由註進、則言上之処、遣人可令極之由被仰出

○備前銀　日本記略

【集註】日本記略曰、延曆十五年六月壬戌、木工大允上道廣成二授二外從五位下一褒二備前國銀之功一也

○石見

曉ノ上「不」字アルベキカ

銀 九州道乃記 【集註】九州道乃記曰、石見の大からと云所にとまりて云々それよりやがて銀山へこえてみるに、やまふきと云城、在所の上に有をみて「城の名もことはりなれやまぶよりもほるしろがねをやまぶきにして ○金銀図録曰、石州銀山旧記ニ云、天文二年大内義興銀山ヲ領スルトキ、筑前博多ヨリ壽亭ト云モノ来テ、初テ鏈ヲ吹鎔シ銀ヲ成スコヲ仕出セリ。是ヲ銀吹ノ始トス。永祿中毛利元就銀山ヲ取ル。天正中太閤ヨリ上使近實某、毛利家ヨリ三井某ヲ以テ銀山ヲ奉行スト云々

○長門銀 醫心方 ○伊豫銀 日本書紀 【集註】日本書紀巻第三十曰、持統天皇五年秋七月庚午朔壬申云々、是日伊豫國司田中朝臣法麻呂等献宇和郡御馬山白銀三斤八兩・鉑(アラガネ)一籠一

○肥前銀 三代實錄 【集註】三代實錄巻第二十八曰、貞觀十八年三月九日丁亥、參議太宰權帥從三位在原朝臣行平起請二事云々、其二事、請令下肥前國松浦郡庇(ヒ)羅値(チ)嘉兩郷、更建二二郡一、號上上近下近一、置中値嘉嶋上曰、撿二案内一、二郷有二八國ニ嶋一、今件二郷、地勢曠遠、戸口既阜。又土産所レ出物多シ奇異一云々、又去年或人民等申シテ云、唐人等必ス先ツ到リ件嶋ニ、多ク採リ香藥一、以テ加ニ貨物ニ、不レ令下ニ此間ノ人民ヲ觀中其ノ物上ヲ。又其ノ海濱ニ多シ奇石ハ、或ハ鍛錬シテ得レ銀、或ハ琢磨スレハ似タリレ玉ニ。唐人等好テ取リ其石ヲ、曉ス土人ニ、以テ此ヲ言ハレ之ヲ、不ルノ委スルニ以テ其ノ人ヲ之弊、大都皆如シ此ノ者也。望請フ、合セ件ノ二郷ヲ、更建二二郡一、號ニ上近下近ト、便チ爲ニ値嘉嶋ト、新ニ置キ嶋司郡領ヲ、任ニ土貢ハ。同巻第二十九曰、貞觀十八年六月八日癸丑、授ニ云々肥前國正六位上云々銀山神、並從五位下一。

○しろば 駿府政事錄曰、慶長十七年五月八日、羽柴肥前守以使者献白銀一万兩、彼領内所産之銀

く職人盡歌合

［漢名］銀薄　［一名］白はく　殿中申次記曰、金はく白はくにてうつくしきゑどり候云〻。職人盡歌合曰、はくうちヿまさこ地の月かげみればしろがねのなゝこまきたるこゝちこそすれヿいけ水のつき影みればしろばくのでいになりてもひかりやはけつヿはいらうのたらざりけるかわれに人とろほされしとおもひあはねば

［集註］北山抄曰、女礼服云云履以採鞋鼻分作二以銀薄餝之云云。中右記曰、銀薄六十枚。延喜式卷第四曰、伊勢太神宮、惣所須銀薄二十四枚。同卷第三十四曰、木工寮、御贖鐵人像料云云銀薄千四百四十枚。並九月一日申ㇾ省請受。

○銀乃須利久都（シロカネノスリクツ）倭名類聚鈔　［漢名］銀屑本草　［今名］ギンフム

［一名］しろてい　殿中申次記曰、しろでいにて、ときぐの繪をかゝれ候。倭名鈔曰、銀屑。和名銀乃須利久都

白泥　類聚雜要抄曰、四尺几帳八本。帷夏ハ白、生ノ平絹ニ以ニ白泥ニ野篠秋草等畫之、又次ノ様繪、胡粉用之

末銀　台記別記曰、久安三年二月廿七日、知足院禪閤七十賀、一机云云末銀一坏爲塩代

［集註］延喜式卷第四曰、伊勢太神宮、神寶、須我流横刀一柄云云。其鞘以ニ金銀泥ニ畫ㇾ之。同卷第六曰、齋院司、畫ニ祭日服并陪從女衣裳ニ料、銀泥四兩一分二銖。扶桑略記三十曰、寛治二年二月廿二日、太上皇爲ㇾ拜ニ高野弘法大師廟堂ニ出ニ於東洛ニ。云云立以ニ銀泥繪屛風ニ。云云　明月記曰、寛喜元年十一月十七日入內云〻。霰顯日十八具、摺裳。綾上塗銀泥、以金靑直水文云云。吾妻鏡卷第九曰、文治五年九月十日、奧州關山中尊寺經藏、金銀泥行交一切經

立以銀泥云　八廿四

黄銀

本草、時珍曰、泊宅編云、黄銀出蜀中、色與金無異。但上石則白色。世人以鍮石爲黄銀非也。鍮石則藥成黄銅也。居易錄曰、唐太宗賜房元齡黄銀帶曰、世傳黄銀鬼神畏之。唐本注有黄銀本經不載。俗云爲器辟惡朱翌云別自一種非金也。予按漢虞淵上林濔有黄銀樹、名取此未詳何義

【形状】 延喜式卷第二十一曰、治部省。祥瑞。黄銀、金勝。註、仁寶也。不斵自成、光如月明。一名金稱○通雅曰、蘇州開元寺大佛三尊、傳言海上浮來、乃鍮石所裝夜嘗放光、後一商裝金而光遂隱、要論鍮乃自然銅之精者也。而廣甘石所煮錬者乃假鍮也。遼元之賤用鍮石皆指廬甘鍮耳

阿加々禰（アカゞネ） 倭名類聚鈔

【一名】 赤金 【漢名】 銅 本草 【今名】 アカヾネ

和漢通名也。年中定例記曰、正月。御祝はてゝ朝供御參候云々赤金にてうちたる鉢に入候て、日に三鉢づゝ兩御所様へ參候。若君様御座候へば、それも同前に參候。赤金のはちに入、おなじく銅の鉢をふたにして、中の御末の御ゆるりに、口ながとて、是も銅のひさげの大きなるやうに、口の候物にて、湯煎にしてをきて、供御の參候時、それを御末にて、うば御老ちようきぬをきて、よそい申され候 枕草紙曰、あつげなるもの 六月 又おなじ比の銅のかち。倭名鈔曰、銅。和名阿加々祢。說文云、銅赤金也。新猿樂記曰、本朝物、銅鐵。吾妻鏡卷第三十日、嘉禎元年六月十九日、被鑄五大堂供鐘。而今

日鑄損之。萊行人周防前司勘発鑄物師之処。陣申云、依銅不足如此。可被加銅歟云云（）海東諸國記曰、備中州產銅、備後州產銅、長門州產銅及双鐵。按ニ唐ニテ日本ノ銅ヲ出セシ事瀛舟筆談云、本銅質鎔精堅許葉氏用日本銅仿鑄三尺得其一此四緣也。大淸會典云、凡商賈有扶貨願航海市銅者官給符爲信聽其出洋往市於東南日本諸夷舟回司鑰者按時直收之以供官用有餘則任其售於市肆以便民用。天工開物云、東夷銅又有托體銀礦內者。入爐煉時、銀結於面、銅沈於下。商舶環入中國、名曰日本銅。其形爲方長板條。漳郡人得之有以爐再煉取出零銀、然後寫成薄餅如川銅一樣、貨賣者。物理小識曰、銅託體鉛中銀中、亦有不襍銀鉛者。爐須傍通高低二孔、鉛先化、從上流、銅後化、從下出。煉託銀者銀結于面銅沈于下。日本方長板銅、漳人再煉取銀。而傾餅轉售是也（）四條流庖丁書曰、箸ノ事、赤ハシハ銅ヲ學也。赤ガネハ藥ヲ生也、依之學也

【集註】續日本紀卷第四曰、元明天皇和銅元年春正月乙巳、武藏國秩父郡獻和銅。詔曰、開有食國中乃東方武藏國自然作成和銅出在止奏而獻焉云云。故改慶雲五年而和銅元年爲而御世年號止定賜。雜令曰、凡國內有出銅鐵處、官未採者、聽百姓私採。延喜式卷第二十六曰、主稅上。凡一駄荷率、銅一百斤。文治二年後乘坊雨源參宮記曰、院宣云、東大寺盧舍那佛者、聖武皇帝勸進天下衆庶請、伊世太神宮所建立也。天平十五年堂宇草創、天平勝寶四年佛像開眼、綺紹常篇、斯寺之起、盡國銅而鑄大像、掄環材而構崇閣、四州之中無其比類、三界之外未聞先規。百練抄 日、或人云、昔聖武天皇造東大寺、國銅皆盡

○山城銅　三代實錄

【集註】三代實錄卷第十一曰、貞觀七年九月廿六日甲辰、勅木工

寮ハ、採ニ銅於山城國相樂郡岡田鄕ニ。舊鑄錢司也。十一月廿六日癸卯、勅以ニ山城國相樂郡舊錢鑄司地二十餘町ヲ、爲ニ採レ銅之地ト。同卷第十四曰、貞觀九年六月九日丙子、勅山城國相樂郡舊鑄錢司地二十町、貞觀七年爲ニ採レ銅地ト。今返ニ賜左大臣源朝臣信ニ。但採レ銅之事、依レ舊行レ之。同卷第十六曰、貞觀十一年秋七月十日丙寅、以ニ前筑後守從五位下清原眞人眞貞ヲ、爲ニ採ニ山城國岡田山銅ヲ使ト。判官一人、主典一人。同卷第三十九曰、元慶五年六月丁丑朔、勅停ニ廢採ニ山城國岡田銅ヲ使ト。其屋舍什器付ニ國令ニ守護セ。同卷第四十曰、同年八月廿日丙申、去六月、停ニ採ニ山城國岡田銅ヲ事ト。採銅使正六位上巨勢朝臣文主返ニ進伊賀國廨米三百八十斛七斗五升五合ヲ。以ニ伊賀國廨米ヲ、充ニ採レ銅之資粮ニ故也

○攝津銅 扶桑略記

集註 百練抄卷第四曰、後朱雀天皇長曆元年四月十二日、攝津國能勢郡初獻レ銅。八月件銅被レ分ニ獻諸社ニ、有レ議。扶桑略記卷第廿八曰、後朱雀天皇長曆元年八月三日、奉ニ幣七社ニ、奉レ獻ニ攝津國貢銅上分ヲ

○因幡銅 續日本紀

集註 續日本紀卷第一曰、文武天皇二年三月乙丑、因幡國獻ニ銅鑛ヲ

○石見銅 續日本後紀

集註 續日本後紀卷第五曰、承和二年十一月庚辰、仰ニ石見國ニ、選ニ幹了百姓四人ヲ、習レ採レ銅、免ニ其雜徭ヲ。三代實錄卷第三十九曰、元慶五年三月七日乙卯、散位從五位上陽侯忌寸永岑言、石見國美濃郡都茂鄕丸山巖石崢嶸、崇巒數十里 銅工膳伴案麻呂、眞髮部廣世等言曰、此山出レ銅、仍採ニ礬石ヲ、試以ニ鼓鑄ヲ、遂得ニ眞銅ヲ。於レ是勅遣ニ木工少屬從七位上紀朝臣眞房、史生從八位上眞髮部安雄等ヲ、檢察焉

○備前銅 三代實錄

集註 三代實錄卷第三十曰、陽成天皇元慶元年閏二月廿三日乙

能野ハ熊毛ノ誤カ

西ハ兩ノ誤カ

末、美作國進銅大十兩。備前國二斤九兩。先是從七位上伴宿禰吉備麻呂言、美作國眞嶋郡加夫良和利山、大庭郡比智奈井山、備前國津高郡佐々山有銅。故吉備麻呂掘採、進其撰銅。勅遣內匠大允正六位上布勢朝臣安峯、與國宰監地撿校掘採。令安峯還向進所採之銅。扶桑略記廿九曰、後三条天皇延久二年四月十二日、令備前國弁申銅金青緑青等出來事。後日差遣官使、被尋實否之處、隨身銅等樣所參上也

○美作銅　三代實錄　註見上

○備中銅　三代實錄

集註　三代實錄卷第十七曰、貞觀十二年二月廿五日丁未、令備中備後兩國採進鑄錢料銅。同卷第四十九曰、仁和二年二月十五日乙丑、新鑄銅印一、賜備中國採銅使。

○備後銅　三代實錄、詳于上註

○周防銅　續日本紀

集註　續日本紀卷第一曰、文武天皇二年九月壬午、周芳國獻銅鑛。同卷第十曰、聖武天皇天平二年三月丁酉、周防國能野郡牛嶋西汀、吉敷郡達理山所出銅、試加冶練、並堪爲用。便令當國採冶、以充長門鑄錢。

○長門銅　三代實錄

集註　三代實錄曰、淸和天皇貞觀元年二月廿五日辛亥、以長門國醫師從八位下海部男種麻呂爲採銅使。同卷第七曰、貞觀五年十月二日辛酉、制、長門國採銅所雜色四人、預於勘籍。同卷第十六曰、貞觀十一年二月廿日戊申、太政官處分、停遣採長門國銅使。付國宰採進焉。令義解曰、謂凡物產所出、土宜各別。故任土作貢、不以其所无。假令長門採銅云云之類也。延喜式卷第二十四曰、主計上。長門國。但大津阿武西郡浮浪人調、充採銅鉛料。同卷第二十六曰、主稅上。凡鑄錢年料銅鉛者、備中國銅八百斤、長門國銅二千五百十六斤十兩二分四銖、豐

擽ハ或ハ採カ
鑄作ハ一本客作兒ニ作ル

前國銅二千五百十六斤十兩二分四銖、毎年擽送

○豐前銅 三代實錄

[集註] 三代實錄卷第三十三曰、元慶二年三月五日辛丑、詔令下三太宰府一採中豐前國規矩郡銅上。宛ニ彼郡俘夫百人一。爲ニ採レ銅鑄作一。同卷第四十七曰、光孝天皇仁和元年三月十日乙丑、太政官處分、下ニ知長門國一、送ニ銅手一人掘穴手一人於豐前國採銅使許一。以ニ豐前國民未ニ習ニ其術一也

○銅薺

水左記 [集註] 水左記曰、承保四年八月十九日、又一撰手牛普賢菩薩像未奉付光、今彫銅薄料物四疋明業給之付其光同奉供養

○熟銅 [漢名] 紅熟銅

[集註] 延喜式卷第四曰、伊勢太神宮。物所須熟銅四十九斤五兩。同卷第五曰、齋宮。造備雜物。熟銅大五十七斤七兩。同卷第十七曰、內匠寮。年料五尺屛風云云料、熟銅百卅二斤十三兩二分年料。几帳八基云云料熟銅十四兩。御鏡一面云云料熟銅大一斤。御斗帳一具云云熟銅大八斤。牛車一具云云料熟銅大四十斤。屛風一帖云云肱金料熟銅大一斤。四尺屛風四帖料熟銅大四斤。同卷第四十八曰、左馬寮。造女鞍一具料。熟銅大三兩三分二銖。同卷第四十九曰、兵庫寮云云熟銅三分。已上蘇蘇伎鍬料。凡二季大祓橫刀八口。其料熟銅四斤。太平記曰、又如何ナル極惡ノ者カ云出シケン、此湯ノ塔ノ九輪ハ太略赤銅ニテアルト覺ル、哀是ヲ以テ鑵子ニ鑄タランニ何ツニヨカランズラント申ケルヲ、越後守聞テゲニモト思ケレバ、九輪ノ寶形一ツ下ヲロシテ、鑵子ニゾ鑄サセタリケル。ゲニ人ノ云シニ不レ差、腐爛無クシテ、磨クニ光冷ヽタリ。芳甘ヲ酌テタツル時、建溪ノ風味濃也。東坡先生ガ人間第一

大明會典曰、試驗黃熟銅紅熟銅生銅、新猿樂記曰、練ニ沸ルヽ銅一鰈レ疑ニ與山百錬カト乎。永仁御即位記曰、熟銅廿六斤十二兩、代千五百疋

ノ水ト美タリシモ此中ヨリヤ出タリケン。上ノ好ム所ニ下必随フ習ナレバ、相集ル諸國ノ武士共、是ヲ聞傳テ我劣ラジト塔ノ九輪ヲ下テ羅子ヲ鑄サセケル間、和泉河內ノ間數百箇所ノ塔婆共、一基モ更ニ直ナルハナク、或ハ九輪ヲ被レ下マス形計アルモアリ、或ハ眞柱ヲ切レテ、九層計殘ルモアリ。類聚雜要抄曰、銅細工熟銅五十六兩

○半熟銅

［集註］延喜式卷第四曰、伊勢太神宮。物所用熟銅云云半熟銅一百七十二斤十四兩。同卷第五曰、齋宮。造備雜物。半熟銅十八斤。同卷第十七曰 內匠寮。屛風一帖。花形釘ノ料、半熟銅大三斤。四尺屛風四帖料、半熟銅大十二斤

金銅 延喜式　［漢名］黃銅 天工開物　［今名］シンチウ

天工開物曰、銅以ニ爐甘石、或倭鉛ニ參和轉レ色爲ニ黃銅ニ。廣東新語曰、赤銅鑄錢須以ニ倭鉛爐甘石ニ入レ之則黃

［集註］延喜式卷第十三曰、圖書寮。金銅花盤二口、金銅鐘一口 金銅大花瓶二口云云 金銅杓二柄、金銅花瓶二口、金銅火爐一口。同卷第三十九曰、內膳司。金銅ノ界ノ文案五基。續日本紀卷第三十六曰、金銅鑄像一合。江家次第曰、金銅小器。又曰、金銅鳳瓶也。台記別記曰、久壽三年三月廿七日、知足院禪閣七十賀供養法具金銅佛具等、自宇治殿被渡之。阿彌陀院寶物目錄曰、基二階、邊著金銅云云下階在連子、著金銅。南禪寺記曰、法堂前不階欄干左右、金銅表柱。太上法皇御受戒記曰、有金銅塔形。百練抄第九曰 金銅錫杖レ進ニ太神宮ニ。同第十三曰 安貞二年七月六日安樂寺言上、去嘉祿元年五月比肥後國津江山住人等於ニ彼峯ニ作レ畠之間掘ニ出金銅鉾二枚ニ要云云。人車記曰、金銅物。又曰、金銅龜形鎖子。明月記曰、建

久七年五月十五日、今日於八幡被供養金銅佛云云。建永二年四月十六日、加茂祭、車。伊勢海、金銅相交すわうかひ付。童云と金銅すはま、車小八葉有物見、金銅八葉付之。寛喜元年五月七日、辰時宮廻、新造宝殿、錦繡之色、金銅之光、照耀驚目。天福元年十月十五日、賢寂従者男、出市見賣金銅者、搦取。兵範記曰、仁安元年九月八日、御佛事、金銅阿伽器五前。延德御八講記曰、金銅の花瓶にはちすのつくり花をたつ。六代勝事記曰、重衡の後室、金銅を大佛にあひくはへてゐるときに、其あかゞねわかずして御身に和せずといへり

○金銅薄 兵範記 今名 シンチウバク

集註 兵範記曰、嘉應元年二月三日、丈六堂供養也。造花用金銅薄

○ちうでい 殿中申次記 假鈔屑 今名 シンチウフン

集註 殿中申次記曰、ちうでい、しろでいにて、ときぐの繪をかゝれ候

白銅 和漢通名

天工開物曰、銅以ニ砒霜等藥一制煉爲ニ白銅一。物理小識曰、銅以砒汞而點白者。又非原白也

白銅鏡手ニ取持而、見レ跡不足。續博物志曰、古無ニ純銅作レ鏡者一、皆有ニ錫雜一レ之。江家次第第五曰、列見。入ニ酒白銅盞一、頭書、白銅盞、白鑞盞也

一名 銀銅 類聚雜要抄曰、香壺一双、銀銅瀬梅花之上ニ上卷付レ之。萬葉集第十二曰、

集註 延喜式卷第六曰、齋院司。白銅酒壺一合。

寶龜十一年三月戊辰ナリ

建久六年三月十二日ナリ

八分四銖トアリ

白銅杓一柄。白銅風爐一具。白銅火爐一具。同卷第十二曰、圖書寮、白銅火爐三口、白銅盤八口、白銅鉢一口。同卷第十七曰、內匠寮。白銅酒壺一合云云白銅大廿斤。續日本紀卷第五曰、元明天皇和銅五年五月癸酉、禁六位已下以白銅及銀飾革帶。同卷第十一曰、聖武天皇天平四年冬十月辛巳、給節度使白銅印。道別一面。同卷第三十六曰、白銅香爐一口。北山抄曰、即位事云云圖書寮以白銅香爐置炉臺。日本靈異記曰、白銅水瓶一口。人車記曰、白銅物、慈惠遺告曰、香爐四具、白銅一具。阿弥陀院寶物目錄曰、白銅火爐一口、白銅鉢二合、白銅磬一枚

滅金 延喜式

古今秘苑曰、銅上鍍金先以醋醶汁浸數日却以鹽霜梅煮半日炭末炒乾淨乾水銀輕輕塗然後貼金金皆變白色火上烘熱候金還元、光珠打實一書曰、燒付ノ如ク摺磨水銀ヲ塗、金箔ヲ置テ燒タルヲ滅金ト云也

【一名】金めつき　室町殿日記曰、よりかゝり壹ツくわんは金めつき。吾妻鏡第十五曰、天平勝寶四年壬辰三月十四日、始奉泥金於大佛

【集註】延喜式卷第四曰、伊勢太神宮。惣所須滅金九斤七兩八分。同卷第十七曰、內匠寮。年料五尺屛風云云料、滅金百二兩四銖。年料几帳八基云云料、滅金一兩一分。御斗帳云云滅金小六兩二分。牛車一具云云滅金小廿兩。同卷第四十八曰、左馬寮。造女鞍一具料、滅金大一銖七分銖之五。類聚雜要抄曰、銅細工滅金五兩二分五朱、打物鍛冶滅金五兩三分。中右記曰、滅金五兩、餝薄二兩。佛灑料外也。永仁御即位記曰、散用砂金九兩二分五兩響

位階平叙子以下料一兩二分、薄料三兩色〻滅金料

今案 装剣奇賞曰、鍍金方先地がねをよく〳〵磨き、梅酢にてはせ、砥粉に水銀を合せ磨付、其上へ金又は銀箔にても好む所を置。扨火にて焙、其色調ふ時、又砥粉水銀をすり付、箔を置てあぶり、如此する事二三遍して、砥粉ばかりにてよく〳〵磨き仕上る也。又方先濃灰汁にて地がねをよく煮て、其上を枝炭にてみがき、金剛砂を以て篦にて能々みがき、梅酢に入レ灰汁ばらひして、金の粉を水銀にてよく合せて、是を右の地がねにすり付あぶる也。二度めには金の色出る、それを水に入て、針の胴を横にしてみがき、上を齒拂に灰を付、又〻みがき、扨緑青にて煮、此上を色上をする也。鍍金色上藥方白焰消緑礬焼塩各等分細末右三味天目の類に露水にてすり合せ、紙を覆ひ三日所置て用ふ。用法は色上んとおもふ所へ此藥を付て焙る也。熱くなりし時、水にてあらふべし。煮緑青方緑青壹匁右の内へ醋を少入れよく磨て、水二升五合入れ、扨前にしるせし煮汁の貯置るを七分三分のつもりにして加へて是を煮るなり

滅銀 延喜式

一名 銀滅 類聚雑要抄曰、銅細工、銀滅三兩、打物鍛冶銀滅五兩三分

集註 延喜式巻第十七曰、内匠寮。年料五尺屏風云云料、滅銀廿五兩二分。永仁御即位記曰、銀四十二兩。十六兩、執翳女孺十八人唐衣泥繪料。七兩、供奉女房十八人同前。六兩、唐衣廿八領洲濱以下蒔料云云二兩、御手水御器滅金料

調製 延喜式巻第十七曰、内匠寮。水銀八十三兩二分二

銖ニ云十八兩三分合ニ入ル銀滅ニ料

しやくごう 平家物語

漢名 紫金 格古要論

通雅曰、紫金、今人用赤銅、和金爲之

一名 赤銅 大内問答曰、御かうがい赤銅、みゝやき付。御小刀小柄。又つかさやなし地、かなご赤銅、めぬきかうがいまへのごとし。按文明寫本下學集、器財門曰、銅赤銅鍮石鐵鉄鐵共同。太平記曰、此邊の塔の九輪は大略しやくどうにて有と覺る。片假名太平記赤銅に作ル。與ニ紫金ニ同名異物也

集註 平家物語曰、しやくどうづくりの太刀をはき。義經記曰、しやくどう作りの太刀をはき、一尺三寸ありける刀にごめんやうなめしにて、おもてさやをつゝみてむずとさし。室町殿日記曰、御刀筒、金具は赤銅上くろみにしてぬめよく候

今案 裝劍奇賞曰、造ニ烏金(シヤクドウ)ヲ方、烏銅(ニアノク)拾匁、燒金壹分、右共ニ坩堝(ルツボ)に入吹合也。是をメザシガ子ト云、下品也。又方、烏銅(ニグロメ)拾匁、燒金三四分、右法同。是烏金(シヤクトウ)の中品也。又方、烏銅拾匁、燒金六七分、右同法。是烏金の上品也

四分一 室町殿日記

扶桑略記ハ卅卷ニテ終ナリ

【集註】室町殿日記曰、御臺子すみ〴〵の金もの、四分一にてしかるべく候　【今案】裝劍奇賞曰、合二四分一ニ方、銅拾匁、銀貳匁五分。但銅に銀を四ツ一ト分合す、故四分一の名ある也。右共に吹合せ用。但其位下品の四分一也。又方、銅拾匁、銀五匁、右同法。是中品の四分一なり。又方、銅拾匁、銀六七匁、右同法。是上々の四分一にて、宗珉宗與などの用ひられし地がねゝ

中尺（チウシャク）　倭名類聚鈔　【漢名】鍮石

續博物志曰、鍮石類金○倭名鈔曰、鍮石。考聲切韻云、鍮字亦作鉐、鍮石二音、俗云中尺。鍮石似金、西域以銅鉄雜藥合爲之　【集註】扶桑略記卅一曰、獻鍮石香爐。慈惠遺告曰、香爐四具、鍮石一具。太上法皇御受戒記曰、鍮石水瓶一口。納二藤村濃結袋一、着二紫藤花枝一。又曰、鍮石水瓶一口、左大弁大江朝臣捧レ之。太平記第二十九曰、一丈餘リノ鍮石（チウシヤク）ノ花瓶ヲ鑄懸テ

奈萬利（ナマリ）　倭名類聚鈔　【漢名】鉛　本草　【今名】ナマリ

【一名】黑奈万利　新撰字鏡曰、鉛役川反、青金、黑奈万利。倭名鈔曰、鉛音延、和名奈萬利。說文云、鉛青金也。同馬鞍具曰、𨥉、和名久佐利。今按俗用鏈字未詳。鏈鉛朴也。音連。字典曰、鏈、玉篇鉛鑛也。正字通作連。史記貨殖傳、江南出金錫連。註、徐廣曰、鉛未煉者。品字箋曰、連又同鏈、鉛之未鍊者。又曰、鏈鉛礦、亦作磏　あをかね　藻塩草　【集註】

凡諸國輸庸云ヽハ二十四卷主計上ナリ
西ハ兩ノ誤カ
操ハ採カ

延喜式卷第二十三曰、民部下。凡備中長門豐前等國、送鑄錢司銅鉛返抄者、副稅帳進之。凡諸國輸庸。長門國、大津阿武西郡浮浪人調充採銅鉛料。同卷第二十五曰、主計下。凡鑄錢年料銅鉛者、備中長門豐前等國、每年採送鑄錢司。即以司返抄、勘會調庸抄帳。同卷第二十六日、主稅上。凡鑄錢年料銅鉛者、長門國鉛千五百十六斤十兩二分四銖。豐前國鉛千四百斤。每年操送。凡備中長門豐前等國、操銅鉛料稻斤別充三束九把六分五毛七厘。三代實錄卷第二日、淸和天皇貞觀元年二月廿五日辛亥、詔、三箇年內、所進銅鉛、年別足三千斤者、須借授五位。其後三年內不減此數者、隨爲眞 【附錄】

鉛錢 類聚雜要抄曰、小宮納十二合。五合云云。邊ノ丸玉卅顆、同平玉卅、銀錢卅、白錫錢卅、鉛錢卅、各納之

○蜜陀僧 【今名】 ギンミツダ

本草綱目曰、蜜陀僧、恭曰、形似黃龍齒而堅重、亦有白色者作理石文 【形狀】

頓醫抄曰、蜜陀僧、此藥ハ唐物也。形ハ柘榴ノ實ニ似タリ。シハハユシ○和訓抄曰、ロカス密陀僧、金密陀僧、銀密陀僧ノ二種有。金密陀僧ハ漢渡バカリニメ和產曾テ無モノ也。銀密陀僧ハ舶來無和產アリ。長州豐後石見銅山多出ス。銀ヲ吹灰ノルカス也。如鼠色剖堅芒有毒者也

之路奈麻利（シロナマリ） 倭名類聚鈔 【漢名】 錫 本草 【今名】 スヾ

品字箋曰、金有五而黃爲長、白銀赤銅靑若黑ノ者ハ則鉛與鐵也。錫爲五金之賊、不列於內

【一名】 **白奈万利** 新撰字鏡曰、白鑞、白奈万利。新猿樂記曰、本朝物白

鑞。永仁御即位記曰、白鑞十斤代七百疋

白鑞　續日本紀、和漢通名、字典曰、玉篇錫鑞也。集韻本作鑞

白鑞　續日本紀、和漢通名、本草綱目白鑞ト出

奈万利

新撰字鏡曰、錫与章反、兵名。与也。奈万利。倭名鈔曰、錫、一名白鑞。和名之路奈厭利。江家次第曰、東宮御元服云々立二白鑞平文倚子一

白良　類聚雜要抄曰、薫衣香新料。火取母。ロノ白錫用途四兩二分。臍料百七十疋。ロ白良十兩。二階下棚、奥唾壺置物。同莒無レ蓋也。ロノ白良六兩。莒蒔料云々ロ白良六兩

白臈　延喜式

〔集註〕續日本紀卷第一曰、文武天皇二年秋七月乙亥、伊豫國獻二白鑞一。乙酉、伊豫國獻二鑞鑛一。十一月辛酉、伊勢國獻二白鑞一。四年二月戊子、令三下丹波國上獻レ錫。同卷第二十七曰、稱德天皇天平神護二年秋七月己卯、散位從七位上昆解宮成得下似二白鑞一者上以獻。言曰、是丹波國天田郡華浪山所出也。和二鑄諸器一、不レ弱二唐錫一。因呈下以二眞白鑞一所レ鑄之鏡上。其後、授以二外從五位下一。復興レ役採レ之。單功數百、得二十餘斤一。或曰、是似レ鈆非レ鈆、未レ知レ所レ名。時召二諸鑄工一、與二宮成一雜而錬レ之。宮成途窮無レ所レ施レ姧。然以三其似二白鑞一、因爭不二肯伏一。寶龜八年、入唐准判官羽栗臣翼賫レ之以示二揚州鑄工一。僉曰、是鈍隱也。此間私鑄二濫錢一者、時或用レ之。延喜式卷第四曰、伊勢太神宮。物所レ須白臈九斤。同卷第十七曰、內匠寮。御鏡一面云々料、白鑞大一斤四兩。同卷第四十一曰、彈正臺。凡純素金銀及白鑞、聽レ爲二五位已上服用之飾一。類聚雜要抄曰、枕筥。ロ白鑞八兩、蓋筥一双。ロ白錫三斤二兩。左衛門權佐殿聟娶料、私二調進ス筥云々白錫七十五兩加小莒定

〔正誤〕本草啓蒙曰、白鑞。本邦ニテシロメノコトヲ云、故ニ古書ニシロメノコトヲ白鑞ト記ス。此說非也。日本ノ古書

屛風料ニアラズ。小行障四具料一ノ註ナリ

ニ出タル白鑞ハ即錫ナルヿ一名ノ注ニテ甚明白也

○白鑞薄 延喜式 〔今名〕 スヾハク 〔形状〕 延喜式卷第十七日、内匠寮。伊勢初齋院裝束云云五尺屛風四帖料云云白鑞薄六枚。方八寸云云。大笠柄二枝料、白鑞薄四枚。方八寸

鑞 延喜式 〔今名〕 シロメ

〔今案〕 延喜式卷第五日、齋宮造備雜物。鑞小一斤。白臘大四兩。同卷第十七日、内匠寮。内印一面料、熟銅大一斤八兩。白鑞大三兩。鑞大三兩。外印一面料、熟銅大一斤。白鑞大二兩。鑞大二兩。諸司印一面料、熟銅大十四兩。白鑞大一兩二分。鑞大一兩二分、諸國印一面料、熟銅大十二兩、白鑞大一兩一分、鑞大一兩一分。觀此則白鑞ト鑞ト二物タルヿ明白也。本草啓蒙曰、シロメノ方ハ、鉛一斤シヤリ十兩ヲ煉テナス。令義解ニ謂凡物產所レ出、土宜各別。故任レ土作レ貢、不レ以ニ其所ロ无。假令伊豫出レ鑞之類也。ト云ハ白鑞ニメ即錫也。伊豫出錫事、續日本紀ニ見エタリ藏寮。威儀御鞍二具料云云鑞五兩。同卷第二十六日、主稅上。諸國織ニ雜綾ニ機一具綵料。鑞大六兩一分。同卷第四十八日、左馬寮。造女鞍一具料。鑞四銖

〔集註〕 延喜式卷第十五日、内

美都加禰（ミヅカネ） 本草和名 〔漢名〕 水銀 本草 〔今名〕 ミヅカネ

三代實錄卷三十六ナリ

一名 水金 新撰字鏡、新猿樂記曰、本朝物水銀。永仁御即位記曰、水銀三十兩代七百疋。海東諸國記曰、伊勢州產水銀。勢陽雜記曰、飯高郡丹生在家一千軒計アリ。水銀山アリ。日域他地ニナシト云云。近年ハ掘絕ケリト

集註 本草和名曰、水銀。和名美都加祢。出伊勢國。續日本紀卷第六曰、元明天皇和銅六年五月癸酉、令獻伊勢水銀。同卷第三十四曰、光仁天皇寶龜八年五月癸酉、賜渤海王書曰云云。又緣都蒙請、加附水銀大一百兩。三代實錄曰、陽成天皇元慶三年冬十月十三日己巳、勅令太宰府、以庫物之代云云水銀百七十五斤。注附官帳。延喜式卷第五曰、齋宮。造備雜物。水銀小五斤三兩。同卷第十七曰、內匠寮。年料、五尺屏風云云料、水銀八十三兩二分二銖。年料、几帳八基云云水銀二分。御斗帳云云料、水銀小三兩一分。牛車一具云云料、水銀小八兩。同卷第三十四曰、木工寮。塗太刀水銀一兩。同卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊勢國水銀十八斤。同卷第四十九曰、兵庫寮。凡二季大祓横刀八口。其料云云水銀一兩。百練抄卷第五曰、承曆元年五月五日、請印大宋國返信官符。長季朝臣書黃紙、入螺鈿筥。答信物六丈織絹二百匹。水銀五千兩也。扶桑略記卅九曰、延久四年三月十五日、太雲寺阿闍梨成尋、於肥前國松浦壁嶋、乘唐人一船頭曾聚之船、與船頭等物員、米五十斛、絹百匹、褂二重、沙金四小兩、上紙百帖、鐵百廷、水銀百八十兩也。台記別記曰、知足院禪閤七十賀、水銀十八兩而金料。職人盡歌合曰、かゝみとぎ。〽水かねやざくろのすますかげなれやかゝみと見ゆる月のおもては。水かねほり。〽みづかねの草にをくかとみゆるかなつゆにやどれる月のひかりを〽あぢきなやにふのみ山にほるかねのみづから人におもひいりぬる

○美豆加禰乃加

須 倭名類聚鈔　【漢名】 **水銀粉** 本草　【今名】 ハラヤ　イセオシロイ

中華古今注曰、秦穆公女弄玉有容德感僊人簫史爲燒水銀作粉與塗亦名飛雲丹。廣博物志曰、秦穆公作輕粉

【一名】 **白物** 頓醫抄曰、穴クサ。輕粉石韋右湯ヲ能ホドニウメテアビセテ、和カナル物ニテ拭テ、件ノ白物件ノ藥ヲ付ベシ

【形狀】 ○雍州府志曰、凡ッ製スル白粉ヲ者入ニ水銀ヲ於釜ニ燒レク之ヲ、故ニ其ノ本家ヲ謂フ釜本ト。所々ニ雖トモ有レ之不レ及ハ洛陽之製ニ。故ニ稱ス京白粉ト。其ノ中ニ神岡越中某シ所ロ燒ク爲ニ洛陽第一ト。禁裏院中ノ女子專ラ用レ之。按勢陽雜記曰、飯野郡射澤村輕粉、土地ノ名物也。イセオシロイノ名此ニ起ル。伊勢貞敦ガ硯之書曰、白きわのおしろいは、はらやを茶碗に入て、木にてよくすり候へば、少黃ばみたるやうになる也。それをたゝうがみに入れ置てつかふ也。はらやは伊勢おろしろいの叓也

粉霜 本草　【今名】 イセオシロイノヤキカヘシ

○**美豆加禰乃介布利** 【漢名】 倭名鈔曰、鐼粉。小品方云、鐼粉。燒朱砂爲水銀、其上黑烟名也。和名美豆加祢乃介布利

久路加禰 倭名類聚鈔　【漢名】 **鐵** 本草　【今名】 クロガネ

十一年十一月癸卯朔

山堂肆考曰、説文鐵黑金也

【一名】禰利 倭名鈔曰、銕 和名久路加祢。一訓祢利 禰利加禰 本草類編 麻可禰 萬葉集曰、麻可祢布久。仙覺萬葉集注釋曰、まがねふくとは、くろがねふく也。にふはところの名、越前にあり。まふとは、まことにのぼるほのほなり。八雲御抄曰、ま金鐵事也。くろがねとも、まがねくろがねわかすを、まがねふくとはいふなり。藻塩草曰、まがねふき、たゝらの事也。くろがねをたゝらにふく事也。新猿樂記曰、進退鐵動同楊州莫耶

眞金 催馬樂曰、眞金吹、まがねふくきびの中山おびにせる、なよや、らいしなや、さいしなや、おびにせるおびにせる。愚案抄曰、まがねは鐵也。ふくは鍛冶のふいがうにて、くろがねをふきわかす也。きびの中山は備中國にあり。くろがねのいづる所なり。藻塩草曰、まがね鉄の事也。但又金の事共いへり。然共只鉄歟。又曰、むれのかね、山のくろがね也。むれは山の名也

くろかね 見上

○延喜式卷第二十四曰、主計上、凡諸國輸調。鐵二廷。三斤五兩爲廷。同卷第二十六曰、主税上。凡一駄荷率。鐵卅廷。同卷第三十四曰、木工寮。鐵工云云右其鐵三斤五兩充和炭一石

【集註】本草類編曰、生鐵、和名祢利加祢。无時採之。日本書紀曰、皇極天皇元年夏四月乙未、蘇我大臣、於畝傍家喚百濟翹岐等、親對語話。仍賜鐵二十鋌。天智天皇九年、是歳造水碓而冶鐵。同卷第二十九曰、天武天皇白鳳八年十月甲子、新羅遣阿飡金項那、沙飡薩虆生朝貢也。調物云云鐵。十一年十一月癸卯朔甲辰、是日筑紫大宰請儲用物云云鐵一万斤。續日本紀卷第二曰、文武天皇大寶元年三月壬寅、賜右大臣從二位阿倍朝臣御主人云云鐵万斤。同卷第八曰、元正天皇養老五年春

甲辰ノ記事ハ十四ノ記事ノ重複混入ナリ三正綜覽ニヨレバ十三年ノ十一月癸卯ノ朔ナリ是ハ一年差アルナリ

時一本時トアリ。是カ

廷ノ下ニ代ニ鍪五ニロ一アルナリ

正月丙子、令下ニ天下百姓一ヲ以ニ銀錢一ヲ當ニ銅錢二十五ニ、以ニ銀一兩ヲ當ニ一百錢ニ、行中用之上。同卷第廿四日、廢帝天平寶字六年六月庚午、尙藏兼尙侍正三位藤原ノ朝臣宇比良古薨。贈太政大臣房前之女ナリ也。賻ニ絁百疋、布百段、錢百廷ヲ。三代實錄卷第四日、淸和天皇貞觀二年三月廿五日乙亥、時有レ敕、免ニ除太政官厨ヲ。借ニ大藏省云云鐵一百廷ヲ。同卷第七日、貞觀五年七月廿七日丁巳、勅、以ニ新錢一千貫文ヲ、施ニ入諸大寺ニ、充ニ修理料ニ。中宮鐵一千廷加ニ充同料ニ。東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺ニ各錢百貫、鐵百廷。延曆寺、新藥師寺ニ各錢三十貫、鐵三十廷。豐浦寺、本元興寺、招提寺、天王寺、崇福寺、知識寺ニ各錢二十貫、鐵二十廷。梵釋寺、比叡ノ西塔院、東寺、西寺各錢十五貫、鐵十五廷。同卷第二十五日、貞觀十六年夏四月廿二日庚戌、諸衞解レ嚴ヲ。有レ勅、遣ニ參議左大弁藤原朝臣家宗ヲ、勞ニ問ヲ淳和院火災ヲ、兼奉レ遣ニ云云鐵二百廷云云。賦役令曰、若輸ニ雜物ニ者、鐵十斤。祿令曰、凡祿秋冬ノ二季ハ、八月上旬給。以ニ鐵二廷ヲ凡食封者云云東宮一年雜用料、鐵五百廷。凡皇親、年十三以上、皆給ニ時服ノ料ヲ。秋鐵四廷。喪令曰、凡職事官薨卒ハ、賻物、正從一位、鐵十連。正從二位、鐵八連。正從三位、鐵六連。正四位、鐵三連。從四位、鐵三連。正五位、鐵二連。從五位、鐵二連。太政大臣、鐵十五連。延喜式卷第一日、三月祭。鎭花祭二座云云鐵三斤五兩。狹井社一座。鐵三斤五兩。風神祭二座。鐵六斤十兩。同卷第四日、伊勢太神宮。服部ノ等造ニ二時神衣ヲ機殿祭并雜用料。鐵六廷。雜供料。鐵一廷、惣所レ須鐵十五廷一兩二分。同卷第五日、齋宮。造備雜物。鐵五十一斤四兩。同卷第十七日、內匠寮。年料革莒廿合云云鐵一廷。牛車一具云云鐵四廷。同卷第四十八日、左馬寮。鐵一廷二兩二分。一廷鍾料。二兩二分鈌料。同卷第四十九日、兵庫寮。鐵十二兩二分。熟銅三分。已上鑑

篩佉ノ鐵料。凡二季大祓横刀八口。其料鐵二十四斤。口別三斤。餘略之。

皇太神宮儀式帳曰、新宮造奉時行事并用物事。用物九種。鐵十廷

附方 女人陰脫肛治方

頓醫抄曰、鐵（クロツチ）ヲ煮テ濃シメテ洗之。又方、鐵ノ屑ヲ開ノ中ニ塗之

○駿河鐵

集註 駿河國風土記曰、伊穂原郡產零羊革鎧箭鏑鐵金

○常陸鐵

集註 常陸國風土記曰、香島郡、郡東二三里高松濱云云慶雲元年國司婇女朝臣、卜率ニ鍛冶佐備大麻呂等一採ニ若松濱之鐵一、以造レ劍之云云其若松浦、即常陸下總二國之堺。安是潮之所レ有、沙鐵造レ劍大利。然爲ニ香嶋之神山ト、不レ得ニ輙入伐レ松穿ニ鐵

○美作鐵

集註 扶桑略記第六曰、和銅八年云云美作國英多郡內、有ニ取レ鐵山一。國司召ニ集役夫十人一、入ニ鐵山穴一、令レ取ニ其鐵一。然間山俄搖崩云云

○備後鐵

集註 類聚三代格曰、延暦二十四年十一月乙亥、太政官府謹奏。備後國神石奴可三上惠蘇甲努世羅三谿三次等ノ八郡調絲相ニ換鍬鐵一事。右件ノ國百姓彫弊積テ有ニ歲月一。雖レ加ニ存濟ヲ一猶未レ復レ舊ニ。而ニ前件ノ八郡僻ニ居ノ山間一、土宜レ採レ鐵不レ便ニ養蠶一。所レ輸ス絹絲營ミ求ムル多苦。因テ茲ニ承前國司屢請フ停テ絹絲ヲ一令セン輸レ鐵ヲ。伏テ望ラクハ永ク停テ絹絲ヲ一令レ輸ニ鍬鐵ヲ一。謹以申聞謹奏者、奉レ勅依レ奏ル。三代實錄卷第十一曰、貞觀七年八月十七日乙丑、備後國神石、奴可、甲努、惠蘇、世良、三谿、三次、三上八郡居ニ山間一、土宜レ採レ鐵、連年旱疾、黎庶弊亡ス。四年之間、每年四郡、更復ニ課役一。新猿樂記曰、備後鐵。勅撰名所和歌曰、吉備中山、備中備後境也。鉄掘山ナリ

○出雲鐵

集註 出雲國風土記曰、飯石郡。波多小川有鉄、飯石小川有鉄、仁多郡三

虎郷、布勢郷、三津郷、横田郷、以上諸郷所出鐵、堅尤堪造雜具

○近江鐵 【集註】續日本紀第三曰、大寶三年九月辛卯、賜四品志紀親王近江國鐵穴。同第十四曰、天平十四年十二月戊子、令下近江國司禁中斷有勢之家專貪鐵穴上。貧賤之民不得採用。同第二十四曰、天平寶字六年二月甲戌、賜大師藤原惠美朝臣押勝近江國淺井高嶋二郡鐵穴各一處。

○能登鐵 【集註】宇治拾遺物語曰、能登國には鐵といふもののすがねといふ程なるをとりて、守にとらするもの六十人ぞあなる。さねやといふ守の任にくろがねとり六十人が長なりけるものゝ云々

○安良加禰（アラカネ）本草類編 【漢名】砂鐵 天工開物 【今名】鐵砂 古今童蒙抄曰、鑛の字をあらがねとよむ、あらきくろがねをば地よりほり出すによりて、地といふ枕詞にいへり 【一名】阿良加禰 本草和名曰、鐵。和名阿良加祢 すかね 宇治拾遺。按本草類編ニ鐵粉、和安良加祢ト云、鐵粉ハセンクヅ也

○布介留加禰（フケルカネ）本草和名 【漢名】鋼鐵 物理小識 【今名】ハガネ 【一名】布加留加禰 本草類編、本草和名曰、鋼鐵。和名布介留加祢。海東諸國記曰、長門州産銅及双鐵 堅鐵（カタカネ）延喜式卷第十七曰、内匠寮。割瓜刀子廿枚料、堅鐵（カタカネ）大六斤四兩、御太刀一口料、堅鐵十斤五兩。駿河國風土記曰、西河郡貢堅鐵 【集註】本草類編曰、鋼鐵。和布加留加祢。无時採之。和名傳抄曰、鋼鐵。和名布介留加祢。是雜練生鐵作力採者 【形狀】

（甲冑製作辨曰、鋼、播磨ノ完粟郡ヨリ出ル物最トス。千種村ニテ製故千種鋼トモイウ。出雲ノ印賀及伯耆美作ヨリ出ル物次之。石見ノ出羽マタ次之

○久呂加禰乃波太 本草和名

[漢名] 鐵落 本草　[今名] ナベカネノトビクズ　[一名] 鐵乃波太

倭名類聚鈔曰、銕落。和名鐵乃波太。一云、加奈久曾。本草和名曰、鐵落。和名久呂加祢乃波太

加奈久曾 見上注

[集註] 本草類編曰、鐵落。和名久呂加祢乃波太。无時採之

○加禰乃佐比 倭名類聚鈔

[漢名] 鐵鏽 本草　[今名] テツノサビ 本草原始曰、鐵鏽。此鐵上赤衣也

[一名] 澁 令義解曰、謂柔鐵生衣是爲生澁。品字箋曰、銹。鐵上衣又刀劍久藏不試、而黑斑生。亦曰、銹鏡銹鏡上綠也。俗謂之揚妃垢、本作鏽。俗作鏥。本草和名曰、鐵精、和名加奈久曾。一名加祢乃佐比。倭名鈔曰、鐵精。和名加祢乃佐比

加禰乃佐美 新撰字鏡曰、鉎。私生反、鏉。加祢乃佐美。正字通曰、鉎。音生。生鐵衣、方音讀若星義同。亦作鉎。

塵添壒囊鈔曰、刀精事。太刀刀ノサビト云字ハ何ゾ。精ノ字ヲサビトヨム。又鉐ヲモサビニ用フ。頓醫抄曰、鉄衣。園太曆曰、御素服事、冠サバシカ子纓以平絹御也。烏帽者改壯年人摭實サハシ、或尋常物通用也

[集註] 延喜式卷第十七曰、内匠寮。御鏡一面云云料鐵精二分

[附方] 十三種ノ丁ヲ治スル方 頓醫抄曰、

鐵ノサビヲ乳汁ニ脫テ可塗、最上也

○ふしカネ 園太曆 〔漢名〕鐵漿 本草 〔今名〕ダシカネ

〔一名〕ふしみつ 藻塩草曰、ふしみつ、是は人のはに付るかね也。園太曆曰、御素服事、ふしカ子染ヒキノリ御帶云々黑服事、是は非舊服心喪服也。先於堂上著之、直衣フシカ子染也○明月記曰、寬喜二年六月廿一日云々云十三日行幸、被置物云々云作泉形瀧落、かねつくる筆の尻ヲ爲瀧水。十一月十四日、臨昏櫛風流云々云以鐵付筆爲水浪、以水入金壷油壺べにざら等爲立石。室町殿日記曰、御はくろみの箱、まき繪中ニ色〳〵入

カネ 塵添壒囊抄曰、湩事。齒ニ付ルカ子トハ何ナル字ゾ。湩ノ字ヲカ子トヨム也。順ガ和名ニハ黑齒ト書テ、ハクロミトヨメリ。又曰、日本ニモ馬醫師ヲ伯樂ト云フ也。內火藥。次ニ女ノ付湩、天目半分○湩ハフシガ子ニ非ズ。字典ニ湩乳汁也ト云リ。又酪字註曰、六書故、酒類也。北方以ニ馬乳ニ爲レ酪、故因謂ニ湩酪ト。雍州府志曰、後白川ノ院、時甚タ重ズ男色ヲ、故ニ堂上ノ男子及ニ十六七歲ニ剃リ眉毛ヲ別ニ以テ突墨ヲ造リ雙眉ヲ、以テ白粉ヲ粧テ而顏ニ、鐵漿染ニ齒牙ヲ、臙脂傳ニ爪端ニ、專ラ爲ス婦人之粧ヲ、自レ茲爲ニ流例ト雖レ爲ニ大人ト染ニ齒牙ヲ、聚テ頭髮ヲ於ニ頂上ニ而結レ之、以レ是ヲ別ツ堂上地下ヲ

〔集註〕 類聚雜要抄曰、手筥一合、齒黑女ノ盤、齒黑帶皿、齒黑女筆四。將軍義尙公御元服記曰、廿四日までも、御はぐろめまいりなどし給ひしかば、御口のうちくろ〲として、御めほそやかに、御おもやせにしろくて、つねよりは中〳〵うつくしくぞおはしまし侍る

〔附錄〕 金花開 明月記曰、寬喜二年五月廿九日、大谷齋宮御春日京極之由、心地房告。依金花開

令立給。百練抄第五曰、應德二年十一月十四日、去八月太宰府言上高良社石硯并高座金花忽生事ー

銀の花

明月記曰、正治二年十月十八日、今日仰云、此宅ニ銀の花といふ物一日比開、依其事有物忩。又今日有此事、所驚恐也。物近日恠異多。申云、尤可有御愼、先渡御他所、尤可宜歟。如此事、極可有御愼者也。又仰云、更無祟、去夏之比、又此花開、尤不吉歟。物此間身極窮屈、可病惱之期也。誠爲愼不少。但力不及。猶申云、此事枉可驚愼、御後悔極無益事也。天福元年八月廿四日、今月廿二日未時東御宗殿外殿師子南方銀花見出事云々。文曆二年五月十一日、辰時巳時居所前簾見出微少銀花、今年連々怪異、雖恐思去何之乎。居易錄曰、天啓辛酉秋六合巴山菴新造地藏、忽左膝生花二朶、三日如盆七日如盤、高可盈尺、色淺黃嫩白、淸芬襲人。又云、右脇下生蓮華一莖四十餘瓣、如栗玉色、踰月又生一莖。倘湖樵書曰、謝氏詩源云、昔薛瓊至孝父病嘗其溲、而家甚貧、嘗出求薪遇老父、以一物與之曰、此銀脊也、用四壁土種之銅盆中置臥床下、當得銀足、贍汝家瓊歸如言種之、旬日發苗、又旬日生花、花有銀色、若鈿螺及結寔皆銀也

古名錄金部卷第七 終

古名錄玉部卷第八目錄

珠玉類

之良太麻（シラタマ） 眞珠 ○綠眞珠 ○むらさき珠
努（ニ） 瓊
綠玉 祖母綠
赤黑玉 昔刺泥
紺玉
紫珠 蠟子
吹玉 硝子
勾玉
比太万（ヒダマ） 珷玞
紫石英
可羅多麻（カラタマ） 玉
青玉
黄玉 木難
黑玉
松實中碧珠
五色玉
富岐玉（フキタマ）
八坂瓊（ヤサカニ）
白石英
比止流太萬（ヒトルタマ） 火珠

美豆止留太萬 水精
赤水精 紅水精
留利 瑠璃
青瑠璃
白琉璃
阿加多末 琥珀
玻瓈
如意珠
足高玉
七わたにわたかまりたる玉 九曲珠
蛇玉 蛇含石
牛玉 牛黄
珊瑚

黒水精 墨精
夜光玉 夜光珠
紺青玉 紺琉璃
黄ルリ
女奈宇 馬瑙
岐良々、雲母
岐良々、玫瑰
羽太玉
鵜鹿々赤石玉
鯨珠
舎利
青琅玕

うみまつ　石帆

通計四十八種

治曆三年十月五日

古名錄玉部卷第八

紀藩　源　伴存撰

珠玉類

令義解曰、珠玉謂自生爲珠作爲玉也。扶桑略記廿九曰、天皇車駕幸二臨宇治平等院一。還御之後供二御膳一。以二金銀珠玉一儲レ之。事之希有、殊催二叡感一

之良太麻（シラタマ）　日本紀私記

【漢名】眞珠　本草

【今名】カヒノタマ

【一名】白玉

山堂肆考曰、財貨源流。珠生二大海中一。乃蚌蛤胎也。埤雅蚌珠在腹。品字箋曰、珠珍珠其種甚多、不レ止二于蚌一。而蚌珠爲レ最。蓋蚌爲二陰物一、且食二太陰之精一結而成レ珠萬葉集卷第十一曰、淡海海、沈白玉、不知、從戀者、令益。白玉、纏持、從今、吾玉爲、知時谷。白玉、從手纏、不忘、念、何畢。倭名類聚鈔曰、眞珠。之良太麻。延喜式卷第二十三曰、民部下。交易雜物。志摩國、白玉千顆。

玉造曰、簾二係（カケ）二蚌胎一。翼越集曰、南珠色紅、西洋珠、色白、北海珠色微靑隨方色也

斯良多麻　古事記曰、斯良（白）多麻能

思良多麻　萬葉集第十八曰、思良多麻能

之良太万　天文寫本和名鈔曰、珠。日本紀私記云、眞珠。訓、之良太万

加比乃多末　大同類聚方

白眞珠　土佐國風土記曰、吾川郡玉嶋。或說

曰、神功皇后巡國之時、御船泊之。皇后下嶋休息、礒際得一白石、團如鷄卵。皇后安于御掌、光明四出。皇后大喜詔左右曰、是海神所賜白眞珠也。故爲嶋名

眞珠 續日本紀卷第一曰、文武天皇二年九月乙酉、令レ獻ニ豐後國眞朱一。按ニ眞朱同名アリ。萬葉集ニ眞朱穿ト云ハ丹砂ノ事也。豐後國風土記解ニ、眞朱ヲ丹砂ノ事トス、非也。續日本紀ニ丹砂ハ朱砂第一第廿七ト出、尤證トスベシ

眞珠 和漢通名。萬葉集卷第十二曰、眞珠眼遠兼念、一重衣一人服寢。源平盛衰記卷第十一日、眞珠ノ立テ砂

麻多麻 古事記曰、麻多麻袁加氣、麻多麻那須

眞玉 萬葉集卷第十三曰、眞杙瀰波、眞玉乎懸、眞珠奈須

しんず 榮花物語本の雫曰、いはんやこんごん、るり、しんずとうをもてかきうつし云々

阿久也玉 百練抄卷第五曰、白河天皇承保三年六月二日、諸卿於ニ殿上一定下申大宋國返信物事上。或云、可レ遣ニ和琴一。或云、可レ遣ニ金銀類一。或云可レ遣ニ細布阿久也玉一。塵添壒嚢抄曰、雀入ニ大水ニ爲レ蛤云ヲ題トメ、紀ノ納言ガ作レル詩ニ、只欲不レ含ニ珠ヲ與モ通ト云ヘリ。ハマグリノ中ニアクヤノ珠アリ。此故カク作レリ

阿久夜玉 新猿樂記曰、本朝物云云阿久夜玉云云等也

あこやの玉 宇治拾遺〇山家集曰、いらごへわたりけるに、井がひと申はまぐりに、あこやのむねと侍るなり。それをとりたるからを、たかくつみをきたりけるを見て「あこやとる井がひのからをつみをきてたからの跡をみするなりけり〇大和本草曰、眞珠ハアコヤ貝ニアルヲヨシトス。本草啓蒙曰、眞珠ハアコヤガヒヨリ出ル珠ナリ

婀波寐之羅陀魔（アヘビシラタマ） 日本書紀武曰、擧騰我彌儞、枳謂屢齒嗜比謎、搖摩儺羅麼、婀我裒屢拕摩能、婀波

隣之羅陀曦。釋日本紀曰、蜊波螺蝮也。之羅陀曦白玉也。堀河院次郎百首曰、から人のころもにかさるしらたまの光(ヒカリ)、めづらしきかな()本草啓蒙曰、石決明ノ珠ハ、今藥舖ニテハ眞珠ト呼ハズ、單ニカヒノタマト呼ビテ、價甚ダ賤シ。ソノ珠紫綠色ニシテ千里光(アハビカラ)ノ內ノ色ノ如ニシテ光澤アリ。又青色ナルアリ。形ハ長アリ橢アリ、正圓アリ、一ナラズ。至テ大ナルモノアリ、全腸珠トナリタルアリ。又至テ小ナルモノアリ、皆腸中ニアリ。又殼ニツキタルモノアリ、青色多シ。肉中ニ胎スルモノハ稀ナリ。ソノ形圓ニシテ甚ダ眞珠ニ似タレドモ、眞珠ヨリハ微シ青ミアリテ硬シ

蚫玉

釋日本紀曰、片思之間寄蚫玉也

鰒珠

萬葉集卷第六曰、淡路乃、野島之海子乃、海底、奧津伊久利二、鰒珠、左盤爾潛出云云同卷第十三曰、木國之、濱因(ヨルトフ)云、鰒珠、將拾(ヒロハント)跡云ヽ而云云奧ツ浪、來因ル白珠、邊(ヘツ)浪之、緣ス流白珠、求ム跡曾云云日本書紀曰、允恭天皇十四年秋九月癸丑朔甲子、天皇獵ニ于淡路嶋ニ、時麋鹿猿猪、莫々紛々、盈ニ于山谷ニ。焱起蠅散、然終日以不レ獲ニ一獸ニ。於レ是獵止以更卜矣。嶋神祟之曰、不レ得レ獸者是我之心也。赤石海底有ニ眞珠ニ、其珠祠ニ於我ニ、則悉當レ得レ獸。爰更集ニ處々之白水郎ニ、以令レ探ニ赤石海底ニ。海深不レ能レ至レ底。唯有ニ一海人ニ、曰ニ男狹磯ニ、是阿波國長邑之海人也。勝ニ於諸海人ニ。是腰繫レ繩入ニ海底ニ、差頃之出曰、於ニ海底ニ有ニ大蝮ニ、其處光也。諸人皆曰、嶋神所請之珠、殆有ニ是蝮腹ニ乎。亦入探之。爰男狹磯抱ニ大蝮ニ而泛出之。乃息絕以死ニ浪上ニ。既而下レ繩測ニ海底ニ六十尋。則割ニ蝮實ニ、眞珠有ニ腹中ニ、其大如ニ桃子ニ。乃祠ニ嶋神ニ而獵之、多獲レ獸也。萬葉集第十三曰、鰒珠、拾、爾登謂ヒ而云云

鰒玉

萬葉集卷第七曰、伊勢海之、白水郎之島津我、鰒玉、取而後毛可、戀之將繁

安波妣多麻

萬葉集卷第十八曰、爲レ贈ニ京家ニ

吏、雲州本「使」ニ作ル

願眞珠哥一首并短歌。珠洲乃安麻能、於伎都美可未爾、伊和多利弖、可都伎等流登伊布、安波妣多麻云云。白玉乎、都々美氏夜良婆云云。於伎都之麻、伊由伎和多里弖、可豆具知布、安波妣多麻母我、都々美弖夜良牟

波末久利乃太末　本草類編曰、眞珠。和波末久利乃太末

石著玉　萬葉集卷第七曰、寄玉。大海之、水底照之、石著玉、齊而將採、風莫吹行年

沉白玉　萬葉集卷第七曰、寄玉。海底、沉白玉、風吹而、海渚雖荒、不取者不止

沉有玉　萬葉集卷第七曰、底清、沉有玉乎、欲見、千遍曾告之、潛爲白水郎

奧在玉　萬葉集卷第七曰、寄玉。秋風者、繼而莫吹、海底、奧在玉乎、手纏左右二

奧津白玉　萬葉集卷第七曰、海之底、奧津白玉、緣乎無三、常如此耳也、戀度味試

集註　延喜式卷第十五曰、內藏寮。白玉一千丸。志摩國所進、臨時有増減。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。志摩國。白玉千顆。同卷第五十曰、凡王臣家吏、不得到對馬嶋私買眞珠擾乱百姓。古今著聞集卷第一曰、これにより海濱を見ければ、明珠一顆あり。又曰、其朝袖より白珠おちたり

形狀　宇治拾遺物語卷第十四曰、袴のこしより、あこ屋の玉の大なる、豆斗ありけるをとり出して、とらせたりければ云々物へ行ける道に、おのこの玉やかふといひて、反古のはしにつゝみたる玉を、懷よりひき出てとらせたりけるをみれば、もくれんじよりもちいさき玉にぞありける。これはいくらととひければ、きぬ廿疋といひければ云々その舟の一のせんどうといふものも、大なる玉もちたりけれども、其はすこしひらにて、この玉にはおとりてぞありける。福田方曰、眞珠、臼ニ入テ細ニ搗テ、アツキ絹ヲ重テ羅吏ニ柞コト

之刊本二也ニ作ル

數百下メ使ヘ、此ハ蚌蛤ノ產スル所ノ者也

○緑眞珠 榮花物語 [一名] 緑珠 慈惠遺告曰、念珠云云緑珠一連 [形狀] 榮花物語をんがく曰、緑眞珠のうへき、はるりのいろなり云云緑眞珠のはは、あをきこと、さかりなるなつのうへきのごとし

○むらさき珠 著聞集 [集註] 古今著聞集卷第二曰、此僧あかつきに下向せんとしけるに、たれともしらぬ俗來りて、珠を持て僧にさづけていひけるは、この珠准后へまいらせて給はるべしとて、すなはちさりにけり。珠の色むらさきにて、其勢たちばなの程なりけり

可羅多麻 萬葉集 [漢名] 玉 本草 [今名] タマ

名物攷曰、玉符云、赤如雞冠、黃如蒸栗、白如脂山堂肆考作肪、黑如淳漆 此玉之符也。山堂肆考曰、玉書有山玄文、有水蒼文。華夷珍玩考曰、玉其色五般今惟青白者常有、黑者時有、黃赤者絕無。品字箋曰、玉爲色、非止白之一種。古玉賦云、赤擬ニ丹砂ニ、黃侔ニ蒸栗ニ、紫若ニ鷄冠ニ、黑如ニ點漆ニ、外此尚有ニ青緑蒼碧種ニ色ニ [一名] 可良多萬 江家次第卷第十曰、本朝月令云、五節ノ舞者、淨御原天皇之所レ制レ之。相傳云。天皇御ニ吉野宮ニ、日暮彈ニ琴有レ興、俄爾之間、前岫ノ之下ヨ雲氣忽起ヲ、如ニ高唐神女ノ、髣髴トノ應レ曲而舞、獨入レ睿、他人無レ見、人擧ニ袖五變、故謂ニ之五節ニ云云其歌云、乎度綿度茂、邑度綿左備須毛、可良

起ノ下「疑」字アリ
人ナシ
毛ヲ「茂」ニ作ル
志ハ「須」字ノ誤カ

多萬乎、多茂度迩麻岐底、乎度綿左備須茂。源平盛衰記ニモ出タリ〇萬葉集卷第五曰、遠等咩良何、遠等咩佐備周等、可羅多麻乎、多母等爾麻可志云云。平家物語曰、やうじうのこがね、けいじうのたま、ごきんのあや、しようこうのにしき

加良太麿 江談抄卷第一曰、清御原天皇之時五節始也。於二吉野川一鼓琴、天女下二降於前庭一、詠歌云云、仍以二其例一始レ之。天女歌云、乙女子賀、乙女佐比志毛、加良太麿遠、乙女佐比須茂、其加良太麿遠

多麻 古事記曰、多末能、美須麻流

多末 倭名鈔國郡部曰、河內國高安郡玉祖、多末乃於也

多萬 倭名鈔國郡部曰、肥後國玉名、多萬奈。駿河國駿河郡玉造、多萬都久里。甲斐國山梨郡玉井、多萬乃井。武藏國埼玉郡埼玉、佐以多萬。加賀國加賀郡玉戈、多萬保古。周防國佐波郡玉祖、多萬乃於也。土佐國安藝郡玉造、多萬都久里

太末 倭名鈔國郡部曰、武藏國埼玉、佐伊太末

太萬 倭名鈔國郡部曰、武藏國兒玉、古太萬。陸奧國玉造、太萬豆久里。萬葉集第九曰、銀母、金母、玉母、奈爾世武爾云云。塵添壒囊抄曰、探レ玉者破レ石拔レ玉者奔レ懸取レ諸云ガ如ク。倭名鈔國郡部、遠江國麁玉、阿良多末。今稱二有玉一アラタマハ璞也

白玉 倭名鈔曰、玉。語欲反、白玉。和名上同。令義解曰、珮者帶レ玉、天子珮二白玉一、公侯珮二玄玉一、是也。扶桑略記廿八曰、如二白玉之瑕一而〇延喜式卷第二十一曰、治部省。祥瑞、澤谷生二白玉一、瑯玕景。註、玉有二光景一者也。華夷珍玩考曰、廣志云、白玉美者可三以照二面ヲ

集註

日本紀略曰、延曆十四年十二月丙子、聽下參議已上著二白玉帶一。大同四年、聽二五位以上通用白木笏一、其白玉把笏等腰帶者、亦依二延曆十五年正月、十八年正月兩度格一、自餘禁制、一如二常例一。續日本後紀卷第三曰、承和元年八月辛巳、上二啓先太上

天皇及太皇大后、賞ニ洒ッキヲ於冷然院ニ、上奉ニ白玉屣一。同卷第六曰、承和四年秋七月丙戌、天皇御ニ後庭ニ、命ニ左近衞府ニ、奏ニ音声ニ、令レ弄ニ玉及刀子ニ。令義解曰、寶器謂金樽玉盞之類也。山槐記曰、治承四年四月廿二日、今日皇帝於紫震殿即位云云。未二點着御高御座、不待次第以告時着御列也。御佩玉聲頻聞令與其音云云。江談抄曰、花山院御即位之日、於ニ大極殿高座上ニ、未レ觸ニ鋆根ニ、先令レ犯ニ馬内侍ニ給之間、惟成弁驚ニ玉佩并御冠鈴声ニ、称ニ鈴奏ニ、持ニ参叙位申文ニ。天皇持ニ御手ニ令レ帰給之間、任レ意行ニ叙位ニ云云。台記別記曰、久安三年三月廿七日、知足院禅閤七十賀。用途玉総角廿四流。毎机四流料、玉一万一百果、青白黄貫交之。御飯料、白玉一万九千果。居物平盛十六坏料、白玉三千八百五十。此内青玉六千八百果、黄玉八百五十果、白玉八百五果。凡玉四万三千七百果。一机、白玉高盛一坏。不レ為ニ飯代ニ。一机白玉平盛四坏。為ニ菓子代餅、生栗、梨、棗等代ニ也。宣胤卿記曰、永正三年□廿二日、今日春日祭閑後夜鐘沐湯着束帯玉丸柄蒔劍紺地平緒。榮花物語本の雫曰、たまのちくをし云云

形状

世俗浅深秘抄曰、白玉帯見ニ知寶ノ玉作玉ニ事。秘説也。古帯中非ニ寶玉ニ帯有之。古人不レ知ニ秘説ニ歟。寶玉ハ打合セテ聞レ聲尓無レ響如レ石ノ声ニ。作玉ハ、其声有レ響如ニ瑠璃ノ声ニ。作玉ハ易レ破ル。寶玉ハ不レ焼レ火不レ破也。此説秘蔵説也。傍抄曰、眞實玉火ニモ不レ焼云ヽ予所レ持帯、故兼忠卿家焼亡之時、在ニ其中ニ、一切無ニ損氣ニ。○字典曰、玉。集韻、烈火焼之、不熱者眞玉也。偶書曰、崑山之玉、入火不焚、吉光之裘、入水不濡、君子所以貴于有徳也。燕夷珍玩考曰、讀先哲云、玉之所ニ以異ニ于群石ニ者、以ニ其ノ堅ニ而有レ渾火力不ニ可レ傷為レ別耳、匪ニ但質潤而音清ニ也。文會雑記曰、玉ノ事今ノ水晶トハ少違ヘリ。水晶ハスルドキ色ナリ。玉ハウルミテ成ホド温潤ナルモノナリ

努ニ 日本書紀　［漢名］瓊　［今名］アカキタマ

［一名］**邇** 古事記曰、天津日高日子番能邇邇藝命、此子隱レ降也云云。是以隨レ白之、科ニ詔日子番能邇邇藝命一。日本書紀曰、天津彥彥火瓊瓊杵尊。古事記曰、大倭根子日子賦斗邇命。日本書紀曰、大日本根子彥太瓊天皇

貳 日本書紀曰、瓊ハ玉也。此曰レ努ニト。釋日本紀曰、私記云、師說、此ノ注瓊玉也、此ヲ云レ努ト、故先師又據レ之、而今或本ニ、努字爲レ貳也、蓋シ古者謂レ玉ヲ或爲レ努、或爲レ貳、兩說並ニ通ス、唯以レ貳ヲ爲ニ異本一。又曰、瓊、渠營反。赤玉。說文云、赤玉也。名物攷曰、瓊赤玉也。漁隱叢話曰、瓊乃赤玉。丹鉛總錄曰、瓊赤玉也。謝希逸雪賦、林挺瓊樹也。豈有ニ赤雪一耶。和名鈔曰、丹砂、和名迩ト云。迩ハ瓊ニメ即赤色ナル事明也。玉造曰、室ニハ粧ニ瓊瑤一ヲ

阿加陀麻 古事記曰、阿加(赤)陀麻(玉)波、袁佐閉比迦禮杼　［集註］觀世音寺資財帳曰、玉貳仟貳佰捌拾柒丸。赤三丸

青玉 延喜式

［一名］**青石玉** 延喜式　［集註］延喜式卷第十九曰、式部下。元正朝賀。其禮冠者、親王四品已上、以ニ云云青玉五顆一、交ニ居冠頂一、四位云云以ニ青玉十顆一立ニ後押鬘上一、

正五位云云以青玉十顆立後押鬘上。同卷第三曰、臨時祭。國造奏神壽詞。青石玉四十四枚。觀世音寺資財帳曰、玉貳仟貳佰捌拾柒丸。青千三百七十七丸。大卅八丸。小千二百卅七丸。台記別記曰、知足院禪閤七十賀。一机、

青玉平盛四坏

綠玉 延喜式　漢名 祖母綠 通雅

物理小識曰、暇耕錄以明綠色爲助木刺。今訛呼祖母綠。華夷珍玩考曰、助木刺中等明綠色○釋日本紀曰、阿烏耳豫辭。私記曰、師說猶木之葉色如青玉

集註 延喜式卷第十九曰、式部下。元正朝賀。其禮冠者、諸王一位云云以綠玉六顆交居冠頂。云云以綠玉廾顆立前後押鬘上、一位以云云綠玉五顆交居冠頂、四位云云以綠玉六顆交居冠頂、諸臣二位以綠玉五顆云云交居冠頂、四位以綠玉五顆交居冠頂、五位以綠玉五顆云云冠頂

黃玉 延喜式　漢名 木難 天祿識餘　一名 きなる玉 源氏物語

天工開物曰、木難純黃色。本草綱目曰、黃者名木難珠

集註 延喜式卷第十九曰、式部下。元正朝賀、其禮冠者、諸王三位以黃玉

八顆立櫛形上。諸臣三位以黄玉八顆立櫛形上。源氏物語繪合曰、しろきしきし、あをきへうし、きさる玉のぢくなり。同梅枝曰、きのへうし、おなじき玉のぢく、だんのからくみのひもなど云々。合記別記曰、知足院禪閤七十賀。

一机　黄玉平盛四坏

赤黑玉　延喜式

【漢名】昔剌泥　華夷珍玩考

華夷珍玩考曰、昔剌泥黑紅色

【集註】延喜式卷第十九曰、式部下。元正朝賀。其禮冠者、諸臣二位以云云赤黑玉三顆交居冠頂。○正字通曰、今言物一顆、顆一頭也。六書故、凡圜物以顆計。又珠琲曰顆

黑玉　延喜式

【集註】延喜式卷第十九曰、式部下。元正朝賀。其禮冠者、諸王一位云云以黑玉八顆立櫛形上、正五位云云以黑玉十顆立前押鬘上

紺玉　延喜式

扶桑記ハ扶桑略記ノ誤

【集註】延喜式巻第十九曰、式部下。元正朝賀、其禮冠者、親王四品已上云云以紺玉廿顆立前後押鬘上、諸臣一位以紺玉八顆立櫛形上

松實中碧珠 百練抄

閑居偶録曰 珠不獨蚌生有龍珠蛇珠龜珠魚珠木珠石珠羊珠牛珠鶴珠種種不一凡諸物受山川日月之氣皆能生珠云云又有友人云 蜀山合抱大樹伐者得於根節中得珠如豆大然光彩少減於蚌珠凡物受山川日月之氣皆能生珠信而有徴

【一名】碧玉 太神宮諸雜事記。令義解曰、碧亦青也

【集註】百練抄巻第四曰、後一條天皇長元七年九月卅日、祭主輔親獻碧珠一顆、是去八月於神宮祈請之間、於寶前松實中所得云云。令諸卿定申之。安置内殿。扶桑記亦出之 袋草紙曰、輔親ハ長元七年十一月晦日、叙二位。十月卅日殊勅以神寶奉伊勢使ニ付テ飯參シテ献碧珠一顆。於神宮奉仕御祈之間、自然在寶殿前樹云云。太神宮諸雜事記曰、長元七年八月廿八日與村、初七ケ日間、祭主正四位下行神祇伯大中臣朝臣輔親、預候於太神宮天、少司氏房共、公家御祈禱所被申也。是則依宣旨也。而間、御前乃松樹仁志天、松子中仁有以碧玉一丸志見付天、乍驚仁祭主仁奉授云云

紫珠 續日本後紀

【漢名】蠟子 格古要論

嘉祥二年十一月壬申

通雅曰、紫ノ者ノ名ニ蠟子ト〇續日本後紀卷第十九日、採ニ紫珠之嘉實ヲ用ヒ供ニ插頭之祥ニ

五色玉　延喜式

集註　延喜式卷第一曰、春日祭。散祭料、五色玉二百枚。園并韓神三座祭。五色玉一百枚。平岡神四座祭。散祭料、五色玉二百丸

吹玉　新猿樂記　漢名　硝子

格古要論曰、硝子ハ假水晶、用レ藥燒成者、色暗青有ニ氣眼一、或有ニ黃青色者一、亦有ニ白者一。但不ニ潔白明瑩一、謂ニ之硝子一。

集註　新猿樂記曰、唐物云云吹玉等也

富岐玉（フキダマ）　延喜式

今案　延喜式卷第三曰、凡出雲國所レ進、御富岐玉六十連。三時大殿祭料三十六連。臨時二十四連。每年十月以前令ニ意宇ノ郡神戶ノ玉作氏ヲシテ造備一。差レ使ヲ進上。ト觀ユレバ新猿樂記所ノ載決產藥製ノ吹玉ト不レ同

勾玉（マガタマ） 人車記

〔集註〕人車記曰、仁平二年八月廿九日、膳中供膳次第云々第三懸盤青勾玉四坏、第四懸盤糖勾玉四坏、第五懸盤紺勾玉四坏、第六懸盤黄勾玉四坏、已上十六坏、銀盤如常色々盛玉、高二寸五分

八坂瓊（ヤサカニ） 日本書紀

〔一名〕八尺勾璁 古事記 八坂丹玉 釋日本紀 青八坂丹玉 同上 八尺瓊 同上

〔今案〕釋日本紀曰、八坂瓊、越後國風土記ニ云、八坂丹ハ、玉ノ名。謂ニ玉色青ヲ、八坂丹ノ玉ト也。萬葉集卷第十四曰、於吉爾須毛、乎加母乃母己呂、也左可杼里。觀レハ此ヲ則八坂瓊ハ鳧ノ頭ノ綠色ニ似タル可ッレ證トス。乎加母ハ卽綠頭鳧也。武家調味故實曰、鴨の男鳥をば惣名に靑くびといふ 按鴨ノ字ヲカモニ用ルハ非也。鴨ハアヒル也 建寧名勝志曰、甌寧縣治西南浦新溪ニ水合流處有レ潭、深沉瑩綠色如ニ鳧頸ノ、名ク鳧綠潭ト。母己呂ハ軀也。日本書紀仁德曰、其ノ爲ルレ人、壹體兩面。平家物語曰、くびをばはんにやじの門のまへに、くぎづけにこそしたりけれ。むくろはさだめてすてをひてぞあるらん

〔集註〕日本書紀曰、則獻腹有ニ八尺瓊勾玉ハ、因以獻之。延喜式卷第八曰、祝詞大殿祭云々齋玉作等我持齋波利持淨麻波利造仕禮留瑞八尺瓊能御吹支乃五百都御統乃玉爾

比太万（ヒタマ）　新撰字鏡　［漢名］**珷玞**　物理小識　［今名］**玉ニ似タル石**

字鏡曰、璑、側岑反 平、石似玉、比太万。字典曰、璑、說文、石之似玉者。格古要論曰、石類玉。句容茆山石白而有光有水石冷白色或有水路或有飯糝色好者與眞玉相似雖刀刮不動終有石性不溫潤宜仔細辨之。本草綱目曰、其石似玉者、珷玞珉琨璁瓔也。物理小識曰、石似玉者夷陵珷玞。華夷珍玩考曰、玉近似者甚多、如ニ珷玞ニ亦可ニ以雜一也。品字箋曰、珷玞石次玉者。正字通曰、玞、撫孤切、音孚。石次玉赤地白采珷玞通作碔砆

珉　若水本モ徐鉉本モ「琨」ニ作ル

白石英　和漢通名

○新撰字鏡曰、石英　山阿不支

［集註］本草和名曰、白石英、出太宰備中國。本草類編曰、白石英、日本近江國、備中國、二月採之。續日本紀卷第六曰、元明天皇和銅六年五月癸酉、令レ獻ニ陸奥國白石英一。續日本後紀卷第二十曰、仁明天皇嘗テ縦容トノ謂ニ侍臣ニ曰、朕年甫（ハシメテ）七齢ニノ、得ニ腹結ノ病ヲ一也。八歳ニノ得ニ臍下絞痛之病ヲ一、尋患ニ頭風ヲ一、加ニ元服ヲ一後三年ニノ、始テ得ニ胸痛ヲ一。其病之爲レ體也、初似ニ心痛ニ一、稍ノ如ニ錐ニテ刺カ一、終以テ增長ノ、如ニ刀ニテ割ル一。於レ是ニ服スルニ七氣丸紫苑生薑等ノ湯ヲ一、初ハ如シ有レ效、而ノ後雖ニ重テ劑（ハナハタシ）一、不ニ曾テ效驗アラ一。冷泉聖皇憂ホレ之。勅曰、予昔シ亦得ニ此病ヲ一、衆方不レ效ラ、欲スルニレ服ニ金液丹幷白石英ヲ一、衆醫禁レ之不レ許。予猶強テ服ノ、遂得ニタリ疾愈ルヲ一。今聞ク所ニヲ患ヘ、非ニ草藥之可ニ治ノ、可レ服ニ金液丹ヲ一。若シ詢ハ諸俗醫等ニ、必駭論ノ不レ肯、宜シク喚テ海淡海子ヲ一細ニ論問シ、隨（ツ）其ノ言說ニ服セヨ之。虔（シンテ）承勅旨ヲ、服スルニ茲丹藥ヲ一、果ノ得タリ效驗ヲ一。兼テ爲レ救ニ解ノ古老ン、設ツ自始

之法ヲ。世絶ニ良醫ヲ、倉卒ノ之變可レ畏故也。今至テ晩節ニ、熱發多變ノ、救解有リ煩ヒニハ世人未レ知ニ朕カ躬之本病ト上皇之勅旨トヲ、必謂ハン妄ニ服シ丹藥ニ、兼テ絶チ自治ヲ而敗ルト焉。宜シク記シ由來ヲ令ヲ免レ此ノ謗ヲ、恭ク遵テ詔旨ニ、記シ而載スレ之ヲ

【藥製】 頓医抄曰、白石英打碎テ云云

紫石英 和漢通名

【集註】 本草和名曰、紫石英。出伯耆國。本草類編曰、紫石英。日本伯耆國。无時取之

比止流太萬（ヒトルタマ） 倭名類聚鈔

【漢名】 火珠 本草

【今名】 火トリダマ

【一名】 火取玉 百練抄○倭名鈔曰、火精、和名比止流太萬。人車記曰、仁安四年正月七日云云豐受太神宮御料、火取玉一果入錦袋 火執珠 後乘坊軍源參宮記 火取珠 人車記曰、仁安四年正月云云火取珠一顆云云 火精玉 類聚雜要抄曰、擲筥一双。乙身納銀小筥廿一合ノ内。一合、火精玉一丸、取レ火、徑七分許、納ニ錦袋ニ

【集註】 延喜式卷第二十曰、大學寮。釋奠云云大炊寮一人、掌下取ニ明火ヲ以テ爨（サンク）事ヲ云云。前享一日云云大炊寮取ニ明火ヲ陽燧ニ以テ供レ爨。百練抄卷第六曰、崇德天皇保延六年五月五日以ニ火取玉ヲ寫ニ陽燧ニ。供ニ八幡宮常燈ニ件

玉上皇令ㇾ獻給ㇾ炎上以後令ㇾ繼ニ常燈ニ也。太神宮參詣記曰、たとへば玉の水火をいだすがごとし。玉には水火なけれども、日にむかひて火をとり、月に對しては水をとる。水左記曰、承保三年六月二日、未時右大殿御共參內、大宋國方物使等悟本与孫思文告對問之由、或云火取玉水銀莢乃長絹眞珠、或云長絹紬布金銀類、或云被和琴相加如何事有哉 【今案】文治二年俊乘坊參宮記曰、即日之夕聖人座禪眠ノ中、無ㇾ止貴女來ㇾ前水精珠二顆授ニ與之ㇾ一顆紅薄様裹ㇾ之、一顆白薄様裹ㇾ之、聖人問云、是誰人乎。答云、吾是風宮也云云夢中授ニ与珠ㇾ覺後現在ニ袖上ㇾ捧ニ頂上ニ歸ニ南都ㇾ多年安置之也云云作珠者火精珠、水取珠也云云此珠私得分也ト云云トミユ。火取玉ハ水精タル可證也

美豆止留太萬（ミツトルタマ）

倭名類聚鈔 【漢名】水精 本草

【一名】白水精 延喜式 すいさう 枕草紙曰、あてなるもの云云すいさうのずゞ すひさう 大鏡 水取珠 俊乘房重源參宮記 すいせう 榮花物語曰、こんごん、すいせうのみつのはしにをとらずみえたり すいしやう 榮花物語音樂曰、にはのすなごはすいしやうにきらめきて、いけのみづきようすみて、いろ〳〵のはちすのはななみより出たり 水青 類聚雜要抄曰、水精ノ樋水青貫直五十疋宰形水青徑六分 水さう よろづの御法曰、かねの花

筥に水さうの御ずずのひかりあひたるなどはよのつねの事のやうなれど、えもいはず見たれぬまでありかたくおがみたてまつる。永享九年行幸記曰、即直檀紙水晶の紙鎭有

水精玉

類聚雜要抄曰、椭筥一双、乙身納銀小筥廿一合ノ内。一合、水精玉一丸徑七分計、取レ水。納ニ錦袋ニ。玉造曰、戸ニハ浮ヲ水精ヲ。倭名抄曰、水精。和名美豆止留太萬

集註

續日本紀巻第三十四曰、光仁天皇寶龜八年五月癸酉、賜ニ渤海王書ニ曰云云又緣ニ都蒙請ニ、加ニ附水精念珠四貫ニ。出雲國風土記曰、意宇郡長江山郡家東南五十里有ニ水精ニ。延喜式巻第十三曰、圖書寮。水精塔形一基。同巻第十九曰、式部下。元正朝賀。其禮冠者、親王四品已上云云以ニ水精三顆ニ云云交ニ居冠頂ニ。同巻第二十曰、大學寮。主水司取ニ明水於陰鑒ニ。水精玉以供ニ實樽罍ニ。觀世音寺資財帳曰、玉云云水精六丸、大三、小三。誦珠陸貫。前帳云、水精三貫。伏見上皇御中陰記曰、文保元年十月十七日、御布施、導師、水精念珠。廿日、事了賜ニ水精念珠一連ニ。廿一日、御布施、水精念珠。永享九年行幸記曰、當之御所云々檀紙を被レ置。水精の紙鎭あり。明月記曰、正治二年八月十八日云云捧物。水精念誦銅枝。人々漸進之。兵範記曰、仁安元年九月六日、御佛事。覺智僧都云々銀扇置獨鈷皆水精念珠、願意已講單重皆水精念珠縣銀枝、光覺已講水精念珠同枝家賓皆水精念珠縣銀枝、實勝水精念珠縣銀枝。天龍寺供養記曰、水精念珠。後宇多院御灌頂記曰、香染法服鍵駄瀫子水精念珠。三國傳來道具也。持之云云水精念珠、付ニ打枝ニ。走湯山緣起曰、右手持水精念珠。仁和寺御傳曰、大師御筆一卷、水精軸、羅ノ表紙、納ニ銀箱、以青地錦裹之、付銀打枝。聖忠記曰、水精御念珠云云。園太暦曰、水精念珠縣檀打枝。慈惠遺告曰、念珠云云水精。親長卿記曰、文明十三年十一月十四日、淨住寺御舍利、於議付所有御頂戴云云

ト活版本群本「ノ」

三十八文龜二年六月

大鏡卷五「申し」「おり」ハ畧書セリ

白水精臺取出率居金盤。十御門院聖忌記曰、水晶御念珠等云云。大鏡曰、紫檀の御ずゞの水精のさうぞくしたるひきかくしてもち給ひたりけり。榮花物語音樂曰、すいしやうのもといし云云。平家物語曰、みなすいしやうの御じゆずをもしもさせ給へば。源平盛衰記卷第十八曰、水精ノ管ニ黃金ノ蒻輪ヲ置タル笛ニテ。高野參詣日記曰、水精の御念珠など頂戴せさせられ侍りき。續古事談曰、行教和尙大菩ノ御前ニ候テ、勅命ヲウケタマハルケシキアリケリ。始ノ別當安宗、大菩ノ御草鞋ノ鼻、水精ノ御念珠ト十弟子ヲミタテマツリケリ。水左記曰、承保四年七月廿三日、參高倉殿、今日御逆修御念佛始也云云妙法華經一部八卷云云般若心等經各一卷、水精軸、吾妻鏡卷第十三曰、建久四年十一月廿七日、永福寺藥師堂供養也云云加布施、水精念珠。同卷第二十九曰、布施、導師分、水精念珠。同卷第三十曰、布施、導師分、水精念珠。在銀打。同卷第四十曰、建長二年五月廿七日、相州令ㇾ淨貞書寫貞觀政要一部上、今日被ㇾ進ニ將軍家一云云水精軸、羅表紙、所ㇾ納二時御筥一御九巳　同卷第四十七曰、正嘉元年十月一日、今日大慈寺供養也。御布施、水精念珠一連。阿彌陀院寶物目錄曰、法華經一部、水精軸、水精塔一基。新猿樂記曰、本朝物、水精

【形狀】　延喜式卷第三曰、臨時祭。國造奏神壽詞、白水精十六枚。同卷第八曰、出雲國造神賀詞。白玉能大御白髮坐。大鏡曰、又閑院左大將あきみつと申しおり、すべていみじかりし御よおぼえに云云やなぐひのすひさうのはずを、此とのゝおもひよりしいで給へるなり。なにごとの行幸につかうまつり給へりしに、このやなぐゐをおひ給へりしは、あさ日のひかりにかゞやきて、いみじうめでたき事やは侍りし。源平盛衰記卷第廿四曰、眉間ノ水精ハ唐國ヨリ被渡タリ。叶玉左見ニモ右見ニモ、釋迦三尊ノ影ウルハシク移リシ玉也

黑水精 百練抄　【漢名】墨精 陔餘叢考　【今名】クロズイシヤウ

陔餘叢考、水晶註ニ曰、墨色者ヲ曰ニ墨精ー

【集註】百練抄卷第五曰、後三條天皇延久四年十月廿六日、但記云、今日有ニ夢想ヽ主上臨ニ幸宇治ー。前相國被レ獻ニ如意寶珠ー、其形如ニ鷄卵ー、頗大。黑水精有ニ通天ヽ主上殊御感云 云

赤水精 延喜式　【漢名】紅水精 山堂肆考　【今名】ベニスイシヤウ

山堂肆考曰、日本國有青水精、紅水精

【一名】赤玉 延喜式

【集註】延喜式卷第十九曰、式部下。元正朝賀。其禮冠者、諸王一位云 云以ニ赤玉五顆云 云ー交ニ居冠頂ー。二位以ニ赤玉八顆ー立ニ前形上。四位云 云以ニ赤玉五顆云 云ー交ニ居冠頂。諸臣四位以ニ赤玉六顆云 云ー交ニ居冠頂ー

【今案】延喜式卷第三曰、臨時祭。國造奏神壽詞。赤水精八枚。同卷第八曰、出雲國造神賀詞。赤玉能御阿加良毗坐ト聞ユレバ、赤玉ハ赤水精タル可證也

夜光玉 萬葉集　【漢名】夜光珠

廣東新語曰、凡夜光之珠皆龍珠也。龍女傳曰、朮公云ク如意珠上上者、夜光照四十餘里、中者十里、下者一里。光之所及、無風雨雷電水火刀兵諸毒厲。驪珠九色。上者夜光百步、中者十步、下者一室。光之所及、無蛇虺蠱豸之毒。蟲珠七色而多赤。其蟲六足ニ目。目當其陷處、有凹如鐵鼻。蚌珠五色、皆有夜光及數尺。無瑕者爲之上。有瑕者爲下。廣東名勝志曰、南越志云、端溪俚岑班入山過一寶珠徑五寸取還夜光明トシテ燭ノ如ク照ス俚人甚懼以火燒之雖少損猶照一室。杜陽雜編曰、夜則公主以紅琉璃盤成夜光珠、令僧祁捧立堂中。而光明如晝。天工開物曰、夜光乃チ其ノ美號非ニ眞有ニ昏夜放光之珠ニ也

一名 龍のくびに五色に光る玉　竹取物語曰、大とものの大納言には、龍のくびに五色に光る玉あり、それをとりて給へ。唐薛瑩龍女傳曰、震澤中洞庭山ノ南ニ有ニ洞穴一。深サ百餘尺。有ニ漁人茅公トイフモノ、偶墮ニ洞中ニ旁行昇降五十餘里。至ニ一龍宮一。周廻四五里。下ニ有テ青泥一至レ膝。有ニ宮室門闕一。龍以レ氣嘘レ水。霏トシテ如ニ輕霧一。晝夜明徹。遇守レ門小蛟。張レ鱗奮レ爪拒レ之。不レ得レ入。公旣有レ洞數日。饑食ニ青泥一。若ニ粳米一。旬餘忽髣髴記得ニ歸路一尋出之。爲ニ吳郡守一。具言ニ其事一。聞ニ梁武帝一。召ニ問杰公一。公曰。此洞穴有四枝。一通洞庭湖西岸。一通蜀道青衣浦北岸。一通羅浮兩山門穴谿。一通枯桑島東穴。燕東海龍王第七女。掌龍王珠藏。小龍千數。衛護此珠。龍畏蠟。愛美玉及空青。而嗜燕。若遣使通信。可得寶珠。帝聞大喜。乃詔有能使者厚賞之。有會稽鄮縣白水郎原毗羅請行。杰公曰。汝五世祖燒殺鄮縣東海潭之龍百餘頭。還爲龍所害。汝龍門之仇也。可無行乎。毗羅伏實乃止。於是合浦郡落黎縣歐越羅子春兄弟二人上書。自言家代與陵水羅水龍爲婚姻。能化惡龍。晉簡文帝以其祖和化龍毒。今

龍化縣卽是臣祖住宅也。象郡石龍剛猛難化。臣祖化之。今石龍縣是也。東海南天台湘川彭蠡洞鼓石頭等諸水大龍。皆識臣宗頭。亦知臣其子孫。請通帝命。杰公曰。汝家制龍石尙在否。答曰在。請僑至都。試取觀之。公曰。汝此石能制徵風召雨戎虜之龍。不能制海王珠藏之龍。又問曰。汝有西海龍腦香否。曰無。公曰。奈之何御龍。帝曰。事不諧矣。公曰。西海大船。求龍腦香可得。昔桐栢眞人。致揚羲許謐茅容乘龍。各貽制龍石十斤。今亦應在。請訪之。帝敕命求之於茅山華陽隱居陶宏景得石雨片。公曰。是矣。帝敕玉工以手閑舒。河中美玉。造小函二。以桐木灰發其光。取宣州空青汰取其精者。用海魚膠膠之。成二缶。火堅之。龍腦香尋亦繼至。杰公曰。以蠟塗子春等身及衣佩。乃賫燒鷰九百枚入洞穴。至龍宮。守門小蛟聞蠟氣。俯伏不敢動。乃以燒鷰百事賂之。令其通問。以其上上者獻龍女。龍女食之大嘉。又上玉函靑缶。具陳帝旨。洞中有千歲龍。能變化出入人間、有善譯時俗之言。龍女知帝禮之。以大珠三。小珠七。雜珠一石。以報帝命。子春乘龍載珠還國。食頃之間。便至江岸。已而子春聘珠。帝大喜。得聘通靈異。獲天人之晉。以珠示杰公。已下ハ前ニ註ス

【集註】扶桑略記第五曰、天智天皇七年正月十七日、於ニ近江國志賀郡ニ建ニ崇福寺一、始令レ平レ地云云又掘ニ出奇好白石一、長五寸、夜放ニ光明一。明衡往來曰、夜光之玉何加琢磨哉。註、夜光璧者天下美玉、能有光也。萬葉集卷第三曰、夜ル光ル、玉跡言十方、酒飮而、情乎遣爾、豈若目八目。源平盛衰記曰、抑五節ト申ハ、昔淸見原帝御宇ニ、唐土ノ御門ヨリ、崑崙山ノ玉ヲ五ツ進セ給ヘリ。其玉暗ヲ照事、一玉ノ光遠五十兩ノ車ニ至ル、是ヲ豐明ト名付タリ。御秘藏ノ玉ニテ、人是ヲ見事ナシ。天武天皇芳野河ニ御幸ノ、御心ヲ澄シ、琴ヲ彈ジ給シニ、神女空ヨリ降下リ、淸見原ノ庭ニテ、

署記承保四年十二月一日　延喜式廿一

廻雪ノ袖ヲ翻シケレドモ、天暗ノ見エザリケレバ、彼玉ヲ出サレ仙女ノ形ヲ御覽ジキ。玉ノ光ニ輝テ、乙女コガ乙女サビスモ、カラ玉ヲ乙女サビスモ、其カラ玉ヲ。ト五聲歌ヒツヽ、五タビ袖ヲ翻ス。五人ノ仙女舞事各異ナル節也、サテコソ五節ト名付タレ。彼舞ノ手ヲ摸ツヽ、雲ノ上人舞トカヤ。其時拍子ニハ、白薄樣濃染紫ノ紙　卷上ノ糸、輛繪書タル筆ノ軸ヤト、ハヤス也。仙女ノ衣ノ薄ク透通リテ、巖キ有樣ガ、薄樣ト厚染紫ノ紙ニ相似タリ。舞ノ袖ヲ翻、簿ヨリ上方ニ、卷上タル貌、絲ヲ以テ卷タルガ如ク、輛繪ヲ書タル筆ノ軸ヲ、差上タル樣ナレバ、昔ヨリ五節宴醉ノ肩脫ニハ、必カクハヤスヲ云云

留利　倭名類聚鈔　〔漢名〕瑠璃

山堂肆考曰、琉璃、本質是石。出大秦國。赤白黑黃青綠紺縹紅紫凡十種。近世又有火成者、光澤益不減也。品字箋曰、瑠璃、此自然之物。今所用。皆銷冶石汁。加衆藥。灌而爲之　〔一名〕

瑠璃玉　一條家裝束抄。令義解曰、典鑄司。正一人。塗餝、瑠璃。謂火齊珠也。倭名類聚鈔曰、瑠璃。俗云、留利。扶桑略記三十曰、瑠璃排ㇾ扉鎖添ニ衆曜之色ヲ。延喜式、祥瑞曰、璧琉璃。不ㇾ琢自成、質有ニ光耀ー

〔集註〕續日本紀卷第廿八曰、称德天皇神護景雲元年夏四月癸巳、東院ノ玉殿新ニ成レリ。群臣畢ク會ス。其殿葺ニ以ニ琉璃之瓦ヲ、畫ニ以ニ藻繢之文ヲ、時ノ人謂ニ之玉ノ宮ト。駿河國風土記曰、安倍郡嚴伴安樂寺、行基菩薩之開基之地也。安置瑠璃之四方佛。榮花物語玉の臺曰、るりのつぼに、からなでしこきちからうなどをさゝせ給へり。にほひいろ〱に見えてめでたし。同衣の珠曰、るりのつぼに、こがね

術本ナシ刊
反本文松刊ニ作ル

五十りやういれさせ給へり。古今著聞集卷第五曰、瑠璃のつぼに花さしたる臺に云々。源平盛衰記卷第十一曰、池ニハ瑠璃ノソリ橋。一條家裝束抄曰、瑠璃帶。治永四四十九信範記 藏人權佐中云、御即位日主上可召有文玉御帶不候、先院奏之処、如然之帶不ニ覺御ハ、さやうにちいさき御帶候者可被献之由院宣候者、召ニ覽所在帶等ニ中有文瑠璃玉ちいさき御帶有一筋、即付ニ先長ニ被献之也。阿弥陀院宝物目錄曰、基ニ階。上階池礎數ニ瑠璃地ニ。新猿樂記曰、唐物、瑪瑙帶、瑠璃壺。百練抄第十六曰、建長二年二月廿八日甲子、於ニ院殿上ニ被レ議下定去年伊勢外宮遷宮時所ニ取落ニ之安レ宮瑠璃壺事上。攝政已下參レ之。台記別記曰、久安三年三月廿七日 知足院禪閤七十賀。沈螺鈿机六脚。金縫塗物、平折四角打。金物。塗物、平折術角足角入筋。塗物、足有伏輪塗物。玉総角、左銀笠瑠璃、以塗反枝。右瑠璃心葉、立四角縣之、二重織物面。扶桑略記ニ十日、長者權少僧都定賢付ニ御所邊ハ、進ニ大師手跡二卷ハ、裹ニ萌黃浮線綾ハ、付ニ瑠璃松枝ニ

形狀 古今著聞集卷第二曰、この女房とびあがり萱屋のむねに尻をかけて座せり。其顏の色瑠璃のごとくにあをくすき通。本朝無題詩曰、瑠璃映徹盈庭水。曾根好忠集曰、留りのつぼさゝらゐさきは蓮のはにたまれる露にさもにたるかな

今案 榮花物語音樂曰、白瑠璃のはゝ、ふゆのにはのゆきをおひたるがごとし。觀レ此則瑠璃ハ古ニモ色々アルノ徴也。源氏物語梅枝曰、るりのつき、ふたつすへて、こんるりのには五えうのえだ、しろきにはむめをえりて

紺青玉 鈔 抄

漢名 紺瑠璃 博物志

一名 紺瑠璃玉 類聚雑要抄曰、櫛筥一双、乙身納銀小筥廿一合ノ内。一合。紺瑠璃玉三十顆。无レ穴。同平玉三十丸 金青玉 裝束拾要抄曰、金青玉帶。承曆二年七月相撲召合ノ時、長忠朝臣金青玉帶ヲ用ユ。各殿上人巡方ノ帶ヲ用ル処ニ不可然ノ由日記ニ見タリ。安貞三年正月廿七日、光明峯寺關白道家、法性寺ノ寶藏ヲ開テ帶ノ箱三合ヲ取出ス。此中ニ金青玉ノ帶二勝アリ

こんろり 源氏物語同寄生曰、るりの御さかづき、へいしはこんるりなり。榮花物語蜘のふるまひ曰、こんるりのからぎぬ。源平盛衰記巻第四十六曰、瑪瑙ノ地盤ニ、紺瑠璃ヲ以テ、伽羅陀山ヲタヽミ。本朝鬪諍集曰、置蓮浮露陂紺青色。廣東新語曰、有美玉色如紺青。博物志曰、煬帝藏書、上品紅琉璃軸、中紺琉璃、下漆軸

集註 こんるりのかみのうへに、しまわうごんをのべて、一部八巻のたへなるのりをうつして云々。東大寺別當次第曰、治安元年三昧堂供養。十月一日前左衛門尉平致經施ニ入紺瑠璃唾壺一。有ニ由緒一仰藏ニ納之一。吾妻鏡巻第九曰、文治五年八月廿二日、甚雨、申剋著ニ御于泰衡平泉舘一。但當ニ于坤角一有ニ一宇倉廩一、遁ニ餘焔之難一、遣ニ葛西三郎清重、小栗十郎重成等一令レ見レ之給云々紺瑠璃等物。本朝麗藻曰、池中秣水碧瑠璃

青瑠璃 明月記

一名 青き瑠璃 落くぼ物語曰、青き瑠璃の壺に、黄金の橘いれて、あをき袋に納て、五葉の枝に付たり

集註 人車記曰、仁安元年十月十日立太子事、次儲

皇御車華美唐車也云云居青瑠璃壷云云。類聚雜要抄曰、久安二年左衛門督佐殿聟娶料私ニ調進手筥云云洲流シ間汲縣地菊折枝搖螺鈿、葉青瑠璃、花黃ルリ、白花貝。明月記曰、嘉祿三年三月廿日云云又唐綾折敷居青瑠璃酒器

【今案】 儀抄曰、青瑠璃称紺青玉、先年商人持來之故、三品殿取之賜予。仍事々可用ト云事不分明、而經賴卿記次將節會用之由注之

黃ルリ 類聚雜要抄見上註

白琉璃 明月記。榮花物語

【集註】 明月記曰、嘉祿三年三月廿日云云白琉璃器六盛梅櫻花

女奈宇(メナウ) 倭名類聚鈔 【漢名】 瑪瑙

【一名】 馬瑙 延喜式卷第十七曰、內匠寮。馬瑙御腰帶一條云云。玉造曰、臺ニハ鏤ム瑪瑙ヲ

【集註】 日本書紀曰、天武天皇朱鳥元年春正月壬寅朔癸卯、是日攝津國人百新興獻ニ白馬瑙一。本朝無題詩曰、夏日大覺寺即事、洞珎奇馬瑙磯。注、太上天皇馬瑙御枕、于今在此寺也。源平盛衰記卷第十一曰、馬瑙ノ石立(タチ)。園太暦曰、貞和二年二月卅日、自ニ嵐山一所ニ掘出一スル馬瑙大石苔生シテ石塚ニ之ヲ納ム櫃ニ誠ニ希

異也、其ノ大サ七八尺、廣サ五六尺、件ノ石ニ在所四角ニ書ス一四句偈ヲ一、乾坤之内、宇宙之間、中有一寶、秘在形山、前右後左山後石右此石ヲ安置ノ令レ懸レ額、其字形山ト。一条家装束抄曰、馬腦帶、四位人尋常用之。但保元三内宴日、關白法性寺殿赤色袍馬腦帶。文安元ミ四月侍從良通拜賀用小馬腦帶五位人々也又應德三正一匡房于時非參議大弁用馬腦帶云ミ。雅輔裝束抄曰、おびの事。殿上人はつのゝおび、馬腦めなうつねにさすことなり。諸大夫そだいふこの定なり。めなうはずんほう巡方のなきかはりにもちゐるものなり。たゞしりんじのまつりの日は、殿上人めなうをさすことなかれ。めなうといふものは、天下に八すぢぞむかしはありけるを、五ゐのまひ人みなさしつれば、のこりはあるべくもなきを、きんだいめなうのおほくなりたるゆへに、あないもしらずさす殿上人あるべし。をみのこと云ミ殿上人はめなうをさすべし。新猿樂記曰、唐物、瑪瑙帶。明月記曰、嘉祿三年四月十二日、河内國太子御墓邊爲造立堂堀地、瑪瑙石堀出之。嘉祿元年十二月廿四日、及日入漸着裝束云云馬腦帶。嘉祿二年十二月廿九日、馬腦帶宰相借送。宣胤卿記曰、明應三年二月廿一日、甘露寺大納言入道返事折帋也。當座覺悟此分候。不可足御信用候。不審條ミ、一四位雲客不帶馬腦候歟。但四位中弁猶犀角候歟。已上此分也宣胤數年四位中弁貫首候し。用犀角候ら歟、不措覺候。但所ニて候ハ犀角をり用候大弁必馬腦候歟。當時家幸朝臣連々用ニ馬腦ニ之躰、其沙汰候如何。此間傍名朝臣大弁以前用犀角候

阿加多末（アカダマ）　本草和名　漢名　琥珀　本草

【一名】**久波久** 倭名鈔曰、琥珀。俗音久波久。玉造曰、簪ニ貫キ虎珀ヲ **阿末多末** 本草和名曰、虎魄。和名阿加多末、一名阿末多末 **琥碧** 延喜式 **琥碧玉** 同上 **虎魄** 令義解曰、謂異寶者、馬腦虎魄之類也。和漢通名也 **安加太末** 本草類編。曾我物語巻第二曰、にわにはさんご、くはくをしきみてり。類聚雑要抄曰、櫛笥一双、乙身納銀小筥廿一合ノ内。一合。琥珀玉一丸、徑七分許。納錦袋○雲南通志曰、琥珀南蠻記、寧州沙中有折腰蜂。岸崩則蜂出。土人燒治以爲琥珀。常見琥珀中有物如蜂形。元中記言、楓脂入地爲琥珀。列仙傳云、松柏脂入地千年化爲茯苓、茯苓化爲琥珀。韋應物詩云、曾得老茯苓。元是寒松液蚊蚋落其中、千年猶可覩。今泰山出茯苓、無琥珀。益州永昌出琥珀、而無茯苓。然此物實自外國來。或言、龍血入地爲琥珀。或言、虎死時、目光淪入地之所爲。故又名虎魄。廣志、哀牢縣有虎魄生地中。其上及旁不生草。深者八九尺、大者如斛。削去外皮中成虎魄。初如桃膠凝堅成也

【集註】山背國風土記曰、久世郡白川庄貢琥珀。本草類編曰、琥珀。和安加太末。唯日本紀吏 薫陸香用之、甚不知人々之。薫陸香、微温似松脂。和安加太末。日本從奧州出之。駿河國風土記曰、伊穗原秋美髪、產琥珀。富士郡出琥珀。尾張國風土記曰、中島郡安部島山山窟有琥珀今猶在。民用取之爲燧器。延喜式巻第四曰、玉纏横刀一柄云云著云云琥珀玉三枚。同巻第十九曰、式部下。元正朝賀、其禮冠者、親王四品已上云云以云云琥珀三顆云云交ニ居冠頂ニ。古今著聞集巻第十九曰、虎魄ヲ軸として云云。阿弥陀院寶物目錄曰、琥珀念珠一貫云云。源平盛衰記巻第十一曰、溝ニハ琥珀ノ一橋ヲ渡シ。同巻第四十六曰、水晶ノ花實ニ琥珀ノ蓮華ヲ葺ケリ。觀世

公任集群本なしノいし下「の」アリ。くはくヲこはくニ作ル秋たつるヲ秋立る日ニ作リてノ下かアり式部下

音寺資財帳曰、虎珀二貫。

新猿樂記曰、本朝物琥珀

【形状】沙石集曰、琥珀塵ヲトレドモ穢タル塵ヲトラズ。榮花物語音樂曰、虎魄のはゝ、ちうしうの、くはうようのごとし。公任卿集曰、こまのないし、くはく。聞えたりけるを、程へて秋たつるやり給へりければ、などて今までに聞えたりければに、紅葉ばの露の色なる玉なれば珠をまたではいかゞみすべき。返しに、珠深きうみのそこなる玉なれば露まつ程もをきてこそみめ。今昔物語曰、眼の光り琥珀のやうにして。福田方曰、琥珀色深瑩徹スキテ面ニ窪熱アタヽメテ芥ヲ拾トル者良シ。此ハアメ色ニメスキトホリタル上品之。又黄イロニメスキトホル者アリ

【今案】延喜式部式ニ、以ニ水精三顆琥珀三顆青玉五顆一、交ニ居冠頂一云云以ニ赤玉五顆緑玉六顆一交ニ居冠頂一。延喜式臨時祭、國造奏神壽詞、赤水精八枚。出雲國造神賀詞、赤玉能御阿加良毗ト觀ユ。琥珀ノ阿加多末ト同名異物也

【正誤】駿府政事錄卷之六曰、慶長十九年甲寅極月十四日、今度南部信濃守出御前獻薰陸。是南部知行栗木林所有之云云安藤帶刀與安法印披露之。是者今日薰陸出何地否依仰尋。日本所謂薰陸与琥珀同。而唐薰陸則乳香也。本草綱目有之出。依之南部領内有之進上云云日本薰陸上琥珀也云云

岐良々（キラヽ）　本草和名　【漢名】雲母　本草

【一名】支良々　本草類編、倭名類聚鈔曰雲母。和名岐良々　幾良々　園太曆曰、自幾良々坂大勢群下赤山取陣。康富記曰、到ニ雲母坂之麓一。太平記曰、サシモ嶮キ雲母坂

云云。明月記曰、近代檜扇塗雲母書繪。三塔巡禮記曰、雲母坂をのぼりぬ。きらゝは雲母とかけるにや、誠に雲のたちどと見えたり。玉造曰、窓ニハ流ス雲母ヲ

集註 本草和名曰、雲母。和名岐良々、出陸奥國。續日本紀卷第六曰、元明天皇和銅六年五月癸酉、令ニ大倭參河并獻ニ雲母ヲ。陸奥國雲母。雅輔裝束抄曰、このつぼのなかにきらゝ（雲母）のつぼひとつあるべし。類聚雜要抄曰、薫物納香壺筥事、故納言曆記云。長元八年七月廿四日乙亥、未明許關白等奉謁申承雜事被仰云、壺筥二合、其一合有小筥四合皆入薫物。則其名難弁知。又今一合有小筥二合以何物可入乎、人々所陳其以縱橫也。右府定知給歟密々申案內可告示者、即參殿申此旨。答報云、香壺筥之內有小筥四合、其納物梅花荷葉黑方侍從此四種物納四合云々今一合之內有小筥二合、雲母一合納散薫物一說薫衣香云々件二合筥号雲母異香筥

形狀 頓醫抄曰、雲母粉白光アリテウスキヲ用ヨ

玻璨 和漢通名

一名 水玉 延喜式卷第三曰、鎭新宮地祭。水玉五十枚（）按延喜式卷第八曰、出雲國造神賀詞、青玉能水江玉乃行相尓ト云ハ、水玉ハ青玉ナルヿ明白也。正字通曰、玻瓈。一名水玉瑩、如水堅如玉。史記司馬相如傳、註、水玉水精也

集註 榮花物語音樂曰、玻璃樹のたをやかなるえだは、いけのそこにみえたり。やはらかなるはなぶさかたぶきておりぬべし。文明寫本下學集曰、玻璃

千年氷化成〻也

岐良〻　倭名類聚鈔　漢名 玫瑰

倭名鈔曰玫瑰。枚廻二音、今按和名與雲母同〇天工開物曰、有玫瑰如珠之有璣也

干滿二珠　師時記

一名 潮滿瓊潮涸瓊　日本書紀　集註 釋日本紀曰、大問云、此滿瓊涸瓊二種、在何處哉。先師申云、元曆之比、宇佐宮臨行之時、本宮注文滿瓊涸瓊二種在當宮之由注進之。然則留宇佐宮歟云云。先師申云、宇佐宮者、應神天皇、姫神、大帶姫神功皇后也三所鎮坐也。二種瓊已在當宮云云。師時記曰、汎師云、高良大明神者、武内大臣也。神号曰高良玉垂命、以干滿二珠令奉行之。故奉号玉垂八幡。愚童訓曰、高良仰テ白色珠ヲ海ニ入玉フト云云受ニ入青色珠給云云

如意珠　日本書紀　漢名 如意寶珠　寶記　今名 メウリホシノタマ

【一名】如意ほうす　榮花物語○鹿王院如意寶珠記曰、如意妙寶珠、其色靑黃赤白紺、而雜辨色。寶記曰、如意寶珠、大如鷄卵、而圓正光色極瑩、置室中明如滿月。釋日本紀曰、凢神功皇后有レ得ニ如意寶珠於海中ニ之由見ニ彼皇后紀ニ耳

【集註】日本書紀曰、仲哀天皇二年秋七月辛亥朔乙卯、皇后泊ニ豐浦津一、是日皇后得ニ如意珠於海中一。明月記曰、建久三年四月十日、仍馳參大炊殿、仰云、可皈參也。暫可候。仍日臘頭亮參入、語云、今日御退出、依如意寶珠事也。件寶珠佛在世之物也。弘法大師傳我朝給、在醍醐某僧正之時、進白河院、追從與白河院傳給鳥羽院云云御時恩寵之餘預給家成卿、件卿不令知妻子、安置靈山堂。薨逝之後、白院被召返之處、後家申不知由、逆鱗付廷尉可被責由被仰。仍致種々祈禱之處、經箱底有書付物、示其所。仍掘出所進也。其後被安置勝光明院寶藏。而法皇御時、義顯事時、以勝賢僧正、以件珠爲本尊、被行如意寶珠法、其事嚴重無爲、仍年來預給件僧正、去冬又有此法、而正月七日結願了云云殿下聞召此事、一昨日以下官令迎取給、若置醍醐者可向之由被仰。仍具數引替向彼僧正許之處、在此房、仍取出所奉也。榮花物語煙の後曰、皇后宮のは如意ほうす、かねりいとしてむすび、たまをつらぬきたり。百練抄曰、前相國被獻如意寶珠云云。源平盛衰記卷第四十六曰、左ニ如意寶珠ヲ持給ヘルガ云云

羽太玉　日本書紀

【集註】日本書紀曰、仁德天皇三年春三月、新羅王子天日槍將來物、羽太玉一箇

次々ノモ同ジ

足高玉 日本書紀

集註 日本書紀曰、仁德天皇三年春三月、新羅王子天日槍將來物、足高玉一箇

鵜鹿々赤石玉 日本書紀

集註 日本書紀曰、仁德天皇三年春三月、新羅王子天日槍將來物、鵜鹿々赤石玉一箇

七わだにわだかまりたる玉 枕草紙　漢名 九曲珠 廣博物志

廣博物志曰、孔子得九曲珠、欲穿不得、遇二女以塗脂于線使蟻通焉。韓詩外傳曰、東夷獻九曲珠、穿之不得、孔子曰、塗脂于孔繫絲于蟻足、使蟻通之、夷人乃服

集註 枕草紙曰、程久しうて、七わだにわだかまりたる玉の中とをりて、左右に口あきたるが、ちいさきを奉りて、これにをとをしてたまはらん。此國にみなし侍る事なり、とて奉りたるに、いみじからん物の上手ふようならん。そこらの上達部よりはじめて、ありとある人、しらずといふに、又いきて、かくなんといへば、おほきなるありを二つとらへて、こしにほそき糸をつけ、又それに、今すこしふときをつけて、あなたの口に、みつをぬりて見よ、とい

ひければ、さ申て、ありをいれたりけるに、みつのかをかぎて、まことにいととう、あなのあなたのくちに出にけり

蛇玉 資財帳　［漢名］ **蛇黄** 本草　［集註］

本草彙言曰、蛇黄小者、如二彈丸一圓重如レ錫皺其亦有レ相二間ル黄黒赤紫雜色一不レ一、擊碎其色如レ錫、俗云蛇黄、是蛇腹中ノ者歷見諸人剖二蛇腹中一並無レ有ルレ黄、非レ出二蛇腹一而出二土中一掘出可信矣

觀世音寺資財帳曰、蛇玉佰陸丸

鯨珠 百練抄

［一名］ **鯨鯢玉** 類聚雜要抄曰、楠筥一双云云乙身納銀小筥廿一合ノ内、一合、鯨鯢玉一丸。但件ノ眼云云其代琥珀玉入レ之、納錦袋

［集註］ 百練抄卷第六曰、崇德天皇大治二年五月廿六日、神崎庄獻二鯨珠一顆於院一。仍令レ勘二和漢之例一

牛玉 吾妻鏡　［漢名］ **牛黄** 本草

廿二日ナリ

【一名】牛ノ玉 類聚雜要抄曰、楠筥一双、乙身納銀小筥廿一合ノ內、一合、牛ノ玉一丸　牛黄ノ玉 頓醫抄曰、牛黄ノ玉梧桐子バカリ

【集註】廄牧令曰、若得二牛黄一者別進。義解曰、謂不レ待二處分一、隨レ得即進。故云別進。續日本紀曰、文武天皇二年春正月己巳、土佐國獻二牛黄一。十一月乙酉、下総國獻二牛黄一。令集解曰、古記云、問、若得牛黄者別進、未知其別。答、及膽角此等收集、至調時共進。又得宛國內雜用。但牛黄一色隨得即進上、不得遲廻。故云別進之也。吾妻鏡卷第九曰、文治五年八月、著二御于泰衡平泉館一、有二一字倉廩一、令レ見レ之給。其內所レ納者、牛玉、犀角、象牙笛、水牛角云云。同卷第二十三曰、建保五年五月廿五日、於二御持佛堂一、被レ供二養文珠像一。導師壽福寺長老。而將軍以二年來御所持牛玉一、爲二御布施一。廣元朝臣不レ可レ然之由、雖傾申、不レ能二御許容一云云。山槐記曰、治承二年十一月十二日、自中宮侍使走來、告御產氣候之由云云牛玉進御所云云牛氣御方淨水入提儲之、向彼所加二持之一摺二牛玉一獻之、以二件水一女房奉塗御腹云云定成朝臣獻御乳付雜具納手箱一合所儲置之、御藥雜物等牛黄入道進御乳付之後、被置皇子御枕上。類聚雜要抄曰、五藥云云牛黄。今按牛黄息ノ中用ニ一種一歟。實胤卿記曰、永正八年二月當牛玉二一消

【形狀】福田方曰、牛黄其レ重疊トシ而折輕、而氣香者良シ、此物ハ多ク僞レ人也。試レ之以指ニ指ノ甲上ニ透レテ甲黄ハム者ヲ爲眞也。心黄ハ如ニ碎クル雞子ノ色ニ也。或ハ皂莢子ノ如也。一云別ニ研テ使ヘ

舍利

少輔ハ省カ

帝京景物略曰、石經山云云盛石銀金函。三發而得小金瓶。舍利現矣。狀黍米。色紫紅。按法苑珠林。白色骨舍利。黑色髮舍利。赤色肉舍利。茲三粒者肉色也。南漢叢錄曰、胡術廬陵人、俗所謂胡六眞人也云云卒之日以火解得舍利三十六丸大如菉豆色黃紫(塵添壒囊鈔曰、舍利トハ何ゾ。幷舍利ナンド云事如何。舍利トハ梵語也。此ニハ云レ身ト又馱都(ダト)モ梵語也。此ニハ身ト曰也。大日經疏ノ第十曰、佛ノ舍利亦名ニ如來馱都ニトテ。凡ソ舍利ニ於テ、全身碎(サイ)身ノ二種アリ。或記云、全身舍利ハ、有ニ龍宮城ニ云云全身ト者、四十四ノ大骨、八十三ノ小骨也。碎身ト者、大小骨ノ分散也ト云云。吾妻鏡卷第二十二曰、建保四年二月十九日、去五日夜、群盜入ニ東寺寶藏一、佛舍利具已下代々寶物等、皆盜ニ取之一云云。舍利者一代教主之遺身

集註

續日本紀卷第二十七曰、天平神護二年十月壬寅、奉レ請ニ脇寺毘沙門像所レ現舍利於法華寺一。云云詔曰、然今示現賜留如來乃尊岐大御舍利波常奉見舍利波大御色毛光照天甚美之大御形毛圓滿天云云。續日本後紀卷第三曰、承和元年九月戊午、傳灯大法師位護命卒云云然而辟ニ居ス右京ノ山田寺ニ喫レ飯ヲ口中得ニタリ佛舍利一粒、復タ在ニ普光寺ニ護ス、唯識論疏ハ時於ニ頂上ニ亦得ニタリ一粒。奇異頻ニ彰レテ使ニレ人驚感ニ。同卷第四曰、承和二年六月壬寅、令ニ中務少輔ヲ進ニ佛舍利七粒ヲ內裏ニ。不レ知ニ其所ニ從來ニ。日本靈異記曰、有舍利二粒。水左記曰、承保四年六月廿四日、今日公家被獻佛舍利七道諸國諸社云々。撰集抄曰、年ごろの舍利のおはしまし侍けるをとりてまかり出で侍り。園太曆曰、延文四年三月十三日、天傳聞、今日修臨時舍利會、是件御舍利去月紛失、今月一日出現、依之修臨時云云今日泉涌寺舍利會事、當寺佛舍利者、名醫彼世利繪其他、而今年三月爲盜人紛失。源平盛衰記卷第四十六曰、錦ノ御舍利袋ヨリ云云。野府記曰、治安四年四月十七日、小女詣ニ安

養院ニ奉レ拝ニ佛舍利一、近日京中ノ男女擧テ首ヲ參拜。法隆寺記曰、嘉禎四年八月上旬、六波羅將軍法隆寺ノ太子寳物可ノ令ニ上洛一給上之由被ノ仰云云十一日、御舍利ノ之外御寳物皆具也。日本紀略曰、万壽元年天台座主僧正於ニ祇陀林寺一奉レ移ニ叡山佛舍利一。塵添壒囊鈔曰　東寺佛舍利八十粒入レ壺、壺ニ有ニ甲乙一其中有ニ金色ノ舍利一粒一。榮花物語曰、山の舍利を女のえおがみ給はぬ事、いと〳〵くちおしとて、舍利會せんとて、舍利はまづくだし奉り給。帝王編年記曰、應德三年九月十三日、供養天台舍利、諸卿扈從。吾妻鏡卷第十一日、建久二年十月廿三日。或僧（其名生一）此間參ニ籠鶴岡一。今日付ニ別當法眼一。奉ニ佛舍利三粒於幕下一。而仰云、佛舍利歸依太（ハナハダ）雖ニ惟深一、去比東大寺上人重源弟子空體（宋人云云）於ニ室内一掘ニ出數十粒佛舍利一盗取。仍興福寺靍胸、屬ニ空體一畢。別當覺憲僧正申ニ子細一。云云今若彼類歟之由、非レ無ニ疑心一。忽然相傳。爭不レ憚ニ後聞一。然者不レ能ニ納受一云云生一持歸之ニ云云若宮別當殊被ニ感申一。云云　同卷第二十日、建曆二年六月廿日、將軍家渡ニ御壽福寺一、自ニ方丈一、手令レ相ニ傳佛舍利三粒一給云云。永享日錄曰、永享十二年四月廿六日、葉室淨住寺御成御齋舍利頂戴分散一粒被ニ進上一。和久良波の御法曰、二条殿の龍池へ御舍利を入させ給へども、なぎさへうちよせ〳〵、なみよらせ給ひけるが、されどもしばらくありて、さゞ浪たちつゝ、御舍利しづませ給ひしかば。百練抄第四曰、寛弘六年五月十七日、左大臣供ニ養天台舍利一。同第七曰、久安元年二月廿五日、家成卿爲レ供ニ養舍利一登山云云。同第十曰、建久三年三月十日壬午、被レ發ニ遣一代一度佛舍利使一。同第十二曰、承久三年三月廿六日辛亥、今日被レ献ニ佛舍利於五十七社一。藏人弁光俊被レ行レ之。同第十六曰、建長五年八月十三日、一代一度佛舍利日時定也。扶桑略記第三曰、崇峻天皇元年三月、自ニ百濟國一獻ニ佛舍利一云云。同廿八

年十月十七日

日、入道前大相國詣金剛峰寺。記云、廿八日入攝津國、午時御四天王寺覽佛舍利畢。同廿九日、永承四年十一月廿五日、諸國諸社公家送佛舍利一粒。十二月十三日、五畿七道五十五社、各奉佛舍利一粒。宣胤卿記日、長享三年二月廿五日、今日東寺佛舍利內裏御奉請也云云舍利已舁居路以持刻限云々次舍利奉入入檳有錦覆退紅仕丁二人舁之、白張一人持棹、前行不知子細、其外白張前行云々次僧綱二人舁舍利櫃置長者前、次僧綱參進切封以鎰披之裹舍利靈寶等、次僧綱參進披舍利臺裹分以薄様裹之、此爲臨期內々內、出之官秀渡之云云次長者參進取舍利乍持御頂戴云云僧綱參進如元納之付封也勅封舁出之云々

形狀

扶桑略記第三曰、敏達天皇十四年乙巳二月、蘇我大臣、於ニ大野岳北一起レ塔供養、耳聰王子語ニ左右一曰、是佛舍利之器也。不レ覆ニ舍利一、不レ得レ爲レ塔。大臣聞レ之、謀レ感ニ舍利一、二七日後、齋食之上、得ニ舍利一枚一、大如ニ胡麻一。其色紅白、紫光四周、浮レ水不レ沈、穿牛而居、鍛擊不レ碎、旃叶ニ妙暉一。大臣納ニ瑠璃壺一、旦夕礼拜。舍利常旋ニ臺裡一、或爲ニ二三一、或爲ニ五六一、無レ有ニ定數一、每夕吐レ光。遂設ニ大會一安ニ塔心下一

附錄

明月記曰、建久七年四月十七日、又天王寺舍利如鍬介ハヒアリキ給。又競之鍬

今案

閑際筆記曰、舍利何物ゾ乎。曰、浮屠死ノ荼毗シ、其骨ト膏相熬凝シ沙石ト爲ル。或ハ豆粒ノ如ク、或ハ米粟ノ如シ。惟光滑ナル者是ナリ。夫貴ニ不レ足所以ナリ。則韓子ガ佛骨表ニ悉レ之矣

○胸蓮花

【集註】撰集抄曰　惠心僧都胸蓮花事。むかし惠心僧都といふ人いまそかりけり。智惠さきらならびなきのみにあらず云々七句にかたぶき給ひてのち、横川にて御身のまかりけるに、むねのあいだに、青蓮花三本はんべりけり。かたじけなくぞはんべる。此事世に聞えしかば、君より彼蓮花をめされけるに、北嶺の衆徒せんぎして、まいらすまじきよしかたく申ければ、さらば一本をたてまつれと仰下さるるとき、衆徒心得て一もとをまいらせてけり。殘二本をば文殊樓にこめ侍りぬ。君の召れたる蓮花は、御堂の大殿の、帝の外祖にていまそかりけるほどに、其御方へ傳りけるを、宇治殿の御代に、平等院の寶藏におさめられ侍りけり。此蓮花をびやうどうゐんのほうざうにこめさせ給へりけるには、大殿みゆきなり、諸卿列にたつて、舞樂を侍りて納めさせ給へり

珊瑚

物理小識曰、水之木珊瑚是也。洞幢小品曰、綸組也。紫菜也。海中之草也。珊瑚也。琅玕也。海中之木也。群芳譜亦出之。山堂肆考曰、珊瑚有赤黒二種、在海直而軟見日曲而堅○扶桑略記三十曰、珊瑚瑩柱更交二百寶之光一

集註 本草類編曰、珊瑚。南海之沈水底、高一丈三尺。源平盛衰記卷第十一曰、珊瑚ノ礎。玉造曰、床ニハ鋪キ珊瑚

青瑯玕

柳河東集註曰、瑯玕石而以珠

集註 本草類編曰、青瑯玕、有五色。又瑠璃類也。久寶也。无時採之。可用青色

うみまつ 惠慶法師集

漢名 石帆 本草

本草綱目曰、弘景曰、石帆狀如レ栢。藏器曰、石帆生二海底一、高尺餘根如二漆色一、至二梢上一漸軟作二交羅紋一。大明曰、石帆紫色梗大ナル者如レ筋見レ風、漸硬色如レ漆、人以飾作二珊瑚裝一

集註 三代實錄卷第三十二曰、元慶元年九月廿七日乙丑、出雲國言、楯縫郡日水郎海部金麻呂、同姓黒麻呂等、今月二日乘二扁舟一、泛レ海釣レ魚。二人沈二鉤羅一、繫二海底一。引レ之不レ出、絲入レ水五十餘丈。金麻呂等下二手綱一。綱引鉤獲二

「縉」ニアルベシ

石一枚ニ、其上生三木三株草三莖一。其木一株高二尺六寸、擯柯無レ葉。初出之時、其色赤黒、黏如レ塗ニ餡一。及二其漸乾一、更變二淺黑一。一株高サ同レ上、雙幹聳出、白色如レ貝。一株高三寸、形如二鹿角一、上頭有下如二檜葉一者上。其草二莖青色、一莖赤色、並形如レ菌。惠慶法師集曰、いしにうみまつのおひたる、あるところにたてまつる「うごきなきいはほにねざすうみ松の千とせはたれに浪もよすらん

〇本草【形狀】啓蒙曰、石帆(ウミヒバ)、海底石上ニ生ズ。大ナル者高サ四五尺、小ナル者ハ數寸、枝叉甚多クシテ網(アミ)羅ノ如シ、背左右ニ枝出テ扁ク帆ノ如ク、又佛ノ後光ノ如シ。紅黃紫白青黑褐ノ數色アリ

【今案】三代實錄ニ一株雙幹聳出、白色ニシテ如レ貝ト云者石梅也。桂海虞衡志曰、石梅生二海中一、一叢數枝、橫斜瘦硬、形色眞枯梅也。雖ニ巧工造作所不能及、本質爲海水所化、今紀州田邊海ニ多シ、白色外滑ニシテ如レ貝者ヲ、俗ニ白瑯玕ト云、枝上菊花紋アリ〇三代實錄ニ其草二莖青一莖赤色並形如菌ト云者ハ石芝也　莖音硬

古名錄珠玉部卷第八　終

古名錄石部卷第九目錄

石類

以之乃知 石鍾乳 ○殷孼 ○孔公孼
○鍾乳床 石牀 ○美川乃太太加宇安和 石花

土陰孼 土殷孼 伊之乃安不良 白石脂

赤石脂 道卦石 桃花石

石墨 黑石脂 志良以志 石膏

滑石 之蚍久 慈石

玄石 陽起石

阿加川知 代赭石 之也世支 金牙

銅牙 花乳石

石鏃 石砮 ○雷公墨 禹餘粮

温石 燒石

石鷰
末度（マト）　越砥
阿乎度（アヲト）
阿良度（アラト）　礪
玉止久石（クマトグイシ）
殺生石
〇加波奈弥（カハナミ）　白礬玉
菊目石　海化石
以之波比（イシハヒ）　石灰
岐介（キニ）　雄黃
大坂石
紀伊石
雜賀石

止（ト）砥　〇唐砥
志良登（シラト）
爪磨（ツマト）
伊豫砥
ごいし　石碁子
禰須美己呂之（ネズミコロシ）　礜石
火宇知石（ヒウチイシ）　玉火石
加留以之（カルイシ）　浮石
龍石
鏡石　石鑑
讃岐石
くろいし
藤戸石

九山八海石　皇子產石
破石　涵星
靑石
通計五十五種　附錄二

古名錄石部卷第九

紀藩　源　伴存撰

石類

事物異名錄曰、地骨。蠡海集、石之生也、或ハ方。方ナル者爲ニ地之骨一也。又郭熈カ山水訓ニ、石者天地之骨。物理論曰、藝文類聚ニ、土精ヲ爲レ石。初學記、石氣之核也。氣之生レ石、猶ヲ人筋絡之生ニスルガ爪牙ヲ一也〇律注曰、草木藥石之類、有レ人已加ニ功力ヲ一、或刈伐或積聚、而輙取者各准ニ積聚之處時價ニ一計レ賦、依ニ盜法ニ一科罪

以イ之シ乃ノ知チ　倭名類聚鈔

漢名　石鐘乳　本草

廣東新語曰、大抵山空則氣蒸ニ於內ニ一、而爲レ乳ト。實則氣蒸ニ於外ニ一、而爲レ雲。雲㩙敌敵、乳褰故凝、雲與レ乳同類。故皆詭怪萬狀變化成レ章。乳者山之精液、雲者山之華也

一名　伊之乃知　本草類編

集註　三代實錄曰、淸和天皇貞觀元年二月七日癸巳、詔遣ニ典藥頭從五位上出雲朝臣峯嗣於備中國ニ一、採ニ石鐘乳ヲ一。延喜式神名記曰、備中國英賀郡比賣坂鐘乳穴神社。井戸鐘乳穴神社。本草和名曰、石鐘乳出備中國。倭名鈔曰、鐘乳。新鈔本草云、石鐘乳、出備中國英賀郡。和名以之乃知。本草類編曰、伊之乃知。日本備中英賀郡无吃採之。肥前國風土記曰、松浦郡大家嶋、嶋南有窟有鐘乳

【形狀】○本草辨疑曰、石鍾乳。日本深山所々ニ有之、今藥舖者皆和ナリ。色瀬白ク中ニ小穴アリ。末尖（トガリ）ニ〆水精ノ如ク、白ク透明〆重ク、長短不定。今寶家ノ藏、末ノ尖ナル所ナク、大方折取タル跡ナリ

○殷孼 和漢通名 【集註】本草和名曰、殷孼。出備中國。本草類編曰、殷孼。日本備中國英賀郡、長門國无粂郡、无時採之。鍾乳根也 ○孔公孼 和漢

通名 【集註】本草和名曰、孔公孼。出備中、長門國。本草類編曰、孔公孼。日本長門國美牟郡、无時採之 ○鍾乳床 延喜式 【漢名】石牀

本草 【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。備中國鍾乳床六十斤。本草和名曰、石牀出鍾乳中 ○美川乃太太加宇安和（ミツノタタカウアヘ） 本草

類編 【漢名】石花 本草 【集註】本草類編曰、石花。和、美川乃太太加宇安和。三月採之

土陰孼 本草和名 【漢名】土殷孼 本草 【集註】本草和名曰、土陰孼。出鍾乳中。本草類編曰、土陰孼、无時採之、出鍾乳中

伊之乃安不良（イシノアブラ） 本草類編 【漢名】白石脂 本草

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊豆國云云白石脂各五斤。本草和名曰、白石脂、出太宰、伊豆國。康賴本草曰、白石脂、出伊豆、太宰。又曰、伊之乃安不良。无旼採之

赤石脂　通名

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊豆國云云赤石脂、各十斤。備後國赤石脂、三斤八兩。本草和名曰、赤石脂。出太宰、備後國。康賴本草曰、赤石脂。出備後國、太宰

【形狀】福田方曰、赤石脂。桃花ノ如ナル者佳シ。指ニテヒ子リテ見バ滑ニメスベル者眞也

【藥製】頓醫抄曰、赤石脂。火ニヤキサマシテコニセヨ。又曰、ヤキテ一二三度スニヒタセ。

福田方曰、赤石脂。瓦器ニ入テフタメ、炭ノ火ノ中ニメ、赤ク燒キ通(トヲ)メ取出メ、地上ニヲキテ、冷テ使ヘ。別ニ研レ

道卦尺(タウグハセキ)　倭名類聚鈔　【漢名】桃花石　本草

【集註】倭名鈔曰、桃花石、此間云、道卦尺。台記別記曰、知足院禪閤七十賀、左兵衛督重道持ニ御念珠、桃花石水精裝束、納銀筥以錦褁之、付銀薔薇枝、以貫五玉結之

石墨　頓醫抄　【漢名】黑石脂　本草

【集註】叡岳要記曰、慈覺大師、天長年中初入堂院、以草庵爲室、修四種三昧坐禪之隙、以草爲筆、以石爲墨、三ヶ年之間手自書寫妙法華經一部、來納小塔云々天長六年云々同八年初秋天、手自以草爲筆、以石爲墨、以禪定智水、一字三礼書寫妙法蓮華經

【附方】石膝散　類医抄曰、石膝散。此藥ハ如法經書時所レ用石黑也。黑石アリ、コレヲ灰ニシテ牛ノ膝皮ヲ灰ニシテ細末メ等分ニ可レ合。若牛膝ノ皮ナクバ、膠ヲ灰燒テ可レ合。此藥ヲ瘡ノ上ニ可付、更ニ内ニ服スベカラズ

志良以志（シライシ）　本草類編

【漢名】石膏　本草

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。備中國石膏六十六斤、太宰府云々石膏各十斤。本草和名曰、石膏、出太宰、備中國。本草類編曰、石膏、和志良以志。日本備中、无時採之。一本康賴本草曰、若狹國出太宰

滑石　通名

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。但馬國云々滑石各五斤、周防國滑石廿斤。五代帝王物語曰、主上あどなくわたらせ給て、近習の人女房などをたふしてわらはせ給はんとて、弘御

かや　群本やがてトアリ

所に、滑石の粉を板敷にぬりをかれたりけるに、主上あしくして御顛倒有けるを、御犬の立まはり〳〵、如法にほえまいらせたりけるこそ、前表にて有けるかや●●

【藥製】頓医抄曰、滑石打碎

【附方】産后ニ乳ハカリ病ニハ　頓医抄曰、滑石ヲ燒テアテヨ

之蚍久 倭名類聚鈔

【漢名】慈石 本草

【集註】續日本紀卷第六曰、元明天皇和銅六年五月癸酉、令レ献ニ近江慈石一。倭名鈔曰、慈石。本草云、慈石吸針。此間云、之蚍久。本草類編曰、磁石。日本近江國淺井郡塩津嶋。无時採之

【形狀】沙石集卷第九曰、磁石鐵ヲ吸ヘドモ曲レル針ヲスハズ。福田方曰、磁石色紫黑ニメ鉄ヲ吸ニ緊(キビシキ)者ヲ佳トス。煅テ使ヘ。針ヲ吸スルニ、アマタ重テ吸ヲ上品トス

【藥製】頓医抄曰、磁石。ヤキテ酢ニヒタシテ、又ハヤキテ醋ニヒタシ、四五度ヤクベシ

玄石 通名

【集註】倭名類聚鈔曰、今按慈石又有玄石之名。本草類編曰、玄石。无時採之

陽起石 通名

集註 本草類編曰、陽起石。无時採之 形狀 福田方曰、陽起石。色白ク肌理瑩明テ、猪ノ牙ノ如ナル者良シ。又試レ之法、椀ニ水ヲ入テ、其中ニ入ツレバ渤泡起者眞也。赤ク燒キ酒ニ漬ルコト七反メ使ヘ○本草辨疑曰、陽起石。唐ヨリ來、色白ク光リテ、長角アリテ、透明スル者アリ。明人元贇是ヲ眞ナリト云

阿加都知 本草和名 漢名 代赭石 本草

一名 安加川知 本草類編 集註 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。太宰府、代赭云云各一斗。本草和名曰、代赭。和名阿加都知。出太宰。本草類編曰、代赭。和安加川知。无時採之。三代實錄卷第九曰、清和天皇貞觀三年三月十四日戊子、於二東大寺一設二無遮大會一、供二養毗盧舍那大佛一云云先レ是詔二從四位下行文章博士兼播磨權守菅原朝臣是善一、作二呪願文一、曰云云以二此貞觀三年歲次辛巳春三月十四日、青蓮湛レ目ヲ、褰二翠幌一而爲臨、赭石涵レ唇ヲ、啓二紅絳一以密咲ス、三十二相、煥トシテ若二天成一云云 藥製 頓醫抄曰、代赭石、ヤキテ二三度スニヒタシ、又曰 ヤキテスニヒタシテ、ウチクダキテスレ

之也世支（シヤセキ） 本草類編　［漢名］ 金牙 本草　［今名］ カナザコ

［集註］ 本草和名曰、金牙。出但馬、上野國。本草類編曰、金牙。和之也世支。如金色

銅牙 通名

［集註］ 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。上野國、銅牙五斤。播磨國、銅牙一斤

［形狀］ 本草辨疑曰、自然銅。今二種アリ。一種ハ方ニシテ形雙六ノ簺ノ如ク、色赤キ石ニシテ銅ニハアラズ。一種ハ形圓ク堅ク重ク、色赤黑、方一分許ノ黑キ金點所々ニアリ。碎テ見レバ内ニ金針ノ筋アリ

花乳石　［今名］ アハモチイシ

［形狀］ 本草類編曰、花乳石。其色如キ硫ノ石也

石鏃 三代實錄　［漢名］ 石砮 本草　［今名］ ヤノネイシ

兵石 吾妻鏡

一名 廉石

三代實錄卷第四十八曰、仁和元年十一月廿一日辛丑云云去六月二十一日、出羽國秋田城中、及飽海郡神宮寺西濱雨石鏃。同卷第四十九曰、仁和二年夏四月十七日丙寅、令出羽國愼警固。去二月出羽國飽海郡諸神邊雨石鏃云云

形狀 續日本後紀卷第八曰、承和六年冬十月乙丑、出羽國言、去八月廿九日、管田川郡司解偁、此郡西濱達府之程九十餘里、本自無石。而從月三日、霖雨無止、雷電鬪聲。經十餘日、乃見晴天。時向海畔、自然隕石、其數不少、或似鏃、或似鋒。或白或黑、或青赤。凡厥壯體鋭皆向西、莖則向東。詢于故老、所未曾見。國司商量、此濱沙地、而徑寸之石自古無有。仍上言者、其所進上兵家之石數十枚、收之外記局。三代實錄卷第四十六曰、光孝天皇元慶八年九月廿九日丙戌、出羽國言、今年六月二十六日、秋田城雷雨晦冥、雨石鏃二十三枚。七月二日飽波郡海濱雨石、似鏃。其鋒皆向南。冬十月二日己丑云云下知出羽國、勤愼警固、以雨石鏃之恠、兵疫不虞凶也

集註 續日本後紀卷第九曰、承和七年秋七月己亥、詔曰、去年出羽國言上、大神乃於雲裏氐十日闘作戰聲後尓兵石零利止申世利之

董文敏公畫禪隨筆曰、余持節楚藩歸、曾晚泊祭風臺、即周郎赤壁在嘉魚縣南七十里、雨過輒有箭簇于沙渚間出、里人拾鏃

今案 南昌府名勝志曰、蘇軾順濟廟石砮記云、建中靖國元年四月中午、軾自儋耳北歸、艤舟吳城山順濟龍王祠下、既進謁而還、逍遙江上、得古箭鏃。槊鋒而劔脊、其廉劌可愛。而其質則石也。曰異哉、此孔子所謂楛矢石砮、肅愼氏之物也。何爲而至此哉。傳觀左右失手、墜于江中、乃禱神、願探得、當藏之廟中、爲往來駭心動目

詭異之觀。既禱則使人沒求之一探而獲。謹按禹貢荊州貢礪砥砮丹及菌簬楛、梁州貢璆鐵銀鏤砮磬、則楛矢石砮自禹而來貢之、然至春秋時年集于陳庭、楛矢貫之。石砮長尺有咫、時人莫能知、而問孔子。孔子不近取之、荊梁而遠取之。肅愼則荊梁之不貢此久矣　顏師古曰、楛木堪爲笴、幽以北皆用之、以此而觀用楛爲矢至唐猶然、而用石爲砮、則自春秋以來莫識矣。可不爲異物乎。兌之戈和之弓、垂之竹矢、陳于路寢孔子履藏于武庫、皆以古見寶、此矢獨非寶乎。順濟王威靈南放于洞庭、北被于淮泗、乃持爲出此寶。輒不敢私有。而留之廟中、與好古博雅君子共之以昭示王之神聖英烈、不可不敬者如此、宋末文天祥順濟廟詩、龍形人鬼外。神在地天間。彭蠡石砮出。洞庭商船還。秋風黃鵠遠。春雨白鷗閑。雲際靑如粟。河山。

流按海

○雷公墨　雷氏傳曰、又時有雷火發於野中、每雨霽得墨石。或圓或方、號雷公墨。又曰、每大雷雨後。多于野中得黳石。謂之雷公墨。叩之鎗然。光瑩如漆。凡訟者投牒。必以雷墨雜常墨書之爲利。又如霹靂處。或土木中。得楔如斧者。謂之霹靂楔。小兒佩帶。皆辟驚邪。孕婦磨服。爲催生藥必驗○倭名類聚鈔曰、霹靂。俗云、加美於豆。一云加美止介

形狀　吾妻鏡卷第二十七曰、寛喜二年十一月八日、大進僧都觀基參御所申云　去月十六日夜半、陸奧國芝田郡、石如雨下云云件石一進將軍家。大如柚、細長也。有石下、廿餘里云云

禹餘粮　通名

今名　マンヂウイシ

集註 延喜式巻第二十七曰、典薬寮。諸國進年料雜薬。太宰府云云禹餘粮各一斗。本草和名曰、禹餘粮。出太宰 薬製 頓醫抄曰、禹餘糧。スニトハセクダク

温石 延喜式 漢名 温石 山東通志 今名 ヲンジヤク

山東通志曰、温石出掖縣。色兼青白。潤膩如玉。味甘無毒。可備薬物

一名 御之也久 本草類編 集註 本草類編曰、御之也久。无時採之。一本康頼本草曰、出紀伊國

今案 延喜式、典薬寮。諸國進年料雜薬。周防國、滑石廿斤。紀伊國、温石一百廿斤トミユレバ、滑石温石爲ルコト別物ナルコト明也。本草類編ニ滑石、和御之也久ト云、天文寫本和名鈔曰、温石。方言要目云今按本文未詳、但俗用之温音運成爲温器者也ト觀ユ。尤非ニ滑石ニ證也。今紀州海士郡藤白嶺ノ産温石、火ニ入テ甚タ強シ。即此物也。本草和名曰、温石。今燒火慰人腰脚者也。本草辨疑曰、温石紀州越州ヨリ出、色青ク柔カナル石ナリ。燒テ之ヲ熨水ヲ濯ギ衣物ニ包テ腹痛ヲナデサスル妙ナリ

燒石 明月記 漢名 温石 證類本草 今名 ヤキイシ 一名 やきいし 平家物語

證類本草曰、温石、及燒塼主之得熱氣徹腰腹久患下部冷久痢腸腹下白膿燒塼幷温石慰及坐之並差。但取堅石ヲ燒暖用之非ニ別有ニ温石ニ也

曰、御すゞり御やきいし、左右の御ふところに入て云々

やき石

落くぼ物語曰、御燒石あてさせ給はんやと聞ゆれば、よかなりとのたまへば云々　御やき石もとめて奉り給へ云々況てやき石はいとやすく思ひにさし燒てんといへば云々石もとめんとて立ぬ云々　翁やきしつゝみもて來たるを○證類本草曰、燒石令赤投水中内塩敷合主風瘙癮疹及洗之又取石如鵝卵大猛火燒令赤内醋中十餘度至石碎盡取屑暴乾和醋塗腫上出北齊書醫人馬嗣明發背及諸惡腫皆瘥此非是尋常石也觀此則與ニ天生溫石ニ別也

【集註】　明月記曰、建久十年三月廿三日、腰同事也。昨夕止燒石。闍梨云、脚氣之腰燒石必成增。乃止之。今曉立、問時成朝臣、以湯可試。正治元年十二月八日、入夜參大炊殿、御不例、依雜熱被付御藥云々。被宛御燒石之間、火フクレ出來之間、又被冷之云々。安貞元年十一月十九日、被遣懸物、令悅目。手鞠、五節櫛、枕、燒石裹、檜扇、墨筆、檀紙、源平盛衰記第四十三曰、女院ハ後奉ラジト、御燒石ト御硯ノ箱トヲ左右ノ御袂ニ宿シ入、御身ヲ重クメ、ツヾキテ海ニ入セ給ケルヲ、

石鷰

【今名】　ツバクライシ

證類本草曰、石鷰。唐本注云、形似蚶而小堅、重如石也

【形状】　山槐記曰、治承二年十一月十二日、定成朝臣獻御乳付云々納手箱一合ニ所ニ儲置ノ之御藥雜物等ト、石鷰二。典藥頭定成朝臣、十一月一日進ニ一對ヲ。入道大相國ヘモ亦一對被レ獻レ之。其躰白。但至ニ于定成朝臣ノ所レ進之石鷰、三日以後返給云々。本草類編曰、石燕形似蚶而小堅○大和本草曰、石燕小ニシテ燕ニ似タリ

【藥製】

頓階抄曰、石燕

ウチクダキ

止(ト) 倭名類聚鈔 【漢名】 砥 【今名】 ト

柳河東集曰、可以備砥礪。注、砥細於礪。○賦役令曰、其調副物、七丁。砥一顆。義解云、謂礪石也。倭名鈔國郡部曰、安房國平群郡砥河。止加波

【集註】 延喜式卷第四曰、伊勢太神宮服部等雜用料。砥四顆。九月神嘗祭、砥一顆。同卷第五曰、齋宮、砥八顆。同卷第十三曰、圖書發、九年料裝潢用度、砥一顆

【形狀】 延喜式卷第二十四曰、凡中男一人輸作物。砥二顆。長一尺三寸、廣六寸五分、厚二寸七分

○唐砥 出雲國風土記曰、嶋根郡玉結濱東邊、有唐砥

末度(マト) 倭名類聚鈔 【漢名】 越砥 本草 【今名】 アハセド

古文正宗曰、越砥。磨石也。○倭名鈔曰、砥。和名末度、細礪石也

志良登(シラト) 萬葉集 【今名】 シラト

集註　萬葉集巻第十四曰、志良登保布、乎爾比多夜麻乃、毛流夜麻能、宇良賀禮勢那奈、登許波爾毛我母

阿乎度(アヲト)　倭名類聚鈔　今名　アヲト

一名　青砥　延喜式。倭名鈔曰、青礪。唐韻云、礛䃴監諸二音。和名阿乎度青礪石也　青砡　類聚雜要抄曰、帳一基塗支度云云青砡三果

集註　延喜式巻第五曰、齋宮造備物。青砥二顆。同巻第十五曰、內藏寮。造御靴料。青砥一顆。諸國年料供進。青砥二百顆、右太宰府所進。同巻第十七曰、內匠寮。朱漆器料云云青砥。八尺臺盤臺一脚料。伊豫砥青砥各小半顆。刀子筥一合料。伊豫砥五顆。青砥四枚。年料革筥廿台料。青砥四枚。年料五尺屏風云云青砥二枚。年料几帳八基云云料。青砥一枚。御鏡一面云云料。青砥。同巻第二十三曰、民部下。年料別貢雜物。太宰府青砥二百顆。同巻第四十九曰、兵庫。挂甲(ウチカケノヨロヒ)一領云云長功砥磨青砥磨幷ニ瑩四十日。中功砥磨青砥磨幷ニ瑩四十六日。短功砥磨青砥磨並瑩五十六日

爪磨(ツマド)　延喜式

集註　延喜式巻第五曰、齋宮爪磨(ツマト)一枚

阿良度 倭名類聚鈔　［漢名］礪　［今名］アラト

［一名］麁砥 延喜式　波也止 新撰字鏡曰、礪。力制力例二反。去砭也。波也止。倭名鈔曰、礪音黄和名阿良度麁礪石也。倭名鈔國郡部曰、越中國礪波。止奈美。萬葉集第十七曰、刀奈美夜麻。同第十三曰、月モ日モ、攝友、久經流、三諸山之、礪津宮地

［集註］軍防令曰、凡兵士、每レ火、礪石一枚。延喜式卷第四十九曰、兵庫寮。麁砥二顆

伊豫砥 延喜式

［一名］伊与砥 類聚雜要抄曰、帳一基塗支度云云伊与砥一果

［集註］延喜式卷第五曰、齋宮。造備雜物。伊豫砥七顆。同卷第十五曰、內藏寮。伊豫砥一顆。同卷第十七曰、內匠寮。朱漆器料。伊豫砥。割レ瓜刀子廿枚料。伊豫砥二顆。年料革筥廿合料。伊豫砥五顆。年料五尺屛風五十帖料。伊豫砥七顆。年料几帳八基料。伊豫砥半顆。御鏡一面料。伊豫砥。同卷第二十四曰、主計上。伊豫國中男作物砥。同卷第四十九曰、兵庫寮。伊豫砥二顆。新猿樂記曰、伊豫云云又砥

玉止久石 新撰字鏡

字鏡曰、磋。昌柯反。玉礪之石也。玉止久石〇正字通曰、磋。倉多切、音蹉、磨治也。詩傳治ニ象牙ニ曰磋

ごいし　山家集　〔漢名〕石碁子　〔今名〕ゴイシ

〔今案〕雲南通志、永昌府物產曰、碁質堅色潤トミユレバ碁ト一字ニテごいしノ漢名トナル〇源氏物語葵曰、五うち、へんつきなしつつ。同竹川曰、五うち給ふとて。同橋姬曰、五うち、へんつきなど、はかなき御あそびわざにつきても。同椎本曰、ごすぐろく、たきのばんどもなどとりいでゝ。文德實錄第五曰、唯好圍碁。日本靈異記曰、碁五反。空海遺告曰、何況シヤ圍碁雙六、一切停止スヘシ。勘註云、圍碁ハ以ニ黑白石ヲ一相乘テ被ルヽ致サ得ル地ヲ者名爲レ勝。倭名類聚鈔曰、圍碁。音期、世間云、五碁石。藝經云、白黑碁子、各一百七十枚

〔集註〕常陸國風土記曰、多珂郡、南卅里藻嶋驛家、東南濱碁子、色如珠玉。所謂常陸國所有麗碁子、唯是濱耳。出雲國風土記曰、嶋根郡玉結濱有碁石。續日本後紀卷第一曰、仁明天皇天長十年十二月壬寅、天皇御ニ紫宸殿一、賜ニ群臣酒一、有ニ圍碁之興一。同卷第三曰、承和元年秋七月庚申、是中旬之初也。上御ニ紫宸殿一、賜ニ侍臣酒一。乃至ニ促カメ親王大臣座於御床ノ下一、令ニム以ニ囲碁一焉。夕暮而罷。同卷第五曰、承和三年六月戊午、天皇御ニ紫宸殿一、賜ニ侍臣酒一、且ツ令レ囲レ碁ヲ。同卷第八曰、承和六年冬十月己酉、天皇御ニ紫宸殿一、賜ニ群臣酒一、召ニ散位從五位下伴宿祢雄堅魚、備後權掾正六位上伴宿祢須賀雄、於御床下一、令ニム圍碁一セ。並當時上手也。雄堅魚下ニ石二路一。賭カケ物新錢廿貫文。局所レ賭ト四貫。所レ約スル惣五局。須賀雄輸マケニ四籌ニ贏カツニ一籌一。北山抄曰、

間諜以下八文字ヲ耕本「殺ニ日本國客ニ樣ヲ欲レ謀間」ニ作ル

六月十一日、神今食事云云、或有圍碁之興。供御畢後、置碁局於親王座東、設短燈臺。百練抄第七曰、近衛天皇久安元年二月十一日、列見、有ニ圍碁一、依ニ舊規一也。扶桑略記廿三曰、延喜七年正月三日、行ニ幸仁和寺一云云、還御時可ニ寂寥一、宜ニ圍碁一、將懸物有ニ好馬一、則召ニ碁局一。裡書曰、延喜九年六月十九日、諸卿實ニ撿鴨川堤破損一、國家於ニ三條末一儲レ饗云云、數盃之後、有ニ圍碁興一。九月五日、右大臣以下諸卿、覆ニ勘川原堤一、依レ雨饗幄圍碁、如ニ六月十九日例一。同第廿四曰、延長五年二月十四日、行ニ幸六條院一云云、此日不レ召ニ王公一、圍碁送レ日。拾遺集曰、天曆御時一条攝政藏人頭にて侍けるに、帶をかけ御碁あそばしける、まけ奉りて御かずおほくなり侍ければ、帶を返し給ふとて。御製。白浪のうちやかへすと待ほどに濱のまさごの數ぞつもれる。榮花物語本雫曰、たうくう云々わかくうつくしげにおはします云々人々はかなき御ご双六、へんつかせ給など、もろともにせさせ給。藻塩草曰、碁うつご、みだれご、らんご。拾遺詞に乱碁とらせ給けり、勝負のことばに、まけわざ、かちわざとてする也と云々。江談抄曰、吉備入唐間事云云、碁人議云、雖レ有ニ才藝一、必不レ可レ有。以ニ圍碁一欲レ試ト云テ、以ニ白石一擬ニ日本一、以ニ黑石一擬ニ唐土一、以ニ此ノ勝負一間諜ヲ殺ニ害之一由、日本國客樣、鬼又聞テ令レ告ニ吉備一、使ニ吉備ヲ令「門」レ問圍碁ニ有レ樣、就ニ例樓一計ヘテ組ニ入三百六十目一、別テ指ニ井目一、一夜之間案得了之間、唐土圍碁上手等撰定集テ令レ打、持打無ニ勝負一之時、吉備偸盜ニ唐方黑石一ニ飲了。欲レ決ニ勝負一之間、唐人負了。唐人等云、希有事也。被怪止云、計合テ黑石不レ足、仍課ニト筮一占レ之、盜テ飲ト云、推レ之大爭在ニ腹中一、然者令レ服ニ瀉藥一、而令レ服ニ呵梨勒丸一、以ニ止封一不レ瀉レ之、遂勝了。仍唐人大怒テ不レ与レ食之間、鬼物每夜与レ食、已及ニ數月一也。今昔物語曰、六十代延喜の御時、碁勢寛蓮といふ一人の僧、碁の上手にて有

一二二ニ作ル此今昔ノ文小異多シ

ずして、宇多院の殿上法師にて有ければ、常にめして碁をあそばしけり。天皇もきはめて上手にあそばしけり。大和物語首書曰、橘良利肥前國藤津郡大村人也。出家號寛蓮、爲宇多院殿上法師、閑碁之堪能也。因爲碁聖大德、延喜十三年五月五日、碁聖奉勅作碁式獻之寛蓮は品もいやしからけれども、寛蓮には先二ッなんおとらせ給ひけり。常に金の御枕(まくら)をかけ物にしてあそばしけるに、天皇負させ給ひて、寛蓮御枕をたまはりてまかり出るときは、若き殿上人の勇めるにおほせて、うばひかへさせらるゝ事度々なり。撰集抄曰、あの圍碁(ご)はんとりていませよ、いご打ちてみせ奉らんとのたまはせければ、仲算いごばんを取あげんとし給ふに云々 念珠いごばんのあしをうちまきて云々。江家次第曰、圍碁召公卿、若弁少納言中能碁之輩圍之厨家奉賭錢、天暦元年宣旨停錢、其後募珍味、其儀六位外記二人持碁盤碁筒居上二枰置公卿座東二枰東西相對史二人取菅圓座四枚、敷碁枰南北、上首二人居北圓座、上首把黑、下﨟把白、公卿以下移著碁所見之。相分爲念人云々 久安元年十二月列見、宇治左大臣爲上卿、行圍碁事、詳見件記也。二水記曰、大永六年八月五日午後參內、有御碁。廿八日參內、有御碁。靑門竹門等御參也。九月十三日午後參內、有御碁。明月記曰、正治二年二月四日、午時許依召參八条殿、中將殿參給九条殿、可御共仰也。未時御共參入、中將殿小童囲碁上手也。件碁御覽之料也。建仁三年十二月十日云々 其傍置囲碁双六將棊等盤。春宮年中行事曰、四月一日改御裝束事云々てんじやうにはひ(火)ゞつ(櫃)をとりて、ゐぎ(圍碁)のばん(盤)をゝく。十月一日、御ころもがへの事云々てん上にゐぎのばんをとりて、火びつをすゑたり

形状 山家集曰、伊勢のたうしと申嶋には、こいしのしろのかぎり侍濱にて、黑はひとつもまじらず、むかひてすがしまと申は、くろかぎり侍なり。「すがしまやたうしのこいしわけかへて黑白まぜよ浦の濱かぜ「さぎしまのこい

しの白をたかなみのたうしの濱に打寄てける〽からすさきの濱のこいしと思ふ哉白もまじらぬすがしまの黑〽あはせばやさぎをからすとこをうたばたうしすがしま黑白の濱○雍州府志曰、圍碁之所用黑白石始自紀伊海濱來、其形之大小自然有適其用者。今絕、故多磨白貝黑石而作之

殺生石 下學集

集註 文明寫本下學集曰、犬追者、昔西域有斑足王、其夫人惡虐過人、勸王取千人頭、其後出生于支那國、作周幽王后、其名曰褒姒、滅國惑人、死後出生于日本、近衛院御宇號玉藻前、傷人無極。後化成白狐、害人惟多。時俗欲驅之、先追走犬以試射騎。白狐知之、化成石。飛禽走獸當其殺氣者、莫不立斃。故謂之殺生石。于今在下野國那須野原也。犬追者始于茲矣。但聽之古老之口號、雖不知本說、且戲之而已

禰須美已呂之 本草類編

漢名 礜石 本草

本草綱目曰、礜石有數種、白礜石、蒼礜石、紫礜石、紅皮礜石、桃花礜石、金星礜石、銀星礜石、特生礜石、俱是一物也。立名其性皆熱毒並可毒鼠製汞

集註 本草和名曰、礜石、出長門國。特生礜

石、出長門國。本草類編曰、特生礜石。和称須美已呂之。无時採之。三代實錄卷第四十九曰、光孝天皇仁和二年八月四日庚戌、先是、安房國言上、去五月二十四日夕有黑雲、自南海群起。其中現雷光、雷鳴地震、通夜不止。二十六日曉、雷電風雨、巳時天色清朗、砂石粉土遍滿地上、山野田園无所不云降。或所厚二三寸、或處僅蔽地。稼苗草木悉凋枯、馬牛食粘粉草、死斃甚多。○

加波奈彌　新撰字鏡曰、白礜石。加波奈弥

火宇知石　新撰字鏡　漢名　玉火石　本草　今名　カドイシ

扶桑略記三十日、午刻出御於葛上郡火打崎。　集註　常陸國風土記曰、久慈郡云云北有小水、丹石交雜、色似琥碧。火鑽尤好。故以號玉川。倭名鈔曰、火鑽。和名比岐利。字鏡曰、磐。若革反。出火之石。火宇知石。延喜式卷第三十曰、大藏省。賜蕃客例。大唐皇出火水精十顆

菊目石　參寄集　漢名　海化石　廣東新語　今名　キクメイシ

廣東新語曰、海石有二、其一曰海花石、蓋瓊海鹹味所凝。有似假山者花樹者人與鳥獸形者。初甚鮮翠、久乃枯槁其狀若盤者、質如荔支之殼、紡而紅紫、以畜養金魚甚善。其一曰羊肚石、出陽江、大如

岑許ニ浮ニ游水上ニ 左思所云雲雨所儲浮石若桴者也、以レ之瀝ニ磨汚垢ニ亦善。二石皆水之質、水之流滓所レ成、若ニ山之石ニ則火質、火之精華所レ成也

形狀 〇本草辨疑曰、菊銘石、南海紀州ヨリ出。石ニ菊ノ紋アリ

加留以之（カルイシ） 倭名類聚鈔

漢名 浮石 本草

今名 カルイシ

一名 美川乃安和 本草類編 加留伊之 同上 加流以之 天文寫本和名鈔。延喜式卷第八曰、祝詞鹽沫能留根。倭名鈔、藥名類曰、浮石散治ニ咳嗽ニ

集註 倭名鈔曰、浮石、和名加留以之。本草類編曰、三月九日採之

以之波比（イシバヒ） 本草和名

漢名 石灰 本草

一名 伊之波比 本草類編〇倭名類聚鈔曰、石灰。以之波比

いしはい 枕草紙曰、まことのいしばいなどにはえおひずやあらん。平家物語曰、清涼殿のいしばいのたんにして、主上夜ごとに伊勢太神宮をぞ御拝有ける。弁内侍日記曰、いしばいの間にかへりたち。續日本後紀卷第四曰、石灰工一人

集註 廣博物志曰、桀臣昆吾作ニ石灰ニ

令曰、主工司正一人掌云云燒石灰等事。本草類編曰、石灰。和伊之波比、時不定取之。延喜式卷第十七曰、內匠寮。伊勢初齋院裝束。五尺屛風四帖料、石灰八合。合ニ麥粉ニ料。中右記曰、天仁元年十月四日庚辰　今日初於石灰壇有御拜。帝王編年記曰、後宇多院弘安九年十二月廿八日、天皇於石灰壇有御拜。百練抄第十四曰、四條院、貞永一年十月廿七日癸卯、藏人頭內藏頭有範朝臣被ㇾ尋ニ神祇權大副兼直宿祢ニ云、石灰壇御拜已前、始有ニ平野祭御禊事一如何。又賀茂臨時祭相ニ當御衰日ニ之上、御即位已前也。兩條可ニ計申ニ者、兼直申云、雖ニ石灰壇御拜以前一、有ニ本社祭ニ者、御禊難ニ歎止ニ歟。但初度御禊坎日也。仁安三年三月、御燈御禊憚ニ日次ニ不ㇾ被ㇾ行也。即位以前臨時祭之時、承久三年十一月廿四日。御即位十二月一日可ㇾ有ニ時議ニ之由申ㇾ之。明月記曰、寛喜二年六月廿四日、昨日塗壁、今日塗石灰畏棟。九槐記曰、石灰の壇に圓座めして、多は火たかせて、しかるべき上達部めして御遊候。これ恒例の事也。麗藻塩襍抄曰、壁ニ白キ事ヲ不ㇾ雜トテ、土ノ上ニ石灰ヲ塗事ナシ。近代帝王物語曰、毎夜石灰の壇にて神宮の御拜ありて云々

龍石　瘢嶋眼科書

集註　慶長十七年瘢嶋眼科書曰、龍石。吉野ヨリ出ル、燒テモ生ニテモ吉

岐尔(キニ)　本草和名　漢名　雄黃　本草

文房肆考曰、雄黃通明似ニ鷄冠ー者佳。芥子園畫傳曰、雄黃揀上號通明鷄冠黃（）新積藥記曰、唐物雄黃

集註 續日本紀卷第一曰、文武天皇二年九月乙酉、令献伊勢國雄黃。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊勢國雄黃四斤。本草和名曰、雄黃。和名阪尒。出伊勢國。本草類編曰、雄黃。探无時。日本伊勢國有之

形狀 福田方曰、雄黃大体（ヲツカタ）丹砂ノ說ノ如シ。但シ雄黃ハ大塊ニメ黃赤色ニメ、少シ硫黃ノ香スル者也。亦云、日本雄黃極テ上下アリ、粉ニメ賣物ハ下品ノ者ヲウル。善ヲバ石ニテウル。石雄黃ト名ク。此中ニウツクシキヲ撰取テ使ヘ

附方 十

三種丁ヲ治スル方 頓醫抄曰、諸ノ丁瘡ヲバ四方及ビ中心ヲ針シテ、針ノ口ニ雄黃ヲ末ノスリヌレバ立処ニ効アリ。雄黃ナクバ黃土ヲモ塗ベシ

明德記ハ群本ト少異アリ

鏡石（カヾミ） 明德記

漢名 石鑑 倘湖樵書　**今名** カヾミイシ

集註 明德記曰、山名修理ハ我身ハ大野ニ有ナガラ云云淸水ノ東浦ヨリ船一艘引寄テ、二月二十五日ノ曉干潟洲ヨリ取乘海上遙ニコギ出ス。峯ツヾキ霞ニ曇ル鏡石、面影計身ニソヒテ、花待カヌル蘇代ヤ云云

大坂石 延喜式

【集註】延喜式卷第三十四曰、木工寮。車載。大坂石積七千九百二十才、小石九千才

讃岐石　延喜式

【集註】延喜式卷第三十四曰、木工寮。車載。讃岐石積六千三百才、小石七千二百才

紀伊石　延喜式

【集註】延喜式卷第四十一曰、彈正臺。凡紀伊石帶云云參議已上云云聽ㇾ着用。紀伊石帶白皙者六位已下不ㇾ得ㇾ用ㇾ之。一条家裝束抄曰、白石帶、大外記用之云云

くろきいし　高倉院嚴島御幸記

【集註】高倉院嚴島御幸記曰、庭にはくろきしろきいしにて、あられのかたにいしだゝみにし

雜賀石　太平記○雍州府志ニ紀伊海青石ト云　【今名】アヲイシ

【集註】太平記曰、泉水ニハ伊勢嶋雜賀ノ大石共ヲ集タレバ、車轢テ軸ヲ摧キ。袋草紙曰、津守國基年ふれどおひもせずしてわかのうらにいくよになりぬ玉津しまひめ。是ハ堂建立之時、壇石取ニ紀伊國ヘ渡。若浦ノ玉津嶋ニ神社アリ。尋聞バ衣通姫ノ此所ヲヲモシロガリ給テ、神ト現テ垂跡給也、ト彼渡人申タリケレバヨミ奉也。其夢ニ、唐髮上テ、唐衣キタル女十人許出來テ、ウレシキ慶ニイフナリトテ、可取石ヤウモ教レ之。夢サメテ如レ教求之ニ如ニ夢告ニ有石。令打破之、一度ニ十二顆ニ破テ壇ノ飾石ニ尅云云

藤戸石 搖見記

【集註】搖見記曰、永祿十二年二条勘解由小路ノ前ノ御所ノ燒跡ヲ、東北へ一町宛押ヒロゲ堀ヲホラセ、石垣ヲ築セテ、御所ヲ造ラル。御庭作ラレケル時、故細川氏綱ガ旧宅ニ、藤戸石トテ名石有ケルヲ引カセ

九山八海石 搖見記

【集註】宗長日記曰、醍醐に北村兵庫助招請誘引せられ、菩提院一見云々九山八海といふ石、淺茅の中に有、聞しよりはみるはともいふべし。搖見記曰、又九山八海ト云、昔慈照院殿ノ御時、花ノ御所ニ

立置レシ石ナルヲ、取寄テ御庭ニ立ラル

皇子產石　釋日本紀

一名　兒饗石　同上

集註　釋日本紀曰、皇后取レ石ヲ挿ミテレ腰ニ。筑紫風土記曰、逸都ノ縣子饗原ニ有ニ石兩顆一。一ハ者、片ノ長一尺二寸、周一尺八寸。一ハ者、長一尺一寸、周一尺八寸。色白ノ而便圓ニ如シ磨成スルカ。俗傳ニ云、息長足比賣ノ命欲レ伐ニト新羅國ヲ、軍ノ之際、懷娠漸動。時取ニ兩ノ石ヲ、挿ニ著裙ノ腰ニ、遂ニ襲ニ新羅ヲ。凱旋之日、至テ芋湄野ニ、太子誕生シ玉フ。有ニ此ノ因緣ヲ曰ニ芋湄野ト。謂レ產ヲ爲ニ芋湄ト者、風俗言詞耳。俗間ノ婦人忽然トシテ娠動スハ、裙ノ腰ニ挿レ石、厭ノ令ニ延レ時ヲ、蓋シ由レル此ニ乎。筑前國風土記曰、怡土ノ郡兒饗野。在ニ郡西ニ。此野之西ニ有ニ白石二顆ヲ。一顆長一尺二寸、大一尺、重卅一斤、一顆長一尺一寸、太一尺、重卅九斤。曩者、氣長足姫ノ尊欲レ征ニ伐ントスル新羅ヲ、到ニ於此村ニ。御身有レ娠、忽ニ當ニ誕生ニシ玉ハントス。登時取ニ此二顆ノ石ヲ挿ニ於御腰ニ。祈曰、朕欲ノ定ニ西堺ヲ、來テ著ニ此ノ野ニ。所レ娠皇子若シ此神ナラハ者、凱旋之後誕生玉ハンコト其レ可ナランコト。遂ニ定ニ西堺ヲ還來リテ、即產ミ玉フ也。所謂譽田天皇是也。時ノ人号ニ其石ヲ曰ニ皇子產石ト。今訛リテ謂ニ兒饗石ト。

軍ノ上「閧」アルベキカ
欲ノ下「定」アルベキカ

破石　續日本紀

【集註】續日本紀卷第卅曰、寳龜元年二月丙辰、破却西大寺東塔心礎。其石大方一丈餘、厚九尺。東大寺以東、飯盛山之石也。初以數十人引之、日去數步。時復或鳴。於是益人夫、九日乃至。卽加削刻、築基已畢。時巫覡之徒、動以石祟爲言。於是積柴燒之、灌以三十餘斛酒、片片破却、棄於道路。後月餘日、天皇不忿。卜之破石爲祟。卽復捨置淨地、不令人馬踐之。今其寺內東南隅數十片破石是也

涵星　硯名

藻塩草曰、涵星硯。是硯の名也。又硯となくて、たゞ星をひたすとばかりよめる歌もあり。硯となく共硯なるべしと云々。寄園寄所寄曰、何遠云、涵星硯龍尾溪石、風字樣下有二足、琢之甚薄、先博士君得之云云此石歲採不過十數、幸善護之。然研只如常研無甚佳者。但用之久至垢埃經月不滌、而磨墨如新、此爲勝絕。小知錄曰、月石涵星蘇東坡硯也。互雜組曰、馬肝、鸜鵒色之正也。月暈、星涵姿之奇也。魚躍、雲興石之怪也

【今案】万寳全書曰、カンセイ石、是モ黑メナル石ニ、ウツクシク白ク、南遼沙金ナドノゴトクニチリテ、見事ナル石ノヨキ心ナル物ナレ共、金色ノチリタル處、墨ヲスル時、墨ニアタリ、ケツマヅキテスリ心ワロシ。文房肆考曰、歙硯其石堅勁瑩潤多。發墨晶有星、以金星者爲貴。然斑斕醉明如泥金者爲上。最好者其形如龍尾、謂之龍尾金星。凡有金星者、石色必帶綠色。洞天淸錄曰、歙

硯龍尾舊坑新坑。注、色淺青黑如ニ秋水一並ニ無レ紋、以レ水濕レ之微似レ紫、乾則否。細潤如レ玉發レ星如ニ汎油一並無レ聲。或有ニ純黑如レ角者一東坡最貴ニ此品一。今得レ之亦貴重

青石 類聚雜要

【集註】類聚雜要抄曰、藥莒。納藥硯、弘二寸、窪深八分、丸樣。長五寸、高一寸。青石、外(ソト)以レ銀打、久々年

東流水沙 延喜式

【集註】延喜式卷第十六曰、陰陽寮。凡新年鎮ニ害氣一者、預前勘ニ錄害氣在處并所レ須鎮物一申レ省。東流水沙三石。同卷第五十曰、雜式。凡諸國鎮ニ害氣一者、於ニ國郡鄉邑一、每年正月上獻日作レ坑方深三尺、取ニ東流水沙三斛一置ニ坑內一以ニ醇酒三升一●灌レ沙。然後以レ土覆レ之、大小各踏ニ其上一以レ杵築レ之、各二七杵。呪曰、害氣消除、人無疾病、五穀成熟

大坂ノ沙 續日本紀　【漢名】合玉石 本草

【一名】こんがうしやう　職人盡歌合曰、硯きり。あふ事はなをかたければ硯いしこんがうしやうもかなはざりけり。西宮記曰、金剛砂園在ニ大和國一藏人所知之

【集註】續日本紀卷第十五曰、聖武天皇天平十五年九月己酉、免ニ宮奴斐太ヲ従ニ良ニ、賜ニ大友ノ史ノ姓ヲ。斐太、始ノ以ニ大坂ノ沙ヲ治ニ玉石ヲ之人也ナリ。延喜式卷第十七曰、内匠寮。切ル石料、大坂沙一石、鐵一延半、裹ル鉄料銀大六兩【附錄】

八幡二字銘石

百練抄曰、崇德天皇長承元年六月廿二日、太宰府言上八幡宮高四尺弘三尺厚二尺石二自然出來各有ニ八幡二字銘一

奇沙

山背國風土記曰、久世郡奈賀瀬川出奇沙、似金粥、大者如玉

古名錄石部卷第九　終

古名錄土部卷第十目錄

土類

之良都知（シラツチ） 白堊
波介（ヘニ） 黃土
赤土
白土
靑土
比知利古（ヒチリコ） 泥
久利（クリ）
久呂豆千（クロツチ）
古江豆知（コエツチ）
加末都知（カマツチ） 伏龍肝
燒土
壁つち 東壁土
鼠ノカキタル土 鼠壤土
燃土 膏風

通計十四種

灰塵類

波比（ハヒ） 灰　○加末乃倶己乃波比（カマノクコノハヒ） 鍛鑪　○己之支和良乃波比（コシヤワラノハヒ）
○加知須留所乃都知灰（カチスルソノツチ）　○汁灰

椿灰（ツバキ）　眞木灰（マキ）

柃灰（ヒサカキノ）　木連灰（イタビノ）

阿加佐乃波比（アカザノハヒ）　黒灰

香爐灰　須美（スミ） 炭　○眞木の灰
○炭火 赤炭

○和炭 麩炭　○熬炭
○獸炭　掃墨

須々（スス） 煤　比乃宇扁乃須々（ヒノウヘノスス） 梁上塵

竈ノヘスヒ 百草霜　知利（チリ） 塵

通計二十三種

古名錄土部卷第十

紀藩　源　伴存撰

土類

說文云、土吐萬物者也。品字箋曰、天之無星處皆辰。地之無石處皆土。○倭名鈔國郡部曰、遠江國城飼郡土形、比知加多。肥前國風土記曰、高來郡土齒池、俗言レ岸ヲ爲二比遲波一。

新撰字鏡曰　塊。口內反、豆知久礼。古事記曰、訓レ土云二豆知一。

之良都知（シラツチ）　本草和名

【漢名】白堊　本草

【今名】アマクサド

事物異名錄曰、白善、庶物異名疏、土ハ以レ黃ヲ爲二正色一、白爲二惡色一、人諱レ之爲二白善一。

【一名】之良豆知　倭名類聚鈔曰、堊。和名之良豆知。本草和名曰、白惡。一名白土。和名。日本書紀曰、卽宮垣（ミヤカキ）室屋弗二堊色（シラツチヌラ）一。

【集註】本草類編曰、白堊。和之良都知。无時採レ之

名ノ下「之良都知」脫カ

波尓（ハニ）　新撰字鏡

【漢名】黃土　本草

【今名】キヅチ

【一名】はにふ 言塵集曰、はにふ。黄土也。
藻塩草曰、はにふ。黄土

波迩 古事記曰、櫛八玉神化レ鵜入レ海底ニ咋ニ出底之波迩ニ作リ天ノ八十毗良迦ヲ。又曰、到ニ於波迩賦坂ニ望ニ見難波宮ニ云云亦歌曰、波迩布邪賀、和賀多知美禮婆云云。萬葉集巻第十曰、彌年ノ黄土。塵添壒囊鈔曰、常ニハツチノイロハ黒モ黄ニモアリ

波爾 倭名鈔國郡部曰、信濃國埴科、波爾志奈。但馬國出石郡埴野、波尓乃。阿波國名方西郡埴土、波爾。延喜式巻第二十一曰、諸陵寮。埴生坂本陵。埴口墓。柳河東集、註曰、土黏曰埴。正字通曰、堇。説文黏土也。徐曰、黄土乃黏○倭名鈔國郡部曰、下總國埴生、波牟布。駿河國安倍郡埴生、反布。上野國緑野郡土師、波尓之。備前國邑久郡土師、反之。阿波國名方西郡土師、波之。筑前國穂浪郡土師、波之

はにつち 藻塩草曰、はにふの小屋、はにつちにてぬりたる小屋也

【今案】字鏡曰、埴。市力反、黏土也。波尓。倭名類聚鈔曰、埴。釋名云、土黄而細密曰埴。萬葉集巻第六曰、住吉能、岸乃黄土粉、一云住吉之、岸之黄土、爾保比而將太。同巻第七曰、住吉之。岸乃黄土、將見因毛欲得。同巻第十一曰、白細砂、三津之黄土、色ニ出而云云。觀レ此則波尓ハ黄土ナル證也。萬葉集巻第十一ニ彼方之、赤土少屋爾、霡霂零ト覯ユレバ、赤土、黄土通テ波尓ト云ルヿ明也

【集註】延喜式巻第十七曰、内匠寮。大寒日立ニ諸門ニ土偶人十二枚。土牛十二頭。料。靑土二升、赤二升、白二升、黄四升。同巻第三十四曰、木工寮。掘埴。掘ニ開埴土ニ一人一日立方五尺ニ。堅埴減ニ一尺ニ。一人一日取レ埴大二千斤。堅埴減ニ一千斤ニ。工一人作ニ埴樋十九柄ニ。夫一人作ニ運レ埴甕瓶十五口ニ。江家次第十七曰、兀子色事云云而今乍兀子、或塗ニ黄土ニ可レ飾レ之。常陸國風土記曰、其里大伴

村有涯、土色黄也

赤土 延喜式　漢名 赤埴 農政全書　今名 アカツチ

農政全書曰、辨二其土色一。若赤埴土其水味惡。赤埴黏土也。中レ爲レ甓、爲レ瓦者是

一名 マ赤土 塵添壒囊鈔曰、凡ソマ文字有レ物多シ、マ赤土。源平盛衰記卷第七曰、是ヤコノ賤ガ伏戸ノ赤土ノ小屋云云。藻塩草曰、またはに、あかつち、うだのまはにといへり

眞赤土 萬葉集第七曰、寄二赤土一。山跡之、宇陀乃眞赤土、左丹著云云。ニツチ傍訓 延喜式（一）延喜式卷第三十四曰、木工寮。

人擔。白土、赤土各三斗。沙二斗九升。並爲二一擔一

集註 延喜式卷第十二曰、主鈴。年料所レ須、赤土一斗。同卷二十四曰、主計。凡諸國輸調。赤土一斗五升。播磨國調、赤土五斛一斗。古事記曰、於是其妻以二牟久木實與二赤土一授二其父一云云又曰、以二赤土一散二床前一云云。播磨國風土記曰、息長帶日女命欲レ平二新羅一云云以二丹浪一而將レ平賜伏。如此致賜於レ此出二賜赤土一。其土塗二天之逆桙一建二神舟之艫舳一又染二御舟裳及御軍之著衣一又攪二濁海水一渡賜之時底潜魚及高飛鳥等不二往來一不レ遮レ前云云

白土 延喜式　漢名 貴妃粉 廣輿記　今名 シラツチ

廣輿記曰、陝西西安府土、產貴妃粉。馬嵬坡上土白如粉。女人面有黑點者、以水和粉洗之卽除

【一名】之良爾 萬葉集卷第十七曰、世乍須辨能、多騰伎乎之良爾、加苦思底也。勢乍須辨能、多騰吉乎之良爾、隱居而。伊敗須幣能、多騰伎乎之良爾、心爾波

信土 萬葉集卷第七曰、白栲爾、丹保布信土之、山川爾云云（萬葉集卷第九曰、田時乎白土、肝向トミユ。胡粉ト同名也

【集註】延喜式卷第七曰、踐祚大嘗祭云云次火臺四荷。塗以二白土一。次土火炉四荷。構以二椋木一、塗以二白土一。同卷第三十四曰、木工寮。土工云云表塗料、白土二石。洗馬矢一石。粥汁料白米二升。表塗料、白土一石。洗馬矢五斗。粥汁料白米一升。車載。白土三石三斗。人擔。白土云云各三斗。常陸國風土記曰、久慈郡。北山所レ有、白土可レ塗レ畫之。江家次第卷第十七曰、御元服云云東机置二陶器鳥頸平瓶一口一。七升納。件鳥頸以レ木作二纏之一、以二白土一塗之

靑土 延喜式

【集註】延喜式卷第十七曰、內匠寮。大寒日立二諸門一土偶人十二枚料。土牛十二頭料。靑土二升、赤土二升、白土二升云云。賦役令曰、其調副物、正丁一人、靑土一合五勺。令集解曰、穴云、靑土者破石取二其中一。所用倘如二彩色一。自二能登國一進レ之

比知利古（ヒチリコ）　倭名類聚鈔　［漢名］泥　［今名］ドロ

品字箋曰、土之滋潤者。泥。泥之乾潔者。土。

［一名］**古豆知**　新撰字鏡曰、壤柔泥也。古豆知。又古万介志。按正字通曰、壤。汝兩切、音攘。柔土無塊

古比千　倭名鈔曰、泥。孫愐云、土和水也。和名比知利古。一云、古比千

古比知　天文寫本和名鈔。藻塩草曰、泥の字をこひちとよむ也

于毗尼　日本書紀曰、埿土此ヲ云ニ于毗尼ト。萬葉集第三曰、埿者雖泣

宇比地　古事記曰、次成神名宇比地迩神

ごろ　撰集抄曰、かしらより始て足手どろかたにて

ひち　言塵集曰、ひちとは泥也。

延喜式卷第八曰、祝詞向股ニ泥畫寄テ

［集註］文德實錄卷第六曰、齊衡元年春正月丙戌朔、停ニ朝賀ヲ、以ニ雨後泥深ヲ也。令義解曰、土工司、正一人。掌ト營ニ土作瓦埿ヲ。謂瓦埿猶レ瓦也。以レ埿爲レ瓦、故連言。新猿樂記曰、腰ニ臥深泥ニ。太平記第二十七曰、踏ハ深泥膝ニアガル。同第二十九曰、衣深泥ニマミレヌレバ。明月記曰、建保五年十一月十九日云云於赤江騎馬路深泥也。寬喜二年正月十四日、夜中深泥也

久利（クリ）　倭名類聚鈔　［漢名］涅　正字通

正字通曰、湼ハ土址ニシテ水中ニ淤黑也。又染黑也
○倭名鈔曰、湼。唐韻云、水中黑土也。久利

久呂豆千（クロツチ） 倭名類聚鈔 【漢名】黑墳 農政全書 【今名】クロボコ 【一名】久路豆知 天文

農政全書曰、辨ニ十有二土之名物ヲ。注、十二分野之土各有レ所レ宜下ニ、其ノ名ヲ謂フ白壤黑墳ニ之類、辨ズルハ其ノ物ヲ謂フ所レ生ズル之物ヲ。又曰、黑墳者色黑稍黏也

寫本和名鈔 黑土 三代實錄 久呂豆知 新撰字鏡曰、濹。呼德反、黑泥。久呂豆知○正字通曰、濹。水名。倭名鈔曰、壚。釋名云、土色黑曰壚。和名久呂豆千○正字通曰、壚。說文、黑剛土也。書禹貢、豫州下土墳壚。周禮草人、埴壚用豕。註以レ埴爲レ黏以レ壚爲レ疏者。淮南子、下契黃壚。註、高地則壤、下地則壚

【集註】三代實錄卷第十四曰、淸和天皇貞觀九年秋七月十二日己酉、權僧正法印大和尙位壹演卒云云識浪之地ニ壹演聚ニ黑土ヲ、築ニ方丈壇ヲ、安ニ置尊影ヲ、壇上變レ白恰モ似レ塗レ粉。觀ル者奇レ之、莫レ不ト云フ欽感セ。出雲國風土記曰、黑田驛、郡家同所、土體色黑、故云黑田

古江豆知（コエツチ） 新撰字鏡

字鏡曰、塽。於六反、入、壞也。古江豆知

加末都知 本草和名 【漢名】伏龍肝 本草 【今名】カマドノ下ノヤケツチ

【一名】竈土 元亨釋書 加末乃宇知乃川知 本草類編曰、伏龍肝。和加末乃宇知乃川知。又云、也計太留川知 也計太留川知 見上。註、本草和名曰、伏龍肝。和名加末都知 竈(カマト)ノ下(シタ)ノ黄土(アカツチ) 頓醫抄曰、竈(カマト)ノ下(シタ)ノ黄土(アカツチ)。伏龍肝也

【集註】元亨釋書十一曰、釋睿實、嘗居ニ愛太子山一、大雪不レ霽、數日無レ餐、取ニ竈土ニ食レ之、其味甘美

【附方】頓醫抄曰、白クサ治方、油ニテ伏龍肝ヲトキツケヨ

燒土 延喜式

【集註】延喜式卷第十七曰、蓋下棧(エツリノ)料。燒土七升。轅并輪料、燒土五升。伊勢初齋院裝束。燒土二升。壁代戶料、燒土七升。五尺屏風四帖料、燒土二升。大笠柄一枝料、燒土三合

蓋下棧料ハ御輿ノ條ニアリテ燒土一斗トアリ腰輿ノ分ハ燒土七升ト

壁つち 宇治拾遺物語 【漢名】壁土

【集註】倭名鈔、藥名類曰、壁土散。治ニ肛門出一。按ニ東壁土也○倭名鈔國郡部曰、常陸國眞壁、萬加倍。駿河國有度郡眞壁、萬加倍。備中國小田郡草壁、久佐加倍。筑前國嘉麻郡草壁、久左加倍

アリ

宇治拾遺曰、道に落たるふるき繩をひろひて、壁つちにくはへて、古堂のやぶれたる壁を塗事をす。源平盛衰記巻第七曰、奇氣ナル小屋ニ、垣ニハ土ヲ壁ニ塗廻

鼠ノカキタル土 頓醫抄 漢名 鼠壤土 本草

附方 頓醫抄曰、玉門ノ頴左右腫上皮爛レ、馬之背ノ如ク、疼痛不可忍治ス、鼠ノカキタル土ヲ四升取テ、熬テ熱クシテツヽミテ、開ノ上ニ付テ、氣ヲシテ内ヘ入シムル好

燃土 日本書紀 漢名 青風 江南通志 今名 スクモ

一名 すくも 言塵集曰、すくも火、すくもたくとも詠り 集註 日本書紀曰、天智天皇七年秋七月、越國献ニ燃土與ニ燃水一

灰塵類

波比 倭名類聚鈔 漢名 灰

字典曰、灰。説文、死火餘燼也、火既滅可以執持。禮月令、註、火之滅者爲灰。品字箋曰、灰。燼餘也。物焚於火盡則灰矣。倭名鈔曰、灰。波比。新撰字鏡曰、灰。呼來反、灰也。波比、又曰、燠。烏洄於廻二反、興字

同。熬灰也。於支比。又阿豆波比〇續日本紀第三十八日、所謂寒灰更煖ニ枯樹復榮也

集註

延喜式卷第六日、齋院司。三年一請雜物。灰十四斛二斗。直、十斛二斗染ニ斗帳壁代帷ニ料。三斛染ニ雜色人及擔夫四十四人衣ニ料。同卷第十五日、內藏寮。中宮御服料。灰五十八斛一升。雜染。灰十二斛。駕輿丁褶料、灰二斛七斗五升。康平記日、被供養東北院。去康平元年爲灰燼、佛像免火。山槐記日、御產御座云々先並敷牛皮二枚、其上敷灰、其上敷綿、其上敷御座也。袖中抄日、しはすのつごもりの夜、ゐなかのげすの、かまどのはいをさらへて、をきとりをきて、それがきえきらぬさまにて、つぎのとしあわんずる事を見ることの侍とかや。扶桑略記廿三、裡書日、延喜十五年七月十三日、出羽國言上、雨灰高二寸、諸鄉農桑枯損之由。落くぼ物語日、雪のふるを見出して、火桶におしかゝりて、灰まさぐり居たまへる

形狀

源氏物語眞木柱日、さるこまかなるはひの、めはなにもいりて、おぼれて物もおぼえず。はらひすて給へど、たちみちたれば、御ぞどもぬぎ給つ云々そこらのはひの、御びんのわたりにもたちのぼり、よろづのところにみちたる心ちすれば、きよらをつくし給。古今著聞集卷第十二日、さげ棚の上に、鉢に灰を入て置たりけるを、この盜人何とか思ひたりけん、つかみ食て後、袋に取入たる物をば、本のごとくに置て歸りけり云々然るに御棚に麥の粉やらんとおぼしき物の、手にさはり候つるを、物のほしく候まゝに、つかみくいて候つるが、はじめはあまりうへたる口にて、何の物共思ひわかれず、あまたゝびになりて、はじめて灰にて候けるとしられて、其後はたへずなりぬ

〇加末乃曾己乃波比　本草類編

集註

本草類編日、鍛竈灰、和加末乃曾己乃波比、不

時定採之 ○己之支和良乃波比 本草類編 [集註] 本草類編曰、甑帶灰、和己之支和良乃波比、久飯蒸用之 ○加知須留

所都知 醫心方 [漢名] 鍛竈灰 本草 [今名] フイゴノハヒ 医心方曰、鍛竈灰、和名加知須留所乃都知 ○

汁灰 延喜式 [漢名] 鹼水 正字通 [今名] アク 本草綱目、冬灰。集解曰、今人以灰淋汁取鹼浣衣。正字通曰、鹼同鹻、俗以竈灰淋汁曰鹼水、去垢膩

[一名] 阿久 倭名類聚鈔曰、灰汁。阿久。延喜式卷第十三曰、圖書寮。淋灰槽一隻長三尺五寸廣三尺三寸深一尺六寸底厚一寸五分 [集註] 延喜式卷第十五曰、內藏寮。造五月五日昌蒲珮所汁灰一斗七升弘仁式ニ汁灰一斗五升ト云

椿灰 延喜式 [今名] ツバキノハヒ 山茶灰也

[集註] 延喜式卷第十三曰、圖書寮。九年料染造、椿灰一斗二升。同卷第十五曰、內藏寮。椿灰二石七斗。散木集曰、上に侍りける比、つばきをきりをきて、はひにやかむとてからすをみてよめる。我身ともつばきの枝いみゆるかな
はひに成べき程のちかさに

眞木灰 延喜式　【今名】スギノハヒ

【集註】延喜式卷第十五曰、內藏寮。眞木灰七斗。已上陵十所、墓七所、并多武峯幣等練染用度料。雜染。眞木灰八斛。古事記曰、眞木ノ灰ヲ納レ瓠ニ(イレヒサゴニ)

柃灰 倭名類聚鈔　【今名】ビシヤシヤキノハヒ

證類本草曰、柃灰。燒ニ木葉ニ作並ニ入ニ藥用ニ、亦堪レ蝕スルニ惡肉ヲ。柃灰、一作ニ苓灰ニ　【集註】倭名鈔曰、柃灰。蘇敬曰、又有ニ柃灰一燒柃木葉作之、並入染用。今按俗所謂椿灰等是也

木連灰 延喜式　【今名】イタビノハヒ

【集註】延喜式卷第十三曰、圖書寮。凡年料所造木連灰十六斛

阿加佐乃波比(アカザノハヒ) 倭名類聚鈔　【漢名】藜灰 證類本草　【今名】アカザノハヒ

證類本草曰、冬灰陶隱居云、此卽今浣衣黃灰爾燒ニ諸蒿藜ニ積聚ノ鍊ア作レ之、性亦烈シ。又荻灰尤烈。唐本注云、冬灰、本是レ藜灰、餘草ハ不レ眞。衍義曰、冬灰、諸家止ダ解レ灰、而不レ解レ冬ヲ亦其闕也。諸灰一烘而成ル、惟冬灰

則經ニ三四月ヲ、方微爐火既曉夕燒灼ス、其ノ力得ル不ルヲ全ク燥烈ニ乎、而又體益重、今一爇而成者體輕、蓋火力劣レバ、故不レ及ニ冬灰ニ耳。本草綱目曰、冬灰乃冬月竈中ニ所レ燒薪柴之灰也。專ラ指ス作ニ蒿藜之灰ト、亦未ニ必然ニ〇倭名鈔曰、黃灰。和名阿加佐乃波比。
本草和名曰、冬灰。和名阿加佐乃波比

集註 本草類編曰、冬灰。和名阿加佐乃波比。時不定採。一名藜灰

黑灰 文德實錄

集註 文德實錄卷第八曰、齊衡三年八月戊寅、安房國言、天雨ニ黑灰ヽ從レ風而來。委ツモルレ地三四許分

香爐灰 本草

今名 カウロノハイ

物理小識曰、香爐灰。米湯和紙灰晒乾。煅紅研之。三煅曰滿爐金或一斗加礦灰二升煅之。尋常燒柚皮。千張灰足矣。冷爐以艸紙茄楷炭埋之。火亦自活。欲留宿火者。胡堯半紅。煖灰埋三五日不燼〇洞天淸錄曰、古以爲文達神明、而不焚香故無香爐今所謂香爐皆以古人宗廟祭器爲之爵爐則古之爵狻猊爐則古之踽足豆香毬則古之㽅其等不一或有新鑄而象古爲之者惟博山爐乃漢太子宮所用香爐之制始於此亦有僞爲者當以物色辨之〇合類經驗方曰、作香爐灰法、桃色ニスルニハ石灰一升、丹十兩、小麥藁椿ツバキ木二色灰ニ燒、アクニタレテ、其アクノ淸汁ニ、右ノ二色ヲウチコミ、能々イサセテ、上ノ淸メル水ヲ去、日ニ乾シ手ニ不レ着カ時分、

挙程ニ握リ堅メ、黒焼壷ニ入、能々可焼、サテ取出シ上皮ヲケヅリ去、藥研ニテオロス也。青色ニスルニハ、石灰一升、緑青十兩。拵様如前

【集註】和漢香之記曰、四季灰の圖の事、春の灰のすがた梅をおす事、夏はあふひ草、秋の灰のすがた菊を置事、香をきくといふ、冬の灰、松のすがたおす事、ふりつむ雪のしたにても、かわらぬもとのすがたをあらはし、ことに松はけぶりをたつるゑんによるにや。灰は雲をかたどる。香の火をさして、しやうをふくがごとしといひしも、又山風にはらはるゝ松の露の落る音もひとしからんか。又曰、灰をおすに、はしをひとつにそろへ、四方をおし、又あいだ四方をおとすべし。かずは八つなり。八葉のみね、八つの谷を表する、如此おす事はよぎなき時のことなり。常にはたゞかきたてたる計也。扶桑略記曰、寂澄和尚傳曰、於二香爐中一出二佛舍利一粒一、又經二小時一於二灰中一得二金花器一合子一。伊勢貞陸娶入記曰、はいのをしやうは、たゞはいをしにてをし候うへを、かうばしにてそと〱御をしにて候

須美（スミ）倭名類聚鈔　【漢名】炭　【今名】スミ

正字通曰、炭燒木未灰也。山堂肆考曰、炭燒木也。物理小識曰、炭者火閉气而死者也。無生性故甃用之埒炭灰斷蟻路。可驗也。小知錄曰、漢書炭動以知日至。注、冬至先二日、垂土炭於衡兩端、輕重適均。冬至陽氣至則炭重。夏至陰氣至則土重。物原、祝融作炭。字典曰、炭。說文燒木餘也。禮月令、草木黃落乃伐薪爲炭。淮南子天文訓、水勝故夏至濕、火勝故冬至燥。燥故炭輕、濕故炭重。○源氏物語椎ガ本曰、このころの事と

て、たきゞのみひろひてまいる人どもあり。あさりのなろよりすみなどやうの物たてまつるとて、とし比にならひ侍にける。堀河院次郎百首曰、はるなれば雪ふるとしのなをちかみをのすみがまけさや燒らん

[一名] **荒炭** 延喜式卷第五曰、齋宮造備雜物。荒炭二十二石二斗。和炭九十四石一斗

[集註] 和泉國風土記曰、日根郡貢ニ麻炭薪一。令曰、凡給ニ後宮及親王炭一、起ニ十月一日一盡ニ二月三十日一。其薪炭ハ用多少ニ量給。供進炭者、不レ在ニ此例一。本朝無題詩曰、見ニ賣レ炭婦一。三宮。賣炭婦人今聞取、家鄕遙在大原山。延喜式卷第一曰、園并韓神三座祭。炭洲籠。已上神祭料。同卷第十五曰、內藏寮。炭一斛五斗。以ニ一斗一充ニ一兩一。同卷第十六曰、陰陽寮。庭火并平野竈神祭。炭五斗。御本命祭。炭五斗。三元祭。炭五斗。同卷第十七曰、內匠寮。御飯筥一合云云料。炭（アラスミ）一石二斗。酒壺一合料。炭二石。酒臺一口料。炭六斗。水銚一口料。炭五斗。盤一口料。炭四斗。水槽一口料。炭一斗。朱漆器。云云料。炭一石。年料革筥廿合。炭九斛二斗五升。年料五尺屛風云云料。炭七十一斛七斗。年料几帳八基料。炭八斗。馬瑙御腰帶一條。炭五斗。轆轤云云料。炭（アラスミ）九斗。和炭廿四斛六斗。熬炭五斗。伊勢初齋院裝束。炭（アラスミ）七斗五升。同卷第三十六曰、主殿寮。神二十三座云云炭山十三座。松尾祭料。炭一石。正月最勝王經齋會料。炭卅九斛四斗。同卷第四十曰、主水司。正月十五日供御七種粥料。炭二石。野府記曰、大原山ハ多ハ爲ニ主殿領一。板松ヲ所レ出ス云云又公私爲ニ炭木之便一。吾妻鏡第三十八曰、秀胤兼用意之間、積ニ置炭薪等於館郭外之四面一、皆悉放レ火。其焔太熾、而非ニ人馬之可一レ通路一。仍軍兵安ニ辨於門外一、催造ニ時聲一發レ箭。同第四十二曰、建長四年三月十九日、三品親王關東御下向也。御雜事。炭五籠。同卷第四十三曰、建

長元年十月十一日、被レ定ニ利賣直法一。炭一駄代百文。類聚雜要抄曰、祿法云々毎日祇候。大籠炭一石師。料
共女官料。大原大籠炭九石。行事所雜物等。炭、薪。人車記曰、仁安三年八月云々御所御裝束云々炭取一
口積炭、仁安九年九月五日、御懺法云々炭二籠。明日記曰、建仁三年十二月十日云々其北置例火桶炭等。兵
衞記曰、仁安元年九月六日、朝御懺法之次、上總前司清高朝臣行御佛事、導師覺智僧都、炭二籠。題名僧九
口、炭廿籠。宣胤卿記曰、永正三年正月三日、伊勢又七云々炭一荷送之、歳暮佳例儀賞候也。長享三年正月七
日、伊勢又七貞俊許鯛一獻、海老廿送之、毎年歳暮三種於炭者下保下司申付可沙汰云々。殿中申次記曰、二
月七日御炭貳十荷。袖中抄曰、私云、大原にすむといふは、北山すみやく大原也。をしほの山は、西山おほ
はらのゝ社かたはらなり。右記曰、自ニ重陽日一至ニ于曲水ノ朝一已上七ケ月間、炭一籠（太王切）毎朝可レ分ニ入之一
者也。是非ニ舊例一、予始存ニ此事一耳

［今案］古刀秘傳曰、備前ずみ、はそう木云々但馬すみ、栗の木。備中ずみ、ほうそ栗の木。備後ずみ、松の木。肥後延壽ずみ、菊地ずみとて栗の木。鎌倉ずみ、あせほ、松の木。雍州府志曰、炭所々出、然於ニ山城ノ國鞍馬山并ニ小野里之産一爲レ宜。是俗稱ニ燒炭一

○眞木の炭（藻塩草）　［今名］スギノスミ

○炭火（日本書紀）　［漢名］赤炭（帝京景物略）　［今名］ヲコシズミ　帝京景物略曰、置鐵鋼篩格赤炭溶之

［集註］日本書紀曰、因灌ニ河水一消レ鬱所ノ設之炭火一

○和炭（延喜式）　［漢名］麩炭　［今名］ケシズミ（天祿識餘）

曰、南方薪木燒而未灰者曰麩炭。白樂天詩云、日暮半爐麩炭火正謂此言鯖曰浮炭陳無已典酒務官託買浮炭浮炭即麩炭也。今人但名爲麩炭。正字通曰、烰炭、俗作麩炭

【一名】ニキズミ 延喜式傍訓 沵古須美 倭名類聚鈔 加知須美 同上 尓古須美 天文寫本和名抄

【集註】延喜式卷第十七曰、内匠寮。御飯筥一合云云料。和炭二石。酒壺一合料。和炭七斛五斗。杓一柄料。和炭七斗。酒臺一口料。和炭一斛三斗。甕一口料。和炭一石二斗。水椀一口料。和炭一石二斗。盤一口料。和炭八斗。年料革筥廿合料。和炭二斛二斗三升。年料五尺屛風云云料。和炭六十七斛九斗。年料几帳八基料。和炭一斛。御鏡一面料。和炭五斗。轆弁云云料和炭廿四斛六斗。同卷第四十八曰、左馬寮、和炭十石。三石鑣料。七石鐙料。和炭三石一斗、三石鑣料。一斗鉄料。並請大藏

【今案】倭名鈔曰、和炭。沵古須美。今案一云加知須美。宮川日記曰、延喜式ニ堅炭ヲ荒炭ト記シ、消炭ヲ和炭ト記シタリ。カタズミハ生炭ナリ。消炭ハ一度化火ノ後ノ炭ナリ

○白炭

【今案】伊勢雜記曰、白炭の事。宗五一册に云、和泉國横山と云所にて燒く炭にて候云云和泉草ニ云、横山炭泉州より出之、炭ノ色白シ、内裏公方御前之官女、手ニ直ニ取ニ置之、手不汚故ニ賞之者每日進上云云夫木集卷三十雜ノ部、山ノ題ノ内、六帖題。光俊朝臣、何としていかにやけばかいづみなるよこやまずみのしろく見ゆらん。又曰宗五一册云、御いろり九月晦日よりあき候て、三月晦日ふさぎ申候。惣じて表向には、御いろりなくば常の御所に一ツ入候。御炭は白炭とて、和泉國横山といふ所に燒ク炭にて候。御對面所にはらうしやくの

帳一基用途料ニハ掃墨三升トアリ　朱漆器ノ下ニ「臺盤一面」トアルベシ

火鉢を被備候

熬炭 延喜式

【集註】延喜式卷第十七曰、內匠寮。御鏡一面料。（中略）熬炭五斗。韉并云云料。熬炭五斗。

○獸炭 物理小識曰、獸炭。炭與鐵矢等分合擣。入芙蓉葉十之二。再擣和糯餅。範獸形。乾之。觸紅入爐。信宿不滅

【集註】明月記曰、承元二年十月十一日云云頭左京大夫送使者云云又被尋獸炭、求而送之

掃墨（ハイスミ） 延喜式

【漢名】松煙

【今名】ハイズミ

【一名】掃灰 類聚雜要抄曰、帳一基塗支度云云掃灰一斗

【集註】延喜式卷第四曰、伊勢太神宮物所須、掃墨二升。同卷第五曰、造備雜物。掃墨九升一合。同卷第十七曰、內匠寮。手湯戶（テウヅノヘ）一口料云云掃墨（ハイスミ）五合、油二合。水槽一口料、掃墨三合。手洗槽一口料。掃墨九合。大椀一口料。掃墨四勺。盤一口料。掃墨三勺。朱漆器云云料。掃墨二升。年料革筥廿合料。掃墨二斗四合。年ノ料几帳八基云云料。掃墨六合。油三合。大寒日立ニツル諸門ニ土偶人（ヒトカタ）十二枚云云掃墨二升。酒一升。同卷第二十三曰、民部下。年料別貢雜物。丹波國、掃墨一石。播磨國、掃墨二石。同卷第三十日、大藏省。十七日大射。其所レ須掃墨一升五合。酒二升。已上造レ梁料。同卷第四十八曰、左馬寮。造走馬鞍一具料。掃墨（ハイスミ）五勺。請ニ圖書寮ニ。同卷第四十九曰、兵庫寮。凡踐祚大嘗會新造神楯四枚云云其料掃墨一斗三升六合。楯別二升八合、戟別三合。膠一斤十二兩。以三二兩ニ和ニ掃墨一升ニ。酒六升八合。以ニ一升ニ和ニ掃墨二升ニ。修ニ理桂甲一領ニ料。掃墨一合

【形狀】俊頼髓腦抄曰、硯のすみをつくるには、まつの木をもやして、そ

寛喜二年ノ記事ナシ

の煙をとりてつくるものなれば云と

須々(スス) 倭名類聚鈔

漢名 炱煤 廣韻、炱煤灰集屋也

今名 スヽ

一名 州須 古事記曰、訓二煤烟一云二州須一。明月記曰、安貞元年十二月十五日、今日すゝ拂。倭名鈔曰、唐韻云、炲煤。灰集レ屋也。和名須々

酢四 萬葉集第十一曰、難波人、葦火燎屋之、酢四手雖有(タク、シタレド、ス)

須酒 萬葉集第九曰、廬八燎、須酒巖、相結婚(フセヤタキ、スヽシキテホヒテアヒヨバヒ) 煤 姻 烟

集註 吾妻鏡第三十一曰、嘉禎二年十二月六日、御煤拂事有二相論一、文元朝臣申云、新造者、三箇年之内、可レ有二其憚(ヘヽカリ)一云云。新職晴賢等朝臣之先達者雖レ無二指文一、皆所二記置一也。至二新造一者、無レ煤之故歟。有レ煤者、可レ拂歟云云。所詮此條無二證據一。然者無二煤拂ノ御沙汰一、可レ宜歟之由、被二仰出一之間、各不レ申二子細一也。寛喜二年十二月十五日、今日令拂炲煤。春宮年中行事曰、十二月御すゝはらひの事。たつはるよりさきに、行幸のくら人さはりなき日、ついでをさだめ、れいにまかせて申おこなふ。今案、みすはちやうにまうくるほかおほかるとき、宮づかさにすけいげ、ごんのすけ、がくしをのぞきて、これをあてらる。歌林四季物語曰、五月のくす玉、あふひなどのかれのこりたるをとりかへて、すゝにしみたるをもとりふてゝ、菊にかゆるもおかし

比乃宇扁乃須々 本草和名 【漢名】梁上塵 本草綱目 【今名】ウツバリノウヘノホコリ

證類本草曰、故茅屋上塵取ニ多年煙火者ニ拂ニ取上塵ー 【集註】本草類編曰、梁上塵。和比乃宇扁乃須々。无時取之 【附方】頓醫抄曰、白クサ、治方。梁上塵ヲタ、キヲトシ、井花水ニトキテ付ヨ

竈ノヘスヒ 詞林采葉抄 【漢名】百草霜 本草 【今名】カマドノヒタヒズミ

【一名】竈の下墨 仙覺萬葉集註釋 釜門ノスミ 頓医抄曰、逆子ヲ治ス。釜門ノスミヲ取テ、指出タラン足ニ塗ベシ 【集註】詞林采葉抄曰、七家ノ竈ノヘスヒヲ取合テ云云 仙覺萬葉集註釋曰、人をおこさじと思ふときに、東方へゆきたる白馬のあしのうらのつちをとりて、我すむ家の竈の下墨をとりて、合薬して、ねたる人のへそのうへにつけつれば、おきあがらずといふ事のあるを云と

【附錄】竈突墨 頓医抄曰、竈突墨。ナベノシリノトガリニツキタルナリ。本草ノ釜臍墨也。竈突墨ハ屋上竃ノ上ノ煙出シニタマルス也、

知利（チリ）倭名類聚鈔　漢名　塵

品字箋曰、紅塵陌上飛揚之黄土細塵塵而黒色ノ者也

一名　知利比治　新撰字鏡曰、塵。知利比治。古今集序曰、たかき山もふもとのちりひぢよりなりて、天雲たなびくまでおひのぼれるごとくに。倭名鈔曰、塵埃。和名知利。仙覺萬葉集註釋卷第十五曰、つちの人馬などにふまれたるが、風にふかれてたつをば、ひぢといふなり。藻塩草曰、ちりひぢ。顯昭云、ちりひぢとは、塵泥といふなり。ちりと、ひぢ二の物なり。泥をばひぢりこと云を、りやくしてひぢとも云也。哥にも、ひぢつちうちてなきつれとよめり。つひひぢと云も、ひぢをつくと云也。是をつねには塵をちりひぢと云と人しれり。八雲御抄曰、ちりひぢ、ちり泥也

知里比治　萬葉集第十五曰、知里比治能、可受爾母安良奴、和禮由惠爾

ホコリ　塵添壒嚢抄曰、道服ト八、雨降ヌ時、乘馬スル上ニ打着テ、滯モセヌ物也。灰ホコリノ立テ、衣裳ヲ垢スヲ防グ心也

集註　源氏物語椎が本曰、おはしまし〻かた、あけさせ給へれば、ちりいたうつもりて。北山抄曰、七月相撲召合事云云若飛塵起仰主殿寮令灑水於庭中。蜻蛉日記曰、なをあるよにはしやうじせんとて、はむしろた〻のむしろのきよきそしきかへさすれば、ちりはらひなどするを見るにも、かやうのことは思ひかけざりしものをなどおもへばいみじうて「うちはらふちりのつもれるさむしろをなげくかずにはしかじとぞおもふ。榮花物語疑曰、みぎはのちりとこそはなりぬめれ。同衣珠曰、御あたりのちりもうちはらひ。平家物語卷第十二曰、あが

るちりはけぶりのごとし。曾我物語卷第十一曰、ちりのみつもるゆかのうへ、うちはらひたるけしきもみえず。源平盛衰記卷第廿六曰、京中六波羅塵灰ヲ立タリ。藻塩草曰、いつはりのなをのみ立てあひ見ぬは硯のうへのちりや吹けん。硯の上の塵をふけば、無實の名たつと云り。落くぼ物語曰、おはし所の塵にらひそゝぐりて。明月記曰、建暦三年四月廿四日、午時許少將相共參法勝寺、欲見塔邊雜人群集、埃塵難堪。水左記曰、飛塵之色春天掩霧。簑輪軍記曰、空に秋風のちりを飛するごとくゝ

形狀

藻塩草曰、つちのはひにたつをば、いなばの國には、ちりひぢといふと云々。頓医抄曰、塵アフラス明リシヤウジノホチニツモリタルチリヲ、鳥ノ羽ニテハキアツムベシ。按水東日記曰、寒北ハ風沙數日ニノ輙チ一ヒ作ル、作レハ或連日塵几撲レ窓不レ辨ニ物色ニ、近日打コ掃積年封閉倉房ニ塵沙積レ地踰レ尺、其細アルコト如レ粉、所謂塵世濁世者是也

古名錄土部卷第十　終

古名錄彩色部卷第十一目錄

彩色類

迹（ニ） 丹砂

多介（タニ） 黄丹

胡粉 蛤粉

加支津介（カキツニ） 扁青

曾青

隱岐綠 綠青 〇阿乎瀰（アヲニ） 銅綠

白綠

燕支（エンシ） 綿臙脂

安爲乃良宇（アヰノラウ） 青黛

あけ 銀朱

波布迹（ハフニ） 粉錫

之王（シワウ） 雌黄

空青

白青

同黄 藤黄

紫土 紫粉

須美（スミ） 墨

通計十九種

制衣ハ製一字カ

古名錄彩色部卷第十一

紀藩　源　伴存撰

彩色類

令義解曰、彩色謂用畫之雜色。草木之類。凡諸節云云、儛臺ノ障泥板方三丈、行幸之前二日令メヨ畫所ヲ繪セ。但蕃客之時畫方六丈。凡木工寮ノ造ル大射賭射騎射等ノ的ハ、皆差向畫師ヲ使塗リ畫カ。延喜式第十七、內匠寮曰、屛風一帖。高五尺、畫鷹并日本書紀曰、推古天皇十二年秋九月、是月始テ定黃書畫師、山背畫師ヲ。續日本紀第六曰、靈龜元年五月乙巳、從六位下畫師忍勝姓改爲倭畫師。同第二十四曰、天平寶字六年正月丁未、造東海南海西海等ノ道ノ節度使料綿襖胄各二万二百五十具ヲ於太宰府。其制衣一如唐國ノ新様。仍テ象五行之色。皆畫甲板之形ヲ。碧地ニハ者以朱、赤地ニハ者以黃、黃地ニハ者以朱、白地者以黑、黑地者以白。每四千五十具成一行之色。玉造曰、垣ニハ畫ク丹青ヲ

迩　倭名類聚鈔

【漢名】丹砂　本草

【今案】上代器物ヲ塗ニ銀朱ヲ不用、朱砂ヲ用。倭名鈔朱砂注、本草云、朱砂最上者、謂光明砂トミエテ、丹砂。和名迩丹砂ハ似朱砂ニ不鮮明ナラ者也ト觀エタリ。此丹砂ヲ下品トシ、朱砂ヲ上品トスレ圧、

本一物ニメ皆丹砂也。延喜式卷第十一曰、太政官。凡式兵二省請ニ印准蔭成選等位記一。所レ須丹漆等物、預先請受。同卷第十三曰、圖書寮。正月最勝王經齋會ノ堂裝。赤漆鷺足圓机四脚。花瓶料。倭名鈔漆器類曰、今案、朱合。俗所謂朱漆合子也。此朱丹、赤漆相通ズルコト明也。扶桑略記曰、承平二年五月廿五日辰刻、印幣丹綿鼠咋散トミユレバ、印色モ丹砂ヲ用コト明也。正字通ニ朱ハ色紅而明丹ハ赤色也ト云リ

【一名】

上朱沙 延喜式卷第十六曰、陰陽寮。凡造レ曆用度者、上朱沙三兩。請ニ藏人所一。永仁御即位記曰、朱砂二十兩、代二百疋。文房肆考曰、硃砂形似箭頭者良。芥子園畫傳曰、朱砂用ニ箭頭者一良、次則芙蓉塊足砂、萬一無ニ朱砂一當ニ以ニ銀朱一代レ之

眞朱(アカニ) 萬葉集卷第十六曰、何所ニ(イトコソ)眞朱穿岳(アカニホル)、薦疊、平羣乃阿曾我、鼻ノ上乎穿禮。本草和名曰、丹砂、一名眞朱、一名朱砂、唐又出伊勢國○延喜式第四十七、左兵衞府。丹(ニシテ)畫細布甲形冑形

【集註】

續日本紀卷第一曰、文武天皇二年九月乙酉、令獻伊勢國朱沙、常陸國備前伊豫日向四國朱沙。同卷第廿七曰、稱德天皇天平神護二年三月戊午、伊豫國人從七位上奏吡登淨足等十一人賜ニ姓阿陪小殿朝臣一。淨足自言、難破長柄朝廷、遣ニ大山上安倍小殿小鎌於伊豫國一、令レ採ニ朱砂一。本草類編曰、丹砂、无時採之。出ニ伊勢飯高郡日向國一。豐後國風土記曰、海部郡丹生鄕、昔時之人、取ニ此山沙一、該ニ朱砂一。因曰ニ丹生鄕一。延喜式卷第四曰、伊勢太神宮神寶二十一種。征箭一千四百九十隻。筈塗ニ朱沙一。物所レ須朱沙一兩二分。同卷第十二曰、主鈴。年料所レ須、朱砂十二兩。同卷第十五曰、內藏寮。諸國年料供進。朱砂一千兩。同卷第十七曰、內匠寮。朱漆器。料朱沙一斤四兩。屛風一帖、朱沙一兩。臺盤一面料。朱砂十兩、擎壬子一口料、朱砂一分。盞一口料、朱砂一分。同卷第二十三曰、民部下。

扶桑略記ハ裡書ナリ

奏ハ「秦」ノ誤カ

九或ハ「八」ノ誤カ

料ノ上

「寧蔵」「函」トアルベシ

交易雜物。太宰府、朱砂一千兩。侍中群要曰、誤使事交易金銀朱砂雜丹雜器造茶二月一日。宇治拾遺曰、朱砂にて一文字をかはらけの底にかきたるばかりなり。吾妻鏡卷第十六曰、正治元年五月八日、時長始獻ニ朱砂丸於姫君ニ。仍賜ニ砂金廿兩以下蔵ニ云云

【形狀】福田方曰、丹砂、一名辰砂、辰州ノ丹砂也。一名朱砂、但シ光明朱ト云ハ水銀ニテ燒ケル者也。丹砂ハ石也。自然者也。丹砂ヲ光明丹トモ名ク。光明朱ト云コトモアリ。水銀ニ朱砂ヲ代ヘ用フ勿レ。其性不同者也。方云、辰砂ハ紅赤色ニシテ光明映徹(ツヤ)(スキトヲル)ノ鮮淨ナル者良シ。不レ然人ヲシテ身体乾燥キ發熱(ホテリ)口乾ク病ヲ發ト云ヘリ。亦云、研細コマカニスリテ水ニ飛過(ケナ)コシテ、灰椀(カワラケ)ノ內ニ紙ヲ鋪テ滲ホシテ使ヘ。又云、口傳云、極テ紅赤色ニ光アリテ、大粒ニシテマジリ渚無ヲ擇ビ使ヘ

あけ 平家物語　【漢名】銀朱 本草　【今名】シュ

天工開物曰、凡將ニ水銀ヲ再ヒ升レ朱用、故名曰ニ銀朱ト。毎レ升ニ水銀一斤ヲ、得ニ硃十四兩、次硃三兩五錢ヲ

【一名】す 雅輔裝束抄曰、ないらむのいゑに、もやのだいきやうを、すき(朱器)のだい盤となづけてせらるゝ事あり。平家物語曰、あけのたまがき神さびて、しめなはのみやのこるらん。榮花物語哥合曰、正月廿日のほど內宴あるべければ云々かんだちめなど、けふはみなあけいろき給へり　光

明朱 福田方ニ光明朱ト云ハ、水銀ニテ燒ケル者也。山槐記曰、治承二年十一月十二日、定成朝臣献御乳村雜具納于手箱一合所儲置之、御藥雜物等光明朱入道進云云取朱蜜季塗御脣。按此即辰砂也。福

田方ニ、丹砂ヲモ光明朱ト云コトモアリト云リ。年中定例記ニ、正月御祝はてゝ朝供御參候云ゝ御精進の時は、あしの付たる折敷にてきこしめし候。御はんにて候。いづれも外をせいしつにぬり、內をば光明朱にてぬられたるにて候ト云、眞ノ銀朱也

〔集註〕延喜式卷第十二曰、中務省。若有ニ選任卒死之類一、以レ朱點レ側、更写ニ一通一六月十二月廿日進ニ藏人所一。同卷第十八曰、式部上。若シ有ラハ改官及レ歷名錯謬一、以レ朱側ニ注ス。宣胤卿記曰、長享三年正月十一日、自去年依室町殿仰予書寫之、帝皇系圖爲朱引遣ス。百練抄第七曰、久安六年九月廿六日、入道大相國取ニ藤氏長者印并朱器大盤一、渡ニ左大臣一。同第十五曰、仁治三年三月廿五日、關白上表。左府於ニ一条亭ニ覽ニ吉書一、被レ渡ニ朱器一云云。水左記曰、承保二年十月二日、今日初內覽吉書、可被渡朱器大盤等云ゝ又下家司等舁朱器長櫃四合、大盤臺五脚、小櫃一合、蘇芳斤等持參中門裏、有綱朝臣奉仰召下家司取出朱器合置長櫃蓋上、下家司二人舁之置簀子上、實綱朝臣取大小朱器各一枚令御覽云ゝ御覽之後、朱器等入納本櫃安置之。令義解曰、畫工司。正一人。彩色。即朱黛等之類、其朱黛等雜色、在ニ大藏省、及內藏寮一、隨ニ其用度一、臨時受用、常不レ在ニ此司ニ貯ニ之也。源平盛衰記卷第廿七曰、餘ニ饑死ニ責ラレテ、人ノ家ヲ片ハシヨリ壞チテ、市ニ持出ツ、薪ノ料ニ賣ケリ。其中ニ薄朱ナドノ付タルモ有ケリ。是ハ爲方ナキ貧人ガ、古キ佛像卒都婆ナドヲ破テ、一旦ノ命ヲ過ントテ角賣ケルニコソ

〔形狀〕紫式部集曰、文のうへに朱といふものをつく〴〵とそゝぎかけて、なみだのいろをとかきたる人の返しに、紅の泪やいとゞうとまるゝうつる心の色に見ゆれば

多尓 本草和名　漢名 **鉛丹** 本草　今名 **タン**

一名 **丹** 延喜式卷第四十一曰、彈正臺。凡支子染色可レ濫ニ黄丹ニ者、不レ得ニ服用一ヲ。法曹至要抄曰、元慶五年十月十四日宣旨云、支子染深色可レ濫ニ黄丹一、不レ得ニ服用一スルコト、而年來以ニ茜紅一交ヘ染ム、尤濫ニ其色一。自今以後、茜若クハ紅交ヘ染ル支子ニ者、不レ論ニ淺深ニ宜レク加ニ禁制一者。衣服令曰、凡服色者、白黄丹云云○按、新儀樂記曰、唐物、丹朱砂胡粉

集註 延喜式卷第六曰、齋院司。賜ニ祭日服并陪從女衣裳ニ料。丹二斤二兩。同卷第十五曰、內藏寮。丹六十斤。右長門國交易所レ進。同卷第十七曰、內匠寮。屏風一帖云云丹二兩

形狀 福田方曰、黄丹久ク停ドモ色不レ變炒ニ輕鬆、如渚良。唐ノ丹ハ黄赤色ニシテ鮮ニウツクシ。和丹ハ黒赤色ニシテ無光也○本草啓蒙曰、鉛丹、今藥肆ニテ黄丹ト云ハ下品ノ丹ナリ。燒タラズノ灰色ニナリタルヲ云。皆ハ堺ノ長吉丹ヲ上トシ、市兵衛丹ヲ次トス。今ハ市兵衛丹ナシ、故ニ長吉丹、勝吉丹ヲ上品トシ、光明丹ヲ次トシ、菊丹ヲ下品トス。菊ノ印アリ故ニ名ク

波布迩 倭名類聚鈔　漢名 **粉錫** 本草　今名 **京オシロイ**

中華古今注曰、粉自ニ三代ニ以レ鉛爲レ粉

一名 **巴布尓** 本草和名曰、粉錫和名巴布尓。倭名鈔容飾具曰、白粉。開元式云、白粉卅斤、俗云波布迩

たうのつ

灰積 流布本「炭櫃」ニ作ル 下ノ灰モ炭ニ作ル

ち 伊勢守貞陸記 【集註】日本書紀卷第三十日、持統天皇六年閏五月戊戌、賜ニ沙門觀成絁十五匹、綿卅屯、布五十端ヿ、美ニ其所レ造鉛粉ヿヲ

之路岐毛乃（シロキモノ） 天文寫本和名鈔 【漢名】水銀粉 本草 【今名】ハラヤ イセオシロイ

【一名】之路岐毛能 倭名鈔容飾具曰、粉。文選好色賦云、著レハ粉則太ハタ白。和名之路岐毛能。類聚雜要鈔曰、疊紙二帖紅紫入ニ白粉ヿ、唐匣ノ下懸子納。落くぼ物語曰、まき繪の箱に白粉（しろいもの）入て云々。新猿樂記曰、不レ着レ粉自白、又曰施セハ粉似ニ狐面ヿ しろいもの 落くぼ物語曰、黄金の箱にしろいもの入てする 白物 類聚雜要抄曰、舞師房裝束。手筥一合。在ニ納物云々疊紙一帖。在白物。禄法。小師云々手筥一合。在ニ納物云々粉盤一、疊紙一帖。加ニ白物ヿヲ鉢云々用ニ薫衣香ヿ時者、鉢ニ白物入之。明月記曰、建仁三年十二月十日云云以白物爲灰積、女房手箱物具等爲灰。又曰、寛喜二年正月十五日云云蒔繪御草子箱入白物具 おしろい 職人盡歌合曰、白粉（しろいもの）うり。あきさむみ雲ものこらぬ月かげはしもとみるまでしろいものかな云々 戀すとや ひとのみるらむおしろいのきはつくまでにながすなみだを。伊勢守貞陸記曰、おしろいのはこ、是もてばこのごとくなり、おしろいを入て、つねにとり出しをくなり ○面脂 江家次第卷第十七曰、東宮御元服。二階南立ニ唐匣ヿ、置ニ上層ヿ、有ニ面脂口脂ヿ。類聚雜要抄曰、蒔白楫府又仰。有ニ唐匣蓋上之小筥ヿ。納ニ面脂、口脂筥等ヿ云云。唐櫛笥上筥納。二合。一合面志筥、納ニ白物ヿ、桂粉軸。一合口脂筥、納ニ麝香ヿ。又曰、

手莒一合。三腙子。第一腙子云と桂粉變六花前。第二腙子云云紅雪・紫雪云云。第三腙子。蒔繪莒、白物。按二品字箋、雪。註云、又口脂、面脂、有紅雪・紫雪諸名。合璧謝賜二口脂紅雪一表云、雪散凝紅紫之名。香膏緇膦蘭之氣。合白金鼎。貯于雕奩。其子絢謝紫雪表云、靈膏有瓊液之名。仙散凝雪花之狀。職喉舌則效膋膋之三緘。任在燮調。請獻謝莊之六出。正字通曰、燕脂ハ以二紅藍花汁一凝脂ヲ爲レ之、燕國ニ所レ出、後人用テ爲二婦飾一曰二面脂口脂一

〔今案〕榮花物語本のしづく曰、かしらははなをぬり、かほにはべに、しろきものをつけたらんやうなり。頓醫抄曰、夫穴クサハ、口ナクシテ高腫ナリ。底ヨリ膿ヲ潰ルオリニ、骨マデ穴アキ、馬ノ目ノヌケタルガ如也。輕粉二分、石韋五兩灰ニヤキテ、右湯ヲ能ホドニウメテ、アビセテ和カナル物ニ拭テ、後ニ件ノ白物許ノ藥ヲ付ベシ。即輕粉ヲ白物ト云ル可證。伊勢貞敦が祝之書曰、まゆおしろいは、はらやをすりたる也。白きわに用、又本まゆの圖に、ひたひうははきのおしろい、一段しろ〴〵とこくする也と云、おしろいの上に、はらやをぬる也。又曰、ほうまゆの支、第一にけしやうして、次にすみきり、又次に白きわたるべし、白きはゝ常のおしろいにあらず、はらやをすりて用ゆ。伊勢守貞陸記曰、手ばこの内、一にはおしろい、二にはたうのつち。本草啓蒙云、藥肆ニ唐ノ土ト呼ニ二種アリ。上品ハ鉛粉也。下品ハ白堊ニ、下品ノ鉛粉ヲ少シ合スルモノ也。伴存云、廣東通志曰、肇慶志輦七出高要官菜山堊白如蛤粉有僞充鉛粉售之市粕者古今秘苑畵色法ニ 桃紅胭脂和鉛粉脂多於粉 水紅鉛粉和胭脂粉多於脂月白鉛粉和花青ト云、唐ニテモ書色ニ鉛粉ヲ用事次ニ證アリ

ごふ、群本、畧解等「こふん」ニ作ル

胡粉ハ二十斤ナリ百五十斤ハ海藻ノ斤數

胡粉 延喜式

【漢名】蛤粉 本草粉錫集解 【今名】ゴフン 【一名】こふ

芥子園畫傳曰、傅粉。古人率用蛤粉。法以蛤蚌殼煅過、硏細、水飛用之。今則畫家概用鉛粉矣

後醍醐天皇年中行事曰、四月朔日、御衣がへなれば、所〻御裝束あらたむ。御殿御帳のかたびら、おもてすゞしにごふにて繪をかく。新猿樂記曰、唐物、胡粉。類聚雜要抄曰、四尺几帳八本。帷夏ハ白生ノ平絹ニ、以二白泥一野篠秋草等畫之。又次ノ樣繪ニ胡粉用レ之 白二一

萬葉集第四曰、田付乎白二云云。同卷第十三曰、心乎胡粉云云。玉造曰、壁ニハ塗二白粉一〇萬葉集卷第十一曰、佐保乃內從、下風之吹禮波、還者、胡粉歎ヶ、夜衣大寸。同卷第十三曰、心乎胡粉云云〇胡粉。和名ニ胡粉ト云ハ蛤粉也。漢名ニ胡粉ト云ハ前條ノ粉錫也。博物志曰、燒鉛錫成胡粉猶類也

【集証】

延喜式卷第四曰、伊勢太神宮所須云云、柄二十四枚、以二鹿皮一縫レ之。胡粉塗以レ墨畫レ之。同卷第六曰、齋院司。諸二祭日服并陪從女衣裳一料。胡粉五斤三兩三分。同卷第十五曰、內藏寮。諸國年料供進。胡粉二十斤云云右長門國交易所レ進。同卷第十七曰、內匠寮。屛風一帖。胡粉五兩。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。長門國、胡粉百五十斤。台記曰、久壽二年四月廿七日、上表儀云云昇表案、高三尺、短一尺二寸許。長二尺二寸許、揚足、件足上三四寸許、四方横瓦木、其上有亂文、皆以檜木造之、塗胡粉、打金銅金物、以白生絹押案面、政所造之。觀世音寺資財帳曰、胡粉拾貳兩。前帳云、小一兩。今撿、長德二年十月一日、下用御寺大佛彩色料者、寬治六年帳云、今撿同前。兩院熊野御詣記曰、折敷裏以木作、高坏同付淡胡粉。中宮

ナリ

神宮條ニ見エタルハ

御産部類記曰、白木帳一具、塗胡粉

之王 倭名類聚鈔 【漢名】 雌黃 本草

倭名鈔曰、雌黃。俗音之王。天文 寫本倭名鈔曰、雌黃。俗云之王

【集註】 續日本紀卷第一曰、文武天皇三年三月己未、下野國獻ニ雌黃ヲ、本草和名曰、雌黃。出備中國。本草類編曰、雌黃。探无時。日本伊勢國有之。水銀灰也。醫心方曰、雌黃。出備中國英賀郡。延喜式卷第六曰、齋院司、晝ニ祭日服并陪從女衣裳ノ料。雌黃五兩一分

【形狀】 福田方曰、雌黃。金色ニメ可ニ折片ノ者吉シ。石塗也。但シ賣者ハ多末メ粉トセリ。黃色ニメ光リアリ。不ﾚ然勿ﾚ用

加支川尓 常陸國風土記 【漢名】 扁青 本草 【今名】 イハコンゼウ

本草綱目、時珍曰、扁青。今之石青是矣。繪畫家用之、其色青翠不渝、俗呼爲大青。文房肆考曰、石青。形似梅花片。芥子園畫傳曰、石青只宜用、所謂梅花片一種。以其形似故名

【一名】 阿

乎尓 常陸國風土記、綠青ト同名異物也

金青 延喜式卷第四曰、伊勢太神宮物所用金青一兩。台記曰、久安六年三月三日御節供臺、土高坏十二本、以ニ金青ノ畫ニ松鶴。厨事類記曰、御臺云云 或

金青一兩二分ナリ

金青地施泥繪

金精 類聚雜要抄曰、又以金精謂文云云以金精青繪

紺精 類聚雜要抄曰、四尺屛風云云紺精三兩

紺青 類聚雜要抄曰、童女云云扇・紺青泥繪。五尺屛風、繪雜事。紺青二兩。扶桑略記廿八日、後朱雀天皇長久二年十二月十九日、是日、自攝津國始獻紺青。永仁御即位記曰、紺青十兩、代二百疋

こんしやう 榮花物語曰、からあやを、でいこんじやうしてもんをとめて云々。又曰、あるはこんじやうをぢにして、金のでいしてかきたれば。又曰、こんじやうでいなどしてゑがきたり

こんさう 蜻蛉日記曰、とを山をながめやれば、こんざうをぬりたるとやいふやうにて

〔集註〕常陸國風土記曰、久慈郡云云東山石鏡、昔有魑魅、萃集翫見鏡、則自去所有土色如青紺、用畫麗之。俗云阿乎尓、或云加支川尓時隨朝命、取而進納。續日本紀卷第一曰、文武天皇二年九月乙酉、令近江國獻金青、安藝長門二國金青。同卷第六日、元明天皇和銅六年五月癸酉、令獻上野金青。延喜式卷第十七曰、内匠寮屛風一帖云云金青一兩。倭名鈔曰、金青。本草稽疑云、金青者空青之最上也

空青 扁青ノ内ニ水ヲ含モノ

〔集註〕本草類編曰、空青。本草綱目、時珍曰、空言其質、青言其色。空青有金坑銅坑二種。或大如拳卵、小如豆粒。或成片塊、或若楊梅。雖有精粗之異、皆以有漿爲上、不空無漿爲下也

三月中旬採之。唐、又出近江國慈賀郡。延喜式卷第六曰、齋院司書ニ祭日服并陪從女衣裳ニ料。空青二斤三兩二分

曾青

本草綱目、時珍曰、曾青。層其青層層而生、故名。但出ㇾ銅處年古即生形如ニ黃連一、相綴。又如ニ蚯蚓屎一方稜、色深如ニ波斯青黛一、層層而生、打ㇾ之如ニ金聲一者爲ㇾ眞　【集註】本草類編曰、曾青。无時採之

白青 通名　【今名】グンジヤウ

本草、白青。集解、恭曰、此即陶氏所ㇾ云空青、圓如ニ鐵珠一、色白而腹不ㇾ空者是也。研ㇾ之色白如ㇾ碧亦謂ニ之碧青一　【集註】延喜式卷第十七曰、內匠寮云云白青一兩二分。本草類編曰、白青。无時採之

隱岐綠 下學集　【漢名】石綠　【今名】岩ロクシヤウ

本草曰、綠靑。弘景曰、此卽用畫綠色者、恭曰、畫工呼爲石綠。桂海金石志曰、綠ハ銅之苗也。亦出右江有銅處生石中、質如石者名石綠。又有一種、脆爛如碎土者、名泥綠品最下價亦賤。文房肆考曰、石綠。蝦蟇背。芥子園畫傳曰、石綠。用蝦蟇背者佳

【一名】祿省　倭名類聚鈔曰、綠靑。俗音祿省。醫心方曰、綠靑。和名安乎仁　綠精　類聚雜要抄曰、云云綠精廿兩　ろくしやう

【集註】

厩中舊記曰、おもてには、くもをちらして、ろくしやうゑをかきゐて云ゝ。又曰、春の野、いねなどろくしやうゑにかゝれゐ○永仁御即位記曰、綠靑十兩、代百疋

續日本紀卷第一曰、文武天皇二年九月乙酉、令ㇾ獻二安藝長門二國綠靑一。延喜式卷第六曰、齋院司。畫二祭日服并陪從女衣裳一料。綠靑(ロクシヤウ)三斤十三兩。同卷第十五曰、內藏寮。諸國年料供進。綠靑二十斤云云。右長門國交易所ㇾ進。同卷第十七曰、內匠寮云云綠靑六兩。同卷第廿三曰、民部下。交易雜物。長門國、綠靑廿斤。本草和名曰、綠靑。一名石綠、出長門國。一本本草類編曰、綠靑。日本長門國採之。安乎仁。山槐記曰、治承四年賀茂祭云云車云云餝塗綠靑近來使小舍人童六人以綠靑事靑摺文付櫻插頭七月十六日云云令堂中尊佛壇前懸五大力像一鋪大佛也。以前繡幡爲像軸塗綠靑。類聚雜要抄曰、五尺屛風十二帖。繪雜事。綠靑廿兩。扶桑略記曰、後三条天皇延久二年四月十二日、令三備前國弁二申銅金靑綠靑等出來事一

○阿乎爾　萬葉集　【漢名】銅綠　【今名】ナラロクシヤウ

【一名】阿烏班　日本書紀仁德天皇曰、阿烏班(靑斑)豫辭、離羅(ナラフ)鳥輪疑。萬葉集卷第六曰、綠靑吉、平山過而。同卷第十三曰、空見津、倭ノ國、靑丹

山代之以下ハ別ノ歌ナリ

貝ハ目ノ誤カ

吉、寧山越而、山代之。綠青吉、平山過而云云。同卷第十七曰、青丹余之、奈良能美夜古波云云。青丹余之、奈良夜麻須疑底、泉河云云。青丹吉、奈良乃吾家爾。同第十九曰、青丹與之、平城京師由云云。同第一曰、青丹吉、楢乃京師乃云云。青丹吉、寧樂乃家爾波。同第三曰、青丹吉、寧樂乃京師者。仙覺萬葉集注釋第一曰、或は昔ゑかく、丹の貝のあをにを、ならざかにてとりけり。外の青によりもよかりければ、あをによしならといふ也。藻塩草曰、あをによしならとは、昔なら坂にあをき土の有ける也

妸嗚儞　日本書紀武烈天皇曰、影媛歌曰、妸嗚儞與志、乃樂能婆娑摩儞

阿袁迩　古事記曰、阿袁迩余志、那良袁須疑

青丹　明月記曰、建曆三年七月廿五日、前駈云云當色、青丹卷染水干小袴

安乎爾　萬葉集第十八曰、安乎爾與之、奈良爾安流伊毛我。同第十五曰、安乎爾余志、奈良能美夜古爾。同第十七曰、安乎爾余之、奈良治伎可欲布。多麻豆佐能。

阿遠爾　萬葉集第五曰、阿遠爾與 。奈良乃美夜古爾同第十九曰、安乎爾與之、奈良比等美牟登。同第五曰、阿乎爾與斯

白綠 延喜式　［今名］ビヤクロク

［一名］**碧綠**　尺素往來曰、内ㇾ茲朱、丹、紺青、碧青、白綠、綠青、燕脂、黄土、胡粉、唐墨、金銀之泥、膠漆之塗、所ㇾ有繪具用盡候了

［集註］延喜式卷第六曰、齋院司。畫二祭日假非陪從女衣裳二料。白綠一斤十二兩二分。同卷第十七曰、内匠寮。屏風一帖云云朱砂一兩、金青一兩、白青一兩二分、綠青六兩、白綠二兩云云

同黃延喜式　【漢名】**藤黃**本草　【今名】**シワウ**　【一名】**銅黃**

芥子園畫傳曰、藤黃。廣志謂岳鄂等州、崖間海藤花蕊、敗落石上、土人收之、曰沙黃、就樹採摘曰蠟黃、今訛爲銅黃。證類本草曰、藤黃今所呼銅黃謬矣。盖以銅藤語訛也

類聚雜要抄曰、五尺屛風十二帖。繪雜事。銅黃二分。新猿樂記曰、唐物云云銅黃、綠靑云云

【集註】延喜式卷第四曰、伊勢太神宮物所用同黃云云各一兩二分。同卷第十七曰、內匠寮。屛風一帖云云同黃三分。按延喜式卷第六曰、齋院司。畫二祭日服幷陪從女衣裳一料云云雌黃五兩一分。同黃四兩四銖ト覩ユレバ、雌黃ト同黃トハ自ラ別物也

燕支倭名類聚鈔　【漢名】**綿烟脂**大明會典曰、綿烟脂五百箇　【今名】**シヤウエンジ**

本草綱目曰、一種以二紫鉚一染レ綿而成者謂二之胡燕脂一

【一名】**中烟子**延喜式　**燕紫**新猿樂記曰、唐物云云燕紫空靑

【集註】延喜式卷第四曰、伊勢太神宮。燕所レ須、中烟子二枚。同卷第十七曰、內匠寮。屛風一帖、中烟子二枚

紫土延喜式　【漢名】**紫粉**天工開物

天工開物曰、紫粉。縹紅色貴重者ハ、用ニ胡粉銀朱ヲ對和ス。粗ナル者ハ、用ニ染家紅花滓汁ヲ爲レ之

【集註】延喜式卷第十七曰、內匠寮。屏風一帖云云紫土二兩

安爲乃良宇（アヰノラウ）　本草類編　【漢名】青黛　本草　【今名】アヰロウ

新猿樂記曰、開ニ青黛之眉ヲ。新撰字鏡曰、黛。青黑色也。婦人餝眉黑色也。萬与加支

【集註】本草類編曰、青黛。和安爲之良宇。五月五日採之。延喜式卷第卅曰、伊勢太神宮。物所レ須云云青黛各一兩二分。同卷第十七曰、內匠寮屏風一帖。青黛二分

【形狀】○本草辨疑曰、今所レ渡ノ青黛ニ土沙甚多シ。石灰モアルベシ。和ノアヒラウヲ可用歟。唐ハ色深ク、和ハ色淺シ

須美（スミ）　倭名類聚鈔　【漢名】墨

五雜組曰、古人書之用ハ墨ヲ不レ過レ欲ニ其黑カラムヲ而已。故凡烟煤皆可レ爲ル也。後世欲ニ其發ニシ光、欲ニ其香ニシテ、又欲ス其堅ナランヲ。故造作百端淫巧選出、價侔ニ金玉ニ。所謂趍ニ其末ニ而忘ルヽ其ノ本ヲ者也。天工開物曰、凡墨燒烟凝質而爲レ之。取ニ桐油、淸油、猪油烟ニ爲ル者居ニ十之一ニ。取ニ松烟ニ爲ル者居ニ十之九ニ。紫硃軒雜綴曰、精墨乃松液所成、又經化鍊輕升滓淘盡去、漬以淸泉、磨以砦石、如膏如露濡毫之餘、間用吮吸。靈奇之氣透入竅久、久自然變易骨節澄鍊神明、謂之墨仙非虛語也。世謂躭書畫者、必壽此理也耶

【一名】上墨　延喜式卷第十六曰、陰陽寮。凡造レ曆用度者、上墨大半廷。請ニ圖書寮ニ。　するす

み　藻塩草　松のけふり　同上　末川乎毛須計无乃須美　本草類編曰、墨。和末川乎毛須計无乃須美。又云、加良須美。倭名抄曰、墨。和名須美。今按、俗用延字未詳

加良須美　見上註

集註

延喜式卷第五曰、齋宮。造備雜物。墨二挺。凡諸國送納調庸云云墨十九廷。已上京庫。同卷第十三日、圖書寮。墨一廷書三百張。凡摸書長功日九十言、內墨四十言。中功八十言、內墨三十八言。短功七十二言、內墨三十一言。陸奧國風土記曰、宮城郡出東䴴白綿紙墨等。日本書紀卷第二十二日、推古天皇十八年春三月、高麗王貢上僧曇徵、法定。曇徵知五經。且能作彩色及紙墨。并造碾磑。蓋造碾磑始于是時歟。古今著聞集卷第三日、後白河院御熊野詣に、藤代の宿につかせおはしましたりけるに、國司松煙をつみて、御前におきたりけり。花山院左府、中山太政入道殿其時右大將にて御前に候はせ給たりけるに、此墨いか程の物ぞ、心みよと勅定有ければ、おとゞ、右大將にすゝめ申されければ、硯を引よせて、墨をとりてすらせ給ひけり。その樣除目の執筆の定成けり。左府見とがめて、しきりに感歎のけしき有けり。新猿樂記曰、淡路墨。類聚雜要抄曰、舞師房裝束。手莒一合。在納物云と墨一挺

形狀

江家次第曰、磨墨事。除目薄墨、敍位濃墨云云一度磨之不再磨。凡爲令水皆爲黑久磨之。枕草紙曰、墨のかたつかたにしどけなくすりひらめかし。又曰、にくきもの、すみのなかに石こもりて、きしきしときしみたる。すゞりにかみのいりてすられたる○雍州府志曰、墨、近江武佐、丹波貝原、并洛下太平墨之製造自古有之。然其色淡黑而甚薄。中世南都興福寺二諦坊取持佛堂燈火烟之熏滀屋宇

一日ノ上「煮レ烟五斗升」アルベキカ

者和牛膠而製之。是南都油烟墨之始也。今偶存。爾後南都人倣之取油烟造之

【製造】延喜式卷第十三曰、圖書寮。凡年料所造墨四百廷。長五寸、廣八分。絹七尺八寸。篩墨料。綿八兩。拭墨料。調布一丈六尺。袋并覆料。紺布四端。阿膠小六斤八兩。席一枚。食薦二枚。並干墨料。長上一人。造手四人。給衣服。各庸布一段。其食人別日米一升六合。鹽一勺六撮。海藻二兩。醬滓一合。惣單九十三人。凡造墨、長功日燒得烟一石五升。二日二夜乃得熟、中功短功亦同。成墨九十三廷。長五寸、廣八分、料膠一斤。中功日燒得烟九斗。煮烟九升。成墨八十廷。短功日燒得烟七斗五升。煮烟七升五合。成墨六十六廷

【今案】正字通曰、上古無墨以竹挺點漆而書、中古有墨石可磨汁以書。或云即延安石液。一說此石燒之爲烟乃成墨非。磨汁即墨也。魏晉間始有墨。凡以漆燒烟和松煤爲之。米芾書史謂、晉人多用凹心硯、正以磨墨、凡貯其瀋也。唐初高麗歲貢松烟墨、用老松燒烟、和麋角膠爲片。唐末墨工奚廷邽倣其法爲之。宋熙豐間張遇供御墨、始用油烟入腦麝。謂之龍香劑。顧石齋筆談曰、墨考。古延州石墨可磨汁而書。晉陸雲與兄箋云、三上臺藏曹公石墨數十萬觔。燒之可用烟。觀此語則石墨未必可磨。亦如松節之燃脂作墨也。至漢始有隃麋之名。唐始有松烟之製。至李廷珪始用腦麝。張遇始用金箔。廷珪父超乃奚姓唐末與其子自易水徙居于歙、遂爲歙人。南唐賜姓李氏、則歙墨之源其來久矣。珪弟廷寬寬子承宴宴子文用皆世其業。唐則敍奚鼎奚鼐陳朗王君得宋則潘谷潘衡張遇朱知常葉茂實世英劉士先皆良工也。宣和帝以蘇合油搜烟和墨、雖以百貨。金　章宗購之每兩黃金一觔。欲倣不能數謂

墨妖。紹興間高宗命戴士衡造復古殿墨。識以雙角龍文。乃侍郎米友仁筆宋多右文之主。而徽廟思陵
寫最焉。元朱萬初金用松烟蓋取二三百年摧朽之餘精英不泯者歛日月。而飽風霜非凡材也。虞奎
章贈以詩云、霜雪摧殘澗壑非。深根千歳斧斤違。寸心不逐非烟化。還作元雲繞紫微。國朝則方正邵格之
羅小華皆擅能墨藪小華名龍紋新安人嚴分宜當國爲其子符幕賓授中書舍人嚴敗伏法所製墨歷玉府金珠以爲
珍異神宗游情翰藻訪及羅氏墨中消瓦背爭賭等于非璧焉厥後織造內臣孫隆製清謊堂墨款式精巧劑料極一時
之選曾進上方神宗愛重之新安方于魯程君房以治墨互相角勝所稟墨譜倩名手爲圖刻畫妍精細入毫髮程作墨
苑以媚之兩家遺編至今傳爲清玩蓋于魯微時曾受造墨之法于君房仍假館而授粲焉程有妾頗美麗其妻妒而出
之正方所納也乃令媒者輾轉娶程公訟之有司遂成隙未幾程坐殺人繫獄疑方陰嗾之故墨苑內繪中山狼以詆
方然以墨品入品論程終不能勝方耳趙爲部清陽造青香草堂墨可與方程並驅近時吳去
塵頗以墨稱余在金陵見去塵墨眞者十一贋者十九錦囊漆匣徒以肱觀于臨池奚當焉

古名錄彩色部卷第十一　終

古名錄 一　日本古典全集之内

編集者　正宗敦夫

東京市豊島區長崎東町三丁目一六二
發行者　合資會社 日本古典全集刊行會
代表社員 長嶋東一

東京市豊島區長崎東町三丁目一六二
印刷者　不二製版印刷所 高瀨淸吉

東京市豊島區長崎東町三丁目一六二
發行所　合資會社 日本古典全集刊行會
振替東京七三〇三二

【非賣品】

昭和九年五月一日印刷
昭和九年五月十日發行

日本古典全集既刊書目總覽

（洋數字ハ全集ノ冊數。無記入ハ他巻併綴。*ハ基本版編入ノ印。（狩）ハ棭齋全集。（西）ハ西鶴全集ノ略符。）

【第一期刊行書目】

*出雲風土記	1
*常陸風土記	1
*播磨風土記	
*豐後風土記	
*肥前風土記	
*萬葉集（略解）	8
懷風藻	1
凌雲集	
文華秀麗集	
校本日本靈異記（狩）	1
經國集	
本草和名	2
御堂關白記・附歌集	2
本朝麗藻	
*源氏物語	5
*榮華物語	3
*平家物語	2
吾妻鏡	8
曾我物語	1
法然上人集	1
易林本節用集	1
*好色一代男（西）	1
好色二代男（西）	1
西鶴諸國咄（西）	1
近代艶隱者（西）	
*好色一代女（西）	1
日本永代藏（西）	
新可笑記（西）	
本朝櫻陰比事（西）	1
*世間胸算用（西）	
俗つれづれ（西）	
芭蕉全集	2
*玉かつま	2
日本靈異記攷證（狩）	1
京游筆記（狩）	
轉注説（狩）	1
扶桑略記校譌（狩）	
每條千金（狩）	
大隈言道全集	2

【第二期刊行書目】

*古事記	1
採摭諸國風土記	1
*竹取物語	1
*古今和歌集・附教長注	1
*土佐日記	1
*大和物語	
*住吉物語	
*後撰和歌集	1
片假名本後撰集	
延喜式	7
*拾遺和歌集・附公任集	1
*蜻蛉日記	
*更級日記	
*清少納言（枕草紙）家集	1
*紫式部日記・附家集	
和泉式部全集	1
*唐物語	
傳習（信西古樂圖）	1
教訓抄	2
保元物語	
平治物語	
宇治拾遺物語	1
長秋詠藻	1
*山家集	
承久記	
義經記	1
*徒然艸	1
謠曲百番	4
諸勘分物	1
塵塚記	1
竪亥錄	
因歸算歌	
ぎやどぺかどる	1
妙貞問答	1
破提宇子	
驗禍錄	
好色五人女（西）	1
本朝廿不孝（西）	
男色大鑑（西）	1
懷硯（西）	
*武道傳來記（西）	1
武家義理物語（西）	1
好色盛衰記（西）	1
一目玉鉾（西）	
*西鶴置土産（西）	1
*西鶴織留（西）	
*萬の文反古（西）	
名殘の友（西）	
參考讀史餘論	1
*賀茂翁淵集	1
與謝蕪村集	1
江漢西游日記	1
本朝度量權衡攷（狩）	2
錢幣考遺（狩）	
錢幣考遺闕錄（狩）	1
日本現在書目證注（狩）	1
説文撿字篇（狩）	1
文教溫故批考（狩）	
上宮聖德法王帝説（狩）	
古京遺文（狩）	1
萬葉集品物圖繪	2

【第三期刊行書目】

日本書紀	4
伊勢物語	1
うつぼ物語	5
後拾遺和歌集	1
金葉和歌集	1
詞花和歌集	
千載和歌集	1
新古今和歌集	1
古今著聞集	2
伊呂波字類抄	8
人倫訓蒙圖彙	1
古押譜	2
五畿內志	3
物類品隲	1
雲根志	2
近世畸人傳（正續）	2
重訂本草綱目啓蒙	4
假字遣奥山路	2
歌舞伎年代記	3
歌儛品目	2
[illegible]	1
[illegible]古雜帖・附忠友歌集	
蝦夷日誌集	3

【第四期刊行書目】

倭名類聚鈔（箋注付）	4
歌謠集	3
今昔物語集	3
江家次第（未完結）	2
體源鈔	4
歌体[illegible]	1
片言	1
物類稱呼	
浪花聞書	
丹波通辭	
東海道名所記	1
東海道分間繪圖	
萬葉集私考	1
萬葉集誤字愚考	
寛文書籍目錄（書目上）	1
國朝書目	
辨疑書目錄	
典籍秦鏡（書目中下）	2
本朝食鑑	2